日本醫史學雜誌

第7卷　第1~3號

昭和31年9月1日　發行

清涼寺釋迦像胎内五藏研究特集號

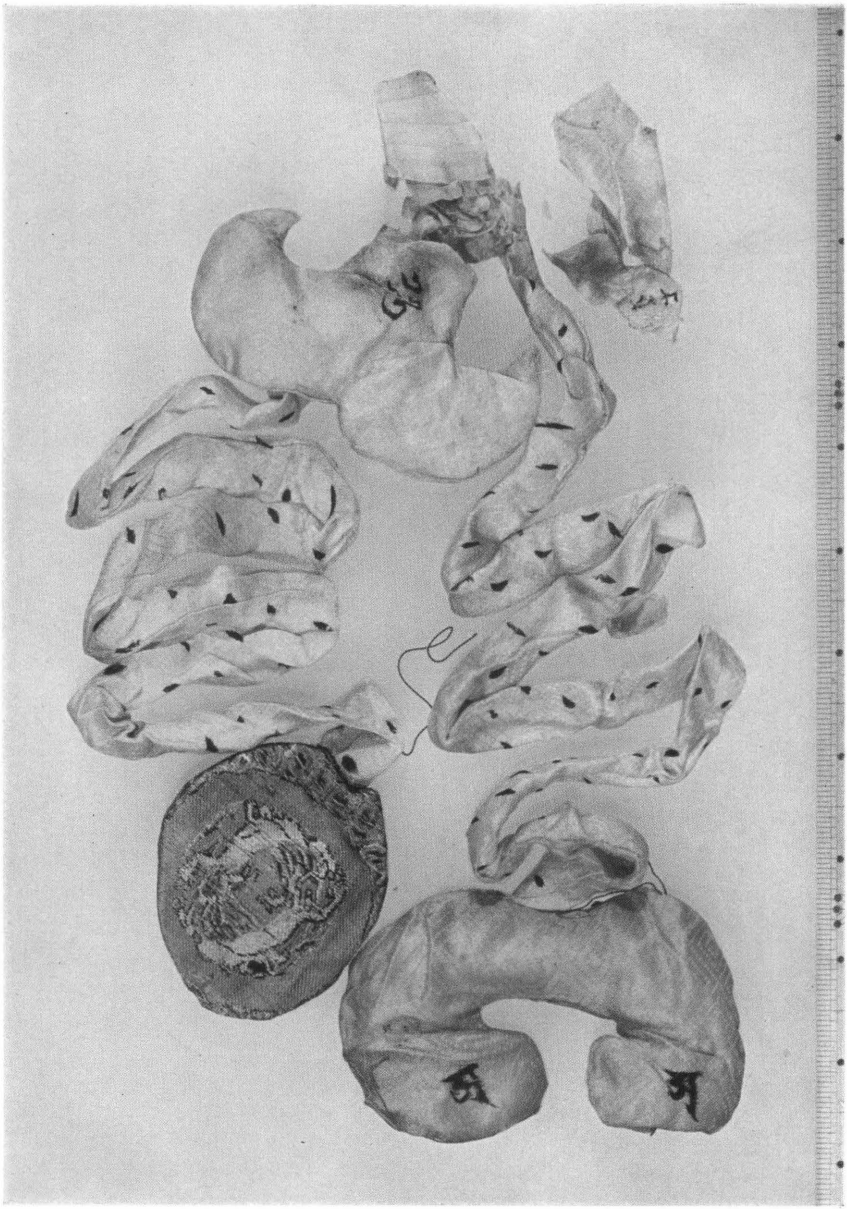
序　　說……森田幸門（1）
五藏入胎の意義について……石原明（5）
清涼寺釋迦胎内五藏の解剖學的研究……渡邊幸三（30）
印度解剖學の成立とその流傳……石原明（64）
現存する中國近世までの五藏六府圖の概說……渡邊幸三（88）

附　圖……（卷頭）
英文抄錄……（183）
編集後記

通卷　第1343~1345號

日本醫史學會

東京都板橋區大谷口町724　日本大學醫學部内山生理
振替口座　東京15250番



第　1　圖

第 3 圖

第 2 圖

第4圖←

第5圖↓

入瑞像之廣其記捨物

台前都僧正　僧　捨水精珠二顆

聞名寺僧　僧　捨水精珠三顆

僧　捨水精珠一顆

僧　捨瑪瑙珠一顆

僧　海神捨水精珠一顆

僧　捨水月觀音鏡子一面　鈴子一箇

僧　清賢捨銀孫陀佛　水月觀音鏡子一面

僧　契蓮捨佛眼珠一顆

僧　契宗捨鏡子一面　僧　延賢捨金剛珠四顆

薩州道書僧捨水精珠一顆

妙華寺尼　清蓮　書葉　文愛　弁尼七郎捨　節五藏一副

胃　肝　腦　腎　脾　肺　心　膽

腎　唆　膽　背欠

睹

造佛博士捨文殊像入胸琵琶珠中

限花見年二歲捨金子銀鈴子一枚

日本國見本寺法燈大師親然　自然　捨節舍利一顆　菩提念珠一副

鈴子一面　寂賜王經一部　染紙書寫　金玉寶石等

日本國僧　玉書　捨小書法華經一部　靈山受相一幅

南無二年八月初七日造像之人　節分於後百至之後時供背

上出血一點不知何瑞或人咸見故此記之時建恥二年　月十日

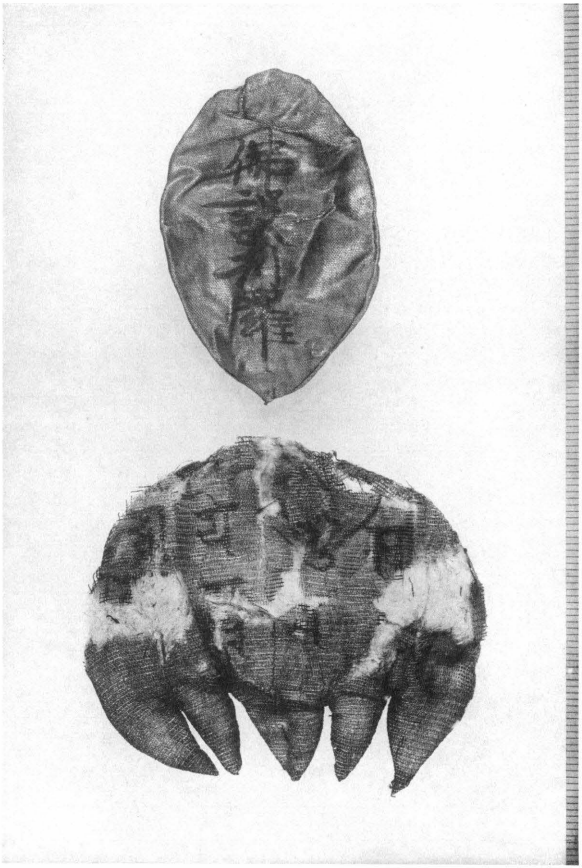
法燈大師然　　録

造像請主　　造成

勾當造像僧　　奉行

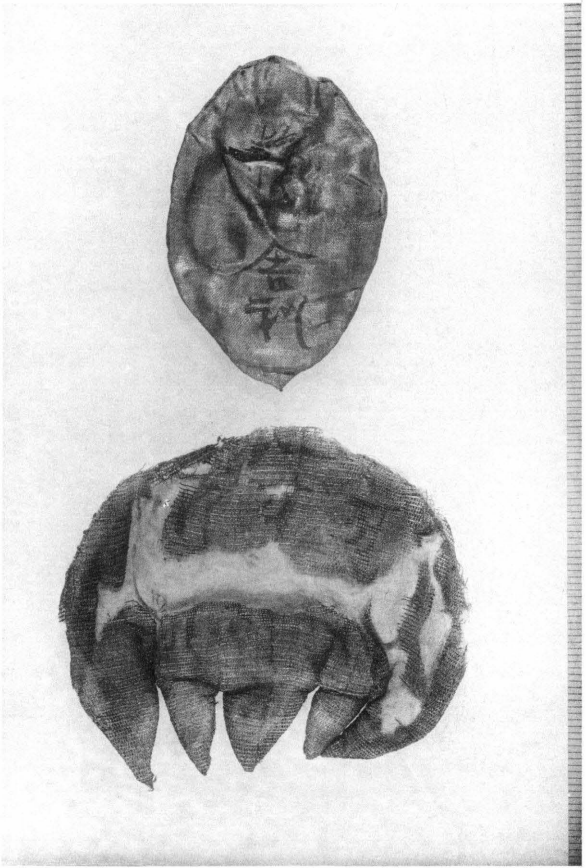
第6圖→

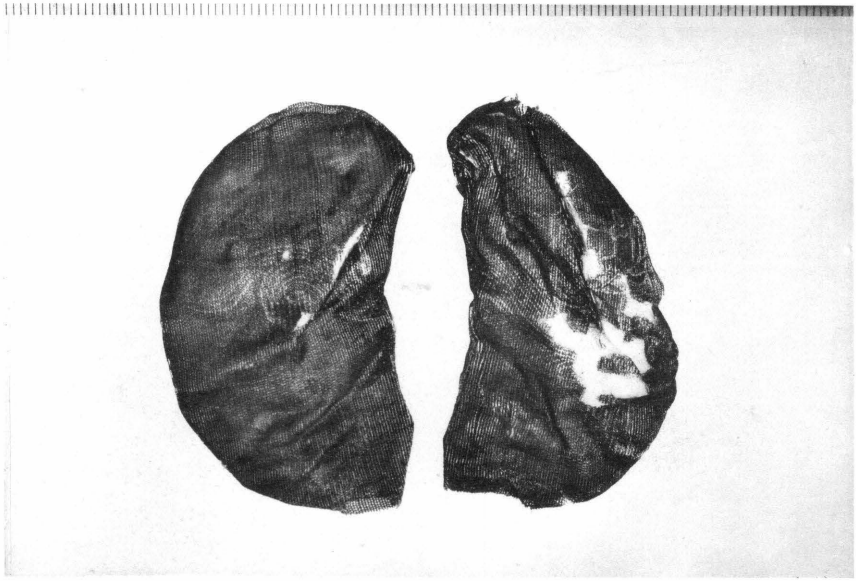
第7圖←



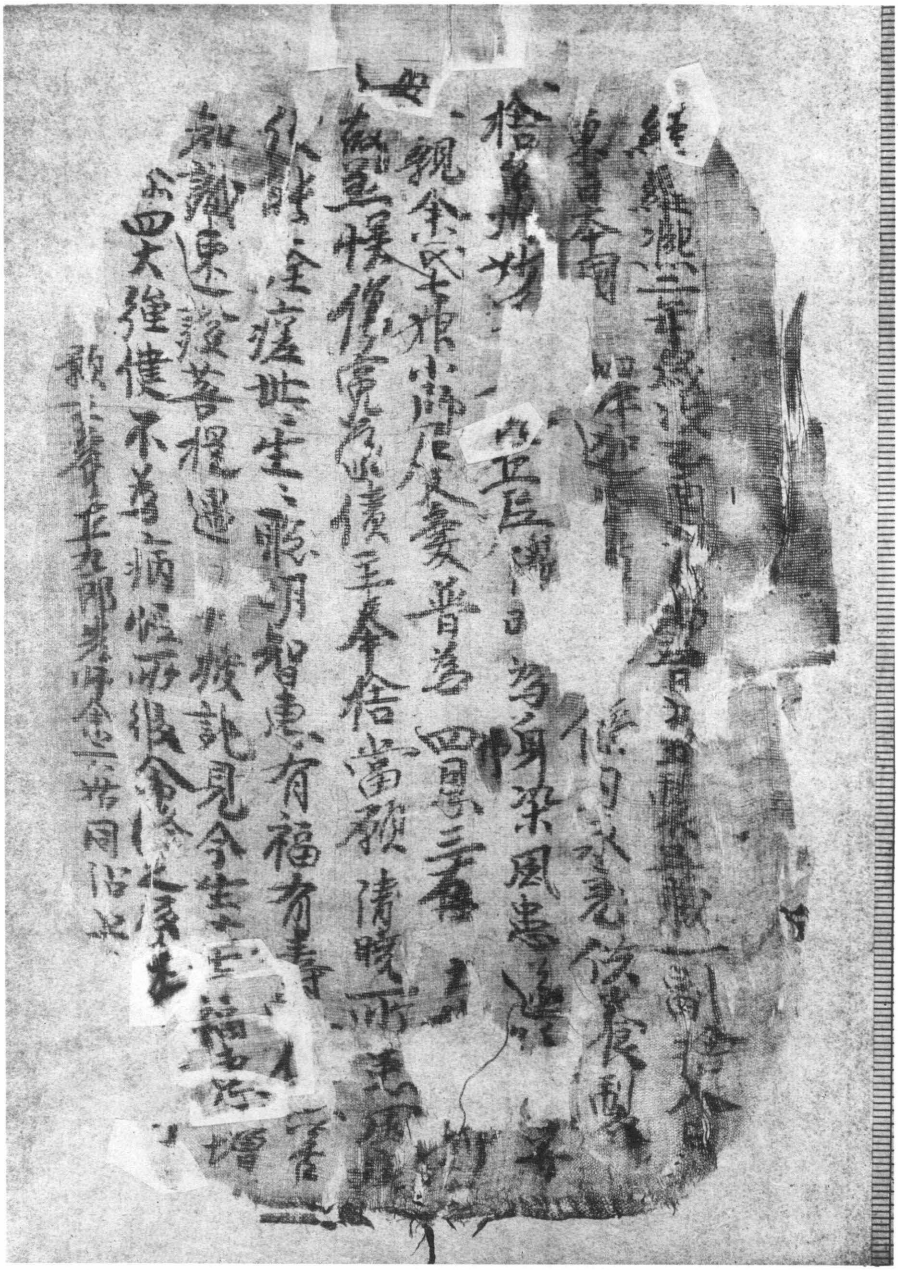
第8圖→

第9圖←





第 10 圖 ↑　　第 11 圖 ↓



第　12　圖

清涼寺釋迦胎内五藏研究特集號發行について

昭和二十九年春、洛西嵯峨の清涼寺に於て古來三國傳來の瑞像として厚い信仰のある本尊の釋迦如來像（國寶）の胎内から、多くの奉籠品が發見されたことは、當時の新聞紙上に大きく、報道されたところである。

本像造顯以來、一千年の間原封のまゝ保たれたこれらの奉籠品は、從來暗黑に閉ざされていた中世の文化交流史、美術工藝史に貴重な資料を提供するものとして徹底的檢討と科學的調査が強く要望されたのに對し、清涼寺住職たる京都大學教授塚本善隆博士を中心として清涼寺綜合研究會が組織され、各專門領域の研究者を集め分科ごとに班を分けて綜合研究が始められた。この仕事は幸いにして文部省及び文化財保護委員會並びに京都國立博物館など關係當局の厚意と、理解ある信徒の協力を得た上、昭和三十年度の文部省科學研究費の交付を受けて順調に進展している。

本像の奉籠品のうちに、絹製の内臓模型（五藏）一具が存することから、その意義の重大なるに鑑み、とくに醫學班を設けて研究を行うことゝなり、本會評議員森田幸門博士、評議員渡邊幸三氏、幹事石原明博士が研究員に委囑され、その研究成果の一部は去る第十四回日本醫學會總會の席上で公表された。その後引續き鋭意調査中のところ、今回やゝまとまつた中間報告が脱稿されたのを機に、圖版を附して本誌の一冊を特集號として諸賢におくることゝした。

本稿は執筆者各人の意見であつて、相互に異つた結論を記した面もあるが、これらは近い將來十分檢討した上で公正な意見にまとめ、他の分野の研究報告と併せて公刊されることとなろう。大方の御諒解と叱正とを希うものである。

發行に當り利益を超越して製版・印刷を擔當された便利堂・文功社及び出版その他に多大の篤志による援助をいたゞいた武田藥品工業株式會社・清涼寺綜合研究會に深い敬意を表する。

日本醫史學會理事長　内山孝一記

附圖說明

第1圖　清涼寺釋迦像に奉籠された五藏のうち、消化管と上焦の原色寫眞。右上に遊離している劒先形のものは上焦。上端は喉、その直下の錨形は胃、左右に續く紐狀の斑點あるものは腸、左の龍紋錦の袋は肚、右の馬蹄形の黃色の袋は膂。すべて絹製で中には第5圖文書に記されている如くいろいろなものが納められている。

第2圖　清涼寺本尊釋迦如來立像の正面。三國傳來赤栴檀の瑞像として古來厚い信仰がある。台座の一部のみ後補。印度樣式を傳えるいわゆる清涼寺式の基本像として美術史上でも重要な地位にある。國寶。

第3圖　前圖の背面。背部の窓は胎內を示すため、上蓋をとつた。上蓋の裏面には造像銘が彫刻され、その上に古錢が貼着されていた。蓋は小さな楔數個で止めてあつた。

第4圖　胎內奉籠物發見當初の狀況。おびたゞしい布片、經典、文書、五藏その他のものが隙間もなく詰つている。

第5圖　胎內奉籠文書の一。『入瑞像五藏具記捨物』と題され、釋迦像造顯に際し、多くの有緣の僧俗が喜捨して奉籠した物品の目錄。中ほどに五藏の記載が見える。雍熙二年(九八五)八月十八日に書かれた文書で、署名のみ奇然の筆。

第6圖　心と肝の表面。何れも赤色で、梵字が墨書されているのが心、佛名の墨書あるのが肝。

第7圖　心と肝の裏面。

第8圖　膽と肺の一面。膽は濃紺で墨書があり、中に金箔に包んだ舍利が納めてある。肺はもと紅色であつた由であるが、現狀は褪色して淡黃色に見える。梵字が表裏に書いてあり、損傷甚しく觸れることさえ出來ない。破損部にみえるのは恐らく綿であろう。

第9圖　前圖の他の面。膽と肺は何れの面が表か裏か判明しない。

第10圖　腎。もとは紫色であつたが、今は變色して茶色である。二個あり。表面に寶相華らしい截金の模樣が僅かに殘つている。

第11圖　肚と膂の擴大寫眞。第1圖原色版と比較されたい。右の丸い袋が肚で左の馬蹄形の袋が膂。

第12圖　背皮の全容。かなり破損しているので墨書された願文の讀めない部分もある。上端に小さい絹片があつて、これで喉に附着していたらしい。

石原明解說

清涼寺釋迦胎内五藏研究序説

（清涼寺釋迦胎内五藏研究　第一報）

森田幸門

平安朝のとき、奈良東大寺の學僧奝然と義藏とは、共に洛西愛宕山に伽藍を建立して、釋尊の遺法を興隆しようと決心し、お互に誓をたてたのであるが、之は當時、平安遷都以後既に一世紀半を經て、京都の新興佛教に對して、極めて不利な立場におかれるようになつた南都佛教徒の奮起の現れとみられ、之によつて特に比叡山の教團に對抗しようと願つたと思われる。（附圖「二世結緣狀」參照）この兩人の誓約は天祿三年（九七二）になされたのであるが、それから約十年を經て、圓融天皇の永觀元年（九八三）の八月一日、奝然は宋商の船に乘つて九州を出帆、同月十八日に台州、即ち現今の浙江省の臨海に到着して、その地方の大寺開元寺に滯在したのである。その後、

九月九日、天台山に向い、そこに約一ヶ月滯在。

十月九日、新昌に向い、その後杭州を經て、江蘇省の蘇州、楊州に到り、楊州では開元寺に到つて、有名な印度傳來の優塡王の作である釋迦生前の姿をうつしたと稱せられる、梅檀の像を拜しようとしたが、既にその像は他に移されていた。即ち南唐王李昪が金陵に移して長光寺に安置したが、南唐が滅びると共に、像も亦開封に入り、宋の太祖は之を滋福殿に安置していることが判つた。

十二月十五日、安徽省の泗州に到り、普光寺に詣で、大聖僧伽和尚の靈蹟を拜した。

十二月十九日、汴京に到着、同二十一日崇政殿で太宗に謁

見、獻上品を贈呈し、日本の事情を答申して太宗を感動せしめ、紫衣を賜るの光榮を得て、左街の明聖觀音院に滯在することになつた。翌年正月、滋福殿に參入して優塡王の釋迦瑞像を拜することができた。

三月十三日、五臺山巡禮に汴京を出發す。

四月七日、五臺山の大華嚴寺に到着。五十餘日間、五臺の諸聖地を巡歷し、種々の靈感を經驗した。このとき奫然の心中には愛宕山に五臺山と同じような大伽藍を建設する夢が描かれていた。

五月二十九日、五臺山出發。河南省の洛陽に出で、白馬寺を訪ねて崇智阿闍梨にあつた。

六月十八日、龍門を經て、

六月二十四日、汴京に歸着した。

雍熙二年（九八五）

二月十八日、當時、優塡王釋迦瑞像は宋宮庭の滋福殿から、啓聖禪院に移し安置されていた。

三月二日、太宗に拜謁して、法濟大師の號を賜わり、新雕の大藏經四八一函、五〇四八卷、新譯四一卷其他を賜つて台州に向つた。

六月二十七日、再び台州に歸着して開元寺に滯在し、こゝで優塡王の釋迦瑞像を、愛宕山に建立する寺の本尊としてまつるために、之を模造する決心をして次の如く曰つている。

奫然は多く生きて叨けなくも像に逢うの運を自ら慶ぶ。因みにきく、往昔優塡王は忉利天に於て釋迦の瑞像を雕刻し、顯現して既に西土に留る。寫邈し或は中華に到る。日域の遐陬をもつて、梵容を想うて而も覩がたし。奫然は遂に衣鉢をすて、香木を収買し、工匠を召募し、樣に依り雕鏤す。七月二十一日功を起し、八月十八日に手を畢う。奫然意うに、父母の養育、師主の訓持、國主の蔭庥、都佛の救度に酬い奉らんとするには、この巨善に憑つて、先づ四恩に報じ、恭しく願う、唐土の帝皇の丕業等が無疆の化をなし、本國々主の崇基が不朽の期を延べ、當朝の大人、此郡の太守は各餘慶を承け、俱に長年に叶わんことを、と。

奫然はまた今月一日に、大藏經を轉讀せんと發心し、皇帝の乾明節をもつて、上は聖壽を扶け、仍つて鴻恩に答え、燭を然やし香を焚き、函を開き卷を展ぶ。

今は瑞像の圓く就るにより、五藏を入るに次いで聊か來

意を書し、以てその由を序す。

時に皇宋の雍熙二年太歳乙酉八月十八日記す。

僧鑒端ために書す。

かように裔然は、愛宕山に建立する寺の本尊とするために、釋尊の生前の姿を、優塡王の作にならつて雕刻すると共に、勅版の大藏經を順次讀誦し、供養する敬虔なる行にはいつたのである。

八月十八日にこの瑞像が完成すると、その像背に、五色の絹で作つた五藏を納めた。之は生身の釋尊であるとの特殊な信仰に結びついているからであろう。五藏と共に、日宋の僧侶によつて次のものが佛體内に、同時に喜捨せられた。

瑞像に五藏と具に入る捨物を記す。

台州都僧正　景堯　水精珠三顆を捨す

開元寺　僧　德宜　水精珠三顆を捨す

僧　保寧　水精珠二顆を捨す

僧　居信　瑪瑙珠一顆を捨す

僧　鴻粹　水精珠一顆を捨す

僧　鑒端　水月觀音鏡子一面、鈴子一箇を捨す

僧　清聳　銀彌陀佛、水月觀音鏡子一面を捨す

僧　契蟾　佛眼珠一雙を捨す

僧　契宗　鏡子一面を捨す

僧　建寶　金剛珠四顆を捨す

蘇州道者僧　水精珠一顆を捨す

妙善寺尼、清曉、省榮、文慶、併余七娘は

五藏一副を捨す

胃白色　心赤藏玉　肝赤藏香　膽紺色藏舍利　肺紅色藏梵書

肚藏錦香　腎紫色藏香　嗅白色　腸白斑色　背皮白色

賭黃色

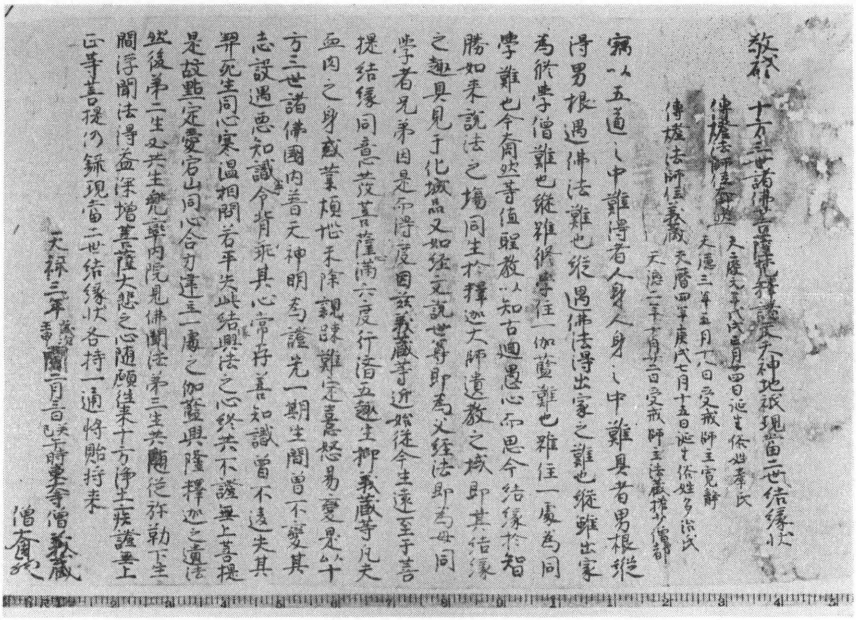
造佛博士　文珠像入肉髻珠中に捨す

陳祝兒年一歳　右手に入る銀釧子一枚を捨す

日本國東大寺法濟大師賜紫　裔然

佛舍利一顆、菩提念珠一釧、鏡子一面、最勝王經一部、娑羅樹葉、金玉寶石等を捨す

日本國僧　喜因　小書法華經一部、靈山變相一幢を



敬白　十方三世諸佛菩薩羅漢天神地祇現當二世結緣狀

傳燈法師僧奔然　天德三年五月十八日受戒　師主寛靜

傳燈法師僧義藏　天暦四年庚戌七月十五日受戒　師主法藏

病ハ五道ノ中難得者人身ノ人身ノ中難具者男根縱得男根遇佛法難也縱遇佛法得出家之難也縱雖出家為供學僧難也縱雖供學任一伽藍難也雖任一處為同學難也今奔然等值聖教ハ知古迴愚心不思今結緣於智勝如來說法之場同生於釋迦大師遺教之域即其結緣之趣具見于化城品又如法花經說世尊即為父經法即為母同學者兄弟因是不得度因茲義藏等近始從今生遠至于菩提結緣同意菩薩滿六度行淫五慾生抑義藏等凡夫血肉之身惑業煩惱未除親疎難定喜怒易變是以十方三世諸佛國內善天神明為證先一期生間曾不變其志設過恵知識令背乖其心常存善知識曾不違失其罪死生同心寒溫相問若平失此結興法之心終共不證無上菩提是故點定靈宮山同心合力達三一處之伽藍興隆釋迦之遺法故後第二生又共生兜率內院見佛聞法第三生共隨從彌勒下生閻浮聞法得益深增菩薩大慈之心隨願往來十方淨土莊嚴無上正等菩提仍錄現當二世結緣狀各持一通將贈持來

天祿三年歲次壬申閏二月吉日　天時東寺僧義藏

僧奔然

奔然・義藏二世結緣狀（手印に注意）

捨す

雍熙二年八月初七日造佛についで、佛牙を像面に入れ、巳に至る後の時、佛背上に血一點をいだす、何の瑞たるかを知らず。衆人はみなみる、故に之を記す。雍熙二年八月十八日

法濟大師賜紫　奔然錄す

造像博士　張　延皎

勾當像僧　居信

以上の他に、奔然が同學義藏と共に手印し、誓いあつて一通宛所持した二世結緣狀と、奔然の生年月日を記した小紙片等とが納められている。

五藏入胎の意義について

（清涼寺釋迦胎内五藏研究　第二報）

石原　明

この釋迦如來像は、古くより三國傳來の瑞像として釋迦の眞容に最も近いとされ、厚い信仰があり、美術史上からは印度形式を傳える、いわゆる清涼寺式という特殊な造顯像の基本として重視されている。

今回發見された胎内奉籠文書によつて、すでに第一報に於て森田幸門氏の紹介される如く、その造像の由來や傳來が明確になり、年代も明瞭となつたことは、わが美術史、佛教文化史上の大きな收穫というべきであろう。

これら奉籠品の中に絹製の内臓模型一具があることは、從來僅少の史料より存しなかつた平安時代の解剖學的知識に大きな貢献を與えるばかりでなく、印度醫學の流傳という點からも醫史學上重大な意義を有するものである。

内　容

一、清涼寺釋迦像胎内の五藏
二、五藏を入胎せる佛像の作例
三、教義よりみたる五藏入胎
四、内臓模型としての意義
五、附　記

一、清涼寺釋迦像胎内の五藏

去る昭和二十九年春、洛西嵯峨の名刹、清涼寺（しようりようじ）の本尊胎内より夥しい奉籠品が發見され、その中には從來全く空白であつた美術工藝史上の問題を解決すべき、幾多の重要資料が存することは、すでに周知のことである。

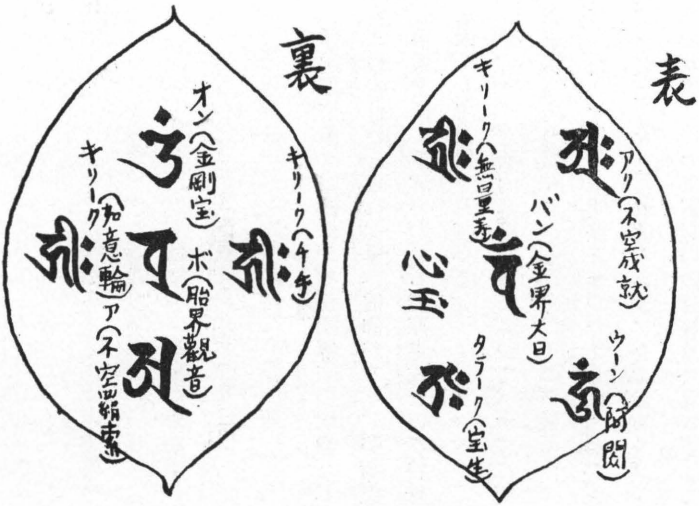
よつて私は清涼寺綜合研究會の囑により、とくに内臓模型を中心とする佛教醫學的意義の解明と、わが中世醫學に及ぼした影響とについて、いさゝか調査した處を發表し、大方の示教と批判とを請うため、あえて中間報告をする次第である。

まず初めに、釋迦像に納められた内臓模型の現状について記載する。

この内臓模型（以下、當時の稱呼によつて單に『五藏』と記す）は、前掲森田氏論文にある「入瑞像五藏具記捨物注文」（口繪附圖參照）の目錄の通り十一個より成る。幸いにも注文に名稱と形態が明記されているので、これと原品とを對照してみると、およそ次の如きものであることが判る。

1　胃……注文には『白色』と注記あるだけであるが、全體は錨形をなし左右約三寸六分、材質は白の入子菱紋綾を用い、綿の縫いくるみである。上方に梵字を一字墨書している。この梵字はオンの字で莊嚴點を伴つている。そして胃全體は上方で喉に連結する。

2　心……『赤色藏玉』と注記あり。現状は遊離して存す。蘇芳染と覺しき赤色の飛紋綾を用い、上下尖の楕圓形をなし、上下約三寸あり、中に指頭大の玉（縫目を解くことが出來ないので材質不明）が入つている。表裏ともに梵字を墨書しているが、どちらが表か裏か明かでない。たゞ梵字



第１圖　心の表裏にかゝれた梵字

の横に『心玉』と記してある面があるから、都合上かりにこれを表とする。

さて、心の表裏の梵字は何かというに、『心玉』と記してある表面は、中央にバン、右上にアク、右下にウーン、左上にキリーク、左下にタラークと讀める、これ卽ち種子であつて、バンは金剛界大日如來、アクは不空成就（釋迦）如來、ウーンは阿閦如來、キリークは無量壽（阿彌陀）如來、タラークは寶生如來をさすものである。この五字をかくの如く配するのは金剛界五智如來の種子曼荼羅である。故に心の表面は金剛界五智如來種子曼荼羅を書いたものであることが判る。

裏面の梵字も五個あり、中央にボ、上は莊嚴點のないオン、下はア、右は涅槃點を缺くが恐らくキリークのつもりであろう。左は少しく字形が崩れているがこれも恐らくキリークならんと察せられる。上から讀んでオン・ボ・アとくると何かの眞言か咒の如く感じられるのでいろ〳〵調べてみたが、一般に用いられるものにこのようなのに該當するものがないので、種子と考え直してこれを解した。オンは金剛寶又は金剛花、左右のキリークは右を正規のキリーク字とみて千手觀音にあてると、左の崩れたキリークは如意輪觀音とみるべきであろう。そうすると下のアは不空羂索觀音となり、中央のボは准胝觀音又は胎藏界觀音の通種子であるから私は後者をとつた。

これによつて考察するに恐らくは胎藏界觀音種子曼荼羅と解すべく、中央に胎藏界觀音の通種子を安じ、上は天蓋にみたてゝ金剛寶を配し左右に千手、如意輪、下に不空羂索をおいたものと思われる。これはあくまで私の想定であつて、このような曼荼羅を說いた經典乃至は聖教の文獻上の依據を示すことは出來ず、極めて根據の薄い解釋であるから、識者の示教を俟つものである。

3 肝……『赤色藏香』と注記あり。左右約三寸二分の佛手柑の如き尖端が五葉に分れた縫いくるみで、上方の縫目が解けて現在は中から絲が見えている。材質は心と同じ蘇芳染らしき赤色の飛紋綾で表面に五佛の名を墨書し裏面には右より五行に次の如く書かれている。

樹一時成佛道」各坐菩提」千花百億」國一國」一釋迦

中に香を藏す、ということになつているが、その香がどんなものか、どれ位入つているかは目下の處不明である。

さて、表面の五佛の名であるが、その配置は、右より普賢菩薩・觀世音菩薩・無量壽佛・釋迦牟尼佛・文殊師利菩薩となつている。これも何れの經典にも說かない配置であるが、強いて考えれば、無量壽佛(阿彌陀如來)の三尊では、阿彌陀如來を中尊として右に觀世音菩薩・左に勢至菩薩を脇侍とする。このうち勢至菩薩を釋迦如來にかえて配したとすると、釋迦三尊として右は文殊菩薩、左は普賢菩薩が脇侍になるので、釋迦の脇侍を彌陀三尊のさらに兩側に配したものではなかろうか。しかし、普賢と文殊の位置が左右逆になつているのはどんな意味があるのか判らない。

裏面の五行の文句は、實は『千花百億國、一國一釋迦、各坐菩提樹、一時成佛道』と讀むべきで、胎內より出た脩然の「繫念記名帖」(粘葉裝縱二寸五厘橫一寸四分五厘、全八枚十六面、墨附十二面)の首に『我今盧遮那、方坐蓮華臺、周市千華上、後現千釋迦、一華百億國、一國一釋迦、各坐菩提樹、一時成佛道、十方恒沙界、分身釋迦身、乃至同名釋迦、三世三千佛、無量十方三世諸佛菩薩、聲聞緣覺三界天人』とある句中に見られる。これは釋迦の功德を讚嘆したものである。肝も現狀ではどこにも連結せずに遊離している。なお、肝の墨書は表裏とも脩然の自筆である。

4 膽…『紺色藏舍利』と注記あり。濃紺の無紋羅で上下約二寸五分の楕圓形をなしている。表裏とも墨書があり『釋迦舍利』『佛設利羅』と讀める。この筆者は脩然ではなく、別筆である。縫目のほどれより金箔に包んだ青色の玉が認められる。これが舍利であろう。佛設利羅とは「大般若經」に『或復三千大千世界、諸有情類非前非後、皆得爲人、此一一人爲供養佛設利羅、故於諸如來…』などと見えるものである。膽も現狀は遊離している。

5 肺…『紅色藏梵書』と注記がある。肝と同じ形態をなし現狀は褪色して黃色に近く見えるが、もとは注文に記されているように紅色であつたのであろう。恐らく染料は紅花を用いたものと考えられる。左右約三寸で無紋羅を用いている。肺はかなり損傷があり中の綿が見えている。梵書を藏したという梵書はどんなものか判らない。表裏に梵字が多く墨書されている。この梵字は保存惡きため判讀に困難であるが、六個書いてある方は六觀音の種子であることが判る。

ア　不空羂索觀音　　キヤ　十一面觀音

第2圖　肺の表裏にかゝれた梵字　下段枠内は推定。

ボ　准胝觀者　　サ　聖觀音

キリーク　千手觀音　キリーク　如意輪觀音

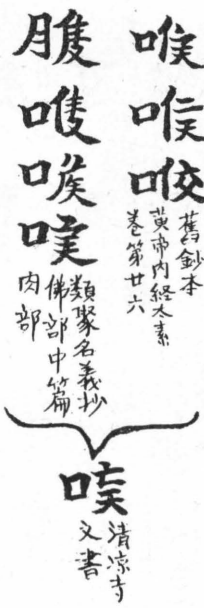
これに反して八個の梵字の方は簡單に讀めない。まず上段の右はア、その左はイー、その次はエンと判讀出來る。これを種子であたつてみるとこゝでは、アは火天、イーは帝釋天、エンは炎魔天であるから、どうやらこれは十二天のうちの種子と想像される。しかしこゝには八個しか書かれていない。十二天のうち日天・月天と梵天・地天の四天を除いた八天は八方天と稱して東西南北及びその中間の八方に配するならわしがある。或はこれをあらわしているかとも考えられるが、私は梵字に不案内であり、眞言のことも全くの門外漢である上に、こゝに書かれている梵字はかなり字形が崩れているので、斷定はさしひかえて後日の考を俟つ。

6　肚……『錦藏香』と記されている。直徑約二寸八分の丸い袋で、一端は腸に連結している。材質は龍紋錦で見事であり、これはかの有名な蜀の錦で作つたものではないかと思う。內容は勿論不明である。

7　腎……『紫色藏香』とあり、現狀は遊離した上下約二寸八分の二個の袋で腎臟の形狀によく似ている。材質は無紋羅で內容は同じく不明、紫色と記されているが現狀は褪せて茶色に近い。寶相華らしい截金模樣が殘つている。この截金については工藝史上大きな問題を投ずるものであるが、本稿とは別であるからこゝでは觸れない。

8　喉……注文には圖版に示した如き何とも判讀出來かねる文字が書かれ、注記にはたゞ『白色』とあるのみである。私はこの文字は中世に慣用された異體字であることに想到し、これに近い類型を求め得て、この字は喉であるこ

とを知つたのである。即ち、現在國寶に指定されている京都・仁和寺の醫書、「黄帝内經太素」(唐・楊上善奉勅撰、原三〇巻)の舊鈔本は仁安二年(一一六七)より約二年を費やして丹波頼基が、家傳の秘本を以て書寫したものであるが、この巻第二六の中に圖示した如く三種の喉の異體字を用いている。それが鎌倉時代には現今も用いられている異體字の祖型と共に用いられておつたので、これが注文にみられるような字形と類することは當然であるから、この類型によつて喉と讀んで差支えないと考える。



第3圖 喉の異體字の實例

喉は上下約一寸二分に綴られている數片の白い無地平織絹で作られ二部分より成り(附記參照)、腸を吊りさらに胃に連結しており、胎内にあつた時は水月觀音の鏡を結んだ絹紐と後述する背皮の上端とともに、釋迦像の胸部に下げられてあつた由である。この位置から考えてもこれが喉であつて然るべきである。

9 腸…『白斑色』とあり。これは白色の入子菱紋綾を用いて袋返しにした紐で、表面に墨で點が打つてある。喉の下から左右に伸び一端は肚に終り、他端は後述の賭に終る。喉の處では胃と連結している。

10 背皮…『白色』と記されるのみ。横絹で縦約八寸六分、横約五寸八分あり、五藏造顯の願文が墨書されている。上端は喉に連結していた。背皮の願文については後述する。

11 賭…『黄色』と注記。この文字も論議の的であるが、いまこゝでは觸れない。黄色の菱紋綾で作られた馬蹄形の縫いくるみで内容は綿らしい。左右凡そ四寸あり、兩側に梵字のア字が各一個墨書されている。

以上十一個の『佛五藏一副』は「入瑞像五藏具記捨物注文」と背皮墨書願文とによつて考えるに、北宋の雍熙二年(九八五)八月五日に台州妙善寺の比丘尼清曉・省榮・文慶及び在家の余氏の七番目の娘の四人の手によつて製作され、釋迦瑞像に納められたものである。背皮の墨書願文による

と、その製作の動機は、清曉尼が風疾に罹患してなか〳〵治癒しなかつたので、母親の余七娘と兄弟子格の先輩の尼文慶とが四恩三有の報恩による功德で功驗があるよう祈願をこめて供養したものであることが判る。即ち背皮墨書願文には、

維雍熙二年歲次乙酉八月五日[丁][丑]製五藏一副捨入日」東日本國釋迦[本][尊]□□像內永充供養製」捨台州妙善寺比丘尼清曉爲身染風患遂以□并」母親余氏七娘小師尼文慶普爲四恩三有之□□所」故[丞]悞傷寃家債主奉捨當願清曉所患風疾」便能痊瘥世〻生〻聰明智惠有福有壽修心善」知識速證菩提遇[佛]授記見今生壽福惠增」爾四大強健不爲病惱所復終之後速□□佛」願云奉直九郎先師余六姑同沾上」

と九行に及ぶ願文が記されている。「捨物注文」の記事によると、雍熙二年八月七日に瑞像が完成したのでいろ〳〵目錄にあるような喜捨の物品を胎內に奉籠した際、佛牙を像面に入れた處、巳の刻（午前十時）の後に至つて背に一點の出血の奇瑞を現じ、衆人もみなこれを認めた旨が八月十八日附で宋人の手によつて記され、裔然の自署が加えられている。

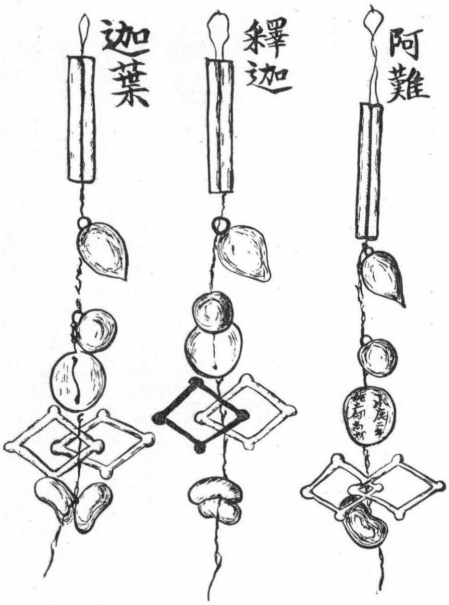
この佛牙（釋迦生身の遺齒）についてはごく最近X線寫眞撮影の結果、確認されたが、未だ詳細は知られず、今後の精査に俟つものである。ともあれ本像は右の如き信仰によつて、生身の像として魂がこめられたものであつて、古來とくに厚い信仰があつたのもまた首肯されるところである。

二、五藏を入胎せる佛像の作例

前述の如く、清涼寺本尊の釋迦如來像は、特殊な佛教々義上の信仰により、胎內に五藏を奉籠している。この五藏入胎についての教義上の解釋は後章にゆずり、このような五藏を入胎せる佛像の作例を探つたところ、實例四・文獻上の作例二を搜索し得た。まだ綿密に調べればかなりの作例を檢出し得ることゝ思うが、目下私が知り得た處は、右の五例である。

清涼寺の釋迦像以外に五藏を入胎せる佛像の實例は、長崎の崇福（そうふくじ）寺本堂の釋迦三尊である。崇福寺の釋迦三尊は造顯年代が新しく、その造像樣式によつて明代の造顯であることが知られ、入胎せる五藏は銀製で、奉籠の年代は承應

二年(一六五三)である。



第4圖　長崎崇福寺釋迦三尊の銀製五藏

圖示せる如く、崇福寺は黄檗宗であるから本尊の釋迦三尊は禪宗の例によつて、中尊に釋迦如來を置き右に阿難尊者、左に迦葉尊者を脇侍としている。

入胎せる五藏は三尊とも約二尺、すべて銀製で何れも八個より成り、銀の針金を以て連結し、胎内に懸垂されている。

形態は、まず上方より三條の銀管があつてこれは氣管と食道とを象徴し、その下に中空の樫實型の銀球がある。直徑は約七分でこれは心をあらわしている如くである。心の下、約二寸おいて中空の銀球が結ばれている。これは脾をかたどつたものであろう。さらにこれに近く、有縁の直徑約八分の銀盤が二個の孔を穿つて針金に連結され、阿難尊者の分には『承應二年　施主何高材』と二行に九字が墨書されている(後述)。これは胃であろう。その下には菱型に切り拔いた銀板が二個ずつ組合されて針金につらなつており、腸を表現している。最下部には蠶豆型の銀塊が二個ずつ連結されており、これは明かに腎と察せられる。

崇福寺本尊の釋迦三尊像は、信仰上の理由から寫眞撮影も精密調査も現在の處不可能である。故に以上の如き簡單なことしか判明しないが、これら五藏の形態は、清涼寺釋迦像の五藏と全く異り、材質も金屬(銀)製という點で細工の上にも差異があり、且つ年代も新しいので直ちに比較することは無理であろう。しかし、五藏入胎という教義上の意義は軌を一にするものと考えられる。

實在例の第四は、深草の瑞光寺(日蓮宗)本尊の釋迦如來坐像である。この五藏は江戸時代の木製といわれるが、目

下未見であるので、詳細は判らない。

次に文献上の記載で知り得た二例のうち、第一例は大阪の中野操博士の示教によるもので、天保七年（一八三六）刊行の緒方惟勝著「杏林内省錄」巻之三、市醫部に記された京都誓願寺の阿彌陀如來坐像の五藏である。

同書の記事を煩を厭わず轉載すると、

（前略）其男芸叟先生モ甚盛ニ行ナハレシガ、元祿ノ頃、京師寺町誓願寺ノ和尚、或夜夢ミラク、本尊ノ如來告テ曰、吾近日病アリ。治ヲ山脇道作ニ可請、ト夢ミテ覺タレド、怪キコトニシテ其儘ニ捨ヲキシガ、其夜同夢ヲ支院ノ住持一統ニ見テ、本寺ヘ集會シ評議ノ上、使僧ヲ山脇家ニ遣シ、其事ヲ告、併テ診ヲ請フ。先生モ亦、前夕夢中所感アリテ、怪シキ事ト思ヒ居ラレシニ、使僧來テ言フ所、全ク符合シケレバ、使僧ニ對シテ言ルヨフ、上古已來、耆婆ハ不知、佛ノ治療セシ人ヲ不聞。併シ吾モ亦靈夢ニ感ズルカラハ怪妄トノミ難言。靈佛ヲ診スルカラハ常ノ病人トハ格別ナリ。一七日物忌シテ可參、ト約シテ既ニ七日ヲ過ギ、沐浴シ誓願寺ヘ詣リ、和尚ニ引レテ内陣ヘ入リ、佛像ノ手ヲ診セラレテモ脈ノ可有理ナシ。眼ヲ定テ熟視アレバ、胸ノ邊ニ木ノ縫目アル故、爪ヲ入レテミラレシニ、扉ヲ開如ク左右ニ分レ、胸腹ノ中ハ別木ヲ用テ五臓六腑ヲ一々作リ、糸ニテ上ヘ釣リテ有シガ、其糸切レテ下ニ墜テアリ。内ヨリ咽喉ノ處ヲ見ラレシニ、金ニテ阿字一字ヲ書シ、其傍ニ折釘アリ、卽五臓六腑ヲ釣ル設ナリ。先生和尚ニ對テ、如來ノ病氣ハ是ナリ、吾臓腑ヲ其位置ノ處ヘ釣ンナレバ、清淨ナル糸ヲ出サレヨ、ト言レシニ、衆僧先刻ヨリ舌ヲ吐キ居シガ、答テ、元ト此ノ如來ハ稽文主・稽主勳兩人ノ作ニテ、腹内ニ五臓六腑ヲ備エ、面中ニ天智帝御書ノ六字名號有トハ聞キ傳レドモ、佛罰ヲ恐レテ開キ見タルコトナキ也、釣糸ハ如何シテ調出サム。ト狼狽ノ折節、兼テ信者ノ西陣糸屋勘十郎參リ合セ、其事ヲ聞テ、糸ハ私手製シテ奉ラム。ト是モ一七日物忌シテ、糸ノ製成テ先生是位置ヲ定テ釣レシカバ、時ノ人聞テ奇異ノ思ヲナシ、近世迄モ人口ニ膾炙スルコトナリ。其後、誓願寺ヨリ厚ク謝幣アリケレバ、先生辭シテ、黄白ハ所望ニ非ズ。子孫ヘ傳テ如來ノ療治セシト云證ニ可成物ヲ。ト望マレケレバ、和尚、尤ナリ。ト未開紅ト云堂前ノ梅ヲ贈レリ（後略）（原文のまゝ、句讀は

便宜上施した)。

とあつて、わが解剖學の先驅者、山脇東洋の先代である二代目道作芸叟が、元祿年間(一六八七—一七〇四)京都・誓願寺の本尊阿彌陀如來像の胎内に奉籠されていた五藏を修復した逸話が、極めて興味深く記されている。

著者の緒方惟勝は祖父より三代にわたつて山脇家の門に入つた。祖父の昌勝はこの話の主人公、芸叟及びその養子の東洋について學びのち岡山藩醫となつたという。從つてこの話は山脇家の語り草として傳えられたものと、祖父の話と兩方で綴つたものと思われる。芸叟が如來像の胎内を開くところなどは、單なる創作や附會ではなく、實際に目擊した者の口から聞かなければ判らないと思う。

いまこの像は祝融の災に遭つて存しない。

第二例は貞享二年(一六八五)に水戸藩の河井恒久らの手に成つた「新編鎌倉志」の記載である。

私が檢出し得たのは鎌倉の荏柄天神の神像に入胎された記載で、同書卷二の荏柄天神の項に次の如く記されている。

本社に菅丞相束帶の像を安す。作者不知。足・膝燒くすぶりてあり。五臟六腑を作り入れ、内に鈴を掛て舌とし、頭内に十一面觀音を作りこむと云ふ。

この記事がもとになつて、その後、文政十一年(一八二八)に成つた植田孟縉の「鎌倉攬勝考」や、天保十一年(一八四〇)に間宮士信らの手に成つた「新編相模風土記稿」などの地誌にも同様な記載がある。

この記載から察するに水戸藩の採訪の時には實見したものではなく、社傳をそのまゝ記したようである。故にどんなものであつたか詳かでない。また、現在この神像は荏柄天神の本殿深く神體として安置されているので五藏の有無を確認することが不可能であつて、これも將來の調査を期するものである。

以上のほかに大和にも五藏を入胎した佛像があるということであるが、私は未だ確かな報告に接しない。

また、佛像でない人體模型の中に内臟が存するものには、古くから東洋醫學で經絡を表示して基準としたいわゆる『銅人』があり、東京國立博物館その他に數體現存しているが、五藏入胎という佛教的な意義は全く認められず、單なる人體模型であるからこゝでは觸れない。

ともかく、五藏を入胎した佛像はその種類が何であるに

せよ、極めて稀なものといゝ得るであろう。

三　教義よりみたる五藏入胎

禮拜の對象として佛像を造顯することは、佛教に於ては極めて重要な意義をもつている。

一例を「覺禪鈔」（釋迦上、本身大日の項）にとれば、

疏十五云、於東方初門中、先置釋迦牟尼、坐白蓮花作說法狀、此白蓮花卽中胎淨法界藏、世尊爲令此教廣流布、故以生身標幟而演說之、然與本法界身無二無別、故云往彼而說法也、

とある如く、法によつて造顯され、供養された像は材質の如何によらず生身の釋迦として信仰されるものである。

釋迦如來像について「覺禪鈔」はさらに「三寶感應錄」を引いて（形像門項）、

釋迦成道後八年、思報母摩耶恩、從祇洹往忉利天、時摩耶出乳潤世尊脣示子緣、佛爲說法、時優塡王欲作佛像、巧匠言應用純紫梅檀木、採斧破木、聲上徹忉利天、以佛力聞者、盲得眼、貧得福、三途離苦、高七尺或五尺、時波斯匿王、以紫摩金而作、如來過九十日已下閻浮、木像從座起如生佛、步虛空足下雨花放光、來向世尊言木像言世尊前進、尊言我入滅不久、汝在世久利衆生、可在前、

これ卽ち釋迦の眞容に最も近いとされる像で、これを再模したと傳えられるのが淸涼寺釋迦像である。從つて生身の像としての特殊な信仰から、單に外相のみを模すにとゞまらず、五藏をも具足して佛性圓滿を期したものと思われる。

このようなことは釋迦像に限つたことではなく、いわゆる造顯作法として煩瑣な儀軌が、とくに密教に多く存する。實際に造顯作法がどのように行われたかというと、「門葉記」などの記錄に頻繁に平安時代の實例が記載されているが、本稿では末節にわたる故に省略する。

佛畫を造顯する時も大同小異の作法が行われるが、印度でどのようにしていたかという一例を擧げると、

應眞有畫像昉於南宋明帝・梁元帝時、蓋西域僧善畫者傳此法也、六朝有摩羅菩提・尉遲跋質那・釋迦佛陀・曇摩拙又・跋摩吉底俱等、唐有尉遲乙僧・金剛三藏等、皆善西域佛像、宋有鄧椿記西天畫曰、中印度那蘭陀寺僧多畫佛菩薩羅漢像、以西天布爲之、先施五臟於畫背、乃塗

五彩於畫面、以金或朱紅作地、用桃膠合柳枝水甚堅漬、中國不得其訣也、由此觀之、則西域畫勝于此土遠矣（鵜飼徹定著「羅漢圖讃集」卷上）

これは羅漢の畫像の正式な描法であるが、宋代にはすでに印度の傳を失していたことが判る。わが國の近代に於ては彫像・畫像ともに素材を修した上、大日如來三身の眞言又は五輪の梵字を空に書し、最も略式なのは開眼供養に際しても單に梵字の阿字を空書する由であるが、これが五藏入胎の精神を傳えた修法であることには變りがない。

右のことはひとり造顯作法のみならず、修法に際して行者は儀軌に從つて道場觀を行い、觀想成れば行者の肉身は法身の佛位に至り、本尊と對等の地位に入ることが出來るとされている。この際、不淨な肉身を法身となすべく種々の作法を行うが「三部四處輪圖」などの如く、身體の各部位に於てそれ〴〵諸尊が配され、定められた眞言を儀軌に從つて唱えるのである。これらについての詳細は別稿を參照されたい。

一例をとれば、宋の日稱らの譯に成る「佛說大毘盧遮那成佛神變加持經修眞言行大悲胎藏生大曼拏羅王普通念誦儀軌」卷下（石山寺本）によると、如來眞言として心・臍・腰・藏の四咒が示されており、その如來藏眞言とは、中指と無名指を立て三指を屈した印相を結び、ナウマク　サリバタター　ギャテイ　ビャクー　ラン〳〵　ラク〳〵　ソワカという眞言を唱える旨が示されている。卽ち、外相に於て各部に諸尊を配すると共に心・臍・腰・內臟が、特に佛位の法身に入るため重視されているのである。こゝに於ても藏がとり上げられていることは、造顯作法の五藏入胎と一脈の關連があるやに察せられる。この儀軌の根源は唐の善無畏三藏に由來し、遠く印度の系統を引くものである。

「白寶抄」（釋迦法雜集下の項）に於ても

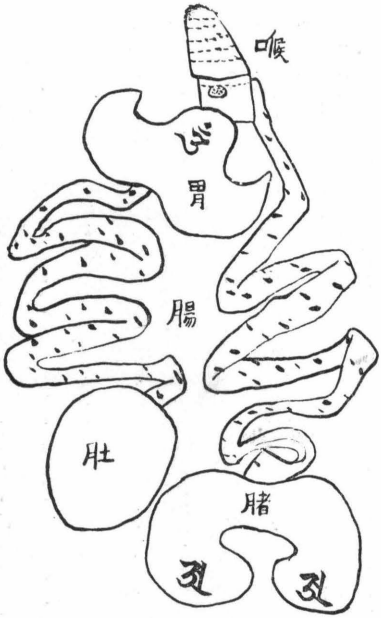
體素心・臍・臟等、卽皆是大日一身上下事、更無異也

と記されていて、やはり重視されていることがわかる。これらの部分が何故に密教で重視されるようになつたかということは、多岐にわたるので別稿にゆずるが、內臟については特別に「五藏曼荼羅」なる教義が展開され、これが五藏入胎を解く重要な鍵となるのである。そしてこの教義は佛教解剖學（こういう言葉が許されるならば——）の中心をなし、はるか古代の印度の解剖學的知識をうけついで

いるものと考えられる。これに關する詳細は別稿を參照されたい。

以上でほゞ五藏入胎の意義を諒解することが出來たが、清涼寺釋迦像に於ては五藏のおの〳〵にどのような意義が存するであろうか。

まず現在連結されている部分について考えてみると、喉は腸と胃と背皮とを結んで、胎内にあつた時は水月觀音を結んだ紐と共に像の胸部に懸垂されていた。水月觀音の鏡はちようど胸の中央に位置し、魂がこゝに宿るものとされたかの感がある。



第5圖 清涼寺五藏の消化管の連結を示す、梵字に注意。

胃には前記の如く莊嚴點を伴つたオン字が墨書され、喉より一方に連る腸の末端は腎に終り、腎には兩翼にア字がそれ〴〵記されている。このオンとアの字に教義上の意義が存する。即ち、一行禪師撰の「悉曇字母表」に、

二九十八悉曇章　五相五輪觀行字
一二三四五重字　幷加莊嚴十二點
百千萬億阿僧祇　出生無量陀羅尼門
一々變作金剛尊　是名心蓮廣金剛
阿等伊等十六字　幷及字母三十四
但合五十字義門　是名心蓮斂金剛

とあるのを普寧が注した「悉曇字母表捷覽」では、第二句を次のように釋している。

菩提心論曰、然此五相具備、方成本尊身也。

とし五相は「蓮花部心儀軌」の所説による金剛界九會の諸尊、五輪は「大日經」所説の胎藏界八葉九尊であつて金・胎兩部を表徵するものという。第九句以下の四句は、

若廣則百萬阿僧祇陀羅尼門、又成金剛尊、若攝則不出五十字義、論曰、卷舒自在當具一切智、攝多曰斂玄門極

成、則其唯阿字唵字也、

と解している處から察するに、悉曇に於ては十八章建立によりあらゆる變化を生ずるが、要約するとアとオンの二字につきる、との意であるから、この二字であらゆる現象を象徴している。即ち五藏の胃と腸にことさらこれを書いたことは、胃と腸の連結の間にすべての生命現象を現成する意を寓したものであろう。然らば腸とは何か。「康熙字典では、

腸(玉篇)陟於切、(廣韻)陟魚切亦與猪同、(正字通)同肚、俗讀肚若睹、故從者作腸、訓同猪誤

と記してある。これでは肚と區別がつかない。しかし肚はまた「集韻」では『胃也』とあり、「博雅」には『胃謂之肚』とあつて、さらに胃との區別はなくなつている。

わが國中世の稱呼もこの區別はほとんどない。「類聚名義抄」(東寺觀音院本、佛中、二〇肉部)には次の如く出ている。

胃　音謂、クソフクロ、物ハミ

腸　音長、ハラ、ハラワタ、オモヒ、コヽロ、クソフクロ

背腸　ミナワタ

大腸　ハラワタ、オホワタ

小腸　ホソワタ

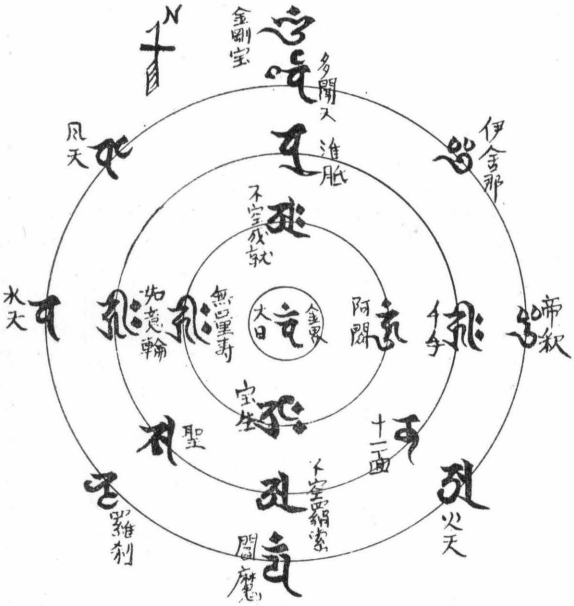
肚　音杜、ハラ、ヒハラ、犬胃、クソフクロ

腸、同通猪字、クソワタ、ハラワタ

もはやこれでは何とも區別のしようがない。清涼寺釋迦像の五藏では、胃・腸・肚・腸の四つは一連になつているので、これ全體を現代の意味の消化管とみる。胃と腸は形態上から現代のと同じものをさしていることは疑いないが、肚と腸は何に該當するか明かでない。形態上の考察は後章にゆずり、こゝでは單に消化管にア字とオン字を墨書してある教義上の意義を明かにするに止める。

次に遊離している諸臓器について考察するに、心は表面に金剛界五智如來種子曼荼羅、裏面に胎藏界觀音種子曼荼羅(假稱)を墨書し、中に玉を藏している、密教にあつて金剛界は精神を胎藏界は肉體をあらわす例があるので、心は二つながら兼ねた中樞との意味にもとれる。また前記の「白寶抄」に『釋迦大日一體事』とあつて、本身は一であるという信仰も、心に金剛界大日如來を中心とした五智如來の種子が書かれている事實と併せ考えると心に特殊な意

義をもたせているものと信じられる。胎藏界觀音種子が存することは、肺の一面に六觀音の種子を顯わし、また水月觀音の鏡が五藏に連結して入胎されていたことに關連して、宋代における觀音信仰の盛況を反映したものと思われる。



第6圖 清涼寺五藏に顯現された種子により新たに組織した曼荼羅（未定稿）

肺の一面の恐らくは八方天と推定される種子は右の六觀音を八方から擁護する意であろうか。または心の金剛界五智如來、ことには金剛界大日如來を中尊とし、その周圍に四佛、さらにその外界に觀音、最外圍に八方天を配した金剛界曼荼羅の一變相とも考えることが出來よう。

肝と膽は恐らく一組であつたと思われる。肝の表面に書かれた佛名の配列については、前述の通りで、膽に特に重要な舍利が藏され、佛名の裏面に釋迦分身の讃嘆がある處からも、この像が生身の釋迦如來としての特殊性を強調したものではなかろうか。

腎と背皮には特に教義上問題となるようなものはないから省略する。

現在、この五藏の中に藏されている香は、調査すべき機會がないので全く不明である。肝・肚・腎の香がもし判明すれば、眞言修法に用いられる護摩の料としての五香・五藥と何らかの關連を生じ、新しい解釋が可能となるかも知れない。これは今後の問題である。

四　內臟模型としての意義

以上三章にわたつて、清涼寺釋迦像胎内五藏の現狀を紹介し、五藏入胎の教義上の意義について考察したが、こゝでは内臟模型としての醫史學的意義について考察する。

從來知られていた中國醫學の内臟に關する知見は、「素問」・「靈樞」・「明堂經」・「難經」などの古典に記載されているのが基本的なものであつて、これらは何れも陰陽五行說によつて說かれた結果、針灸醫學の基礎理論たる經絡經穴說の中に包含されてしまつている。

中國醫學の内臟知見は五藏六府（藏・府とも倉庫の意で、前者は實質性臟器をさす）に分ち、

藏者爲陰、府者爲陽、心・肝・脾・肺・腎五藏皆爲陰、膽・胃・大腸・小腸・三焦・膀胱此六者天氣之所生也

（「黃帝内經素問」五藏別論篇第十一）

となし五行說に配當して、心は赤色で小腸を府とし、肝は青色で膽を府とし、脾は黃色で胃を府とし、肺は白色で大腸を府とし、腎は黑色で膀胱を府とする。このほか孤の府として三焦があり『有名無形』と說いている。ほかに心包（膻中）胞（子宮）などをも記載しているが、五藏六府が主要なもので、十二藏または九藏（「素問」靈蘭秘典論篇など）の分類もある。

五藏六府の形狀と大さは「難經」や「明堂經」の記載によると、心は重さ十二兩、中に七孔三毛あり精汁三合を盛る。肝は重さ二斤四兩あり左三葉右四葉、合せて七葉で木の葉の如く、膽は肝の短葉の間にあり、重さ三兩三銖で精汁三合を盛る。脾は扁平で長さ五寸廣さ三寸、重さ二斤三兩あり散膏半斤をもつている。肺は六葉兩耳およそ八葉、重さは三斤三兩、肺管（氣管軟骨のこと）は九節。腎は二個あつて重さ一斤一兩、右腎をとくに命門といゝ女子にあつては胞（子宮）を繫ける。膀胱は長さも幅も九寸、重さ九兩二銖、小便九升九合を入れ、口の廣さは二寸半である。消化管については「靈樞」腸胃第三一に次の如く記されている。

脣至齒長九分、口廣二寸半、齒以後至會厭深三寸半大容五合、舌重十兩長七寸廣二寸半、咽門重十兩廣一寸半、至胃長一尺六寸、胃紆曲屈伸之長二尺六寸大一尺五寸徑五寸大容三斗五升、小腸後附脊左環廻周疊積、其注于廻腸者外附于臍上廻運環十六曲、大二寸半徑八分分之少半長三丈二尺、廻腸當臍左環廻周葉積而下廻運環反十六曲、大四寸徑一寸寸之少半長二丈一尺、廣腸傳脊以受廻腸左

環葉脊上下辟、大八寸徑二寸寸之大半長二尺八寸、腸胃入至所出長六丈四寸四分、廻曲環反三十二曲也

中國の解剖圖は唐時代には、すでに何種か作られていた。これら圖示されたものゝ一部を現在われ〳〵は知ることが出來る(中國解剖圖の詳細については渡邊幸三氏の報告を參照のこと)。しかし、右に略記したような中國醫學の內臟知見や現在知り得る中世の解剖圖と、清涼寺釋迦像の五藏とを比較するに、一見ほとんど關係がなさそうにみえる。

まず、臟器の色彩が絹を用いているから有合せの小布片を利用したとしても、もし傳統的な中國醫說によつたものとすれば、常識的に五行說を排した色を使う筈がない。また臟器の形狀も一見したところ似ておらず、それにもまして五藏六府にあてはまらない。

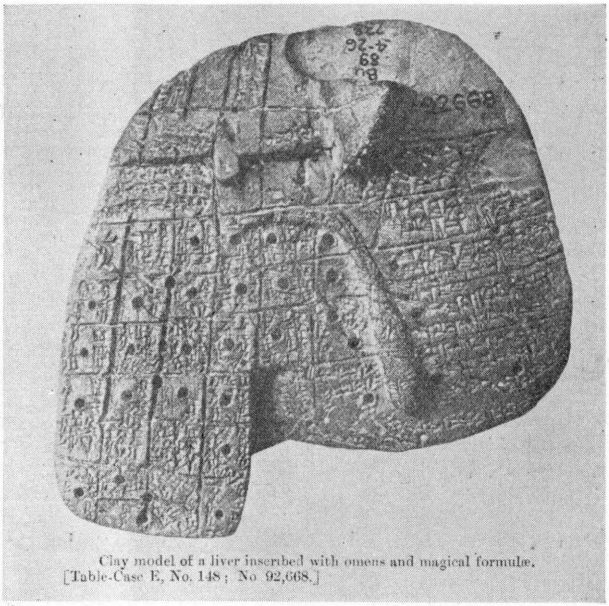
白紙の立場に歸つて、清涼寺釋迦像五藏を形態から想像すると、これは中國醫學とは全く別の系統をついだものと思われる。私の想像するところによると、清涼寺釋迦像五藏は印度の解剖學から派生した佛教醫學の知識に基いて製作されたものではないかと信じられる。そしてこの五藏は人體解剖の知見ではなくして、鳥類ことにニワトリ、或は反芻類ことにウシの內臟にヒントを得た模型ではなかろうか。現在、連絡している消化管は、喉の下に胃が連り、その左右に腸が伸び、その末端は肚と賭になつている。ことに肚は龍紋錦の袋であつてその一見した感じは非常にニワトリの砂囊に酷似する。龍紋錦の色彩もニワトリの砂囊に類して妙である。

生物學の示す處によれば、脊椎動物の消化管には口腔・咽頭・食道・胃・小腸・大腸などの部分が識別され、動物の種類によつて種々の特化が起つており、鳥類では嗉囊・前胃・砂囊などの特殊器官がみられ、反芻類の胃では瘤胃・蜂巢胃・重瓣胃・皺胃などの區分がある。

清涼寺の五藏は、製作者があまり學問のない尼僧である點より、何か基本になるべき五藏が存しなければ製作出來なかつたことであろう。製作者の知り得た限りの佛の名號や種子を羅列した點からも、基本型の五藏又は準據すべき儀軌(印度傳來の佛教醫書と思われる。詳細は別稿を參照のこと)があつたことを暗示するものである。

これについて思い合されることは「大般若經」第五三卷にウシを解剖し、その知見を佛教の教義で解釋した條項の

あることである（これも詳細は別稿を參照のこと）。ウシは元來印度では聖獸とみなされ、佛教に於ても神聖な動物とされていることから、ウシの內臟を以て模型化したものが生身の釋迦像の魂として入胎されたであろうことは否定出來ない



Clay model of a liver inscribed with omens and magical formulæ.
[Table-Case E, No. 148; No 92,668.]

第7圖 バビロニア出土粘土製肝模型（大英博物館所藏品目錄による）

ともあれ、以上のような理由から、清涼寺釋迦像の五藏は、はるかに古代印度の解剖學の系統によつて造顯され入胎されたものであつて、これが中國醫學の傳統的五藏六府說に盲從したものでないことは、ほゞ肯定されるであろう。

さて、現存する內臟模型の最古のものとしては、バビロニア出土の西紀前二一〇〇年頃のものと推定される肝臟の粘土製模型が知られている。これは大英博物館所藏（バビロニア室テーブルケースE第一四八號、記載番號九二六六八）で、膽囊を附着し表面に約五〇個の區劃が施され、區劃內には肝臟の示すあらゆる變化の意義が楔形文字で刻まれている。また少しく年代は下るが、同じくバビロニア出土の青銅製の肝臟模型も知られている。

これらバビロニアの肝臟模型は、純然たる醫學的意圖の下に製作されたものではなくして、神にさゝげたいけにえの動物を殺し、その肝臟をみて神託を知る參考資料として作られたものである。バビロニアに於ては身體の諸臟器のうちとくに肝臟が重視され、血液の中樞であつて生命を支配する處と考えられていた結果、政治・軍事上の吉凶を占うためには神に犧牲をさゝげることにより、神託はその犧

牲獸の最も重要な部分、卽ち肝臟に變化を起させて示されると信じられていた。故に神託を知るために動物を解剖することから、ある程度の體系立つた知識がもたれ、これによつて占術的基準を示すために右のような模型が作られたのである。粘土製模型はかなり實物に近い形狀をなしていて、動物解剖の知見が反映されているようであるが、その製作動機が全く醫學と關係なく、また肝臟だけで他の臟器の模型は目下の處知られていない。

エヂプト・ギリシア・アレクサンドリア・ローマなどの古代醫學の繁榮した時代の內臟模型の遺品は未だ一つも知られていない。エヂプトではミイラの製作によつて解剖學はかなり發達したが宗教的理由によつて醫學の分野から遊離し、人體そのものゝ保存という面のみ重視された結果、恐らくは內臟模型製作は全く行われなかつたことゝ想像される。ギリシアでは宗教的理由から解剖は行われず、自然哲學的思辨が醫學を支配したので、やはり內臟模型などは作られなかつたことであろう。アレクサンドリアでは始めて人體解剖が學問的意圖の下に行われ、多くの新知見が得られたが、解剖學そのものとしては獨立して發達せず、外科の分野に應用されたので解剖圖や模型などは作られなかつた。ローマに於ては實利を尊ぶ氣風から、ガレノス(一三〇—二〇一?)のような大家が輩出して解剖・生理學は空前の發達をとげたが、彼の知識はサルの剖見に立脚したものといわれ、全集中に記載あるのみで圖譜さえも著わされなかつた。

中世のヨーロッパでは全く解剖學は振わず、カトリックの束縛の下にガレノスを祖述するにとゞまり、何ら見るべきものをもたない。

暗黑時代の中世歐洲に新しい息吹を與えたアラビア醫學は、歐洲ではすでに亡んだ古代醫學を溫存した點に於て大きな地位を占めている。しかしアラビア醫學の有した解剖學的知見はガレノスの亞流であり、東方との交流によつて印度の知識がとり入れられたほか、獨創性に缺けている。しかし、低俗ながらアラビアでは幼稚な解剖圖が作られ、歐洲に傳えられたことは、中世解剖學史上の重要なことがらである。

以上略述した如く歐洲に於ける內臟模型は中世には全く存せず、解剖圖さえもアラビア系のもの以外にはない。わ

れわれの知り得るバビロニアの肝臓模型二個が唯一のものであるというも過言ではない。

再び眼を東洋に向けると、中國に於ける人體模型製作の歴史は遠く漢代に遡る。即ち、新の天鳳三年(一六)王莽は醫官に命じて生體解剖をなさしめ、これにより青銅を以て『銅人』を鑄造したという「漢書」の記事を初見とする。唐代には記錄が存しないが、宋代になると仁宗の天聖五年(一〇二七)に王惟一が勅を奉じて銅人二體を鑄造し、その解説として「銅人兪穴鍼灸圖經」三卷を著わした。元代にもこの銅人は傳存したが破損があつたとみえ、世祖の至元二年(一二六五)にこれを修理せしめたことが知られている。

中國で銅人を作つた理由は、針灸治療の實施上重要な經穴を正確に表示するためと、經穴を求める練習に使用するためであつた。

宋代の制では銅人の大さはすべて「靈樞」骨度篇に示された寸法に從い、中空なものとする。胴は腹・背で蓋がとれるようにし、中には頭部から金屬製の五藏六府を懸垂しておく。四肢・頭部・軀幹などの空洞には、鹿革の袋に水銀を入れたものを充塡し、體表には片側三六五穴の經穴と十二經絡を表示する。經穴の穴は體表に直角とし、管針が漸く入るほどの大さに穿つ。

これが正式な銅人で、實習用には目隱しをして指先で經穴をさぐり、管針をこれに刺入するに、その位置が正しい刺法にかなつていれば袋の中の水銀は管針によつて穿刺され、掌中に洩れて手技の正しいことを示すようになつていたという。

わが國にこのような銅人が渡來したのは、永和四年(一三七八)に竹田昌慶が明から歸朝の時、携え歸つたといわれるが最も確實な記錄である。この像はその後轉々として江戸幕府の醫學館の所有になつた。昌慶の持歸つた像は、宋に成つて元に補修した正統な銅人をさらに倣製した明の國定像の複製であろうと思われる。

現在、東京國立博物館に江戸幕府醫學館舊藏と稱せられる銅人二體が存するが、これは昌慶傳來の像ではないようで、製作年代が少し下り、經穴も正規なものではない。一體には頗る破損した五藏六府の斷片があるが、革袋はない。その五藏六府は傳統的中國醫學の形態を踏襲したものである。

明末清初の造顯と思われる長崎・崇福寺釋迦三尊の五藏は、前述の如き形態で、かなり模式化されているがやはり傳統的中國醫學の五藏六府を踏襲している。

右に記したような次第で、東洋に於ても元以前の內臟模型は現存しなかつたのである。從來知られていた前記の銅人の五藏六府も、長崎・崇福寺の銀製五藏も、共に明代の遺品で、解剖圖でさえも完存する原本で南宋以前のものはない。從つて清涼寺釋迦像五藏の發見によつて東洋醫學史は勿論、世界に誇るべき現存最古の完全な內臟模型を得たことは學界のため慶びにたえないところである。

しかも、この五藏は傳統的中國醫說によらず、五藏入胎という宗教的理由から、恐らくはニワトリ・ウシの內臟知見に發したと思われる古代印度解剖學の流れをついだ佛教醫說によつて製作されたものであつて、絹製という特殊な材質の點からも、かのバビロニア出土品と異り、傳世品として北宋の雍熙二年(九八五)造顯以來、約一〇〇〇年の間釋迦像の胎內に秘められていた事實は、五藏入胎という特殊な信仰の然らしめた處であり、光輝ある千年の傳統文化をもつ古都——京都にしてはじめて可能であつたといえるであろう。

稿を終るにあたり、清涼寺住職塚本善隆博士の御好意を謝すると共に、文部省文化財保護委員會・京都國立博物館・清涼寺綜合研究會の御援助に對し心から謝意を表する。

なお、本研究は昭和三〇年度の文部省科學研究費の補助によつて行つたものである。

(三一・一・七　脫稿)

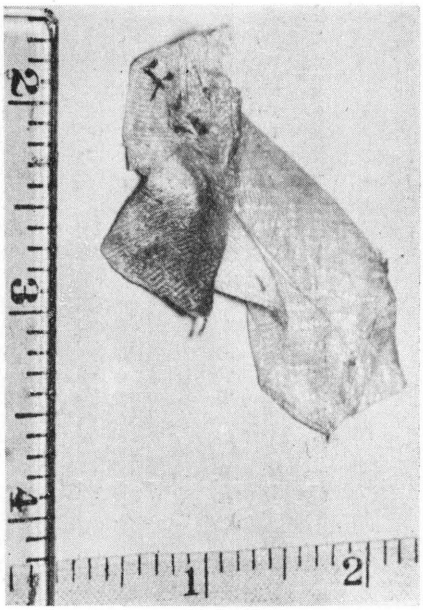
五　附　記

昭和三一年三月六日、好機に惠まれ、再び清涼寺釋迦堂に於て本尊を開扉して撥遣ののち、X線透視及び撮影に立會い、また五藏について精査することを得て、若干の新知見を得た。すでに脫稿した中間報告に全面的補訂を加えることが困難であつたので左に列擧して附記とする。

1　『上焦』の確認

さきに五藏は「入瑞像五藏具記捨物注文」の記載通り十一個であると報じたが、注文記載以外にさらに上焦の存することを確認した。

卽ち、口繪原色圖版の右上に喉の横に見えている蝶結び劍先形の帛製品がそれで、墨書が二字あり、一は『上』字



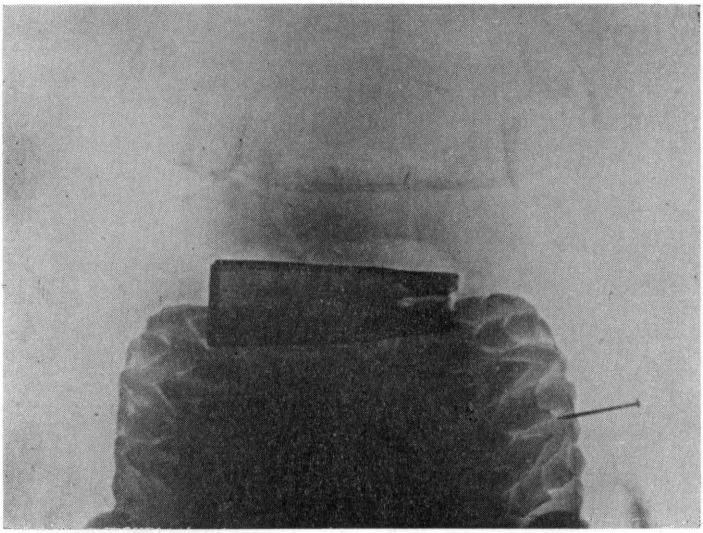
第8圖　清涼寺釋迦像に納められた上焦の全形

で判然としているが他の文字は明かでない。材質は胃腸と同じ入子菱紋綾で袋になつており緣は糸で止めてある。全長約二寸三分、幅約一寸、劒先形の反對側は蝶結びの如くみえるが、これは密教で修法の際香藥を包んで本尊に供養するいわゆる『香藥裹樣』の一種で折られている。この折り方が無理なため右脚上半部から左耳中央にかけて折り癖がついている。不明の文字はこの折り目の中に入り込んでいる。即ち墨で文字を書いてから疊み糸で止めたものと思われる。そこで脆い纖維を損しないよう注意して折り目をのばしたところ『焦』字とほゞ斷定しても大過ない墨痕が認められたので、これを上焦と確認したわけである。この墨書は奔然の筆蹟とも異り、膽の墨書とも別筆である。

上焦の確認により、三焦全部の存在が推定されるが、現在知り得る限り中焦・下焦に相當するものは發見出來ない。恐らく存在するであろう中焦・下焦は、像の腹部の僅かな木材のハギ目の間隙に納められているものと思う。

三焦の概念は中國醫學特有のもので、六府のうちに數えられ、しかも名のみあつて形體がなく、上焦は霧の如く中焦は漚の如く下焦は瀆の如きものであると「靈樞」『營衛生會』第十九篇に說かれている。從つて何れの中國解剖圖にも三焦の形體は圖示されていない。それにもかゝわらず、ひとり清涼寺釋迦像にのみ上焦が特異な形狀で表現されていることは、何らかの理由があると思う。しかも上焦が注文の五藏目錄に記載なく、印度醫學では三焦の概念が全くないことを考え併せると、この入胎五藏が中國醫學の影響を受けていることも肯定し得る處である。中國醫學の說く五藏六府のうち清涼寺五藏に存しないものは脾と膀胱の二

つであり、これが或は注文中の肚と賭にあたるかも知れないという想像も起る。



第9圖　清涼寺釋迦像の佛牙(X線透過による正面像)

2　佛牙の發見と出血奇瑞の考察

「入瑞像五藏具記捨物注文」の末尾に

雍熙二年八月初七日造像之次、入佛牙於像面、至巳後時佛背上出血一點、不知何瑞、衆人咸見、故此記之、時雍熙二年八月十八日

とあることから面部に佛牙が奉籠されていることは明かであつたが、今回X線透視と撮影によつてその存在が確實になつた。佛牙はやゝ長方形の恐らくは練物に植えられているように見えて長さ約一寸五分、表面に線狀の陰影が認められ、不透過の箔の如きもので包まれている。記載によるとこの佛牙を納めたあとで、像の背に一點の出血があり奇瑞として衆人みなこれを認めたとある。

本像は奮然の發願により雍熙二年七月廿一日に起工し八月十八日に完成したというから、かなり急いだ造顯といわざるを得ない。それが特に台州の夏季であつてみれば塗裝の工程を考慮してみる必要がある。いま奉籠物の納められた胎内をみると(口繪、全像背面寫眞參照)、板蓋の施された腔の大さは高さ八寸五分、幅四寸五分、深さ三寸七分あり

底面の奥の下は約二分ほどの間隙（素材ハギ目）になつている。（この中は未調査）。蓋の施された外口周邊と蓋の周邊には朱が處々に明瞭に沈着している。この所見から考えると、像の彫刻が一應終つたのち下塗りとして朱を施し、上塗りに漆をかけたところ、蓋と腔の間隙に下塗りの朱が多く流れこみ完全に乾燥しないうちに上塗りの漆がかけられたので、氣候の關係と漆の特性から流れこんだ朱が浮き出したのを出血の奇瑞と信じたものではなかろうか。のちにいろ〳〵の奉籠物や文書を胎内に納め蓋をして楔で止め、合せ目を上塗りしたものと考えられ、楔の材質を專門家が調べた結果によると原封のまゝであるとのことである。

3　喉の構造と包藏物

喉は三つの部分より成つている。最も外表にみえる處は幅約八分あり、四枚のテープ狀の絹を綴り合せてある。その下には少し狹いテープ狀の絹を五枚綴り、筒狀にしてある。この筒狀の中に茶褐色角質樣不均等の小塊が包藏されている。この物質は目下の處不明である。最下部には長さ約一寸八分の無地平織絹が附着し、これが背皮と腸を連結し、上方は前述の腔上面に紫色の絹と重ねられて水月觀音の鏡を結んだ紐と共に漆で固定されてあつた。テープ狀の絹が合計九枚用いられ、下部は筒狀をなしていることから、喉嚨九節という古說に一致し、これが喉であることは益々確定したわけである。問題は角質樣の包藏物の小塊であつて、紫外線照射によつても螢光を發せず、肉眼で見たところは樹脂のようにもみえ、恐らくは香の一種であろう。今後の精査に期待するものである。

4　紫外線照射による所見

清涼寺釋迦像の五藏を紫外線で照射してみたところ左の如き興味ある事實を發見した。肉眼では上焦は白色にみえ、折り目の深い部分に僅かに赤色が認められるだけであるが、紫外線照射下では全體が鮮黃色である。他の部分にこのようなものはなく、もとは染色されていたことを思わしめる。また、膽は肉眼では深黃色一色でかなり鮮かで汚れも認められないが、紫外線照射下では表面に龍紋が浮き出て見える。これは肚の龍紋の轉寫したものであつて、胎内に於て密着して長年月を經過したため肚の龍紋の染料が膽に影響

を與えたものであろう。

5　塵埃中より檢出した香

胎内より得た塵埃中より武田藥工研究所の渡邊武氏は沈香・安息香・檀香の三種を檢出した。恐らく五藏の中に包藏された香がこぼれたものと思われる。密教の通常の儀軌によると釋迦法に用いる香は、名香として白檀、五香として龍腦・鬱金香・檀香・麝香・沈水香を用いることになつている（「覺禪鈔」）。台密の一流では鬱金香を安息香又は丁香に代えている儀軌もあるから、揮發性の龍腦はともかくとして喉の中の角質様小塊は或は麝香かも知れない。香については精査の上、改めて渡邊武氏が發表の豫定である。

6　材質の解明

本像は古來、赤梅檀の瑞像と傳えられているが、木材の質について調査した西京大學助教授小原二郎氏の報告によると魏氏櫻桃 Prunus wilsonii Koehne であるという。この木は喬木で中國の湖北地方より貴州に分布しているもので台州で造顯された本像の素材としては、まさに土産の材を用いたものといえよう。魏氏櫻桃の作例は本像のほか、小原氏によると教王護國寺の兜跋毘沙門があるという。

7　荏柄天神の五藏について

鎌倉の荏柄天神の五藏についてさきに私は文献の記載を紹介し、その存否については確たる證據を示し得なかつたが、友人の佛像修理專門家三森達雄氏の教示により現存することが明かにされた。木製彩色でおよその形狀は一般に知られている中國醫學の五藏六府說と一致するものゝようである。

以上、最近知り得たことがらを附け加えたが、何れ後日完全な調査をまつて決定的な報告をしたいと思つている。諸賢の御教示を得ることが出來れば大幸である。

終りに當り再び清涼寺當局及び各專門分野での知見を教示された各位に謝意を表する。とくに再調査にあたり、特別な便宜を與えられた武田藥品工業株式會社重役、伊藤純一郎氏の好意に心から御禮を申上げたい。

（三一・三・九附記）

清涼寺釋迦胎内五藏の解剖學的研究

――中國傳統醫學よりの研究――

（清涼寺釋迦胎内五藏研究　第三報）

渡邊　幸三

はしがき
一　釋迦胎内五藏の種類
二　釋迦胎内五藏の上焦
三　釋迦胎内五藏の排列
四　釋迦胎内五藏の形態
五　釋迦胎内五藏の色彩
六　釋迦胎内五藏と佛教教義による五藏六府圖
むすび

はしがき

洛西嵯峨の名刹、清涼寺釋迦堂の本尊、釋迦如來の造顯・傳來等の經緯、その胎内に奉籠されている五藏の種類・形態・色彩・材質、五藏の表裏に書かれている經文・梵字、五藏の内に納められている舍利・玉・香・梵書、五藏が胎内に奉籠される宗教的意義等に關する總括的な説明は、森田幸門博士(第一報)、石原明博士(第二報)によつて、それぞれ詳報されるはずであるから、本稿に於いては、それらの總括的な説明は省略させていたゞき、釋迦胎内五藏の解剖學的性格を究明するに必要な問題を重點的に取りあげて論ずることにしたい。

由來、佛教に於いては、例えば宋の鄧椿の畫繼卷十の「中印度僧畫佛」に、「西天中印度那蘭陀寺僧。多畫佛及菩

薩羅漢象。…先施五藏于畫背。乃塗五彩于畫。」とあるが如くに、佛畫を畫く時には、その畫紙の裏に五藏を素畫する行事がある。又、藏府の模型を作成して之を佛像の胎内に奉籠する行事も行われていた。例えば唐の段成式の酉陽雜俎前集卷六の「絶藝」に、

成都寶相寺偏院小殿中。有菩提像。其塵不集。如新塑者。相傳。此像初造時。匠人依明堂。先具五藏。次四肢百節。將百餘年。纖塵不凝焉。

とある。成都の寶相寺の塔頭の小殿中の菩提像(羅漢像)の胎内に、五藏が奉籠された功德により、少しの塵も集積しなかつたと言うのである。この文によつても、五藏の胎内への奉籠は、その佛像を生身の瑞像とする佛教的な信仰によるものであることが推定される。この行事は、唐から北宋にかけて、ますます盛んに行われたと見え、北宋末の楊傑の「淨慈寺七寶彌陀像記」(樂邦文類卷三)に、「佛身等於大虛。故不設五藏。」と言い、佛身は大空(ソラ)に等しいから五藏を設けないと、五藏を奉籠しない理由をわざわざ説明している。この言を裏から見れば、その當時に於ては、佛像には多く五藏が奉籠されていたことが推定される。

この佛像に五藏を奉籠する行事は、道教に於ても行われ、南宋の陸游の渭南文集卷二十四の「道像五藏疏」には、

道雖與貌。固非耳目口鼻之施。天本無心。尙何肝膽肺腸之有。既云肖像。蓋亦同人。願共發於信心。不須疑着。庶亟成於盛事。垂示無窮。

と述べている。この文中の「既云肖像。蓋亦同人。」の二句は、五藏の奉籠は生身の瑞像となすものと言う宗教的信仰を如實に物語るものと思われる。

上記したが如くに、佛像に五藏を奉籠する宗教行事は、唐宋の間に一般に普及していた。この行事は、相當舊くから我國にも傳えられたであろう。又、五藏のかわりに、金・玉・五穀を奉籠する例もあるとの由である。その宗教的意義・起原・消長・作例等は、石原明博士から報告されるはずである。清凉寺釋迦胎内五藏(以後「釋迦胎内五藏」と簡稱する)はその製作年時、製作者も明確であり、且つその五藏六府も完具しており、現存する世界最古の絹製五藏であつて、佛教史學上のみならず、一般文化史特に醫史學上に於いても、貴重な史料と言うべきものである。

佛像に奉籠される五藏は、時代により、場所により、又

は宗旨によつて、それぞれの異同變遷があると思われる。然らば、釋迦胎內五藏の性格は如何なるものであるか。本稿に於いては、宗教學的性格を除外し、專ら解剖學的性格のみに就いて論究したいと思う。

常識の上から言えば、佛像に奉籠すべく作られる五藏は、當然印度佛教醫學によるものと考えられる。しかしここに注意すべきは、上に引用した酉陽雜俎の「匠人依明堂。先具五藏。」とある一文である。「明堂」とは、隋書經籍志等に著錄される「神農明堂圖」、「秦承祖明堂圖」等の類であつて、中國傳統醫學又はそれから分派した道教醫學によつて描かれた藏府圖であり、決して純粹な印度佛教醫學によつて描かれたものではない。從つて宋の雍熙二年(九八五)に製作された釋迦胎內五藏は、佛教醫學・中國傳統醫學・道教醫學の三方面から分析して、はじめてその性格を把握し得るのである。內につき、佛教醫學方面からの分析は、石原明博士が分擔され、中國傳統醫學・道教醫學からの分析は筆者が分擔することになつた。

ここに考うべきは、中國傳統醫學と道教醫學との關係である。由來、中國傳統醫學は、その本來は神仙方家と相表裏して發達したものであるから、その本質には、多分に道教的要素をもつものである。又、道教醫學は、中國傳統醫學を基盤として、道教目的にかなうように展開したもので、その本質に於いては、多分に中國傳統醫學の要素をもつものである。從つて、この兩醫學は、その末端に於いては、相當な異同はあるが、その本質を同じくするものと言い得る。(此の問題に關しては、第五報第二章第一節の「七　むすび」の條を參照されたい。)故に本稿に於いては、特別な必要のない限りは、道教醫學を中國傳統醫學の中に包括して、議論を進めることにしたい。

又、中國傳統醫學の方面から、釋迦胎內五藏の性格を考究するには、その前提條件として、中國の性理解剖に關する知識及びその歷史が明確にされねばならぬ。しかし、この方面のことに就いては、何らの前人の業蹟もなく、一朝一夕にして成し得るものでもない。故に本稿に於いては、釋迦胎內五藏と近緣の關係に在り、しかも中國の生理解剖の知識を具體的に圖示するものとして、中國に現存する古今の藏府圖を取上げ、之が研究に重點を置き、その性格・系統・存佚を明らかにして、「現存する中國近世までの五

藏六府圖の概說」の一文を草して、之を第五報とした。本稿はこの第五報の上に立つて、釋迦胎內五藏の性格を究明したものである。

しかし本年三月に、相當大規模に本尊釋迦如來のレントゲン撮影が行われ、多種の新資料が得られた。その外にも、他の佛像の胎內の五藏を調査し得る見こみも少くはない。此等の新資料を利用しての研究は、後日行うことに豫定されている「本報告」に讓ることにし、此所には、今日までに得た結果を取りまとめて、一應の中間報告を行う次第である。誤謬・脫漏は必ず多いことと思われるが、諸賢の教示によつて補正し得ば幸甚である。

一　釋迦胎內五藏の種類

釋迦胎內に奉籠された品物の目錄である「入瑞像五藏具記捨物」（以後は「具記捨物」と略稱する。卷首の圖版參照）には、五藏の品目をかかげて、

胃（白色）、心（赤色　藏玉）、肝（赤色　藏香）、膽（紺色　藏舍利）、肺（紅色　藏梵書）、肚（錦　藏香）、腎（紫色　藏香）、嗅（白色）、腸（白斑色）、背皮（白色）、睹（黃色）

と記し、胎內の藏府の種類・色彩・內容物を明らかにしておる。

內につき、背皮は淸曉尼等が五藏を製作した時の願文であるから、當然藏府から除外すべきである。又胃・心・肝・膽・肺・腎・腸の九種は、その名稱に於いても形態に於いても、現代の解剖學のいずれの藏府に該當するかは、一見して明白である。しかし、その他の嗅・肚・睹が、現代の解剖學の何に該當するかに就いては考證を必要とする。

1　嗅…具記捨物記載の「嗅」の字は、石原明博士の教示によると、仁和寺に架藏されている仁安年間（一一六六～一一六八）に書寫された「黃帝內經太素」（國寶）では、「嗅」を「喉」の字の書寫體の文字として、使用されているとの由である。今、釋迦胎內の嗅に就いて見ると、その部位はあたかも喉の所に該當しておる。又、嗅にはその上部の表面に五つの襞、裏面には四つの襞、合計九つの襞がある。中國傳統醫學では、例えば難經四十二難に「喉嚨九節」と記載されているが如くに、喉には九節があるとされている。釋迦胎內の嗅の九襞は、喉の九節を表徵したものと思われ、嗅は喉であることが推定される。以上の諸理由によ

り、具記捨物の「唉」は「喉」の書寫體の文字であることは疑を容れない所である。

2 膅と肚…具記捨物には、「膅（黄色）・肚（錦　藏香）」と記載されている。この色彩と材質とからして、卷首の原色圖版に見られるが如くに、膅と肚とは左右の腸の下端に連結され、向つて右側の黄色の菱紋綾で作られた馬蹄形のもので、兩翼に「ア」の梵字が書かれているものが膅、又向つて左側の龍紋錦で作られた偏球形のものが肚であると言うことになる。

この膅と肚とが、現代解剖學の何の藏府に該當するかを同定することは、容易な問題ではない。いささか鄙見を述べて、諸賢の教正を得たいと思う。

この問題につき、釋迦胎内に五藏が奉籠される以上は、必ず五藏六府のすべてが奉籠されて然るべきはずであると言うことが考えられる。しかるに、具記捨物には、胃・心・肝・膽・肺・腎の六藏府はその名が記載されている。又具記捨物にはただ「腸」と書かれているが、卷首の原色圖版に見られるが如くに、釋迦胎内には、左右に二條の腸が存在している。從つて具記捨物の「腸」は、大腸・小腸を總稱したものと思われる。又具記捨物の「唉」は上記したが如くに喉であり、五藏六府の問題とは直接の關係がないから之を除外する。從つて、五藏六府の中、具記捨物にその名の書かれていないものは、脾と膀胱と三焦との三種であると言うことになる。次の「二　釋迦胎内五藏の上焦」の條に於て詳述するが如くに、釋迦胎内には、三焦の内の上焦かと思われるものが存在している。假にこのものが果して上焦であつても、由來中國醫學では、三焦は「名あるも形なし」とせられているものであるから、具記捨物にその名を故意に省略したものかと思われる。從つて具記捨物にその名が載せられていない五藏六府は脾と膀胱とであり、その代りとして、具記捨物には、「膅」と「肚」との名が記載されている。以上のことからして、具記捨物に記載される「膅」と「肚」との内のいずれかが、脾と膀胱との内のいずれかに該當するものであることが推測される。

次に具記捨物記載の「膅」と「肚」なる文字そのものの上から、この問題を考えて見よう。

先ず「膅」の字に就いて見ると、「膅」の字は字書には、「猪（ブタ）・肚」等に解釋され、東寺觀智院に架藏される

類聚名義抄の肉部には、「クソワタ・ハラワタ」と訓釋している。しかしそのいずれも、具記捨物記載の「腖」に該當するものとは思われない。

次に康熙辭典等の字書には、「瀦」の字を、「水の停る處。又「瀦」とも書く」としている。この文字からして、

「膀胱は尿なる水分の停る處であるから、「瀦」・「瀦」と俗稱され、具記捨物はこの俗稱に從い「瀦」・「瀦」と書くべきを、之を略して「腖」と書したもの」

と言う假說が想定される。この假說によると、具記捨物の「腖」は膀胱であると同定される。

由來、中國傳統醫學では、「小腸と大腸との合う處から、水分は膀胱に入つて小便となり、穀滓は大腸に入つて大便となる」とされている。從つて、釋迦胎內の所謂「腖」が、腸の下端に連結されていることは、上記の中國傳統醫學の說に合致するもので、腖を膀胱に同定する假說に、何等の障碍をなすものではない。

次に具記捨物記載の「肚」につき、その文字そのものの上から考えてみることにする。字書には、「肚」を「胃・腹・腸外腹皮」と解釋しているが、具記捨物記載の「肚」に該

第1圖　梶原性全の頓醫抄卷四十四（岡本本）　背面圖

當するものとは思われない。第五報第二章第三節で詳述するが如くに、梶原性全の頓醫抄卷四十四は、宋の楊介の存眞環中圖に就き、藏府圖はそのまま之を轉載し、圖說はほとんど逐次的に和譯したものである。この頓醫抄卷四十四の第三圖の背面圖には、直腸に該當する所の圖に「肚腸大便出處也魂門ト云」との說明をつけ、又その圖說に「肚腸ト云ハ、大便ノ傳出ル處ナリ。又魄門ト名ク」と言い、直腸を「肚腸」なる文字を用いて說明している。又、東寺觀智院所藏の類聚名義抄の肉部には、「肚」を「クソフクロ」と訓釋している。さらに又、釋迦胎內五藏の所謂「肚」も、腸の下端に連結されている。以上を綜合すると、具記捨物に記載される「肚」は、頓醫抄の所謂「肚腸」に該當し、直腸・肛門に同定さるべきものと一應は疑われる。

しかし、具記捨物の「肚」を「肚腸」と斷定するには、頓醫抄の所謂「肚腸」は、その文字に誤はなく、正確に楊介の存眞環中圖の眞を傳えたものであるかと言うことを先ず吟味すべきである。この問題に就いて注意すべきは、華佗內照圖である。第五報第二章第三節で詳述するが如くに、華佗內照圖の藏府圖は楊介の存眞環中圖の藏府圖を襲用し、その圖說は楊介の圖說に他說を加えて改編したものである。この華佗內照圖の第二圖の背面圖には、直腸に該當する所の圖に、「肚腸　大便出處。魄門。」と說明を附し、「肚腸」なる文字を用いている。しかしその圖說には、「廣腸。又曰肛門。言其處似車釭形。故曰肛門。」と言い、「肛門」なる文字を用い、さらに「車釭に似るから肛門と曰う」と說明している。この點から言えば、華佗內照圖は「肛腸」に作り、その圖の說明の「肚腸」は「肛腸」の誤と見るべきであろう。從つて、華佗內照圖の依據した楊介の存眞環中圖は「肛腸」に作つていたことが推定される。案ずるに、古典醫書には、「肛門」が常用され、かつ「肛」と「肚」とは書き誤りやすい字であり、さらに華佗內照圖の依據した存眞環中圖では、「肛腸」に作つていたことを併せ考えると、頓醫抄の「肚腸」は、むしろ「肛腸」の誤と見るのがおだやかではなかろうか。

かつ、若し頓醫抄の「肚腸」に從つて、具記捨物の「肚」を直腸・肛門に同定したならば、重大な機能を有する脾を捨てて、それよりも重要でない肛門が、釋迦胎內に奉籠されたこととなり、甚しく不自然である。しかし、この

「肚」なる文字そのものからは、何の藏府に該當するかを、導き出すことはできない。

以上は具記捨物に記載される「賭」・「肚」なる文字そのものから、何の藏府に該當するかを考察したのであるが、その結果として、「賭」は「瀦」又は「瀦」の略字で、膀胱に同定さるべきものではなかろうかとの假説をたて、又「肚」は頓醫抄に記載される「肚腸」ではないであろうと思われるが、さりとて何の藏府に該當するかは未詳であると言う結論に到達した。

次に具記捨物に、「賭」・「肚」と記載されるものの形態の上から、之を考察してみよう。

第五報第二章第四節で詳述するが如くに、元の王好古の醫家大法の藏府圖は、その當時に傳存していた中國傳統醫學の藏府圖を用い、之を校訂して編纂されたものであつて、舊い藏府圖の面影を相當多く温存するものと思われる。この醫家大法の存佚は明らかではないが、その藏府圖は、明の王圻の三才圖會、張介賓の類經圖翼、施沛の藏府指掌圖書に轉載され、此等の書によつて復原され得るものである。

今、この王好古の藏府圖につき、具記捨物に記載される賭と肚とに、その形態の類似するものを求めると、具記捨物に「肚」と記載されるものは、王好古の膀胱圖に類似しているが、具記捨物に「賭」と記載されるものに類似する藏府圖は見出し得ない。

次に、華佗內照圖に就いて見ると、その「脾足太陰經」の條には、「黃帝書云。脾形似馬蹄。內包胃脘。」と言い、脾の形は馬蹄に似ているとしている。この「黃帝書」とは如何なる書であるかは未詳ではあるが、やはり中國傳統醫學の相當に舊い書であろう。又、第五報第二章第一節で詳說する唐の胡愔の五藏六府圖では、脾の形を「其象如覆盆」と言い、その圖には、盆を覆せたような形態が描かれている。案ずるに、脾の形を黃帝書では馬蹄形に似るとし、胡愔の書では覆盆の如しと言い、その表現は異るが、馬蹄形とは、脾を下から仰いて見た場合の形容であり、覆盆とは、脾を上から見た場合の形容であつて、その實は一であると思われる。

今、具記捨物に「賭」と記載されるものの形態を見ると、恰も馬蹄形のようである。從つて具記捨物に記載される「賭」の形態は、直接には、黃帝書に記載される脾の形態

に合致し、間接には胡愔の五藏六府圖に記載される脾の形態に合致するものである。

以上は、具記捨物に「賭」・「肚」と記載されるものにつき、形態の上から考察した結果、「賭」は黄帝書に記載される脾の形態に合し、「肚」は、王好古の膀胱圖に類似すると言う結論を得た。

次に、具記捨物に「賭」・「肚」と記載されているものをその色彩の上から考察して見よう。

本稿の「五　釋迦胎内五藏の色彩」の條に詳說するが如くに、釋迦胎内五藏の色彩は、素問五藏生成篇・胡愔の五藏六府圖に記載されている藏府の實質の色が施彩されたものである。今、具記捨物によると、肚は錦で雜色、賭は黄色である。素問五藏生成篇には、「生於脾。如以縞裹栝樓實。」と言い、五藏六府圖には、「脾色如縞映黄。」と言い、その文は少しく異るが、ともに脾の實質の色は、「縞(白色の練絹)で栝樓實(黄)をつつみ、その縞を透して見えるような色」即ち黄色としている。上記したが如くに、具記捨物には、賭は黄色とされているから、色彩の上からすると、具記捨物の「賭」は脾と言うことになる。又、五藏生成篇・五藏六府圖には、心・肝・肺・脾・腎・膽の色を記載しているが、錦で作られた雜色の肚に該當する記載はない。從つて「肚」は、上記の六種以外の胃・小腸・大腸・膀胱の内のいずれかの一に該當するものと思われる。しかるに具記捨物には、「胃(白色)・腸(白斑色)」と記載されているからして、「肚」は胃・腸に該當するものでないことは明らかである。從つて具記捨物に記載される「肚」は膀胱であることが考えられる。

以上は、具記捨物に記載される「賭」・「肚」とを、その色彩の上から考察した結果、「賭」は脾、「肚」は膀胱なる結論を得た。

以上を綜合すると、具記捨物に「賭」と記載されるものは、その文字の上からは膀胱と同定され、形態及び色彩の上からは、脾と同定される。又、具記捨物に「肚」と記載されるものは、文字の上からは未詳であるが、その形態及び色彩の上からは、膀胱であると同定される。

若し上記の筆者の推定が正しいとすれば、具記捨物の「肚(錦　藏香)・賭(黄色)」なる記載は、「賭(錦　藏香)・肚(黄色)」と校改してこそ、はじめて上記の推定を滿足させ

ることができるのである。案ずるに釋迦胎内五藏の作成者の清曉尼等はいずれも醫學に通じないものである。故に「肚」と「賭」とを混同し、その具記捨物に「肚」を書すべき所を誤つて「賭」と書し、「賭」と書すべき所を誤つて「肚」と書したと言う蓋然性は、十分に考えられる。

しかし上記した所の、「具記捨物の「賭」は、「瀦」・「瀦」の略字で、膀胱に同定される」と言う推定は、あくまで筆者の假説であつて、積極的な證據のあるものではない。從つて、この假説を十分に成立せしむるに足る積極的な證據を見出し得るまでは、具記捨物の「肚(錦　藏香)・賭(黄色)」の記載をそのままにしておき、その形態及び色彩から、「肚」を膀胱に、「賭」を脾に同定するに留めておくのが、おだやかであると思われる。

しかし、これで問題が解決したわけではない。例えば、具記捨物の「肚」と「賭」とのいずれかを脾と同定しても、釋迦胎内五藏では、脾は腸に連結されていることになる。中國傳統醫學に於いては、「脾掩太倉(胃)」とされ、脾と胃との系屬關係は常に言われている所であるが、脾と腸との系屬關係に就いては、之を言及するものはない。しかるに釋迦胎内五藏では、脾は腸に連結されている。此は單なる清曉尼等が醫學に無智なるがために、偶然に生じた誤であるか、あるいは別に解剖學的又は信仰的根據の有るものであるかにつき、解決されるべきであり、又「肚」・「賭」を膀胱・脾の意に用いられている用例を見出すべきである。此等のことに關しては、具記捨物の賭の兩翼に記載される「ア」の梵字の意義に關する石原明博士の報告を俟つて、さらに研究したいと思う。

以上、本節に言う所を要約すると、具記捨物に記載される釋迦胎内五藏には、胃・心・肝・膽・肺・肚・腎・咯・腸・背皮・賭の十一種がある。内につき、背皮は清曉尼等が五藏を奉籠した時の願文が書かれた文書で、五藏とは直接の關係のあるものでない。「咯」は「喉」の書寫體の文字である。又、「肚」と「賭」とは、「賭」は「瀦」で膀胱であると言う假説が成立すれば、具記捨物は「賭(錦　藏香)・肚(黄色)」と書き改めらるべく、「賭」は膀胱に、「肚」は脾に同定さるべきである。若し「賭」を膀胱とする假説が成立しない時は、具記捨物の「肚(錦　藏香)・賭(黄色)」なる記載をそのままに從い、「肚」を膀胱に、「賭」を脾に同定さ

るべきである。しかしその決定には、なお研究すべき諸種の問題が殘されている。今しばらく假に「肚」を膀胱、「睹」を脾に同定しておいて、今後の研究に俟つことにすると言うことになる。

二　釋迦胎內五藏の上焦

上節に述べた釋迦胎內五藏の種類は、いずれも、具記捨物に記載されているものであるが、この外に、上焦かと思われるものが釋迦胎內に存在している。卷首の原色圖版に就いて言えば、喉の向つて右側にある蝶結び劍先形の絹製品である。肉眼で見ると、胃などと同じく白色に見えるが、紫外線で照射すると、鮮黃色を呈する。此にはその表面に二字の墨蹟がある。その上の字は「上」と明らかに讀めるが、下の一字は、折目の中に入りこんで、僅かに墨痕が認められる程度である。折目を伸してみると、「焦」の字ではなかろうかと思われるが、その絹の退化が甚しいために墨蹟も定やかではなく、必ず「焦」の字と斷定することはできない。

この絹製品が果して上焦であるとすれば、それと對をなす所の中焦・下焦、又はそれに代替する何物かが存在すべきである。あるいは中焦・下焦、又はそれに代替するものが、見ることのできない釋迦像の腹部に納められているとか、木の隙間に落ちこんでいるとか、さらに胎內の中央に奉籠されていたと推定される銅鏡(水月觀音が毛彫されている)が中焦を表徵し、その下方に下焦を表徵する何物かが奉籠されているのではなかろうかなどと種々憶測されるが、いまだそのいずれも確認されていない。從つて、この絹製品が上焦であるか否かの決定は、レントゲン撮影の結果、又はその他の調査に俟たねばならぬ。しかし、本稿では、暫く之を上焦であると假定して、議論を進めることにする。

上焦は中焦・下焦とともに三焦とよばれ、胃・腸等と共に六府の一に數えられ、中國醫學上に重要な位置を占むるものである。しかしこの三焦は、最も古くは史記卷一百五の扁鵲傳に「別下於三焦膀胱」と、その名の見えるものであるが、その起原は明確ではなく、かつその生理解剖說も、時代と共に變遷し、中國の生理解剖史學上、最もその正體を把握し難いものの一とされている。故に本稿に於いては、素問・靈樞・難經等の古典醫書により、最も通說と思われ

る説を紹介するに留め、その他に關しては、稿を改めて論じたいと思う。

中國古典醫書に記載されている所を綜合して見ると、上焦は心下と胃の上口との間に、中焦は胃の中院に當り、下焦は臍の下と膀胱の上口との間に存在するものとされている。その生理は、「三焦者。決瀆之官。水道出焉。」又は「三焦者。水穀之道路。氣之所終始也。」などと總括的に説明されており、又「上焦如霧」、「中焦如漚」、「下焦如瀆」と個別的にも説明されている。此の説明は甚だ抽象的で理解し難いが、恐らく、三焦とは、胃が吸収した水分・穀氣を承けて、之を全身に循環させるものとし、上焦はその水分・穀氣を霧の如くにして、組織内に漑ぐもの、中焦は胃が吸収した水分・穀氣を承けて、之を漚(泡)の如くにして上焦に流入させるもの、下焦は既に使用濟の水分・穀氣を承けて、瀆(ミゾ)の如くに膀胱に入れて排泄させるものの謂であろう。上記の三焦・上焦等の説明の文は、素朴なものであつて、三焦・上焦等の原始的な生理説を示すものと思われる。しかし、時代の降ると共に、その機能は觀念的に擴大され、體温(上焦)、消化・循環(中焦)・排泄(下焦)等はいずれも三焦の主管する機能とされるようになり、さらに「三焦原氣説」にまで展開して、三焦が一切の生命力の原氣であるとされるに至つた。現在の日本の東洋醫學者の間には、この三焦を自律神經に同定する説もあるが、その當否は詳らかではない。

又、中國傳統醫學に於いては、三焦は「有名無形」とされており、舊い藏府圖の傳統を保有すると思われる明の王圻の三才圖會、張介賓の類經圖翼には、それぞれ異る三焦圖を載せているが、それ等はいずれも三焦の部位が示めされているだけで、その形態は描かれていない。しかし、第五報第一章の「七　徐遁の藏府觀察」の條に詳述するが如く北宋末に單驤・蘇轍・徐遁・陳無擇の如くに、三焦は「脂膜で手掌大」の形質があるもので、かつ右腎の附近にあると主張した人もある。それは釋迦胎内五藏が作られた雍熙二年(九八五)より約一百數十年後のことである。若し釋迦胎内の所謂上焦が、果して眞に上焦であつたならば、唐から宋にかけて、「三焦は形のあるもの」と言う説が行われ、かつ釋迦胎内の所謂上焦の如き形態が想定されていたことになり、中國の生理解剖史學上に興味ある問題を提供

することになる。

又、今までの定説では、三焦なる觀念は中國傳統醫學に特有のもので、印度醫學にはない觀念とされている。しかしこの定説にも若干の疑問がある。

上記したが如くに、史記扁鵲傳には、「別下於三焦膀胱」と記され、三焦が膀胱と併記されている。又中國古典醫書には、三焦の機能を「三焦者。決瀆之官。水道出焉。」と記載されている。この二事を併せ考えると、原始的な三焦の觀念は、體内の不要になつた水分・穀氣をば集めて、膀胱に送り入れて排泄する機能を有するものとされていたことが推定される。

案ずるに、文選卷五十三の稽康の養生論の「或益之以畎澮。而泄之以尾閭。」なる文の唐の李善の注は、この「尾閭」を説明するために、莊子外篇秋水第十七の「天下之水。莫大於海。萬川歸之。不知何時止而不盈。尾閭泄之。」を引き、さらにその晉の司馬彪の注を引用して、

尾閭。水之從海出者也。一名沃焦。在東大海之中。：海水注者。無不焦盡。故名沃焦。

と言つている。その大意は、尾閭は海中の島で、そこから海水は奈落に落ちこむと言われる島で、一名「沃焦」と謂われる。「沃焦」と言われる理由は、海水がここで大熱を受けて氣化して焦盡するからであると言うのである。

中國醫學では、膀胱には上口がなく、ただ下口のみがあつて尿道に連らなつているとされている。又、腎の機能を誤つて生殖器としたがために、體内の水分は下焦から氣化して膀胱に入るものとされている。又一方、文選注には「海水注者。無不焦盡。故名沃焦。」と言つている。その現象は、あたかも下焦が水分を氣化して膀胱に入れる現象と同じである。從つて下焦の「焦」と、沃焦の「焦」とは、その命名の起原を同じくするもので、その間に何らかの有機的關係のあることが推測される。

しかもこの沃焦は、東晉の駄跋陀羅の譯した華嚴經卷十六・卷六十六に見え、又唐の六波羅密陀經にも見えておる。慧琳の一切經音義には、六波羅密陀經の「沃焦海」を注解して、「大海水大熱燋竭。：其大海水。皆悉消盡。不曾盈。」と言つておる。從つて「沃焦」は、梵語の中國譯と言うことになる。上記したが如くに、下焦と沃焦とは、その名稱の起原を同じくするものであり、しかも沃焦は梵語の中國

譯名である。從つて、中國醫學の三焦・上・中・下焦も亦印度醫學と何らかの有機關係があるのではないかと疑われる。この決定には、さらに印度醫學の方面を研究する必要が痛感される。故に今日に於いては、三焦なる觀念は、中國醫學の特有のものとする今日までの定說に、疑を存するだけに留めることにする。

以上、本節に述べた所を要約すると、釋迦胎内には、上焦かと思われるものが存在している。此が果して上焦であることを確定するためには、中焦・下焦又はそれに代替するものを見つけ出さねばならぬ。又具記捨物に、他の藏府の名を記載しながら、特にこの三焦の名のみを擧げなかつた理由も解決しなければならぬ。さらに又、「上焦は形あり」とする說のよつて出ずる所を、追究しなければならぬ。若し釋迦胎内の所謂上焦が、果して上焦であつても、三焦を中國醫學の特有のものとする說には若干の疑問があるからして、釋迦胎内五藏に上焦があることを理由として、ただちに釋迦胎内五藏は、專ら中國傳統醫學によつて作られたものと、速斷することはできないと言う結論に到達したのである。

〔附記〕 既に脫稿した後、京都國立博物館長神田喜一郎先生より、九州大學醫學部教授金關丈夫先生の「三焦」（福岡醫學雜誌第四七卷第六號別刷）なる論文を御借りした。金關先生は三焦に關する古典醫書の記事を文獻學的に整理され、更に進んで「三焦」の「焦」は、「沃焦」の「焦」と關係のあるものとされ、三焦―特に下焦―は印度醫學の影響を受けたものと推定されている。精微を極めた論文である。是非御一讀されたいと思う。筆者の說も金關先生の論文によつて裏付されたことを心より喜び、御禮を申上げる。

（三一・七・八記）

三　釋迦胎内五藏の排列

具記捨物には、釋迦胎内五藏をば、胃・心・肝・膽・肺・肚・腎・嗌・腸・背皮・睹の順序に排列している。嗌・背皮は五藏六府の内に數えられないから之を除外し、又、「肚」を膀胱に、「睹」を脾に同定し、この具記捨物に記載される藏府の順序は、何らかの典據があるものか否かに就いて吟味して見ることにする。

由來、中國傳統醫學に於いては、中國の思想律とも見る

べき陰陽五行説をば、その組織の紐帯としている。先ず陰陽説によつて、體内の器官を藏(藏精…陰)と府(府庫…陽)とに二大別し、かつ藏と府との相互間に機能關係を設定し、それによつて、例えば「心の府は小腸」とするが如くに、藏と府との間に主從關係を規定した。又五行説に從つて、藏府を「五」の數を基準とし、五藏・六府(但し三焦は、名あるも形なしとされ、五行の原理を適用する時は、「孤府」として除外される)に分け、この五藏・六府を五行説の理念によつて、五行・五色・五味・四時・四方等に配當し、之を五行説の相生・相剋の原則によつて展開・活用して、治療・診斷を行うように組織されたものである。從つて中國傳統醫學に於いては、藏府の排列には、嚴重な規則がある。五行相生説によつて藏府を排列する時は、木…肝・膽。火…心・小腸。土…脾・胃。金…肺・大腸。水…腎・膀胱。三焦の順序に排列され、五行相剋説による時は、水…腎・膀胱。火…心・小腸。木…肝・膽。金…肺・大腸。土…脾・胃。三焦の順序に排列される。この排列は、記述・分類の便に資するためのものではなくて、排列そのものが、中國醫學の原理そのものである。一藏・一府でも、その排列順序を誤る時は、診斷・治療は行い得ないものとされている。

上記の五行相生・相剋説による藏府の排列は、中國傳統醫學の原理として、一般に行われるものであるが、例外として、藏府の部位によつて排列される時もある。中國傳統醫學に於ける藏府の部位は、例えば靈樞經の五色篇に、

庭者。首面也。闕上者。咽喉也。闕中者。肺也。下極者。心也。直下者。肝也。肝左者。膽也。下者。脾也。方上者。胃也。中央者。大腸也。挾大腸者。腎也。當腎者。臍也。面王以上者。小腸也。面王以下者。膀胱子處也。

と言い、人身を前段・中段・後段の三段に分け、前段から次第に、上部から下部へと藏府が記述せられている。卽ち前段…首面・咽喉・肺・心・肝・膽・脾。中段…胃・大腸・腎・臍。後段…小腸・膀胱と言う順序になる。この藏府の部位によつて排列された例としては、唐の胡愔の五藏六府圖等がある。この書では、肺・心・肝・脾・腎・膽の順序としており、上記の靈樞經の記載する部位の順序と若干異るのは、部位による外に、五藏を主とする考が加

味されたがためである。しかしこの部位によつての排列は、分類・記述の簡明を目的としたもので、その間に、五行相生・相剋説によるが如き、原理性は認められない。

この外に、中國古典醫書には、上記の藏府排列と異る記載が相當にあるが、それはいずれも行文の都合によつて隨意に排列されたもので、一つの基準によつて排列されたものではない。從つて、此等を藏府の排列方式とは認められない。

次に佛典に見える藏府の排列は、調査が不充分のために確信は持ち得ないが、その排列はまちまちで、一定の排列基準がないかの如くに思われる。中には、地・水・火・風・空の五大に五藏六府・五佛・五塵・五香・五色・五味等を配當し、中國の五行相生・相剋説が適用されているかの如き感じのものもある。しかし此等は、むしろ佛教醫學の中國化を意味するものであつて、佛教醫學の本來のものであるとは思えない。

上記の具記捨物に記載される釋迦胎内五藏の排列の順序は、中國醫學のいずれの排列順序とも合致しない。かつその排列順序が甚だしく亂雜で、何らの秩序も方式も見出し得ない。從つて、具記捨物に記載される五藏の順序は、清曉尼等が、藏府の排列に何らの考慮を拂うことなく、筆に任かせて書いたもので、別に典據する方式はなかつたものと思われる。

以上、本節に述べた所を要約すると、中國傳統醫學では、藏府の排列順序には、一定の基準があるが、具記捨物に記載される五藏の排列は、清曉尼等が、筆に任かせてかいたもので、方式に典據して排列されたものではないと言う結論に到達した。

四　釋迦胎内五藏の形態

釋迦胎内五藏の形態は、卷首の圖版に見られるが如きものであるが、この形態を中國傳統醫學の立場から考察して、釋迦胎内五藏の性格を明らかにしたいと思う。

中國の現存する最古の藏府圖は、第五報第二章第一節に詳述する唐の胡愔の黄庭内景五藏六府圖（以後は「五藏六府圖」と略稱する）であると思われる。この書は、唐の宣宗の大中二年（八四八）に成つたもので、釋迦胎内五藏の作られた雍熙二年（九八五）より約一百四十年前に作られたもので

ある。この書には肺・心・肝・脾・腎・膽の六つの藏府圖が載せられている。この書は道教の書ではあるが、その各藏府の形態は、中國傳統醫學の藏府圖の舊態を、割合によく保有しておるものである。（この事に關しては、第五報第二章第一節を參照されたい）

今、釋迦胎内五藏の形態を、胡愔の五藏六府圖のそれと對比すると、心・腎・膽の三種は非常に近似しており、肺・肝の二種は、全體としての形態は非常によく似ているが、その葉數に相異があり、又脾（釋迦胎内五藏中の馬蹄形のもので、具記捨物に「睹」とするもの。後皆之に倣う）はその形態が全く異つている。

以上の内、先ず肺・肝の葉數の相異に就いて説明すると、釋迦胎内五藏の内の肺・肝はともに五葉に作られているが、五藏六府圖では、肺・肝ともに七葉が描かれている。内につき、五藏六府圖の肝圖の圖説では、「肝左三葉。右四葉。」としており、肝圖の七葉は之に合するから、別に問題はない。しかし肺圖の圖説には「肺有六葉。」と言つている。この「肺有六葉」は、肺の兩耳を除外して言つたものである。由來、中國傳統醫學では、肺は「六葉兩耳。凡八葉。」とされている。從つて肺圖の七葉は、いずれにしても誤で、正しくは六葉又は六葉兩耳（八葉）を描くべきである。

釋迦胎内五藏の肝・肺の五葉は、五藏六府圖に合しないのみでなく、又中國傳統醫學にも合しないもので、正しくは肝は七葉、肺は六葉又は六葉兩耳（八葉）となすべきである。かかる誤謬は、恐らく清曉尼等は醫學にくらく、肝・肺の正確な葉數に考慮を拂うことなく、その大體の形態だけを似せて作つたがために生じた誤謬であると思われる。あるいは、第五報第二章第一節に述べるが如く、醫方類聚所收の五藏論には、肺は四葉、肝は五葉とあるが、清曉尼等は或はそれによつたものかとも疑われる。

次に、釋迦胎内五藏の脾と五藏六府圖の脾の形態の異同について見ると、五藏六府圖の圖説では「其象如覆盆」と言い、又その圖にも盆を覆せたような繪が描かれている。之に對して、釋迦胎内の脾は、卷首の原色圖版の睹に見られるが如くに、馬蹄形に作られている。この馬蹄形は、本稿の第一節に詳述したが如くに、華佗内照圖に「黄帝書云。脾形似馬蹄。」と引用されている「黄帝書」に合致するものである。「覆盆」と「馬蹄」とでは、その形態は非常に異る

かの如くに思われるが、しかしこの兩者は同一の脾の形をば、一は上方から俯觀したがために、覆盆の形に見え、一は下方から仰觀したがために、馬蹄の形に見えたとも推定することができる。從つて五藏六府圖と釋迦胎内五藏との脾の形は、兩者ともに同じ形態の脾を想定しながらも、その觀點の相異によつて、その表現を異にしたものと解すことができる。

第2圖　施沛の藏府指掌圖書　脾圖

後世の中國の醫書では、多く「脾形如刀鎌」と言い、脾の形をば刀鎌に似るとし、その藏府圖にも、下部がやや廣く、その下部の先端がやや尖がり、杓子形の圖が描かれている。（附圖第二圖參照）此等はいずれも難經四十二難の「脾扁廣三寸。長五寸。」によつて、描かれた想像圖であると思われる。五藏六府圖及び釋迦胎内五藏の脾は、いずれも中國の傳統醫學による脾圖の舊態を存するものとして注意すべきであろう。

以上を要するに、釋迦胎内五藏の形態を胡愔の五藏六府圖の藏府圖に比較すると、心・腎・膽の三種はその形態はほとんど同じであり、肺・肝は全體としての形態は似ているが、清曉尼等の不注意によつてその葉數を五葉に誤り、脾の形態は一見しただけでは非常に異るが、その實は觀點の相異によつて生じた異同で、同一の形態を想定していたものであることが知られる。第五報第二章第一節で說明するが如くに、五藏六府圖は道書ではあるが、その藏府の形態は、中國傳統醫學によつたものである。しかるに釋迦胎内五藏の形態は、この五藏六府圖に合致するものであるから、釋迦胎内五藏もまた中國傳統醫學による藏府圖によつたものであろうことが、その形態を胡愔の五藏六府圖と比較した結果から推定される。

由來、中國に於いては、第五報第二章に詳述するが如くに古くから諸種の藏府圖が作られているが、釋迦胎内五藏以前の藏府圖で現存するものは、上記の胡愔の五藏六府圖の一書があるのみである。しかし、此の書にはただ肺・心・肝・脾・腎・膽の六圖しか存していないがために、釋迦胎内五藏の内、胃・腸（大小腸）・膀胱の三種を比較し得ない。釋迦胎内五藏より以後に作られた藏府圖で、現存する代表的なものとしては、宋の楊介の存眞環中圖と元の王好古の醫家大法とが擧げられる。次に釋迦胎内五藏をこの二書に、その形態を比較して見よう。

楊介の存眞環中圖（以後は「存眞圖」と略稱する）は、第五報第二章第三節で詳述するが如くに、その藏府圖は、北宋の崇寧年間（一一〇二～一一〇六）に泗州で刑戮された賊の解剖圖を、政和三年（一一一三）に楊介が若干校改したものである。この存眞圖は既に亡佚しておるが、我國の梶原性全の頓醫抄卷四十四、華佗内照圖等數種の書に轉載されて、今日でもその概貌は窺い得るものである。

今、存眞圖の藏府圖と釋迦胎内五藏とを比較して見ると、先ず全體として受ける印象は、存眞圖は寫實的であるに對して、釋迦胎内五藏は觀念的な感じが強い。第五報第一章に詳述するが如くに、漢の王莽が天鳳三年（一六）に王孫慶を解剖してから、宋の慶曆五年（一〇四五）に歐希範が解剖されるまでの約一千年間には、醫學を目的とする人體解剖は行われていない。從つてその間に於ける中國の生理解剖の智識は、經驗による僅かの人體の智識を基とし、之に禽獸等の屠殺によつて得られた智識を補足して、觀念的に組織されたものと思われる。古典醫書記載の生理解剖の智識に、動物的・觀念的な要素が多いのは、この事を示すものである。釋迦胎内五藏は、歐希範の解剖よりも數十年前の雍熙二年（九八五）に作られたものである。從つて釋迦胎内五藏に寫實性のないのは當然であつて、中國の傳統的生理解剖の智識の觀念的・動物的なる特殊性を如實に反映したものと言うことができる。

次に、存眞圖は個々の藏府の形態よりも、各藏府の系屬關係の究明に重點が置かれ、數藏府が一圖の内にかかれている。之に對して、釋迦胎内五藏は、藏府の系屬關係よりも、各藏府の形態に重點が置かれている。脾（膂）を誤つて腸に連結するが如きは、系屬關係に重點を置かなかつたこ

との一例證であろう。第五報第二章第一節で論及する太上黄庭內外景玉經(魏晉のころの作)、五藏論(南北朝の作。醫方類聚所收)及び胡愔の五藏六府圖等の如き、現存する藏府に關する古典醫書に就いて見ると、いずれも各個の藏府の形態・機能等に中心を置いて論じ、各藏府の系屬關係に至つては、ほとんど全く疎略にされている。この事も亦中國の傳統的生理解剖智識の一特色であつて、釋迦胎內五藏は之を反映するものと思われる。

上記したが如くに、存眞圖は各藏府の系屬關係に重點を置いたために、各藏府の形態は精密には描かれていない。かつ存眞圖の藏府圖を轉載した頓醫抄・華佗內照圖等の藏府圖は、轉寫の間に、相當にくずれたと思われるからして、その各藏府の形態を、釋迦胎內五藏のそれに、比較することは困難である。強いて比較しても、肺・心・膀胱は若干類似していると認められるが、その他の藏府は未詳と言わざるを得ない。

次に、元の王好古の醫家大法の藏府圖の各藏府の形態と釋迦胎內五藏の形態とを比較してみよう。

第五報第二章第四節に詳述するが如くに、王好古の醫家大法は、その正名を「伊尹湯液仲景廣爲大法」と言い、醫家大法はその通稱である。この書は王好古が元の太宗の甲午の年(金の天興三年・南宋の端平元年—一二三四—)に作つたものである。この書が現在傳存しているか否かは未詳であるが、その藏府圖は、明の王圻の三才圖會、張介賓の類經圖翼、施沛の藏府指掌圖書に轉載されており、その復原もさして困難ではない。

然らば醫家大法の藏府圖は如何なる性格のものか。醫家大法の存佚が未詳の今日、王好古その人の學風及び他書に轉載されているその藏府圖から推定せざるを得ない。王好古その人は、素問・靈樞・難經等を中心として、之を陰陽五行說・六甲運氣說で展開して、診斷・治療を行うことを原則とした金元醫學の代表者の一人である。從つてその學風は、古典中心的・觀念的な傾向の強いものである。この王好古が藏府圖を作成するにあたつては、必ずその當時に傳存していた諸種の傳統的醫學による藏府圖を利用したことが推定される。又、三才圖會等に轉載されている藏府圖に就いて見ても、藏府の系屬關係よりも、各藏府の形態に重點が置かれて、各藏府ごとに一圖が描かれており、かつ

甚しく觀念的であつて、胡愔の五藏六府圖と相通ずる要素を多分に持つている。從つて醫家大法の藏府圖は、元の王好古の作であるとは言え、その中には、六朝・唐宋以來の中國醫學による藏府圖の傳統は、脉々として流れているものと言い得るであろう。

今、三才圖會等を仲介として想定される醫家大法の藏府圖を、釋迦胎內五藏にその形態を對比すると、心(王好古の心圖には、存眞圖の影響を受けて、肺・肝・脾・腎・心の五系が描かれているが、之を除外する)・肺・肝(釋迦胎內五藏の肺・肝はともに五葉に作られているが、此は淸曉尼等の不注意による誤と認められる)・腎・胃・膀胱・腸(釋迦胎內五藏は、大小腸の區別を設けていない)・膽の諸藏府は、相當に類似性が多く、その形態が明白に異るものは、脾の一藏のみである。上記したが如くに、釋迦胎內五藏の脾(睹)の形態は、黃帝書の「脾形似馬蹄」に合するもので、この馬蹄形は中國傳統的藏府圖の脾の形態であると思われる。しかるに難經四十二難に「脾扁廣三寸。長五寸。」とある。王好古は馬蹄形では、難經の記載を滿足せしめ得ないものと考えて、その圖を改めたと推定される。又、釋迦胎內五藏には、上焦かと思われるものがある。王好古は三焦は「名あるも形なし」とする傳統醫學に從い、ただその部位を示した圖を描いただけであるから、その形態は比較し得べくもない。

王好古の藏府圖の各藏府の形態を、釋迦胎內五藏のそれに比較した結果、脾の一藏を除く以外の藏府には類似性が多く、脾の形態も、王好古が改めたものと思われる。從つて王好古が依據した藏府圖の原本の藏府の形態は、相當によく釋迦胎內五藏に類似するものであることが推定される。之により、釋迦胎內五藏は、中國傳統醫學の藏府圖によつて作られたものであることが、王好古の藏府圖との比較の上からしても言うことができる。

以上は、唐の胡愔の五藏六府圖・宋の楊介の存眞圖・元の王好古の醫家大法等の、中國に現存する代表的な藏府圖と、釋迦胎內五藏とを、その形態を對比したのであるが、その結果として、釋迦胎內五藏は、中國傳統醫學による藏府圖によつて作られたものであつて、決して人體解剖による藏府圖、又は純粹な印度佛教醫學による藏府圖によつて作られたものでないとの結論に到達した。

この結論を裏付けるため、いささか蛇足の感がないでは

ないが、素問・靈樞・難經等の古典醫書の各藏府の形態に關する記文と、釋迦胎內五藏の形態との關係を簡單に述べて見ることにする。

1 胃……難經四十二難・唐の孫思邈の千金方卷十六には、「胃重二斤十四兩。迂曲屈伸。長二尺六寸。大一尺五寸。徑五寸。受水穀三斗五升。」とあり、靈樞の腸胃篇・平人絕穀篇にも同じ文がある。この記載からだけでは胃の形態を想定することは困難である。釋迦胎內五藏の胃は、その兩翼が張出して尖り、中央下部が凹んでおることは、難經の「迂曲屈伸」に該當するものと思われる。又釋迦胎內五藏の胃の縱と橫との比率は、大體に於いて難經記載の長・大・徑の比率に近いものである。從つて釋迦胎內五藏の胃の形態は、難經等の古典醫書の記載と衝突するものとは思えない。

2 心……華佗內照圖の心手少陰經の條に、「黃帝書云。心形如未敷蓮花。」とあり、胡愔の五藏六府圖には、「其象如垂蓮。」とあり、內外景玉經にも、「心部之宮。蓮含蕾。」とある。釋迦胎內五藏の心の形態は、之に合致するものである。

3 肝……難經四十二難・千金方卷十一には、「肝重四斤四兩。左三葉。右四葉。凡七葉。」とある。上記したが如くに、釋迦胎內五藏の肝には、五葉しか作られていない。それは清曉尼等の不注意によつて誤つたものと思われる。

4 膽……難經四十二難・千金方卷十二には、「重三兩三銖。長三寸二分。在肝短葉間。」と言うのみで、その形態を述べていないが、胡愔の五藏六府圖には、「其象如懸瓠」と言つている。正倉院に尊藏されている獸膽も、懸瓠の形に作られている。(朝比奈泰彥博士編「正倉院藥物」を參照されたい。)釋迦胎內五藏の膽は、この瓠の先端の細い部分を除去した形態にいくらか類似している。

5 肺……難經四十二難には、「肺重三斤三兩。六葉兩耳。凡八葉。」とあり、又千金方卷十七にも、「肺爲五藏之華蓋。……肺重三斤三兩。六葉兩耳。凡八葉。」とあり、胡愔の五藏六府圖にも、ほぼ同じ文がある。釋迦胎內五藏の肺が五葉であるのは、上記したが如くに、清曉尼等の不注意による誤であると思われる。

6 肚……具記捨物に「肚」と記載されるものは、釋迦胎內五藏の內、龍文錦で作られた扁球形の絹製品で、形態・色

彩からして、膀胱に同定されるものであることは、上記したが如くである。難經四十二難・千金方卷二十には、「膀胱重九兩二銖。左回疊積上下。口廣二寸半。縱廣九寸。受津液九升九合。兩邊等。」と說明されている。この文から、膀胱の具體的な形態を想定することは困難であるが、「縱廣九寸。…兩邊等。」なる記文から推すと、偏球形のものが意識されていたかの如くに思われる。又中國傳統醫學では、膀胱を「胞」とも呼んでいる。「胞」と言う以上は、丸い囊狀のものが意識されていたことが知られる。釋迦胎內五藏の肚は、大體に於いて之に近い形態のものである。由來、中國傳統醫學では、腸中の水分は、氣化して膀胱內に入ると考えられている。釋迦胎內五藏の肚が、腸に連結されていることは、この中國醫學の說に合致するものである。

7 腎……胡愔の五藏六府圖には腎の形態を「其象如懸石」と說明し、華佗內照圖の腎足小陰經の條には、「黃帝書云。腎藏有二。形如豆。相並而曲附於膂筋。」と說明している。難經四十二難・千金方卷十九には「重一斤一兩。有兩枚。」と言つている。釋迦胎內五藏の腎の形態は、黃帝書の所謂「豆」に合致するものである。

8 喉……上記したが如くに、具記捨物に記載される「喉」は、「喉」の書寫體の文字である。難經四十二難には「喉嚨重十二兩。廣二寸。長一尺二寸。九節。」と說明されている。釋迦胎內五藏の喉には、上部の表面には五襞、裏面には四襞、合計九襞がある。喉の九節を表徵したものであろう。又喉が短かく作られているのは、釋迦胎內に奉籠することを考慮して、特に短く作られたものと思われる。

9 腸……具記捨物には、ただ「腸」とだけ記載して、大腸・小腸の區別を明らかにしていない。しかし、釋迦胎內五藏に於ては、左右に二條の腸が作られているからして、具記捨物記載の「腸」は、大腸・小腸を總括して「腸」としたものである。しかし釋迦胎內五藏の左右の腸は、その形態・色彩等が一律に作られているからして、いずれが小腸であり、いずれが大腸であるかは、明らかではない。強いて言えば、睹（脾）が連結されている腸が小腸、肚（膀胱）が連結されている腸が大腸に該當するかとも一應は考えられるが、此は單なる憶測に過ぎない。靈樞經の腸胃篇には、

小腸後附脊。左環廻周疊積。其注于廻腸者。外附于臍。

上廻運環。十六曲。大二寸半。徑八分分之少半。長三丈三尺。廻腸當臍左環。廻周葉積而下。廻運環反十六曲。大四寸。徑一寸寸之少半。長二丈一尺。廣腸傳脊。以受廻腸。左環葉脊上下辟。大八寸。徑二寸寸之大半。長二尺八寸。

と小腸・大腸の形態を説明している。難經四十二難・千金方卷十四及び卷十七、靈樞經の平人絶穀篇にも、大小腸の形態を記した文がある。その内容はほぼ合致するが、その尺寸の數字には、若干の異同がある。釋迦胎内五藏の腸は、大小腸の大體の形態を示したもので、靈樞經の記載と衝突するものではない。

10 賭……具記捨物に「賭」と記載されているものは、上記したが如くに、形態・色彩によつて、脾に同定される。又この脾の形態は、華佗内照圖所引の黄帝書の「脾形似馬蹄」に合致するものである。

11 上焦……釋迦胎内の所謂上焦は、具記捨物にその名は記載されず、又果して上焦であるかも疑問である。若し假に上焦であるにしても、中國醫學では、「名あるも形なし」とされているから、古典醫書には、その形態を比較し得べき記載はない。

以上は、中國古典醫書の各藏府の形態に關する記文に就いて、釋迦胎内五藏の各藏府の形態を照合したのであるが、その結果として、釋迦胎内五藏の各藏府の形態は、そのほとんどが中國古典醫書の記載に合致するものであると言う結論に到達し得た。從つて、釋迦胎内五藏の形態は、現存する中國傳統醫學の藏府圖に對比しても、古典醫書の記載に照合しても、中國傳統醫學による藏府圖によつて作られたものであることが知られる。

五　釋迦胎内五藏の色彩

釋迦胎内五藏の色彩は、具記捨物に胃…白、心…赤、肝…赤、膽…紺、肺…紅、肚(膀胱)…錦で雜色、腎…紫、咳…白、腸(小腸・大腸)…白斑色、賭(脾)…黄と明記されている。この外所謂「上焦か」と思われるものがあり、肉眼では白色であるが、紫外線で照射すると、鮮黄色である。この上焦は、中國醫學では、「名あるも形なきもの」とされるからして、その色彩がないのは當然であり、かつ釋迦胎内の「上焦か」と思われるものが、果して上焦であるやも

疑問である。従つてこの上焦は本問題から除去してしかるべきものである。今、釋迦胎内五藏の色彩につき、中國醫學の立場から考察してみよう。

上記したが如くに、中國傳統醫學は、陰陽五行説を紐帶として組織されたもので、五藏六府その他一切の事物・現象をば五行に配當して、相生・相剋の原理によつて展開して、治療・診斷を行うと言う方式が用いられている。その五行説による五行・藏府・五色のそれぞれの配當は、木……肝・膽……青。火……心・小腸……赤。土……脾・胃……黄。金……肺・大腸……白。水……腎・膀胱……黑。とされている。かくの如き五行・藏府・五色の配當は、素問・靈樞等の古典醫書から現代の中國醫學に至るまで、常に用いられているものである。

今この方式によつて、藏府に配當される五色と、釋迦胎内五藏の色彩とを對比すると、完全にその色彩が一致するものは、心……赤、脾(睹)……黄の二藏のみである。(釋迦胎内五藏の腸は、小腸・大腸を包括したもので、白斑色とされている。五行説によると、大腸…白、小腸…赤であるから、大腸のみが合致する)その他の諸藏府の色彩は、合致するものがない。この點から考えると、釋迦胎内五藏の色彩は、中國傳統醫學常用の五行説による藏府配當の五色に據つて、施彩されたものでないことは明らかである。

ここに注意すべきは上記の五行・藏府・五色の配當は、中國醫學に常用されるものではあるが、同じく五行説によりながらも五行・藏府・五色の配當が、上記の配當と異る説がある。その説は禮記月令の唐の孔穎達の正義に引用されている後漢の鄭玄の「駁五經異義」に詳見している。

故異義云。今文尚書歐陽説。肝木也。心火也。脾土也。肺金也。腎水也。古尚書説。脾木也。肺火也。心土也。肝金也。腎水也。許愼案。月令春祭脾。夏祭肺。季夏祭心。秋祭肝。冬祭腎。與古尚書同。鄭駁之云。月令祭四時之位。及其五藏之上下次之耳。冬位在後而腎在下。夏位在前而肺在上。春位小前。故祭先脾。秋位小却。故祭肝。腎也脾也。俱在鬲下。肺也心也肝也。俱在鬲上。祭者必三。故有先後焉。不得同五行之氣。今醫病之法。以肝爲木。心爲火。脾爲土。肺爲金。腎爲水。則有瘳也。若反其術。不死爲劇。

と言うのである。今少しく之を解説すると、禮記月令篇に

は、孟春・仲春・季春の月にはそれぞれ「其祀戸。祭先脾。」とあり、孟夏・仲夏・季夏の月には「其祀竈。祭先肺。」とあり、中央土には、「其祀中霤。祭先心。」とあり、孟秋・仲秋・季秋の月には、「其祀門。祭先肝。」とあり、孟冬・仲冬・季冬には「其祀行。祭先腎。」とある。後漢の許愼はこの月令篇の記事を證據として、木…春…脾。火…夏…肺。土…土用…心。金…秋…肝。水…冬…腎。と配當する古文尚書說に從うべきであることを主張した。後漢の鄭玄は之を反駁して、月令の記事は、その五藏が置かれている位置の前後によつて、祭るのに先後ができただけのことであつて、五行說の配當によつて、先後ができたものではない。從つて、月令の記事は、古文尚書說の證據とはなし得ないものである。故に木…春…肝。火…夏…心。土…土用…脾。金…秋…肺。水…冬…腎。と配當する今文尚書歐陽說に從うべきであると主張したものである。

上記の月令篇の五藏を祭るの記文は、中國古典醫書記載の藏府の智識の一つの來源を暗示するものとして興味のあるものであり、又駁五經異義の「今醫病之法」以下の一文によつて、後漢の中葉ごろには、醫家は專ら、木…肝、火…心、土…脾、金…肺、水…腎なる配當を用いていたことが知られ、興味ある醫史資料であると思われる。

何はともかく、許愼と鄭玄との兩說のうち、いずれの說が正しいかは別とし、この駁五經異義によつて、漢代には、木…脾・胃…青。火…肺・大腸…赤。土…心・小腸…黃。金…肝・膽…白。水…腎・膀胱…黑。なる五行・藏府・五色の配當說が、古文尚書家の間に行われていたことが知られる。

今、この古文尚書家の方式によつて藏府に配當される五色と、釋迦胎內五藏の色彩とを對比すると、色彩が合致するものは一つもない。從つて釋迦胎內五藏の色彩は、古文尚書家の方式によつて藏府に配當される五色に據つて、施彩されたものでないことは、甚だ明白である。

以上により、五行說によつて、藏府に配當される五色と、釋迦胎內五藏の色彩とは、何らの關係のあるものでないことが明らかにされた。中國傳統醫學には、この外に今一つの藏府の色彩を規定する方式がある。次にその方式に就いて述べることにする。

素問の五藏生成篇には、

生於心。如以縞裹朱。生於肺。如以縞裹紅。生於肝。如以縞裹紺。生於脾。如以縞裹栝樓實。生於腎。如以縞裹紫。此五藏所生之外榮也。

と記載し、その唐の王冰の注には、「是乃眞見生色也。縞白色。紺薄青色。」と説明している。この五藏生成篇と同じ文が、太素經卷十七證候篇にも見えている。五藏の各々の外榮の色を述べたものである。五藏の各々の實質の色が、そのまま外面に現れて外榮の色となると考えられているからして、この五藏生成篇に記載されている色は、即ち各藏の實質の色そのものと言うことになる。唐の胡愔の五藏六府圖には、

肺色如縞映紅…心色如縞映絳。…肝色如縞映紺。…脾色如縞映黃。…腎色如縞映紫。…膽色如縞映青。

と述べている。此の一文は、明らかに藏府そのものの實質の色彩を述べたものである。この一文を上記の五藏生成篇と比較すると、五藏生成篇では「縞裹」に作り、五藏六府圖では「縞映」に作り、その表現は異つているが、ともに「縞(白の練絹)で包んで、その縞を透して見える色」の謂であると解釋せられるからして、その內容は同じである。又五藏生成篇では、心の色を「朱」とし、五藏六府圖では「絳」としておるが、絳は濃き赤の謂で、朱とほとんど同色である。さらに、五藏生成篇では脾の色を「栝樓實」とし、五藏六府圖では「黃」としている。栝樓實は熟すと黃色になるからして、その表現は異るが、ともに黃色を指すものである。以上により、五藏生成篇と五藏六府圖とは、その文はやや異るが、その內容は同じで、ともに藏府の實質の色、及びその實質の色が外に現れてなる外榮の色を言つたもので、一は外榮の色に重點を置き、一は藏府の實質の色に重點をおいた相異があるにすぎない。次に五藏生成篇・五藏六府圖に記載される藏府の實質の色彩を次に表示すると、

肺…縞(白色の練絹)で紅を包み、その縞を透して見るような色

心…縞で朱(又は絳)を包み、その縞を透して見るような色

肝…縞で紺を包み、その縞を透して見るような色

脾…縞で栝樓實(又は黃)を包み、その縞を透して見るような色

腎…縞で紫を包み、その縞を透して見るような色
膽…縞で青を包み、その縞を透して見るような色
と言うことになる。

今、中國傳統醫學が、藏府の實質の色としている上記の色彩と、釋迦胎內五藏の肺…紅、心…赤、肝…赤、脾(睹)…黃、腎…紫、膽…紺なる色彩とを比較すると、肺・心・脾・腎の四種はその色彩が一致し、膽は一は青、一は紺で異るが、上記の王冰注に見えるが如くに「紺は薄青色」であるから、この兩者は非常に類似する色であり、肝は一は紺、一は赤で、全く異ると言う結果が得られる。

今、釋迦胎內五藏の內、肺と肝とに就いて見ると、その形態・大小は酷似し、又その葉數もともに五葉である。又釋迦胎內五藏の肺は紅、肝は赤であるが、この紅と赤とは割合に類似する色である。以上の點を併せ考えると、釋迦胎內五藏の肝を作製したものが、肝と肺とを混同し、肝に誤つて赤色を用いたのではないかと疑われる。あるいは、釋迦胎內五藏の製作の時に依據した藏府圖が、肺と肝とは形態が酷似しているために、この兩者を混同し、その傳寫の間に、肝に紺色を着色すべきを誤つて、肺の紅色に近い赤色が施彩されていたとも考えられる。その色彩を誤つた理由はともかくとして、釋迦胎內五藏の心が赤色であるのに、さらに肝にも赤色が施されるのは不自然で、その理由は考えられない。肝の赤色は必ず誤謬によるものと思われる。正しくは、肝に紺又は青が施されるべきである。

以上を要するに、釋迦胎內五藏の內、心・肝・脾・腎の色彩は、中國傳統醫學が藏府の實質の色彩とするものと一致し、膽は類似の色であり、肝のみが色を異にしているが、それでも釋迦胎內五藏の肝の色は、誤られたものであると考えられる理由がある。釋迦胎內五藏の內上記の六種には、本來に於いては、中國傳統醫學が藏府の實質の色とする色彩が施さるべくして、肝にはその色を誤つたものである。

五藏六府圖等には、上記の六藏府の色しか記載されていないので、胃・大小腸・膀胱の實質の色とされる色彩は未詳であるが、上記心・肺等の色彩から類推して、中國傳統醫學が胃・大腸・小腸・膀胱の實質の色とする色彩によつて、釋迦胎內五藏の胃・小腸・大腸・膀胱に施彩されたと言い得るのではなかろうか。之を逆にして言えば、傳寫・誤解等によつて、例えば肝の紺を赤と誤る等の如き若干の

誤謬があることは當然考えられるが、釋迦胎内五藏の色彩は、中國傳統醫學が藏府の實質の色とする色彩を如實に示すものとも言い得るのではなかろうか。

以上を結論すると、釋迦胎内五藏の色彩は、中國傳統醫學が常用する五行説によつて藏府に配當される五色が施彩されたものではなく、その本來に於いては、中國傳統醫學が藏府の實質の色とする色彩が施彩されたものである。從つて、釋迦胎内五藏は、色彩の上からしても、中國傳統醫學の藏府圖によつて作られたものであることが言い得る。

六　釋迦胎内五藏と佛教教義による五藏六府圖

佛教教義による藏府圖は、石原明博士の分擔に屬し、恐らく詳細に報告されることと思われる。筆者はその方面の智識もなく、又資料の蒐集・調査も不十分ではあるが、釋迦胎内五藏の性格究明の一助として、いささか鄙見を述べさせていただきたいと思う。

中國に如何なる佛教教義による藏府圖が現存しているかは、未調査のために、明らかになし得ないが、我國に現存する最古のものは、「五藏曼荼羅」(石原明博士所藏)ではないかと思われる。(その圖版は、昭和三十年京都國立博物館で監修された「醫學に關する美術聚英」に掲載されているから參照されたい)この五藏曼荼羅は、鎌倉末期の寫本と思われるもので、眞言教義による佛教醫學の根本文獻とされている。「醫學に關する美術聚英」には、この五藏曼荼羅を解説して、

その觀想は、身内に大海あり、その底に金色のハラ字がある。これが變じて佛性をあらわす金龜となり、龜の上にソ字が生ずる。また變じて須彌山となり、山上のア字變じて金剛地輪となり、蓮華現出してア字を安んじ、ア字は八葉九尊に化して、あらゆる不可思議の作用をなすと觀ずるのである。蓮華上のア字は卽ち心藏で、一身の生命の中樞ここに發すというのが五藏曼荼羅の概略で、眞言宗の佛教醫説の主要な位置を占めている。

と述べている。この解説が示すように、五藏曼荼羅は、解剖智識を佛教教義によつて展開して、宇宙觀・生命觀を表徵したもので、その圖も圖説もともに宗教的・觀念的で、具體的な藏府の形態等は想定し得べくもないものである。

後村上帝の貞祐二年(一三六二)のころに作られた僧有林の福田方の巻十二に見える五藏圖は、その圖は粗雑拙劣ではあるが、やはりこの類に入るものであろう。

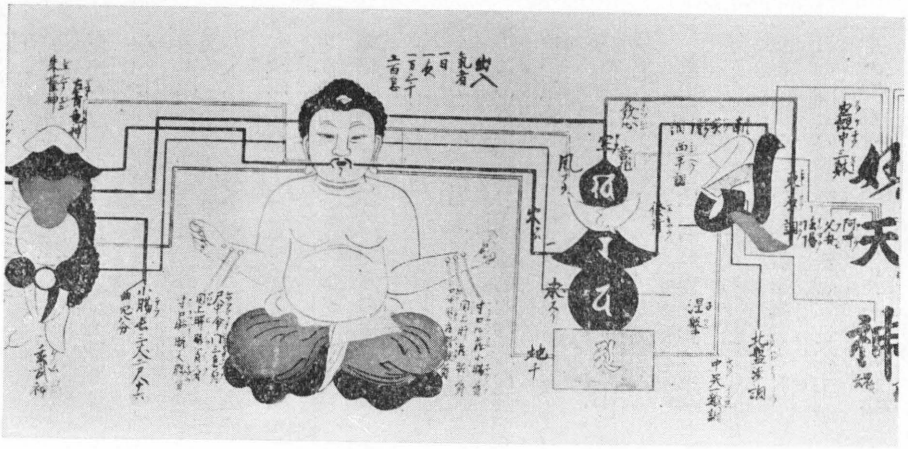
上記したが如くに、五藏曼荼羅の等は、解剖智識を利用して、佛教教義によつて展開し、觀念的な宇宙觀・人生觀を圖示することに重點が置かれたものである。從つて、信仰上の問題は別とし、解剖學的立場に於いては、具體的な釋迦胎内五藏とは、何らの直接的なつながりを持つものではない。

しかしながら、同じく佛教教義によつて作られた藏府圖ではあるが、より具體的な藏府の形態等が描かれているものが現存している。その代表的なものは、「永正解剖圖」(石原博士所藏。假題)と「古代解剖圖」(武田藥工研究所所藏。假題)とである。

永正解剖圖は、石原博士の大業「日本生理學前史」(昭和三十年日本學術振興會編「明治以前日本醫學史」第三卷)に、第八圖としてこの書の圖版を掲載され、詳細に解説されている。石原博士の解説によると、「永正十年(一五一三)に僧行善がその師の僧富益から傳えられた秘書を、實算という僧に示した鍼灸の秘傳書で、僧形の人物に彩色した五藏六府をかき、五行の色體と五佛の支配を表示し、次に藏府圖をかき、姙娠の狀を示し、脊椎との關係を記し、「三十二物説」による附屬物を加え、終りに六根具足した如來像を描いたものである。胃を「田肉」と記した非常識を暴露しているが、室町時代の解剖圖としては稀なる文獻」とのことである。

次に武田藥工研究所架藏の「古代解剖圖」に就いては、そのはじめに、梶原性全の頓醫抄卷四十四から轉載したと思われる藏府の圖が三圖あり、その次に「是ヨリハ新刻華佗内照圖之寫也」と記し、新刻華佗内照圖から轉載した六つの藏府圖があり、次に「妙天神」と書して、ここに問題としている佛教教義による藏府圖(圖版參照)を載せ、次に「一　九蟲形像之圖」と題して、元の葛乾孫の十藥神書から轉載したと思われる尸蟲・肺蟲以下十五蟲の形像圖を掲げ、次に三焦・五藏六府の部位・命門についての簡單な解説の文があり、最後に「長崎壽榮」の署名がある。この書の傳來經緯は明らかではないが、德川初期の寫本であることには、疑を容れ得ない。

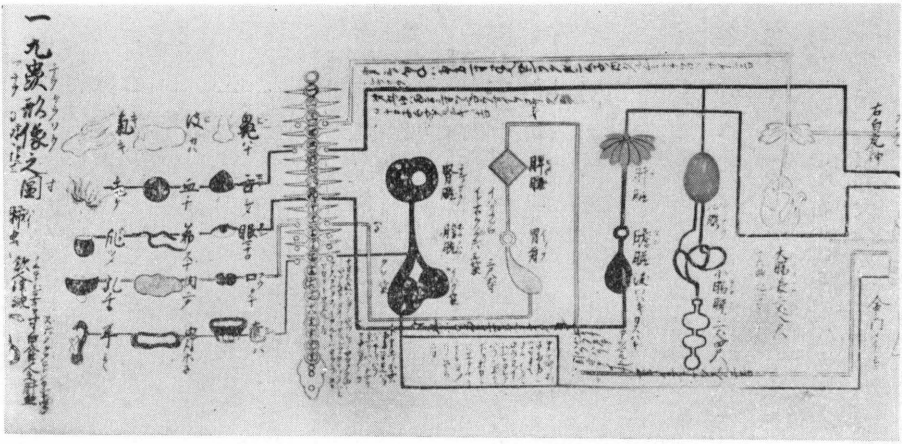
然らばこの古代解剖圖とその末尾に署名されている長崎



第3圖　長崎壽榮の醫家祕方　解剖圖（前半）

壽榮とは如何なる關係があるか。長崎壽榮の傳記は明らかでないが、弘治三年（一五五七）に、「醫家秘方」なる書を作つたことが知られている。ここに注意すべきは、古代解剖圖には、「是ヨリハ新刻華佗內照圖之寫也」と言つて、新刻華佗內照圖から、六つの藏府圖が轉載されていることである。第五報第二章第三節の「華佗內照圖」の條で詳說するが如くに、新刻華佗內照圖は、胡文煥が萬曆年間（一五七三～一六一九）に刊行した書で、弘治三年（一五五七）に成つた醫家秘方よりも後の書である。從つて古代解剖圖に轉載されている頓醫抄・新刻華佗內照圖からの藏府圖は、醫家秘方の原有のものではないことが推定される。古代解剖圖の佛教教義による藏府圖は、石原明博士の言によると、日本醫科大學教授・故岡崎博士が所藏されていた醫家秘方の原本には、この佛教教義による藏府圖が載せられてあつたとのことである。從つて、この佛教教義による藏府圖から「長崎壽榮」の署名までは、醫家秘方原有のものと推定される。

次に、この古代解剖圖の佛教教義による藏府圖と永正解剖圖とを比較すると、古代解剖圖には、「妙天神」の文字、五大の各梵字を一字に組合せた梵字、空風火水地の五輪圖、五藏六府の個別圖はあるが、永正解剖圖にはなく、又永正解剖圖には、五行・五佛・五藏・五色等の配當表はあるが、古代解剖圖にはない等の異同の外に、その圖柄・圖の說明にも、相當な異同・詳略がある。一見しただけでは、無關係の書と思われるが、詳細に見ると、兩者には共通する點



第 4 圖　長崎壽榮の醫家祕方　解剖圖（後半）

が多く、同一の祖本から出たもので、轉寫の間に、增減・摘錄されて、しだいにその內容に多くの異同の生じるようになつたものと推定される。

この兩者の共通とする祖本に就いては、全く未詳であるが、少くとも我國で作られたものではなくして、中國から傳來したものであることだけは、確信をもつて言うことができる。強いて想像を逞しくすれば、天台沙門安然の「諸阿闍梨眞言密教部類總錄」の「雜事圖」に著錄されている「五藏六府圖一卷」に淵源するものと憶測される。この「五藏六府圖一卷」は、山城國山科の安祥寺の入唐僧惠運が、承和十四年(唐の大中元年—八四七)に將來したものである。

古代解剖圖・永正解剖圖を通じて想定される兩者共通の祖本には、如來像・五輪圖等の如き佛教醫學による圖、五行說による五行・五藏・五佛・五大・五色の配當表の如き、中國・佛教の兩醫學を混淆した圖・表、又中國醫學によつて、各藏府に、五行說によつて配當される五色が着色されている藏府圖が描かれていたことが推測される。從つて、この兩者の共通とする祖本は、中國醫學と佛教醫學とを混淆して作られたものであつて、佛教醫學による藏府圖が、しだいに中國化する過程にあるものであることが推定される。

かかる佛教醫學の中國化は、藏府圖に於いて見られるのみでなく、佛典に於いても常に見られる所である。由來、佛典が漢譯される時、例えば陰陽五行說のような中國特有の思考形式が取り入れられて、佛典そのものも相當に中國

化されたのであるが、五藏六府を中國式に五行に配當し、又中國特有の「藏と府」なる思考形式が取り入れられているが如きは、いずれも、佛教醫學の中國化を示すものである。

以上を綜合すると、佛教教義によつて作られた藏府圖には、五藏曼荼羅に見られるが如き、純粋な佛教教義による藏府圖と、古代解剖圖等によつて想定されるが如き、佛教醫學が中國化する過程にある藏府圖との二種があることが知られる。

釋迦胎內五藏は、上記したが如くに、その種類・形態・色彩は、中國傳統醫學に一致するものである。若し釋迦胎內五藏が佛教醫學による藏府圖に據つて作られたとしても、その藏府圖は、ほとんど中國醫學による藏府圖と區別し得ない程度まで中國化された佛教醫學の藏府圖であると言うことのできるものである。從つて、釋迦胎內五藏は、ただ各藏府にかかれている梵字・經文及び藏府の中に納められている舍利・香・玉・梵書に、その佛教的な面影を殘すに過ぎないものと言い得られる。

〔附記〕京都大學赤松教授より、京都市內の某寺に、所傳によると、弘法大師が將來されたと言われる藏府圖が存在している。その寺の都合で、今は拜見し得ないとの由であるが、鎌倉時代の建保年間(一二一三〜一二一八)の書寫で、藏府には彩色が施されているとのことである。「本報告」までには拜見が許されることを望んでやまない。(三一・七・七記)

むすび

以上この中間報告に述べた所を結論すると、本稿は釋迦胎內五藏を中國傳統醫學の立場から分析したものであるが、その結果として、釋迦胎內五藏は、種類・形態・色彩ともに、中國傳統醫學に一致するものであるから、中國傳統醫學による藏府圖によつて作られたものと推定される。若し佛教醫學による藏府圖によつて作られたとしたなれば、その藏府圖は、ほとんど全く中國醫學化されたものである。從つて、釋迦胎內五藏は、藏府の表裏にかかれている經文・梵字及びその中に納められている舍利・香・玉・梵書に、佛教の名ごりを留めておるに過ぎないものと言うことができる。

擱筆するに當り、諸種の御教示・御便宜を賜つた清涼寺御當局・清涼寺釋迦綜合研究會の各位に感謝する。
特に學問上、精神上ともに御指導と御鞭韃とをして下さつた伊藤純一郎様の御芳志は、筆者の一生忘れ得ない所で、謹んで御禮申上げます。
なほこの研究は、昭和三十年度文部省科學研究補助費・武田藥品工業の篤志による經濟援助によつてなされたものの一部であることを附記して感謝の意を表わす。　（三一・五・七稿了）

附　記

昭和三十一年七月四日、京都國立博物館員毛利久氏が發見された佛藏胎内の五藏の調査に參加することができた。この佛像は、京都の三谷與一郎氏の所藏にかかるものであつて、中國鑄造の一尺有餘の白衣觀音の座像である。その製作年代は未詳であるが、元明の間のものと思われる。その胎内からは、心・脾・小腸・腎を一聯とする金屬製の模型と、肺・肝・胃・膽・大腸・膀胱を一聯とする絹製の模型とが出胎した。この新資料の出現により、釋迦胎内五藏は比較研究をなし得るようになつた。例えば筆者は「五釋迦胎内五藏の色彩」の條で、釋迦胎内五藏の肝の「赤色」は誤で、「紺色」又は「青色」に改むべきことを述べたが、三谷氏所藏のこの佛像では、肝に紺に近い「こげ茶色」が彩色されている等の如き、釋迦胎内五藏の研究に利用し得るものが多い。「本報告」の時までに、之を研究して、この中間報告を訂正・增補したいと思う。（三一・七・四記）

印度解剖學の成立とその流傳

（清涼寺釋迦像胎内五藏研究　第四報）

石原　明

内　容

一、緒　言
二、古代印度神話にみられる醫術の傳承
三、印度解剖學の成立と佛教への影響
四、佛教による東方への流傳
五、五藏曼荼羅の成立
六、印度醫學の西方流傳
七、結　語

一、緒　言

京都嵯峨の清涼寺本尊、釋迦如來像の胎内に奉籠されている北宋の絹製内臓模型『五藏』一具はすでに報告した如く、特殊な信仰上の意義から入胎されたものではあるが、醫史學的にみて現存最古の内臓模型であり、かつ教義上依據した解剖學的知識は、中國醫學と異つた系統に屬するものであることを明かにした。そして中國に古くから傳えられた在來の知識と異る系統とは、古代印度の醫說を傳承した佛教醫學（醫方明 Chikitsā-vidyā）に基く解剖的知識であることを教義的に推定した。

そこで本稿に於ては、印度醫學はいかなる成立過程をとつたか、解剖學的知識はどのような部分に含まれているか。佛教はこれらの古代知識をどのような形態の下に傳承し、

これが佛教の東漸によつて中國及びわが國にいかなる流傳をなしたかを出來得る限り究明することゝした。

本論に先立つて一言しておくことは、古代印度の醫學思想を研究する上に、第一に大きな障碍となるものは古代印度ではすべての學術及び記錄はすべて口誦による傳承に終始し、文字による記錄は神聖を冒瀆するものと考えられた結果、確實な年代を知ることがほとんど不可能であることである。

第二には印度神話は非常に複雜である上に異つた系統に屬する神々が雜然と混入し、異傳が多く、傳承される地方によつて神格が相違し、ギリシア神話や日本神話の如く筋の通つた系譜を作ることが至難であることである。

第三に古代印度醫學の代表的記錄といわれる何部かの醫書は、從來醫史學的知識の少い西歐の梵語學者によつて飜譯或は紹介されているため、その正しい內容と價値を知ることが十分でない點である。

本稿に於ては右の如き諸點に不滿の意を感じながらも、一應從來の報告や漢譯佛典を通して推察し得ることがらをとりまとめて、簡單に綜說を試み、淸凉寺釋迦像五藏がいかなる意義を有するか、また印度解剖學はどのようなかたちで流傳したかということを明かにするに留める。從つて將來、印度に於てより信據すべき材料が發見されるか、吠陀や古代醫書の忠實な飜譯が出現するならば、多くの補訂を要するかも知れない。この點については事情をお察しの上、諒とされたい。

二、古代印度神話にみられる醫術の傳承

こゝに古代印度というのは、印度の西北方から移住し遊牧から定着した農耕文化をもちバラモン文化を形成したアーリア民族の活躍した時期をさすもので、アーリア民族侵入前の先住民族の文化については全く關係しない。

アーリア民族の宗教的傳承は口誦による吠陀 Veda という文學的作品としてまとめられた。われ〳〵は現在、このアーリア民族最古の文化遺產によつて最も古い時代の印度の醫療の狀態を推測することが可能である。

吠陀の基本的なものは本集 Samhita と稱され、左の四部より成る。

一、梨俱吠陀 Rg-veda …… 一〇卷より成るアーリア民

族の神の讃歌で、西紀前一〇世紀以前に結集されたという。成立年代は最も古い。

二、沙摩吠陀 Sama-veda ……梨倶吠陀中に説かれている月神ソマを祭る際に詠ぜられる神歌で、梨倶吠陀に附屬するものと考えられる。

三、夜柔吠陀 Yajur-veda ……神に供物を捧げる時低聲で唱えられる祭詞で、定着した農耕文化をもち神官階級が確立した頃に成立したといわれ、吠陀中成立は最も新しい。

四、阿達婆吠陀 Atharva-veda ……結集されたのは夜柔吠陀と同じ頃らしいが、この吠陀は前三者と系統を異にし、あらゆる呪法に關する呪文約六千句を集め七三〇章二〇卷としたもので、このある部分は梨倶吠陀よりも古い内容を傳えているという。招福・降魔の呪文を始めとし除病・延命の呪法などもあつて、この吠陀こそ直接に醫學に關係ある唯一の記錄である。

右に記したことからも判るように、古代印度における醫術の成立と傳承は、梨倶吠陀によつて神話を知り、阿達婆吠陀によつてその内容と傳承を察するほか方法がないのである。そして、これら魔法醫術の實施に當つては修法の順序と方法を示した規定たる儀軌 Kdlpa によらねばならず、この儀軌は變形して佛教にも取入れられ、眞言修法となつて今に傳えられている。

さて、本論に戻つて、阿達婆吠陀中に含まれる醫學知識はどのようにして傳えられたであろうか。吠陀の神話によると次のようになつている。

吠陀に説かれている神々のうち、最高に位する神はブラフマ神(以下梵語はすべてカナで表示する。この神は漢譯して梵天と稱し、佛教では守護神の格になつている)であつて、その啓示をうけたアタルヴァン仙が、天宮に傳えられる阿達婆吠陀の中から一ラーク(一〇萬頌)を占めている醫術に關する部分を集め、要約して八卷にまとめた。これを Ayur-veda という。アユールとは生命の意、ヴェーダは知識の意で漢譯して壽命吠陀といわれるが、その意を直譯すると生命學卽ち醫學に他ならない。

アタルヴァン仙によつてまとめられた壽命吠陀は本來の吠陀(前述の四部の本集)の續編 Upa-veda で、阿達婆吠陀本集に屬するものとされている。ブラフマ神は壽命吠陀に關するすべての知識をダクサ神に相承した。ダクサ神はさ

らにこれを双生神のアスヴィニ神・デヴァタス神に傳えた。この神は醫神であつてその妻サラスヴァチ神は婦人科治療に巧みで不姙を治す藥を創製したといわれる。この夫婦の間に三人の女神があつた。その一人をめとつたヅハンヴァンタリは半神半人の醫師といわれ、多くの醫書を著わし弟子に醫術を教えたとススルタ醫錄では傳えている。このアスヴィニ神話はかのギリシアの醫神アスクレピオス一族と酷似した話である。

さて、アスヴィニ神に傳えられた壽命吠陀の正統はついでインドラ神にうけつがれた。インドラ神は古代印度ではブラフマ神と並べられるほど大なる勢力と信仰をもつ神であるが佛教では帝釋天と譯されて梵天と共に守護を司る。インドラ神はこれを始めて地上の人間に傳授したという。

これよりさき、ブラフマ神は身を化して人界に下り、アトリ仙と稱して醫師となつた。彼の著作にアトリ・サンヒタ(醫錄)があるという。その子にアトレヤ・プナルヴァスという醫師がおり、これがインドラ神から壽命吠陀の正統を相承し、壽命吠陀によつてアトレヤ論集を著わした。

右の神話の系譜を要約すると、壽命吠陀相承の正系はインドラ神から傳えられたアトレヤ・プナルヴァス派であつて、傍系の一であるアトリ仙はブラフマ神の化身であり、アトレヤの父であるから正系に合流したものとみて、他の傍系ヅハンヴァンタリ派は支流とも考えられる。

次にアトレヤ・プナルヴァスには六人の有能な弟子があつた。そのうち最もすぐれているアグニヴェサは壽命吠陀の正系をうけ、アグニヴェサ・タントラ(論集)を作つた。

紀元前後、有名な醫師チャラカはアグニヴェサ・タントラを改訂しチャラカ・サムヒタを作つた。これは壽命吠陀のもとのかたちを踏襲し八篇より成る。のちヅルドハヴァラによつて補修され、さらにハリ・チャンドラの手でチャラカ・タントラ・ヴャークハヤー(チャラカ論集釋義)として注解され、またクリシュナによつて注釋されたものは、チャラカ・ブハーシュヤ(チャラカ大疏)と名ずけられている。

以上の壽命吠陀の傳統は全く神話的なもので歴史的信據をこれに求めることは出來ないが、ともかく壽命吠陀はチャラカによつて醫書としての形態がとゝのえられたことだけは肯定出來よう。

次に別系統としてススルタ派の記錄について記さねばな

らない。

ススルタは外科の名手と傳えられ、チャラカよりは前の時代の醫師といわれる。その祖は醫神ダンヴァンタリ神と傳えられ壽命吠陀の傍系の一支流と目される。

彼の名を冠したススルタ・サムヒタは六篇より成り、とくに外科的療法が詳細で古代印度の醫書の中で最も完備したものと稱されている。その内容よりみるに現存テキストは少くとも五世紀以前の成立であつて、のちにマハヤナ佛教の開祖となつたナガルヂュニ（漢譯して龍猛、眞言七祖の一人）によつて改修されたという。

チャラカ・サムヒタとススルタ・サムヒタは六世紀と八世紀にヴァーグバタなる同名異人の二人の醫學者によつて拔萃集成され、八分醫方叢錄 Ashtānga-hridaya-samhita と名ずけられた。これ古代印度醫學の集成であつて、その内容は次の如きものである。

一、拔除醫方 Shalya（創傷療法）
二、利器醫方 Shālakya（手術法）
三、身病醫方 Kāya-chikitsā（内科疾患治療法）
四、鬼瘴醫方 Bhuta-vidyā（精神病治療法）
五、看童醫方 Kdumāra-bhritya（婦人小兒治療法）
六、解毒方論 Agada-tantra（藥物論）
七、延命方論 Rāsāyana-tantra（長生藥論）
八、增益方論 Vājikarana-tantra（强精藥論）

この八部の分科は吠陀以來の印度醫學の傳統であつて、佛教でもこれを踏襲し、壽命吠陀に對する醫學知識を意味するものとして醫方明 Chikitsā-vidyā（又は藥療論 Vaidya-shāstra）なる語あり、佛教の補助學たる五明 Pancha-vidyā 卽ち音韻・論理・哲學・技術と並んで必修の知識とされている。そしてやはり内容を右の如き八分科 Ashtanga に分ち、八分醫方・八術・八醫などゝ稱し、「金光明最勝王經」その他の經典に見えている。これらに關しては後述する。

以上、要するに古代印度醫學は魔法醫術的色彩の濃い吠陀から、經驗醫術に移行して多くのタントラを加えてサンヒタとなり、記述醫學として成立しこゝにいわゆるバラモン醫學なる燦然たる體系を作り上げると同時に、バラモン神學の影響をうけて宗教醫學化し、これが佛教にとり入れられて佛教醫學を形成するに至つたものである。

三、印度解剖學の成立と佛教への影響

前述の如き傳承によつて成立したバラモン醫學では、解剖學的知識はどのような程度であつたであろうか。

代表的醫書であるチャラカとススルタの醫書では、前者は第四篇、後者は第三篇がともに Sarina-sthāna と題され、解剖・胎生及び胎兒の分娩について記されている。ことにススルタ醫書は外科領域に詳しいため第一篇の總論 Sutra-sthāna に於て外科手術用器具とその使用法を略記してあり、鐵又は青銅製の鋭器二〇種鈍器一〇一種が擧げられている。これら驚くべき多種類の器具が外科手術に使用されていたという事實のうらには、かなり高度の外科手術(記載のたしかなものには膿瘍切開術・腫瘍摘出術・腹水穿刺術・水昌體墜落術・イレウスに對する開腹術・腸管縫合術・側方切開による膀胱結石摘出術・有莖皮膚瓣による造鼻術・瘻孔の消息子檢査など)を行うためには、ある程度の解剖學的知識がなければならず、相當體系立つた解剖學が存在したことを否定することは出來ない。

バラモン教の說く處によると、屍體を解剖することは神意に反するものとして禁ぜられ、また諸獸の中で象と牛は聖なるものとして殺すことは出來なかつた。從つて解剖は宗教の束縛をうけてそれほど發達しなかつたが、ススルタの一派は極秘裡に罪人の屍體を流水中で解剖したといわれ、その觀察結果は、秘密にされていた。解剖を流水中で行つたのは一には氣温が高く腐敗し易いのでこれを防ぐためであり、二には川の中で行うことにより衆人の眼につくことなく秘密が保たれ、三には水によつて汚物が流れ去り、また筋肉などの軟部組織は軟化して觀察が容易となる利點があつたからであるという。

ススルタ派の人體解剖はその方法が詳かに知られていないが、外部が軟化した頃を見計い表皮を剝ぎ、ある種の果實の殼で一層ずつ剝離し腱・筋・脉管・神經・軟骨などをたどり、內臟は水中で個々に切り離して觀察したらしい。

また古くから瀆神の罪人は最も殘酷な極刑に處せられ、生體解剖に類したことも行われた結果、心臟を取り出すことがその生命を去る證據とみられ、このことは佛教にも影響して比豆梨不那奇本生譚 Vitura Punakyaya Jātaka にも現われている

第1圖　比豆梨不那奇本生圖石刻、中印度バールフト廢寺の前二世紀の作品。

即ち、太古にクル國の大臣たるヴィトウラは說法に秀で、聽く人ことゞく信心を起さぬ者はなかつた。ある時、龍王ヴァルナがひそかにその說法を聞き感激して歸り、これを妻のヴィマラーに告げた。妻はこれを聞くより早く聽聞したい一念が凝つて病に臥し、ついに大臣をわがものにしたくなり、大臣の心臟を欲しい。これのみがわが病を治す良藥であると言い出した。そこで龍王は娘のイランダティーに夫たるべき者の資格としてヴィトウラ大臣の心臟を結納とすべきであると命じた。そこで娘は夫たるべき男を求めて山中に入つた處、プナキヤーヤという藥叉に會う。藥叉は事の次第を聞きクル國王を謀つて大臣を賭けとり、山の上から大臣を落して殺そうとする。しかし、大臣の說法を聞いて改心し龍王の許に伴い行き、再び說法させた。そこで龍王も發心し妻の病も治つたので、大臣は無事に本國に歸され、龍王の娘と藥叉は結婚した。このクル國の大臣ヴィトウラが釋迦の前生の一であつたというのがこのヂャータカのあらすじである。

この話は佛教說話ではあるが、多分にバラモン教の臭氣があり、また賢人の心臟が難病の良藥とか、敵の心臟を持ち歸れというような話は西歐中世の物語やお伽話によく出てくる。この邊にも比較神話學の立場からみるとアーリア民族の原有文化の關連が感ぜられる。佛教では心臟はとく

に重視され、經典中にもしば〳〵現われており、漢譯して肉團心といわれている（「飜譯名義集」一七、後述）。

四聖獸マハージャーネーヤとして、象・牛・獅子・馬は侵すべからざる動物とされていたが、祭祀のためいけにえとされる場合には宗教的意義によつて解剖されることがあり、これには專業の巧屠師という階級があつたことが漢譯佛典の「大般若經」五三にみえている。少し長いが冗長を厭わず引用すると、

復次善現、若菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時、以無所得而爲方便、審觀自身、如實念知四界差別、所謂地界水火風界、如巧屠師或彼弟子、斷牛命已復利刀、分析其身剖爲四分、若坐若立如實觀知（中略）從足至頂種々不淨充滿其中、外爲薄皮之所纏裹、所謂唯有髮毛爪齒、皮革血肉、筋脉骨髓、心肝肺腎、脾膽胞胃、大腸小腸屎尿洟唾、涎淚垢汗、淡膿肪脂、腦膜膿睡、如是不淨充滿身中、如有農夫或諸長者、倉中盛滿種々雜穀、所謂稻麻粟豆麥等、有明目者開倉覩之、卽如實知（中略）從足至頂、唯有種々不淨臭物充滿其中、亦復如是、誰有智者寶玩此身、

卽ち「大般若經」では肉身は不淨なものが充滿しているので慾念も從つて起り易い。これを調伏するためにどのように觀想をなすかということのたとえに解剖學的知識を引用しているのであるが、これがバラモン教の影響によるものであることは容易に首肯されるであろう。

ススルタ醫書に記されている解剖學的知識は骨格以外は頗る觀念的なもので、流水中における剖見によつて脉管や神經がより印象的であつたためか、何種かの脉管を想定し、バラモン教の教義によつてすべて臍から起るものと考えられている。從つて生命現象も頗る空想的であつた。

攝取された食物は胃腸で乳糜となり、これは脾と肝で血液に化せられ、血液は凝つて筋肉を生じ、筋肉は脂肪となり（佛典のいわゆる肪脂）さらに骨を作り、骨は骨髓を、髓は最終段階に於て精液を形成する。以上の七種が身體の構成物質であるとされていた。

さらに生命現象の四要素として空氣・血液・粘液・膽汁が重視され、幼少期は粘液、青壯期は膽汁、老年期は空氣が生命の支配的立場にあり、血液は各期を通じて生命を保つもので、これら四要素の過不足が疾病となると說いている。また外界の四要素、地・水・火・風のいわゆる四大

（のちに空を加えて五大、原動力としての識を加えて六大の説に發展する）は内界の四要素や多くの器官に影響を與えてさまざまの疾病が生ずるとも考えた。

四大 Catvāri-mahābhutāni はバラモン哲學の説く宇宙構成物質で、原子論に似た構成論を形而上的に創作した説である。四大の思想は佛教にもとり入れられ、またギリシアのエムペドクレス Empedokles（B.C483—B.C435？）の四原素説と同一の考えで、恐らくはこれもアーリア民族の原有思想に端を發するものと想像される。佛典の所説によると四大の本性は堅 Khara・濕 Sneha・暖 Uṣṇa・動 Irana でこれを實四大（性四大）と稱し、これが形をかりた假四大（事四大）は地 Pṛthivi・水 Ab・火 Tejo・風 Vāyu となり、これらはおの〳〵持 Dhṛti・攝 Saṃgraha・熟 Pakti・長 Vyūhana の作用を有する。これを業という（「正法念處經」・「俱舍論」）。人の肉體もこの四大によつて構成され、あらゆる生命現象は四大の性によつて營まれており（「維摩詰經」）、性と業との不調和・不均衡により四百四病が現成する（「增一阿含經」）と説いている。

さらに空 Sunya を加え、空はその性が無礙であつて一切を包含し、存在を可能ならしめ五輪のかたちをとると觀想して密教ではとくに重んじている。また、五大は單なる物質であるから、これを完全に運用するための原動力として識 Vijnāna の存在を必要とし（「瓔珞本業經」）精神的要素と物質的要素との關連を強調し、五輪六大の瑜伽と稱して密教では教理の基本となすに至つた（「即身成佛義」）。

さて、前述の如く各種の脉管が臍を中心として體内に分布すると考えたバラモン醫學の説は、漢譯佛典にも散見している。

脉管の數は異説もあるが「大寶積經」五五及び五六には、

身前後左右各五脉、有種々名、或名伴・力・勢、有種々色、青・黄・赤・白・豆・酥・油・酪等色、更有多色、共相和雜、

二十脉各有四十小脉、又各有一百枝脉、身前後左右各二萬總八萬、

とあり、その種別を十三に分類している。

身中有十三脉、命流脉・隨順流脉・水流脉・汗流脉・尿流脉・糞流脉・十流脉・汁流脉・肉流脉・脂流脉・骨流脉・髓流脉・精流脉（「正法念處經」六四）

これは細分されてはいるが、ススルタ醫書で體内には空氣・血液・粘液・膽汁の四種の脉管があり、臍を起點として分布していると說かれているのに該當し、さらにその分布狀態を佛典では次のように記している。

此息風先入口鼻、流至咽喉、從咽喉至心胸、流至臍輪、漸流偏肢節(「大毘婆娑論」二六)

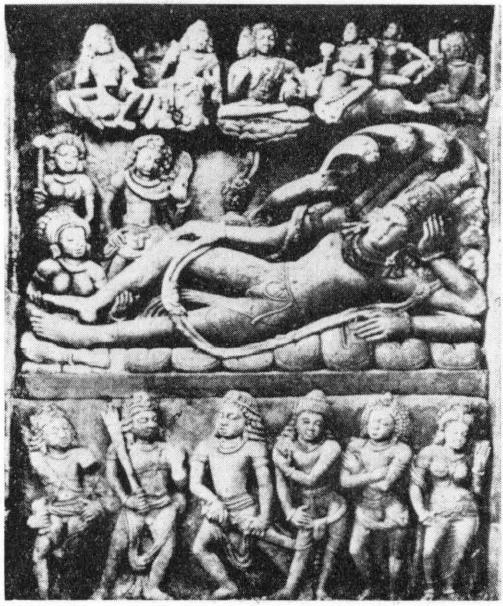
これはススルタにいわゆる空氣の流れる脉管にあたる。粘液と膽汁の脉管と覺しきものは、

水流脉者生臟・肝・心以爲根本、屎流脉者熟臟・下門爲本、汁流脉者肺爲其本(「正法念處經」六四)

とありその生臟 Amāsaya とは胃をさした言葉であり、熟臟 Antra とは腸のことである。何れも佛教用語であるがこれが印度傳來の言葉であることは容易に判るであろう。

臍は前記の如く佛典でも重視されているが、その起原はバラモン教の神話にも見出すことが出來、デオガルフ寺院にある五世紀頃の笈多(グプタ)王朝の石造浮彫には、臍がバラモン教でいかなる意義を有するかを示す作品が殘されている。

この浮彫は吠陀の傳承を表現したもので、ヴィシュヌ神(リグ吠陀中にこの神の創製した神藥シッダルタ油のことが傳えられている)がアヂセサ神(八頭を有する蛇體の神)の上に横臥し、その臍帶は長く空中にのびて蓮華と化し、蓮華の上には四面のブラフマ神が坐つている。ブラフマ神は前述の如く生命を司る神であるから、これが臍帶上の蓮華に坐していることはバラモンの教義上重大な意義をもつているのである。この考えが密教にとり入れられ、如來臍眞言とか「三部四處輪圖」(後述)などが成立することになる。從つ



第2圖 バラモン教の神ヴィシュヌの臍帶をあらわしたデオガルフ寺院の石刻

てバラモン醫學が解剖學を說くにあたり、臍を中心として諸種の脉管が走行すると考えたことは、宗教醫學としての成立を想起するならば決して不自然なことではない。

右に記した以外、身體の諸器官・組織などについてバラモン醫學の知識がどのように漢譯佛典にとり入れられているかについては、次章に概括する。

要するに印度解剖學はバラモン教の支配下に成立したものであるから觀念的であり、佛教はさらにこの知識を教義說明の手段としてとり入れているが、逆に漢譯佛典によつて、古代の印度解剖學のあらましを推知することがある程度可能であるということが出來る。

四、佛教による東方への流傳

バラモン教の支配下に成立した印度醫學の解剖學的知識は、釋迦及びその後繼者たちによつて佛教にどのようなかたちでとり入れられ、さらにこれが中國に經典として傳えられどんな表現で漢譯されているであろうか。

すでに私は漢譯佛典にあらわれた生理學的思想について概說した(日本學士院編「明治前日本醫學史」第二卷一六頁以下)ので本稿では解剖學的記載のみを考察する。

まず、胎生學的記載と人體を構成する諸器官・組織などについて、綜括的に體系立つて記されているのは唐・菩提流志の譯に成る「大寶積經」五五『佛爲阿難說人處胎會』(これは別に西晉・竺法護の譯した「佛說胞胎經」なる異譯本が單行で存し、かつてヒュボッターにより獨譯された)、同じく五六・五七の『佛說入胎藏會』(この兩卷は唐・義淨三藏の譯する處である)が代表的なものであるから、以下この二部三卷二會の經典を主として述べる。

「大寶積經」に說かれている受胎の機轉については、かつて畏友杉田暉道氏が發表している(「日本醫史學雜誌」第五卷第四號)からこれを省略し、主要器官の形成される時期を調べてみると、姙娠第五週に於て四肢が生じ、第九週に眼・耳・鼻・口・大小便處の九相が生じ、第十二週に大小腸及び三二〇の支節一〇一の穴が生ずる。第十三週に胎兒は痩せて飢渴を覺え母の攝取した飲食の滋味をとつて身穴と臍輪によつて吸收し肥大すると說いている。こゝに臍が出てくることは前述のバラモン教の思想によつたもので注意する必要がある。

第十四週に九〇〇の筋が生じ、第十五週に八萬の脉（前述）が生じ、次第に諸部分が成長して第二〇週には骨が生じ、かくして第三八週にして胎藏を出る（分娩）と説いている。

佛典では骨の數が問題である。それは舍利として安置する風習があるからであつて、「大寶積經」五五では各部の骨の數を詳しく列擧したのち、小骨を除いて大骨の數は二百としているので『二〇〇骨説』といわれ、第五六卷でも同じく記していながら第五七卷の同じ會の下篇で釋迦が阿難陀に説いた伽陀では『三一六骨説』をとり、また第九六卷と「增一阿含經」三〇では『三六〇骨説』になつている。また「修行道地經」には『三〇〇骨説』がみられる。「大寶積經」一部の内に三説がある處から、『三一六骨説』は『三六〇骨説』、の誤りで、大約して記したのが『二〇〇骨説』、端數をとつて『三〇〇骨説』と從來教義上では解されていた。そしてこのことからも佛教解剖學は醫學の專門家でない人々の傳承により、教義説明のための一手段として單に名數が列記されているように思われていた。しかし、細かく集計してみると「大寶積經」の第五五卷では總計二五一となり、第五六卷では六個增して二五七である。この兩卷とも大數を擧げて二百となし小骨を除くとことさらに斷つてあるので、數え方によつて六個くらいの差はあり、第五七卷では二二〇であるが脊骨の三二個は細かく數えると四分して一二八個であるとしているから、四分の數を加えると三一六となり、『三一六骨説』は不自然ではない。この四分の脊骨數で前の卷を數え直すと第五五卷は三〇五、第五六卷は三一一でほゞ『三一六骨説』に近くなるから、『三一六骨説』は佛教がバラモン醫學から借用した知識であり、ススルタ醫書の骨の數も數え方によつては三一六になるので、古代印度の解剖學は骨の數を三一六と考えていたものと想像される。

身體を構成する組織や器官については、すでに記したようなみ方もあるし、また教義上分泌物や排泄物などまで含めて大乘經典では三六に分類して『三六物説』をとり小乘經典では三二に分けて『三二物説』を説いている。體系的に一個處で最も細分して記してあるのは「大寶積經」第五七卷で三九種の名目が列擧され、第五五卷では多少簡略にして三三種が説かれている。これらのものは外相・身器・

内含に大別されているので、内臓器官について身器に屬するものを次の主要な經典によつて調べてみた。調査した經典は、

大寶積經・大方廣佛華嚴經疏・雜阿含經・中阿含經・增一阿含經・大智度論・罵意經・大般若經・六度集經・正法念處經・瑜伽論・大毘婆娑論・法觀經・小誦經・南本涅槃經・摩訶止觀・四分律・破地獄三種悉地法

以上十八部で、まだこの外にも調査なし得なかつた重要な經典が少くないが、一應これらに記された傾向で概略は判明する。その結果、内臓器官として明かに認められているものは腦・咽喉・胃・(生藏)・腸(熟藏、大小腸・肚・肛または大便道)・心・肝・腎(命門)・脾・肺・胞・膀胱・膽の各器官である。これらがどこまで印度本來の思想として認め得べきかは大きな問題で、漢譯に際し中國醫學と相當密接に融合しているであろうことは考えなければならない。腎の右側のものを命門というとあつたり、胃は脾の府など、「破地獄三種悉地法」(正式な經名ではない、後章參照)に記されているものなどは、明かに中國醫學との融合を物語つている。

そこで唐・義淨三藏の撰になり、慈覺大師が入唐してわが國に請來したという「梵唐千字文」や、同じく慈覺大師請來の歸茲國・禮言の集めた「梵語雜名」、惟海上人請來本と傳える「梵唐消息」などの梵漢對譯單語集に、内臓がどんな梵語で示されているかを前記の調査の裏付けとした。

これによると心はカリダヤ又はキリダヤ、腎はボリキヤ、腸は「千字文」ではアウタラ「雜名」ではウダラ、肚は「千字文」ヘイター「雜名」ウダーラ「消息」クキッシ、咽は「千字文」ギャラ「雜名」ギリバ、喉は「千字文」ターロ「雜名」ギャナタ(何れも梵字と音寫漢字は印刷の都合で省略した)、これ以外には何の記載もない。これらから類推するに心・肚腸(現今の解剖學名の何れに同定すべきか問題であるが)・咽喉・腎などが、他の内臓器官の名稱よりも使用頻度が高かつたと想像し得る。

清涼寺本尊釋迦如來像の胎内に奉籠されている『五藏』は十二個(上焦を加えて)より成つているが、胃を生藏として肚・腸・膓を一括して熟藏と考えて對比させ、心・腎・喉は前記の如く梵語集に出ているので問題なく、背皮は内臓でないから除外すると肝・膽・肺のみが前記の梵語集に見

當らない。清涼寺五藏の解決の鍵は、この邊にも伏在するようである。

以上、要するに佛教にとり入れられたバラモン醫學の解剖學的知識は、經典の中國請來と漢譯により四世紀より八世紀のころ、ことに隋・唐時代に中國に傳えられ、さらにこれが入唐僧や遣唐使などの手によつてわが國にまで流傳されたものということが出來るであろう。そして次章に述べる中天竺から唐に來た善無畏三藏が三種悉地の血脉を付法し、三種悉地法の儀軌を譯するに及んでわが國の台密や東密の小野流で「五藏曼荼羅」の教義が成立し、印度解剖學の根本思想は、局部的ではあるが鎌倉時代にも存し室町末期まで隱然たる流傳を形成したことは佛教の特殊性の然らしめる處であつて驚嘆に價する事實といわなければならない。

五、五藏曼荼羅の成立

眞言七祖の一、善無畏三藏 Subharasimha が密教の法流上に占める地位は極めて大きい。密教で重視する「大日經」と「蘇悉地經」は彼の手によつて譯され、密教の正統を傳えるいくつかの儀軌は彼によつて中國に傳えられている點からも佛教史上、重要ではあるが、醫史學の立場からみるとき、彼によつて吠陀の宇宙觀に基く印度解剖學の知識が繼承され東漸しているからである。

「宋高僧傳」二によると、彼は中印度摩伽陀國の人で、釋迦の一族甘露飯王の後、一時、烏荼國王の地位にあり故あつて那蘭陀寺の達磨掬多の門に入り佛道を修めた。のち發心して唐に到り、開元四年(七一六)多くの梵本を隨身して長安に入り、同二〇年に及ぶ間譯業に從い開元二三年(七三五)十月十七日九九歳の高齢を以て涅槃に入つたという。

彼が傳えた儀軌のうち「破地獄三種悉地法」なる修法を說いたものがあり、明かに彼が譯したと思われるものに二本あり、初譯本及び再譯本とみられている。初譯本とされている儀軌は「佛頂尊勝心破地獄轉業障出三界秘密三身佛果三種悉地眞言儀軌」と題され、再譯本と目されるものは「三種悉地破地獄轉業障出三界秘密陀羅尼法」と名附けられ、兩本とも卷頭に『中天竺國　三藏善無畏奉詔譯』とあつて、唐の玄宗の勅により開元五年より同二〇年(七一七

――七三二)に至る間に梵本より譯出したものであることが判る。

他に異譯本として「佛頂尊勝心破地獄轉業障出三界秘密陀羅尼」・「三種悉地秘密眞言法」・「三種悉地儀軌」の三本があるが、何れも善無畏の二本のうちの何れかと內容は大同小異である。

この儀軌は密教々義の上から極めて重要な內容を有しており、「金剛頂經」「大日經」兩經の教義を說明し金胎兩部不二の思想を宣揚し、五字明の妙咒を唱え契印して觀想することにより、上品・中品・下品三種の悉地を成就し摩訶毘盧遮那(大日)如來の三昧に遊化することを得るとされている。教義上の說明は本稿では省略し、この儀軌が何故に印度解剖學の思想を繼承しているかについて考察してみよう。

元來、密家の間ではこの兩種の儀軌を善無畏が梵本に忠實に譯したものではないと考えられている。そして密教獨特の思想を唐に弘通するに際し、古來中國で重んぜられている陰陽家の說と融合させ、世人の耳目に親しからんことを期したものであろうといわれている。なる程、再譯本の方は初譯本よりも濃厚に陰陽家の說に習合されている部分が特に顯著であつて、「黃帝內經」などの陰陽家の文獻を飜譯に際して參照したであろうことは否定出來ない。卽ち印度の五大說と中國の五行說とを巧みに結びつけて五字明で解釋し、天人合一說と印度の宇宙觀とを融合させ、眞言唱誦の功德を以て國家鎭護、運氣順行、太平和樂に歸し、五字明の一字を五藏に布字すれば萬病生ぜず長生久視に至ると攝生に結びつけている。從つて本儀軌は密教々義の弘通の手段として印度解剖學の思想を以て、中國古來の陰陽系醫說に融合したものであるから、破地獄三種悉地法の付法血脈を以て印度解剖學の東漸に擬することは、あながち附會の考えではないであろう。

いま兩種の儀軌の本文中より主要部分を表示すると次表のようになる。繁を避けて原文は省略した。

これが儀軌ではどのように表現されているかというに、再譯本の一節を左に譯出すると、

藍字は寶部にして心を主る。藍字はこれ大日如來の心地に火大の種子を植ゆ。三世諸佛の室宅にして一切衆生の無始の無明・塵垢・妄執を焚燒し、菩提心の芽種を出

字	大	觀	形	色	部	智	佛	種子	藏	識	陰	行	神	季	彩	根	榮	味	方
ア	地	（金剛座地）	方	黃	金剛	（金剛大圓鏡）	如來阿閦	輪金剛地	肝	阿賴耶	色	木	魂	春	空	眼	筋	酸	東
バン	水	（蓮華水）	圓	白	蓮華	（轉法轉蓮華妙觀察）	如來阿彌陀	大輪智海水	肺	波陀耶	想	金	魄	秋	白	鼻	毛	辛	西
ラン	火	日	三角	赤	寶	（灌汀平等性）	如來寶生	大心地火	心	阿陀耶	受	火	神	夏	赤	舌	血	苦	南
カン	風	月	半月	黑	羯磨	（羯磨成所作）	就如來不空成壽	大量風	腎	前五	行	水	志	冬	黑	耳	骨	鹹	北
ケン	空	空	團	雜	虛空	法界性	如來大日	如寂滅眞	脾	阿摩羅	識	土	意	季夏	黃	口	肉	甘	上

生す。阿字を轉じ釋くなり。即ちこれ應化身の如來にして、實にこれ智法身の火生曼荼羅なり。心は神を主り、その形は鳥の如し。南方を火となし、火は夏を主りその色は赤し。赤色は火より生じ火は木より生ず。五陰中にて受陰心は火を持し、受心は想心より生ず。また赤氣及び肝より生ず。心は出でゝ舌となり血を主り、血窮りて乳となる。また耳を主りて鼻喉・鼻梁・額頤などを轉ず。苦味は多く心に入りて心を增し肺を損す。もし心中に神なければ多く前後を忘失す。腎の心を害さば病をなすは水の火を尅するが如く、腎強ければ心は弱し。まさに心を腎に止むべし。赤氣を以て黑氣を攝取すれば、心の病は則ち差ゆ。赤氣とは藍字のことなり

このような具合にして上品悉地の眞言たるア・バン・ラン・カン・ケンの五字明を釋し、

右五部の眞言は、これ一切の如來、無比甘露の珍漿、醍醐佛性の妙藥なり。一字、五藏に入つて萬病生ぜず。況んや日觀と月觀とを修するをや、即時に佛身の空寂を證得せん。

と記してあることから、この儀軌の思想のおゝよそは察知されよう。

破地獄三種悉地法は右の如く、唐における密教の興隆に資する處大なるものがあつた。これがわが國に傳えられたのは天台宗の祖、傳教大師最澄に始まる。即ち「根本大和尙眞跡策子等目錄」に

破地獄眞言一通

右一帖、外題云、梵字眞言云々、然而多有漢語等

とあつて最澄自筆の聖教が存したことが判る。そしてこの法脈については延喜二年(九〇二)に安然が編集した「諸阿闍梨眞言密教部類惣錄」に

尊勝破地獄陀羅尼儀軌一卷　是三種悉地法

三種悉地付法一卷

順曉出澄和上顯戒論緣起三卷中

と記されているので「顯戒論緣起」をみるとその上卷に『大唐泰嶽靈巖寺順曉阿闍梨付法文』という血脈があり、これによると、

灌頂傳授三部三昧耶阿闍梨沙門順曉、圖樣契印法、大唐貞元二十一年四月十八日、泰嶽靈嚴寺鎭國道場、大德內供奉沙門順曉、於越府峯山頂道場、付三部三昧耶、牒弟子最澄

さらにこれに續いて附記がある。曰く、

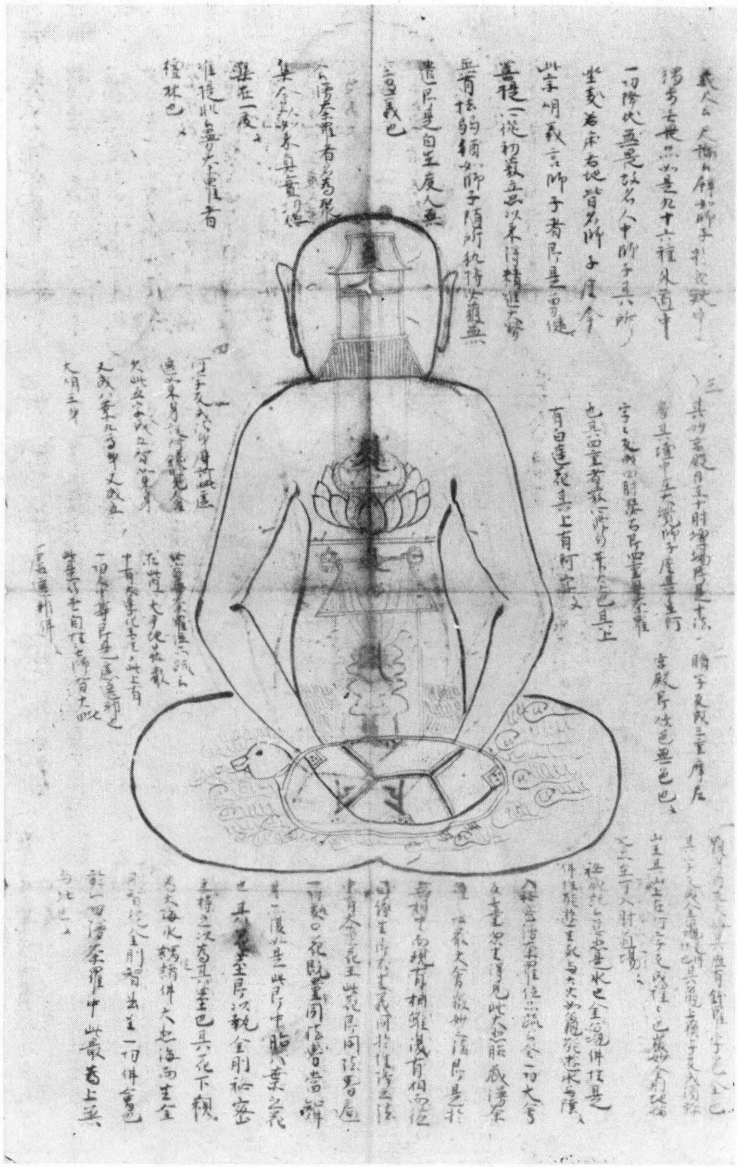
大唐國開元朝、大三藏婆羅門國王子法號善無畏、從佛國大那蘭陀寺轉大法輪、至大唐國轉付囑傳法弟子僧義林、亦是國師大阿闍梨、一百三歲今在新羅國轉大法輪、又付唐弟子僧順曉、是鎭國道場大阿闍梨、又付日本國弟子僧最澄轉大法輪、僧最澄是第四付囑傳授

唐貞元二十一年四月十九日書記

即ち最澄は三種悉地法の第四傳で、歸朝後延曆二四年(八〇五)秋、高雄山に於て弟子にこの修法を傳法した。かくて本法は台密の專有であるかの如き感を呈して次の如き三種悉地法の血脈が傳えられている(金澤文庫藏「三種悉地附法血脈」による。善無畏以前と鎌倉時代のものは省略した)。

しかし東密に於ても惠果阿闍梨が玄超から傳えられたこの法を義操と法潤に付法し、また弘法大師空海も兩部不二の法脈を惠果から受けており、嵯峨天皇の御宇に清涼殿の宗論に於て、本法により五藏に上品悉地の五字明を布觀し智拳印を結んで即身成佛の三昧に入定したとも傳えられている(「五輪九字明抄秘釋」)。しかし、東密では主として小野流に傳えられ、他の流派では全くこれを有しないものもあ

第3圖　五蔵曼荼羅を圖に顯現した一本、鎌倉末期寫、家蔵、梵字は朱書、一帖一舗。



るし、異傳と目すべき法脈もある。

承和一四年(八四七)に歸朝した安祥寺の惠運の請來に「五藏六府圖」一卷があり、安流に傳えられている。惠果からの正統を傳えた法脈では石山內供淳祐より三傳した小野僧正仁海に「五藏曼荼羅」一帖、「五藏肝心抄」一帖があり(「諸師製作目錄」)、小野流の秘法になつている。

台密には圓仁に「三種悉地秘法」があり、圓珍に「三種悉地法」の傳が存する。

かくて平安末期から鎌倉期にかけて「現圖五藏曼荼羅」が成立し、これに伴つていくつかの注書も出現した。

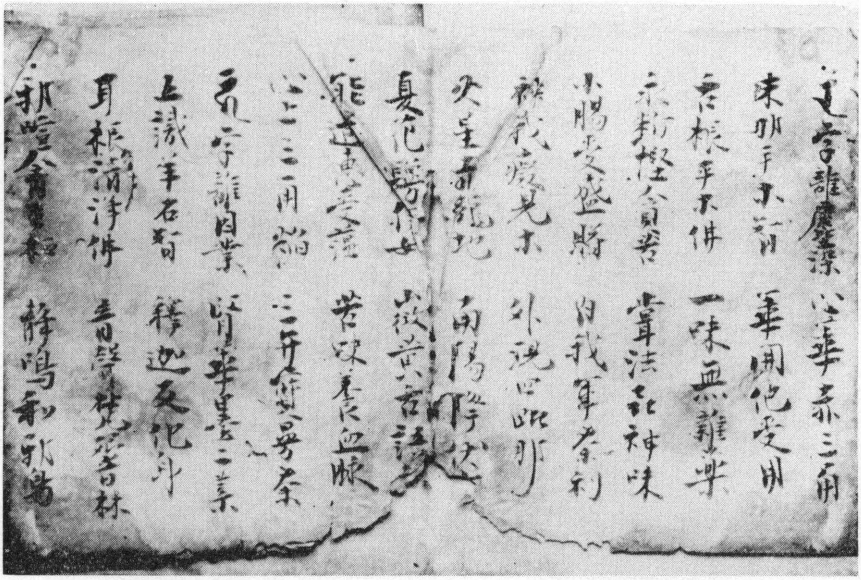
家藏の一本に「理曼荼私　尊勝破地獄意」と題する野山舊本の鎌倉末期鈔本があるが、恐らくこれが小野流の「現圖五藏曼荼羅」であろうと思われる。

圖に示したのはその全容であつて、この觀想は善無畏の再譯本に基いており、五藏はもはや顯現されることなく、次の如き次第に成立している。

まず五輪を觀想し、體內下部に深玄の色の大海水輪を成す。上に金色のハラ字あり、變じて大金龜となり背上にソ字を想う。卽ち變じて妙高山となり金山七重に圍繞する。虛空中に毘盧遮那佛身あり、毛孔より出る處の香乳は雨となつて金山の間に注ぎ、八功德香水の乳海となる。法身は反つて三重の摩尼宮殿と成りその中に大覺獅子座の壇が出現し、四重曼荼羅となりアン字を着す。心に當つてキリク字あり變じて重層八葉の蓮華となり法界に遍く、華上にア字を現ずる。ア字は法身の大日如來となりア・バン・ラン・カン・ケンの五字明を說き、五智如來身または八葉九尊身或は大明王身となる。變じて五峯八柱の寶樓閣となり、上にバン字を生じて卒都婆(塔)となり大光明を放つて普く法界を照すが故に、あらゆる受苦の有情は光に値遇して解脫することを得る。というのが五藏曼荼羅の觀想である。

こゝに至つてはもはや印度解剖學の片鱗をも明知することは出來ないが、その成立事情を考えるならば、密敎における五藏曼荼羅が根底に印度解剖學を伏在していることを察知することが容易である。

これを具體的に釋した「五藏曼荼羅讃」(小野流所傳、家藏)は、大日三身の眞言を善無畏の例にならい中國醫學の思想を以て敷衍している(詳しくは拙著「日本生理學前史」參照のこと、日本學士院編「明治前日本醫學史」第二卷所收)。



第4圖　「五藏曼荼羅讃」の一部、鎌倉中期寫、小野流所傳、家藏

なお、五藏曼荼羅の傳本及び類書には、私の知り得た限りでも次の如き多くのものが現存する。

五藏曼荼羅　小一卷、寛德二年(一〇四五)寫、京都・來迎院如來藏・報字函

同　一帖、元永元年(一一一八)寫、京都・青蓮院吉水藏・第四號函

同　横一冊、文永七年(一二七〇)寫、滋賀・實藏坊眞如藏・第一九架一二八函

同　一帖、建治二年(一二七六)寫、神奈川・金澤文庫(別に書寫年代明記なき鎌倉末期寫本二部あり)

五藏曼荼羅集　一結、平安末期寫、京都・高山寺法鼓台

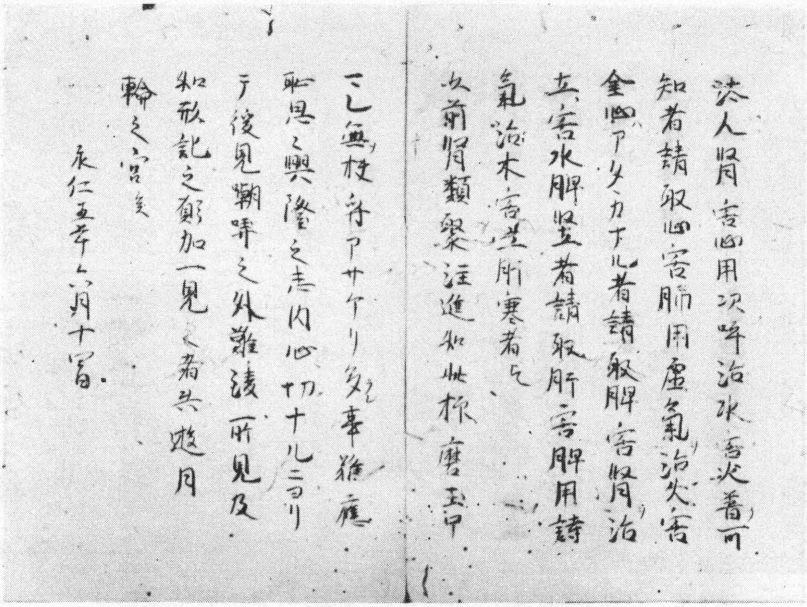
五藏曼荼羅讃　一帖、鎌倉中期寫、家藏

五藏曼荼羅和會　一帖、鎌倉末期寫、和歌山・高野山寶龜院

五藏曼荼羅和會釋　三帖(脫簡あり)、永仁五年(一二九七)寫、神奈川・金澤文庫

永正五藏圖(假題)　一卷、永正一〇年(一五一三)寫、家藏

醫家秘方　一卷、弘治三年(一五五七)寫、故岡崎博士舊藏、現藏不詳、



第5圖　「五藏曼荼羅和會釋」の末尾、金澤文庫本

同（略抄）　一卷、近世初期寫、大阪・杏雨書屋

五藏梵字書（假題）　一冊、室町末期寫、東京・宮內廳書陵部

新渡□□圖　一卷、慶長二年（一五九七）寫、家藏

このほか東寺・仁和寺・石山寺・園城寺などの秘庫を探索すれば、なお多くの傳本が得られるであろう。また五藏曼荼羅についてはなお論ずべきいくつかの問題が殘つているが、餘りに觀念的な教義上のことであるから、印度解剖學の東方への流傳という點で以上の說明に止める。この法流血脈は室町末期にも存したが近世に入つて急速に衰えたらしい。現在では五藏曼荼羅は獨立した法流を形成していない。

六、印度醫學の西方流傳

古代印度醫學を築いたアーリア民族は印度侵入前にすでに文化を有し、クレート・ミノス文化圈 Kretisch-minoische Kultur. はギリシア文化の根源をなすといわれているから、印度醫學とギリシア醫學と相似の共通點が少くないのは當然である。ギリシア醫學に雄飛したヒポクラテス

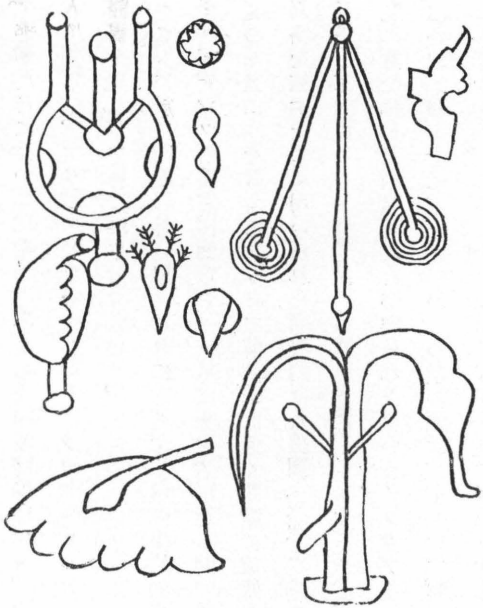
のコス學派では、何種かの印度原産の藥物を使用しており、アレクサンドロスの印度遠征の結果は印度醫學の西方流傳を促がした。ローマ時代にもインドの藥物は海路ローマに入り多彩を加えたが、中世に及んでビザンツ帝國の興隆、ネストリウス派(唐に景教と稱するキリスト教の一派)のペルシア逃避などによつて、藥物のみならず印度醫學はアラビア人に知られ、アラビアの大守たちはチャラカやススルタの醫書をアラビア語に譯させたという。

こゝに於て印度の外科學とこれに附隨する解剖學的知識は、ビザンツの醫家に知られ、ルネッサンスに至る間、印度の知識に端を發するアラビア解剖學は遠く西歐に流傳し、刺絡を施すために用いられた通俗的な人體圖(天體とくに十二宮・二十八宿などと人體各部との關連を圖示したもの)や、極度に意匠化した內臟圖などが作られた。いまイタリアその他各地に殘る十二、三世紀のこの種の圖は、ギリシア醫學の影響を勿論認めることは出來るが、一見アラビア風の意匠化した內臟圖などはそのうらに印度解剖學の知識が伏在することを暗示するものがある。

アラビア系の解剖圖は、多く臟器や器官が別々に圖示され、極度に意匠化されて形式的固定があるのを特色とする。元來、アラビアではイスラム教の教義により人體解剖はおろか動物の解剖もあまり行われず、從つて外科手術法やその知識は印度醫學を踏襲している面が少くない。ギリシア・ローマの醫學文獻の溫存によつて、ガレノス解剖學がアラビア醫家によく知られていたが、すぐれた印度の外科と解剖學的知識はとくにラーツェス(アラビア名 Abu Bekr Muhammed ben Zakarijja er-Razi. 850—932)によつて同化され、彼の代表的著述といわれる「醫學府庫」Continens(アラビア名 al-Hawi)に記載されている(Ernst Hemneter)。しかし彼の解剖圖は殘されていない。

アラビア系の解剖圖が一つ一つの臟器や器官をとり出して單純な樣式化した線描きで描かれているのは、恐らくススルタ派の醫師が流水中で人體解剖をしたという知見に端を發するものではなかろうか。私の臆測ではあるが流水中で解剖すると臟器を個々に切り出す場合、比較的周圍の軟部組織が取り去られ易く、內容や汚物も洗い流され收縮するので形態は一定の樣式になり易い。これが意匠化されて描かれると、ほゞアラビア系の解剖圖のようなものになる

のではなかろうか。



第6圖 アラビア系解剖圖の一例、十二世紀初めピサで描かれたもの、説明はラテン語、メイヤー・スタイニヒ蒐集品の内、一部模寫

單純化した様式にすることがアラビア系の特色であることは、ひとり解剖圖ばかりでなく、地圖についても指摘することが出來る。

例えば園城寺舊藏の智證大師請來本の寫しと傳えられる「蓮華臺藏世界圖」（重美指定）は地域を方形で表わし、いくつかの方形の連續によつて世界を圖示している。そしてこれに書かれている文字が字形は崩れているが梵語ではなく、アラビア語系統のものである處から、この地圖はアラビア人の作つたものがはる〴〵唐に傳えられて佛教の世界觀と融合し、わが國にまで傳來したものであることが知られている（中村拓氏の研究による）。このような場合を逆に考えると或は解剖圖は印度が先鞭をつけたある形式がアラビア醫學にとり入れられて西方に流傳し、他方にはその解剖學的知識は佛教々義に融合して東方に流傳した、と考えることは果して荒唐無稽に過ぎるであろうか。假説としてこのような考えも一應捨て去るには當らないと思う。

西歐におけるアラビア系の解剖圖は、ルネッサンスにさきがけた何人かの革新的醫家によつて打破され始め、一五世紀にはほとんど完全に近いまでに崩壞して、科學的な實證解剖學におきかえられてしまつた。

七、結　語

本稿は清涼寺釋迦像入胎の五藏が、印度解剖學の知識に基いて造顯され、特殊な佛教々義上の信仰により奉籠され

たものであることの傍證として、印度における解剖學的知識はどのようにして成立し、ついでいかなる經路で東西に流傳して影響を與えたかという點についていさゝか調査し得た知見をまとめたものである。

文獻學的方法によつて究明したが、漢譯佛典以外は原典を直接に調査することが不可能であり、且つ密教について全くの門外漢であるため教義上の意義を曲解した點も存するであろう。これらは大方の叱正を俟つて何れ機會をみて訂正增補したいと考えている。本稿によつていさゝかでも清涼寺釋迦像五藏の性格が明かになれば望外の喜びである。

擱筆に當り、重ねて清涼寺綜合研究會の研究員各位に感謝し、文獻の閲覽に多大の便宜を與えられた各寺院・圖書館の當事者の方々に謝意を表する。

なお、本研究は文部省科學研究費の補助によつて行つたものであることを附記し、併せて謝意をさゝげる。（三一・二・二三稿）

追　記

脱稿の後に「リグ吠陀」と「チャラカ本集」の原典を調べる機會を得た。近年印度で新たに註釋した英譯のついている本である。まだ十分讀んでいないが、三種悉地法の根源が「リグ吠陀」第一〇篇第一二一頌にみられるので、創造神話の一端を追記する。

プラジャーパティ（造物主）が世界創造の意欲を起し、最初に創つたものは水であつた。かくして出來た海は萬有を包藏する『黄金の卵』Hiraṇyagarbha を浮べていた。その卵からさらに下位の創造神が出現し萬有を生起せしめた。と說かれている。これが「五藏曼荼羅」になると、深玄の色の大海水輪あり、その上に金色のハラ字が浮び、變じて金龜となつて萬有に化する、ということになつている。

また、Śāṇḍilya のアートマン說などにも、『身體のうちに存する黄金の原人』という表現があり、『黄金の卵』の思想はアーリア民族の非常に古い考えの一つであることが首肯される。「チャラカ本集」の第三卷胎生學の部分にもこの思想は濃厚である。

次に、臍を重視した證も創造神話に見出される。「リグ吠陀」第一〇篇第九〇頌の『原人創造讃歌』によると、千頭・千眼・千足の原人 Puruṣa をいけにえとして神々が祭式を行つた時、身體各部からいろ〳〵なものが生じた。心臟より月 Soma、臍より空界、等々。

また最近觸目した石山流の聖教のうちに世界創造を說いて、始めて眞如の出ずる時、玄水の大海あり、海上に那羅延天（卽ちビシュヌ神）あり臍輪より千葉金色の寶蓮花を生ず、蓮花上に梵天（ブラフマ神）出現し結跏趺坐して思念するに萬物生ず、という意味の記事があつた。今後材料を一層集めた上で改めて考察したい。（三一・八・八追記）

現存する中國近世までの五藏六府圖の概說

（清涼寺釋迦胎內五藏研究　第五報）

渡邊幸三

目次

第一章　中國解剖略史
はしがき
一　兪跗の人體模型
二　靈樞經に記載される解剖
三　王莽の王孫慶解剖
四　華佗の外科手術
五　唐會要に見える「解支之人募闘」
六　歐希範の解剖
七　徐遁の藏府觀察
八　泗州の賊の解剖
九　張濟の藏府觀察
十　錢雷の藏府觀察
〔附記〕程式の藏府觀察
十一　何一陽の敵屍解剖
十二　王清任の藏府觀察
むすび
第二章　現存する中國近世までの五藏六府圖・人體模型の概說
はしがき
第一節　唐の代表的五藏六府圖…胡愔の黃庭內景五藏六府圖

第二節　宋代の人體模型
一　嵯峨清涼寺の釋迦胎內五藏模型（詳細は第三報「清涼寺釋迦胎內五藏の解剖學的研究」を參照）
二　宋の銅人像とその模像
第三節　宋の代表的な五藏六府圖
一　歐希範五藏圖
二　楊介の存眞環中圖
三　朱肱の內外二景圖
四　華佗內照圖
第四節　元の代表的な五藏六府圖…王好古の醫家大法
第五節　明の代表的な五藏六府圖
一　錢雷の臟腑證治圖說人鏡經
二　その他の重要な五藏六府圖
1　王文潔の太上天寶太素張神仙脈訣玄微綱領宗統
2　王圻の三才圖會
3　循經考穴編
4　張介賓の類經圖翼
5　施沛の藏府指掌圖書
第六節　清の代表的な五藏六府圖…王清任の醫林改錯
附錄
1　中國近世までの解剖・藏府圖簡明年表
2　主要藏府圖簡略系譜

第一章　中國解剖略史

はしがき

中國に於ては、第二章に詳說すが如くに、多くの五藏六府の圖が作られている。此等の五藏六府の圖は直接又は間接に、人體の解剖または人屍の觀察と、何等かの關聯を有するものである。さらに又、中國の醫學は、一言に之を要約すれば、中國特有の經絡說の基盤の上に組織されたものであり、その經絡說は、中國特有の五藏六府の生理解剖の智識を根底とするものである。從つて中國醫學の究明は、その生理解剖智識の完全な把握を基礎的な條件とするものである。本章に於いては、中國の文獻に見える人體の解剖、人屍の觀察、またはそれ等に關係のある記載を拾い上げ、之を時代を逐つて整理し、近くは第二章の五藏六府圖に關する記述の參考に供し、遠くは中國の生理解剖史學の根本

資料にしたいと思う。

由來、中國に於いては、舊くは儀禮・禮記・春秋左傳等の古典に見え、新しくは中國近世の民間信仰に見えるが如くに、人屍に對しては、異常なまでに、崇敬と恐怖とを有し、人屍の保全に對しては、愼重な注意と手段とが講ぜられている。

春秋左傳・禮記等の古典の記載を綜合して見ると、

「人は魂(神氣)と魄(肉體)とからなり、魂・魄が調和を保つている時は人は生存し、魂・魄が調和を失う時は人は死亡し、魂は魄から離脱する。魂は永久に滅びず、しばしば舊の魄に歸つて休息する。若し魄が損傷または消滅すると、魂は歸る處を失い、化して鬼となり、疾病その他の災害をなすもの」

と信ぜられ、人屍の保全に注意が拂らわれていたようである。後には儒・佛・道の思想も之に加わり、人屍に對する崇敬と恐怖とは、ますます強化された。かかる事情の下に於いては、人屍を解剖するが如きは、天人ともに許さぬ惡虐行爲とされ、道德上に於ても、社會上に於いても否定され、唐に至つては、法律によつて禁止されている。

唐以前に既に法律によつて人屍解剖が禁止されたか否かに就いては、明文の徵すべきものがない。唐の高宗の永徽四年(六五三)に、長孫無忌等が敕命によつて編纂したと云われる唐律疏議の卷十八「賊盜」の條には、

諸殘害死屍。及棄屍水中者。各減鬪殺罪一等。

とあり、その疏議には、

殘害死屍。謂支解形骸。割絕骨體。及焚燒之類。

と規定されている。人屍を支解すれば、鬪殺罪より一等を減じて處刑すると言う規定である。我國の大寶律にも、この唐律によつて、同文の規定がある。又この唐律の規定は、宋刑統・明律・清律にも踏襲されている。

上記したが如くに、中國に於ては、人屍の解剖はあらゆる面に於いて禁止されていた。しかし、此にも若干の例外があつて、叛逆人・敵屍・暴露した死屍が、醫學の目的によつて、あるいは公然と、あるいは內密に、解剖又は觀察された事例が、僅少ながらも文獻に記載されている。本章は此等の記錄を拾い集めて、時代順に整理したものである。

ここに一寸斷つておきたいのは、例えば史記卷三の殷本紀に、紂が比干の心臟に七竅があるか否かを調べるために、

比干を解剖したとか、宋史卷四百六十三王繼勳傳に、王繼勳が奴婢百餘人を解剖したとか、その他史書に多く散見する敵屍の解剖とかは、いずれも嗜虐・報復・好奇心によるもので、解剖智識に直接の貢獻をもたらしたものではない。故に本章に於いては、此等を一律に省略して、醫學の目的によつて行われた人屍の解剖または觀察に限ることにする。

一　兪跗の人體模型

兪跗は傳說によると、黃帝の時の名醫と言われる人である。史記卷一百五扁鵲倉公列傳に、扁鵲が虢の太子の病を治療した時、虢の中庶子と交した問答の中に、この兪跗の外科手術の說話が記載されている。

中庶子曰。臣聞。上古之時。醫有兪跗。治病不以湯液醴灑鑱石。撟引案杭毒熨。一撥見病之應。因五藏之輸。乃割皮解肌。訣脉結筋。搦髓腦。揲荒爪幕。湔浣腸胃。漱滌五藏。練精易形。

とある。兪跗が治療する時には、湯藥・鍼灸・按摩等の方法によらないで、皮肌を割解し、脈を訣し、筋を結び、髓腦をつかね、腸胃を湔浣し、五藏を漱滌するが如き大外科手術を行つたと言うのである。この記事をそのままにうけ取れば、黃帝の太古の時、現代の大外科手術にも匹敵する生體解剖による治療が行われたことになり、從つてその當時、解剖の智識が非常に進步していたことが推測される。

しかし、この扁鵲と中庶子との問答は、前漢時代に相當普及していた說話と思われ、韓嬰の韓詩外傳、劉向の說苑にも書かれている。今韓詩外傳によると、その卷十に、

中庶子之好方者曰。吾聞。上古醫曰弟父。弟父之爲醫也。以莞爲席。以芻爲狗。北面而祝之。發十言耳。諸扶輿而來者。皆平復如故。…吾聞。中古之爲醫者。曰踰跗。跗之爲醫也。搦木爲腦。芷草爲軀。吹竅定腦。死者復生。

とある。上古の醫師の弟父は、莞で席を作り、その上に芻で作つた狗をおき、之に北面して呪文をとなえると、十言までに病人が治つた。…中古の醫師の踰跗は、木をつかねて腦とし、芷草で人の體軀を作り、竅を吹いて腦を定めると死者が蘇生したと言うのである。又、說苑の卷十八「辨物」にも、その文字は若干異つているが、ほぼ同じことを述べた文がある。

此等の記事から推すと、兪跗は生體解剖にも比すべき大

外科手術を行つたのではなく、草木で人體・髓腦・五藏六府等を作り、呪文をとなえながら、五藏六府を滌滌したものと思われ、全く呪術的治療であることは明白である。

史記扁鵲傳の記載は、韓詩外傳等のそれと、淵源を同じくするものであるが、より多くの潤色が加えられて、あたかもかかる大手術が現實に行われたがように記載されたものと推定される。從つて史記扁鵲傳の記載をそのままに信用して、太古の黃帝の時に兪跗の大外科手術に相應する解剖的智識があつたとすることは許されない。若し然らば、晉書卷五十一の皇甫謐傳に記載されている「釋勸論」の、「岐伯剖腹以蠲腸」の一句もまた呪術的治療と解釋すべきであろう。

史記扁鵲傳によつて、漢以前に草木を用いて五藏六府・髓腦・筋脉を具備する人體模型が作られたことが知られ、又之によつて、その當時に於いて、五藏六府及びその他の人體に關する生理解剖の智識がある程度まで發達していたことが推定される。その五藏六府等の具體的な形態は未詳であるが、恐らく素問・靈樞等の古典醫書に記載される解剖智識の中に相當取入れられて存在し、犧牲・屠殺等によつて知られた動物解剖の要素を多分に含むものであろう。

二　靈樞經に記載される解剖

醫學の目的を以つて行われた人體解剖ないしは觀察に關し、最も舊くて信用し得るものとされている記載は、靈樞經卷三の經水篇に、

若夫八尺之士。皮肉在此。外可度量切循而得之。其死可解剖而視之。其藏之堅脆。府之大小。穀之多少。脉之長短。血之清濁。氣之多少。十二經之多血少氣。與其少血多氣。與其皆多血氣。與皆少血氣。皆有大數。

と記載される一文である。生體には外部から度量切循し、死體には解剖して、五藏六府・十二經脉等の解剖の智識を得ることができると言うのである。この文中の「解剖」は、現代用いられている「解剖」の語源と見られる。

この靈樞の記文が書かれた時代は詳らかではないが、これと全く同じ文が、黃帝內經太素卷三の十二水篇に見えている。この黃帝內經太素は、漢書藝文志に著錄されている「黃帝內經十八卷」の舊文を相當多量に存しているものと思われるからして、この記事は遲くとも前漢時代に書かれ

たものと言われている。

上記したが如くに、中國古代に於いても、人屍の解剖は信仰上、道德上許されないものである。しかるに靈樞に「其死可解剖而視之。」とて、解剖を是認しているのは、如何なる理由によるか。多紀元簡はその醫賸卷上の「解剖藏府」の條に、

蓋太古時。風俗淳朴。死則棄之於野。初無衣衾棺槨之葬。故使爲醫術者。可得剖而視之。亦無所禁。

と言い、太古の時は風俗は淳朴で、埋葬等のこともなく、死屍を野に棄てたからして、醫師は自由に解剖することが許されていたと考えている。

今、春秋左傳等の記載によつて、周代の治療法を調査すると、祭祀呪術による巫醫的療法が主であつて、湯藥鍼灸等による治療は從屬的なものであり、病因は多く鬼邪に歸せられていた。從つてその當時の醫學は、醫學の目的によつて死屍を解剖する域にまでは達していなかつた。多紀氏の言の如くに、死屍を野に捨てるが如き原始時代に、醫學の目的によつて人屍が解剖されるが如きは、到底考えられない。多紀氏の言は、甚しく崇古に泥したが爲に誤つたものと言うべきであろう。

醫學の目的によつて人屍が解剖される以上、醫學が相當に高い水準にまで到達した時でなければならない。中國醫史學上に於いて、その時を求むると、少くとも秦漢より以後でなければならぬ。しかるに上記したが如くに、秦漢のころは、既に信仰上道德上、人屍の解剖は許されていない。今、素問・靈樞に記載される生理解剖の智識を分析して見ると、既に山脇東洋がその「藏志」に指摘しておるが如く、動物解剖の要素が相當に多く含まれている。この事實からして、素問・靈樞の生理解剖の記載は、自由に人屍を解剖又は觀察した結果によつて書かれたものではなく、極く限定された人屍の解剖又は觀察した結果によつて書かれたものであると推定される。次に詳述するが如くに、王莽は醫學の目的によつて叛逆人王孫慶を解剖している。この事を併せ考えると、靈樞經の「其死可解剖而視之。」の死屍は、刑死人又は敵屍を意味するものではなかろうか。更に想像を逞しくすれば、靈樞經のこの一文が王莽の王孫慶解剖の以後に書かれたものであつて、王莽の解剖故事を意識して、「其死可解剖而視之」と希望的に書かれた文で、現實のこ

とではないとも疑われる。更に後日の研究を必要とする。

三　王莽の王孫慶解剖

漢書卷九十九王莽傳の天鳳三年(一六)の條に

翟義黨王孫慶捕得。莽使太醫尚方與巧屠。共刳剝之。量度五藏。以竹筳導其脉。知所終始。云可以治病。

と記載されている。此は中國の數多き正史の中に見える唯一の醫學の目的による解剖記事であつて、中國解剖史學上注目されるものである。王莽が天鳳三年(一六)に、その政敵翟義の殘黨王孫慶を捕得し、太醫・尚方の立會の下に巧屠に解剖させ、五藏六府を量度し、竹筳(へら)で經脉をたどり、その系屬を調査し、治病の參考に資したと言うのである。

この王莽の行つた解剖は、後に詳述する歐希範等の解剖と相通ずるものがあり、恐らく後世の所謂「凌遲」に該當するものと思われ、生體解剖が行われたものと推定される。

この解剖に關係した「太醫」・「尚方」に就いては、後漢書卷二十六の百官志に、

大醫令一人。六百石。本注曰。掌諸醫。劉昭注云。漢官曰。員醫二百九十三人。員吏十九人。

尚方令一人。六百石。本注曰。掌上手工作御刀劍諸好器物。劉昭注云。漢官曰。員吏十三人。吏從官六人。

と規定されている。太醫は宮中の醫官、尚方は天子の刀劍・諸器物を工作するものである。故三上義夫先生は、日本醫史學雜誌の第一三一號に、「王莽時代の人體解剖とその當時の事情」と題する論文を發表されて、尚方の職掌を根據として、詳細に考證され、

「尚方が人體解剖に參與したのは、解剖の結果を模型に鑄造するため」

と結論されている。恐らく三上先生の言の如くに、青銅で五藏六府を具有し、十二經脉を明示する人體模型が作成されたのであろう。

又「巧屠」に就いては、職官志等にその名を見出し得ないが、その文字からして、「動物を巧みに屠殺解剖するもの」と解せられ、「巧屠」を上記の意味に用いた文例はしばしば見出される。王孫慶を實際に解剖したのは、この巧屠であろう。

然らば王莽は如何なる意圖の下に、王孫慶を解剖に附し

たか。

史記卷一百五扁鵲倉公列傳の倉公の治驗の記事、素問・靈樞等の古典醫書の記載からして、前漢の醫學は主として五藏六府を中心として、それに終始する經脉に關する生理解剖の智識の上に組織・體系づけられたものである。漢書藝文志方伎家の「醫經類」の解說に、

醫經者。原人血脉經絡骨髓陰陽表裏。以起百病之本。死生之分。而用度箴石湯火所施。調百藥齊和之所宜。

とある記文は、この事を如實に物語るものであろう。王莽の政事理念は、その國號の「新」が示すが如く、前漢を一新するに在つた。醫學に於いても、前漢の生理解剖の智識に疑問をもち、人體解剖によつて實證的な、より高度の醫學に一新することを目的として、王孫慶を生體解剖に附したものと思われる。故に五藏を量度し、竹筵でその脉をたどつて、その終始する狀態が調査されたのである。勿論、王孫慶の解剖には、ただ醫學の目的だけではなく、叛逆人に對する報復や衆人への見せしめが、その重なものであることは否定し得ない。

この王孫慶の解剖の結果が如何なるものであつたかに就いては明らかではない。しかし素問・靈樞等の古典醫書に記載されている生理解剖の智識の中には、この王孫慶の解剖によつて得られた智識が、相當多量に含まれているであろうことが推測される。

四　華佗の外科手術

華佗は字を元化と言い、安徽譙縣の人。後漢の末から三國時代にかけて活躍した名醫である。後漢書列傳卷七十二方術の華佗傳に、

若疾發結於內。針藥所不能及者。乃令先以酒服麻沸散。既醉無所覺。因刳破腹背。抽割積聚。若在腸胃。則斷截湔洗。除去疾穢。既而縫合。傅以神膏。四五日創愈。一月之間。皆平復。

とあり、また三國志魏書卷二十九の華佗傳にも、ほぼ同じような文がある。疾が奥深くに生じ、鍼灸が用をなし得ない時には、麻沸散なる麻醉藥を酒服させてから、腹または背を刳破して患部を摘除し、腸胃に生じた時は、腸胃を切りまたは洗つて患部を除去する。それを縫合し、神膏を塗つて治愈させたと言うのである。此の華佗傳に言うが如き

外科手術が果して實際に行われたとすれば、華佗はそれに相當するだけの解剖智識を有していたことが推定される。

由來、中國の醫學は、針灸・湯液・按摩を主として、外科手術を用いることは、非常に少い。しかも華佗以前には、外科手術を行つた事例は、文獻には見出し得ない。之に對し、印度の醫學には、外科手術が多く用いられていたことは、ススルタ、チヤラカ等の古典醫書に徵して明らかである。中國醫學では從來ほとんど用いられていない外科手術が、華佗に至つて急に行われていることは、印度醫學の影響を考えざるを得ない。特にここに注意すべきは、麻沸散なる痲醉藥の使用である。麻沸散は如何なるものであるかは明白ではないが、その主藥としては、曼陀羅華（テウセンアサガホ）、莨菪（シナヒヨス）等が考えられるが、かかる痲醉藥の使用は、恐らく印度醫學の影響によつたものと思われる。かかる外科手術が印度から中國に傳つている以上、それに相應する印度の解剖智識も中國に導入されていたことが推定される。

今に傳わる書に「華佗內照圖」があるが、その五藏六府圖は、第二章第三節に詳述するが如く、北宋末の楊介の存眞圖によつたもので、決して華佗の作ではないことを附記しておく。

五　唐會要に見える「解支之人募闇」

唐會要なる書は、北宋の王溥が唐代の奏・疏・表等を纂修し、太祖の建隆二年（九六一）に奏上した書で、一百卷からなる政書である。故三上義夫先生は、日本醫史學雜誌の第一三一一號に「王莽時代の人體解剖とその當時の事情」なる論文を發表されて、

「一つ注意しておきたいのは、唐會要卷九十九に、

開元七年。（七一九）其葉護支汗耶帝賒上表。獻解支之人募闇。請加試驗。

と云ふ記事を見ることである。募闇は解剖をする能力のある人と云ふのであらうし、實地にやつて見ることを請ふたと云うが、實行したかどうかは書いていない」

と言つておられる。若し三上先生の言をそのままに信ずれば、唐代には政府公認の人體解剖專門家が置かれていたことが推定され、解剖史學上のみならず、法制史學上に於いても由々しい大問題となる。次に三上先生の說を檢討して

見よう。

今の唐會要の傳本は、いずれも三上先生が引用されているが如くに、「獻解支之人募闇」に作つている。しかしこの「解支」なる語が果して「解剖」の謂に解し得られるかは問題である。案ずるに、前に引用した唐律疏議卷十八の「賊盜」の條には、「殘害死屍。謂支解形骸。割絶骨體。」とあり、解剖に「支解」なる語を用い、「解支」とは言つていない。宋刑統・明律・清律も皆「解支」なる語を用いており、解剖を「支解」と言つた用例を見出すことはできない。此の點からして、三上先生の言の如くに。「支解」を解剖と譯すのは、いささか無理ではないかと思われる。

さらに又、今の唐會要の傳本、例えば廣雅書局刊本等の「獻解支之人募闇」の句に、誤脱等があるか否かを考えねばならぬ。京都大學人文科學研究所經學文學研究室が撮影された東京靜嘉堂文庫架藏の宋版冊府元龜の寫眞を、平岡武夫助教授の厚意によつて見せていただいた。その卷九百九十七外使部に、

吐火羅支汗那王帝賒。開元七年上表。獻解天文人大募闇。其人智惠幽深。問無不知。

とあり、唐會要の「解支之人」を「解天文人」に作つている。又、清內府刊本の欽定全唐文の卷九百九十九も、やはり「解天文人」に作つている。此等によつて、唐會要の「解支之人」は、文獻學的にも「解天文人」の誤であることが證明される。

以上を要するに、唐會要の「解支之人」を、三上先生の如くに「解剖をする能力のある人」と解することは、訓詁學上、文獻學上許されない所で、「天文を解する人」の誤であることは明白である。

六　歐希範の解剖

我國の室町末期の僧幻雲の史記標注（史記抄）に引用されている宋の政和三年（一一一三）に作られた楊介の存眞圖には（醫籍考卷十六吳氏簡歐希範五藏圖の條に見ゆ）

楊介曰。宜賊歐希範被刑時。州吏吳簡。令畫工就圖之以記。詳得其狀。吳簡云。凡二日剖歐希範等五十有六腹。皆詳視之。

とあり、又宋の趙與時の賓退錄卷四にも、

慶曆間。廣西戮歐希範及其黨。凡二日剖五十有六腹。宜

州推官吳簡。(擇是居景宋本による。俗本は靈簡に誤る)皆詳視之。爲圖以傳于世。

とある。之によつて、北宋の慶曆年間(一〇四一～一〇四八)に、廣西で歐希範等の叛逆人五十六人の腹を剖き、宜州の推官(裁判官)吳簡が、畫工等をつかわし、詳細に觀察して、藏府圖を描かしたことが知られる。

この歐希範等が刑戮される經緯は、宋の李攸の宋朝事實卷十六の「平廣西西蠻族歐希範」の條に、最も詳細に書かれている。非常な長文であるから、次にその要領だけを摘譯する。

歐希範は廣西環州思恩縣の人で、進士にも合格した人である。景祐五年(一〇三八)に、官軍に從つて叛蠻を討ち功績があり、その功によつて、政府の役人に採用されんことを要求した。政府は妄りに賞を求めるものとして之を拒否した。歐希範は之を遺恨に思い、叔父の歐正辭、白崖山の酋長の蒙趕等と共に、慶曆四年(一〇四四)に叛亂を起し、環州・鎭寧州等を攻略した。慶曆五年(一〇四五)に、轉運使の杜杞が之を討つた。杜杞は講和をすると僞つて、歐希範等を招待し、酒で醉いつぶして歐希範及びその一味を捕え、希範等數十人の腹を剖き、その五藏圖を描き、その肉を醢にして、人に食べさせた。

と言うのである。之によつて歐希範等が刑戮されたのは、慶曆五年(一〇四五)であることが知られる。

又、宋の鄭景璧の蒙齋筆談にも

世傳歐希範五藏圖。此慶曆間。杜杞待制治廣南賊歐希範所作也。希範本書生。桀黠有知數。通曉文法。嘗爲推官。乘元昊叛。西方有兵時。度王師必不能及。乃與蒙幹。嘯聚數千人。聲搖廣南。朝廷遣楊畋。討之不得。乃以杞代。杞入境。卽僞爲招降之說。與之通好。希範猖獗久。亦幸苟免。遂從之。與幹挾其酋領數十人皆至。杞大爲燕犒。醉之以酒。已乃執於坐上。翌日盡磔於市。且使皆剖腹。刳其腎腸。因使醫與畫人。一一探索。繪以爲圖。

と言つている。多紀元胤の醫籍考はこの文を引用して、「劇談錄」としているのは誤である。此の記事と上記の宋朝事實とを相補して讀むと、歐希範刑戮の經緯を知ることができる。又この記文からして、宜州の推官の吳簡は、杜杞の命令を承けて歐希範等を醫學の目的によつて解剖したこと、又解剖には醫師を立會わせたことが知られる。

ここに附言すべきは、「凌遲」なる刑である。凌遲なる刑が、何時代に始まつたかに就いては諸説があるが、宋朝に盛んに行われたことは事實で、明律に至つて、はじめて法制化されたものである。

宋史卷一百九十七刑法志に、

入內供奉官楊守珍。使陝西。督捕盜賊。因請擒獲強盜至死者。望以付臣凌遲。用戒凶惡。詔。捕盜送所屬。依法論決。毋用凌遲。凌遲者。先斷其支體。乃抉其吭。當時之極法也。

と記載している。此の記事は、北宋の眞宗（九九八～一〇二二）の時の事であるが、楊守珍が陝西に行き、盜賊を捕えることを監督した時に、死刑以上の盜賊を現場にて凌遲の刑に處すことを請うた。眞宗が詔して、之に反對されたのであるが、この文中に凌遲を評して、「當時之極法也」とあるからして、凌遲は既に眞宗の時に行われていたことは明らかである。歐希範は大叛逆人であり、かつ眞宗より以後の慶曆五年（一〇四五）に刑戮されたのであるから、歐希範等には、所謂凌遲の刑が適用されたことが推定される。

上記の宋史の文は、凌遲をば、「先ずその支體を斷じてから喉をえぐる」と規定している。しかし、同じく宋史刑法志には、

王隨請臠咼之。帝曰。五刑自有常制。何爲慘毒也。

とあり、凌遲の刑に「臠咼」なる語を用いている。「臠」は肉をきざみ、「咼」はえぐり取るの謂である。清朝に於ける凌遲の刑は、支體を切斷して喉をえぐり、之を解剖して五藏六府を取り出した。俗語では「剮刑」と呼ばれている。宋代に於いても、五藏六府を取り出したものと推定される。歐希範の場合も、その死屍は解剖され、肉は宋朝事實によると、醢（肉醬）にされているからして、宋史の所謂「臠咼」に該當するものである。歐希範の刑戮こそ、宋代の凌遲の一實例と見るべきものであろう。

歐希範の場合は、その凌遲の刑を利用して、醫學目的による藏府圖が作成されているが、すべての凌遲に、藏府圖が作成されれ譯ではない。しかしこの凌遲の刑が、中國の生理解剖の智識に相當大きな影響を與えたことは、否定し得ない。第二章に詳述するが如くに、歐希範五藏圖・楊介の存眞圖・王清任の藏府圖等は、いずれもこの凌遲に、直接的な關係をもつものであり、その他の藏府圖といえども、

間接的な若干の關係をもつものであろう。

然らば、王莽の時以來、絶えて久しく行われなかつた刑屍解剖の醫學えの利用が、この歐希範の解剖の時に至つて、再び行われたのは、如何なる理由によるか。

由來、中國の傳統的思考形式は、古典中心の立場に於いて、類推主義・觀念主義の傾向の下に展開されたものである。しかるに北宋—特に北宋末—に至つて、實證主義・經驗主義的な氣運が、その中に萠生えた。周濂溪・程伊川・程明道・朱子等によつて提唱された所謂「性理の學」は、その一斑を示すものである。醫學に於いても、古典中心主義的な隋唐醫學を主流としながらも、その中に例えば太平聖濟總錄・和劑局方等の如き、臨床經驗主義的な醫書も次第に作られるようになつた。生理解剖の方面に於いても同樣であつて、例えば次に詳述するが如く、蘇轍はその龍川略志に於いて、古典の三焦に關する記載を疑い、之を親見することによつて實證することを望んでいるが如くに、經驗的・實證的な氣運が強く萠生えていた。歐希範刑戮の醫學への利用は、かかる氣運の下に行われたものと推定され、中國解剖史學上・醫史學上注意さるべきことである。後に述べる崇寧年間(一一〇二～一一〇六)に行われた泗州の賊の刑戮を利用して、藏府圖が作られたのも亦この氣運の下に行われたのである。

中國の傳統的解剖學は、想像的觀念的な要素を多分に含み、動物解剖による智識も相當に混在するものである。歐希範等の解剖を利用して作られた歐希範五藏圖に就いては、第二章第三節で詳述するが、この歐希範等の解剖の結果、中國傳統醫學の中に、人體解剖による現實的實證的な新しい解剖智識の要素を導入するものも生じ、中國解剖史學上に一時代を劃した解剖として注意されるべきである。

七　徐遁の藏府觀察

北宋の有名の文人蘇轍(寶元二年～政和二年。一〇三九～一一一二)が著述した蘇黃門龍川略志卷二の「醫術論三焦」の條に、

彭山有隱者。通古醫術。與世諸醫所用法不同。人莫之知。單驤從之學。盡得其術。遂以醫名於世。治平中。予與驤遇廣都。論古今術同異。驤既言其略。復歎曰。古人論五臟六腑。其說有謬者。而相承不察。今欲以告人。人誰

信者。古說左腎。其腑膀胱。右腎命門。其腑三焦。丈夫以藏精。女子以繫包。以理言之。三焦當如膀胱。有形質可見。而王叔和言。三焦有臟無形。不亦大謬乎。蓋三焦有形如膀胱。故可以藏有所繫。若其無形。尙何以藏繫哉。且其所以三焦者何也。三焦分布人體中。有上中下之異。方人心湛寂。慾念不起。則精氣散在三焦。榮華百骸。及其慾念一起。心火熾然。翕撮三焦精氣。入命門之腑。輸寫而去。故號此腑。爲三焦耳。世承叔和之謬而不悟。可爲長太息也。

と述べている。此の龍川略志の大意は、單驤は彭山の隱者から醫を學んで、世に名のある人である。治平年間(一〇六四～一〇六七)に、蘇轍と廣都で會つた時、單驤は古今の醫術の相異を論じてから、

「古人の五臟六腑の論には誤があるものもある。王叔和は三焦は臟はあるが形はないとしているが、それは誤である。左腎の腑は膀胱であり、右腎卽ち命門の腑は三焦である。膀胱に形質がある以上、當然三焦にも形質があるべきである。三焦に形質がなければ、男子は精を藏し、女子は胞を繫けることはできない」

と言つて、三焦は形質のあるものであるとの說を主張したと言うのである。

單驤は古典醫書の「三焦は名ありて形なし」とする說を否定し、「三焦は形質があるもの」との說を主張するとともに、「精を藏し胞を繫ける處は、命門ではなくして、三焦である」と主張して、古典醫書と見解を異にしている。ここにも、宋代の古典懷疑の一斑が見られる。龍川略志は、この文に引き續いて、

予甚異其說。後爲齊州從事。有一擧子徐遁者。石守道之壻也。少嘗學醫於衛州。聞高敏之遺說。療病有精思。予爲道驤之言。遁喜曰。齊嘗大飢。羣匄相臠割而食。有一人皮肉盡而骨脈全者。遁以學醫。故往觀其五臟。見右腎下。有脂膜如手大者。正與膀胱相對。有二白脈。自其中出。夾脊而上。貫腦。此卽導引家所謂夾脊靈關者。而不悟脂膜如手大者之爲三焦也。單君之言。與所見懸合。可以正古人之謬矣。

と述べている。この文中の「後爲齊州從事」は、蘇轍が元豊年間(一〇七八～一〇八五)に齊州掌書記になつたことを指するものであり、「石守道」は、慶曆年間(一〇四一～一〇四八)

ごろに活躍し、狙徠集の作で有名な文人の石介であり、又「高敏之」は宋の名醫の高若訥である。この龍川略志の大意は、元豊年間に蘇轍が齊州に居住した時に、徐遁に遇つた。徐遁は石介の女壻で、幼少のころに衛州に學び、名醫高若訥の遺説を聞き、治療に熱心な人である。蘇轍が上記した單驤の言葉を話した所、徐遁は

「齊が饑饉で群衆が相食んだ時に、皮肉がなくなり藏府が露出した死屍を觀察した。右腎の下に、手掌大の脂膜が、膀胱と相對する位置に在つた。この脂膜から二つの白脈が出て、脊を夾んで上り、腦を貫通するものがあつた。この白脈は、導引家が夾脊霎關と呼ぶものであることは判つたが、この脂膜が三焦であることには氣が付かなかつた」

と語つたと言うのである。

蘇轍のこの文は、徐遁の死屍觀察の所見によつて、單驤の説を證明し、中國古典醫書の、「三焦は名ありて形なし」の記載を否定し、「三焦に形質あり」を主張したものである。しかし、徐遁が觀察したと言う「右腎の下の手掌大の脂膜」は、現代解剖學の何に該當するかに就いて、專門家の教を受けた所、「之に該當するものはない」とのことであつた。徐遁の觀察した死屍は、臠割して食い荒らされたものであるから、他の藏府か何か別のものが、偶然に右腎の下に在つたものと推定される。

何はともかく、徐遁の死屍觀察及び蘇轍の態度は、北宋末の古典懷疑・實證尊重の一端を示すものと思われる。又この北宋末の學風から推して、死屍を觀察したものは、徐遁一人だけでなく、外にも相當多くの人があるであろうことが推測される。

この「三焦に形質あり」の説は、有名な蘇轍が提唱しただけに、その影響力も強く、例えば宋の陳無擇の三因極一病症方等の如くに、この説に對する贊否の兩論は、後世しばしば論ぜられている。

八　泗州の賊の解剖

我國の室町末期の僧幻雲の史記標注所引の楊介の存眞圖には、

楊介曰。…宜賊歐希範被刑時。州吏吳簡。令畫工就圖之以記。詳得其狀。或以書考之。則未完。崇寧中。泗州刑

賊於市。郡守李夷行。遣醫幷畫工往觀。決膜摘膏。曲折圖之。得盡纖悉。

とあり、又宋の趙希弁の郡齋讀書後志卷二の「存眞環中圖一卷」の解說にも、上記の存眞圖とほぼ同樣な文が記載されている。

以上を綜合すると、歐希範等が解剖されて作られた歐希範五藏圖がなお不完全なために之を補正すべく、北宋の徽宗の崇寧年間（一一〇二～一一〇六）に、安徽省泗州で賊が凌遲の刑に處せられたのを利用し、郡守の李夷行が、醫師・畫工をつかわし、五藏六府を詳細に調査し、その藏府圖を描かせたのである。第二章第三節「一　楊介の存眞環中圖」の條に詳說するが如くに、この時描かれた藏府圖は、後に楊介が校定して存眞圖と名付け、政和三年（一一一三）に、他書と合して「存眞環中圖」と名付ける一書とした。この存眞圖は、中國解剖學のみならず、我國の解剖學にも、大きな影響を與えた書である。

九　張濟の藏府觀察

宋の邵博の聞見後錄卷二十九に、

無爲軍醫張濟。善用針。得訣于異人。云能解人而視其經絡。則無不精。因歲饑疫。人相食。凡視一百七十人。以行針。無不立驗。

と書かれている。この張濟の傳記は明らかでなく、又張濟が何時ごろ藏府を觀察したかも未詳である。しかし、邵博の聞見後錄は、南宋の紹興二年（一一三二）のころになつたものであるから、張濟の藏府觀察は、北宋末のころのことと推察される。

上に引用した文の大意は、北宋末のころ無爲軍（安徽安慶道無爲縣一帶の地）の醫師張濟は、自ら人を解剖して經絡を調査したから、針に就いては精通していた。又饑饉・流行病で死んだ屍を、凡一百七十體も觀察したと言うのである。

ただ張濟の藏府觀察に就いては、上記のことのみが知り得るだけで、具體的な所見等は、何も傳わつていない。

十　錢雷の藏府觀察

上に述べたが如くに、北宋末のころには、醫學を目的として、人體の解剖・觀察が行われ、第二章で詳述するが如き諸種の藏府圖も作られた。この北宋に萠生えた實證主義

的醫學の傾向は、南宋に入ると共に衰退し、所謂南宋醫學と金元醫學とに分派した。南宋醫學は、簡便・實用を主とする醫學で、基礎醫學に屬する五藏六府の研究とは程遠いものである。又、金元醫學は、中國古典醫書の記載を中心とし、陰陽五行説等を原理とし、之を展開する類推的・理論的な古典中心主義の醫學である。從つて人體を解剖するが如き、實證主義的な行爲は、むしろ排斥されていた。金元明の三代を通じて、この金元醫學が指導的立場をしめていた。かかる狀態に於いては、醫學目的による人體の解剖・觀察が行われないのは、當然のことである。

しかるに明末に至ると、實用主義的醫學と實證主義的醫學との二つの傾向が、小規模ながらも起つた。しかしこの二つの傾向は、獨立した存在ではなく、常に金元醫學の中に內在するものに過ぎない。龔廷賢の萬病回春の中に、實用主義的な傾向が內在し、王肯堂の證治準繩の中に、實證主義的な傾向が內在し、李時珍の本草綱目の中に、この二つの傾向が內在するが如きである。

かかる實證主義的醫學の傾向の萠芽の下に、明末に於いては、甚だ小規模ながらも、人體の解剖・觀察が行われた。文獻に見えるものには、錢雷の藏府觀察と、何一陽の解剖とがある。

明代に於いて、最も先に醫學の目的をもつて、人體の藏府を觀察したのは、錢雷であると思われる。錢雷は自己の纂修した「臟腑證治圖說人鏡經」（第二章で詳說する。又以後は「人鏡經」と略稱する）の附錄上（附錄は錢雷の著）の「膀胱圖正訛」の條に、

余前於嘉靖三十六年。適總憲梅林胡公。戮倭於東教場。命劊子手。取心治之。與衆將同食。時中軍戴翔海。居停余家。因得從劊子手。逐一檢視。以證疇昔之惑。果膀胱無上口。又無胞居中。但有一管直達前陰而出溺。其精管循腰脊。遶大腸之右。而合出於前陰。但精管在溺管之下爾。乃予所目擊者。故敢決群疑而證經旨。夫豈好辨哉。

と述べている。この一節は、元の王履が、「膀胱の內には胞があり、又膀胱には上口はあるが下口はない」と主張した說を反駁するために、自己の藏府觀察を述べたものである。

嘉靖三十六年（一五五七）に、浙江四明の東教場に於いて、總憲の胡梅林が倭寇を解剖し、劊子手（解剖人）に命じて心

臓を料理させて、諸將とともに食した。その時、中軍の戴翔海が錢雷の家に宿泊していた關係から、その解剖を逐一見ることができた。その結果、膀胱には上口のないこと、膀胱内には胞がないこと、及び膀胱には溺管の一管のみがあること、精管は腰脊にしたがい、大腸の右を遶つてから前陰に出ること、精管は溺管の下に在ることを確認したと言うのである。

由來、人鏡經なる書は、錢雷の序によると、その師の王宗泉の舊藏本を錢雷が校訂したもので、その書の傳來・著者等は不明とされている。この書を校訂した時、錢雷はその序に、

如心圖中。多一咽系。肺圖中。食多一食管。膀胱圖中。多一胞於其内。此皆踵前人之譌。亦由未之經識故爾。

と言い、人鏡經の原圖には、心圖に咽・肺・腎・肝・脾の五系が描かれていたのを、錢雷が咽系を除き、肺圖に肺管・食管が描かれていたのを、錢雷が食管を除き、膀胱圖に胞内にさらに一胞が描かれていたのを、錢雷が内の一胞を除いたと言うのである。

上記したが如くに、膀胱圖は自己の藏府觀察によつて描かれたものである。此から類推すると、心圖も肺圖もこの藏府觀察によつて訂正されたものと思われる。人鏡經に記載される藏府圖は、第二章で詳述するが、上記した藏府以外に於いても、この嘉靖三十五年の藏府觀察の結果が、いくらかは加味されているであろう。

〔附　記〕

ここに附記しておくべきことは、程式の藏府觀察である。多紀元簡の醫賸卷上の「解剖藏府」の條に、

明程式亦嘗解倭人。檢視藏府。詳見醫穀中。

と述べ、又謝觀の中國醫學源流論にも、程式が倭寇を剖いて藏府を觀察したことを述べている。

今、程式の醫穀に就いて見ると、その集古卷一に、錢雷の人鏡經の藏府圖と全く同じ圖を載せ、その卷二に「膀胱圖正訛」の題名の下に、全く錢雷の「膀胱圖正訛」と同一の文が掲載されている。案ずるに、人鏡經は萬曆三十四年(一六〇六)に成り、醫穀は萬曆四十六年(一六一八)に成つた書であるからして、程式の解剖圖及び解剖記事は、錢雷のそれを、「集古」に轉載したものであつて、程式自身が解剖・觀察したものでないことは明白である。ここに附記して

おく。

十一　何一陽の敵屍解剖

明の孫一奎の赤水玄珠醫案醫旨緒餘卷十一の「難經正義三焦評」の條に、

何一陽又曰。余先年精力時。以醫從師征南。歷剖賊腹。考驗臟腑。心大長于豕心。而頂平不尖。大小腸與豕無異。惟小腸上。多紅花紋。膀胱眞是脬之室。餘皆如難經所云。亦無所謂脂膜如手掌大者。

と述べている。此の一文は、上記した蘇轍の龍川略志の「三焦は形質があり、手掌大の脂膜」とする說を否定するために、孫一奎が何一陽の解剖所見を證據として擧げたものである。

上記の文の大意は、何一陽が青年の時に、軍醫として南征に從軍し、多くの敵屍を剖いて臟腑を考驗した。その結果は、人の心臟は豚の心臟よりも長大であるが、頂上は平らかで尖つていない。大小腸は豚のそれと異る所はないが、人の小腸には、その表面に紅花紋が多い。膀胱は全く脬（小便）の室である。その他の諸臟腑は皆難經に記載されている通りである。徐遁の所謂「手掌大の脂膜」なる三焦は全く存しないと言うのである。

何一陽の傳記は未詳であり、この敵屍を歷剖した時も明らかでない。孫一奎の赤水玄珠醫案醫旨緒餘は、萬曆十八年（一五九〇）に成つた書であるからして、何一陽が敵屍を歷剖した時は、嘉靖・萬曆の間に在ると推定される。

十二　王清任の藏府觀察

清朝の醫學は誠に微々として振わず、元明の糟粕をなむるに過ぎなかつた。明末に小規模ながらも行われていた醫學の目的による人體の解剖・觀察も、その後全く蹟を絕ち、ここに述べる王清任の藏府觀察までは、之を行うものがなかつた。清代醫學が振わない原因の究明は、中國醫史學の研究を志すものに取つては、重大な課題であるが、後日の研究に俟ちたいと思う。

王清任（乾隆三十三年生――一七六八）は、字は勳臣、直隸玉田縣の人。王清任は一切の診斷・治病は正確なる藏府の智識を有してはじめて可能である。しかるに、古典記載の生理解剖の記事には誤謬が多く、又世に傳わる藏府圖には、

信據するに足るものがない。自らの親視實驗にもとずいて正確な藏府の智識を得て、それによつて藏府圖を作ることを志し、四十年にわたつて、人屍の觀察を行つた。その觀察の經緯は、王清任の著書醫林改錯卷上の「醫林改錯臟腑記敍」に詳細に書かれている。その第一回の藏府觀察は、

至嘉慶二年丁巳。余年三十。四月初旬。遊于灤州之稻花鎭。其時彼處小兒。正染瘟疹痢症。十死八九。無力之家。多半用代蓆裹埋。代蓆者。代棺之蓆也。彼地鄉風。更不深埋。意在犬食。利于下胎不死。故各義塚中。破腹露臟之兒。日有百餘。余每日壓馬過其地。初未嘗不掩鼻。後因念及古人所以錯論臟腑。皆由未嘗親見。遂不避汚穢。每日清晨。赴其義塚。就羣兒之露臟者。細視之。犬食之餘。大約有腸胃者多。有心肝者少。亙相參看。十人之內。看全不過三人。連視十日。大約看全。不下三十餘人。始知醫書中所繪臟腑圖。與人之臟腑。全不相合。卽件數多寡。亦不相符。惟胷中膈膜一片。其薄如紙。最關緊要。及余看時。皆以破壞。未能驗明在心下心上。是斜是正。最爲遺憾。

と記載されている。

嘉慶二年（一七九七）四月の初旬、王清任が年三十で、直隸省永平府灤州の稻花鎭に行つた。その時、稻花鎭では瘟疹痢症（熱性傳染病）が小兒の間に流行し、十に八・九までが死亡した。貧乏の家は、死屍を棺に入れずに、蓆（むしろ）に包んで埋葬し、又、死屍を犬に食わすと、墮胎しても死なないと言う迷信のために、深く埋葬しなかつた。このために、各義塚（共同墓地）には、腹が破れて臟腑を露出した死屍が、日に百餘もあつた。毎日鼻を掩い、馬を馳けさせて通りぬけていたが、古人の臟腑の論說が誤つているのは、臟腑を親見しないためであることに氣付き、毎朝義塚に赴いて些細に觀察した。犬が食い荒した結果、腸胃が有るものは多かつたが、心肝の有るものは少なかつた。それでも相補足して、十のうち三弱の割合で、完全なものを見ることができた。十日間連續した結果、三十餘屍の完全なものを見ることができた。この觀察の結果、醫書中に記載されている臟腑圖は、人間の臟腑とは合致しないものであり、その數の多少すらも符合しないものであることを知つた。又、最も觀察を必要とする胷中の膈膜は、紙のように薄いために、皆破壞されてしまい、心臟の上に在るか、又は下

に在るか、直なものか、または斜のものかすらも知り得なかつたのは、最も遺憾であると言うのである。

以上は王清任の第一回の藏府觀察であるが、第二章で述べるが如くに、王清任の想定した藏府圖では、膈膜より上を血府とし、血液が貯藏される所としている。從つて王清任の立場からすれば、膈膜は非常に重要なものであるからして、王清任は上記の文に「膈膜一事。最關緊要」と言つたのである。第二回以後の藏府觀察の重點は、專ら膈膜に置かれている。第二回の藏府觀察は、

至嘉慶四年六月。余在奉天府。有遼陽州一婦女。年二十六歳。因瘋疾打死其夫與翁。解省擬剮。跟至西關。忽然醒悟。以彼非男子。不忽近前。片刻。行刑者。提其心與肝肺。從面前過。細看與前次所看相同。

と記載されている。この文中の「剮」とは、凌遲の俗語である。

嘉慶四年(一七九九)六月に、遼陽州の一婦女が、瘋疾(精神病)で、その夫と夫の父とを殺した罪によつて、奉天府で凌遲の刑に處せられた時、西關の刑場までついて行つたが、婦人なるが故に、その處刑は公開されなかつた。しばらく間待つと、行刑人が心・肝・肺をもつて前を通りすぎた。その心・肝・肺は、第一回の觀察の所見と同じであつたと言うのである。

この記文によつて、婦人の凌遲は非公開であり、心・肝・肺等の五藏が摘出されて、民衆に見せられたことが知られる。第三回の藏府觀察は、

後余在京師時。嘉慶庚辰年。有打死其母之剮犯。行刑于崇文門外吊橋之南。卻得近前。及至其處。雖見臟腑。膈膜已破。仍未得見。

と記載されている。

嘉慶庚辰(二十五年—一八二〇)に、母を殺した凌遲犯が、北京崇文門外吊橋の南で處刑された時は公開されていたが、王清任が現場に行つた時には、臟腑を見ることができたが、膈膜は既に破れてしまつていて、觀察することができなかつたと言うのである。第四回の藏府觀察は、

道光八年五月十四日。剮逆犯張格爾。及至其處。不能近前。自思一簣未成。不能終止。

と記載されている。

道光八年(一八二八)に叛逆犯の張格爾が凌遲に處せられ

た時、王清任は現場に行つたが、近づけなかつた。膈膜を明らかにし得るまではやめないと決心したと言うのである。

第五回目は、自ら藏府を觀察したのではなく、他人の解剖所見を聞いたものであつて、

不意。道光九年十二月十三日夜間。有安正門大街板廠衚衕恆宅。請余看症。因談及膈膜一事。留心四十年。未能審驗明確。內有江寧布政司恆敬公。言伊曾鎭守哈密。領兵于喀什噶爾。所見誅戮逆尸最多。于膈膜一事。知之最悉。余聞言。喜出望外。卽拜叩而問之。恆公鑒余苦衷。細細說明形狀。余于臟腑一事。訪驗四十二年。方得的確。繪成全圖。

と記載されている。

道光九年(一八二九)十二月十三日に、王清任がその患家先で、膈膜のことで四十年間も苦しんで居ることを話した。そこに江寧布政使の恆敬公が來合せていた。恆敬公はかつて哈密(新疆省廸化道)の總督となり、兵を喀什噶爾で指揮したことのある人である。その時、誅戮された多くの逆屍を見ていて、膈膜の事を、悉く知つておると述べた。王清任は喜望外に出で、この人から細かに膈膜のことを聞いた。この話と前の觀察した所とを綜合し、四十二年にして、はじめて的確な臟腑圖を作り得たと言うのである。

第二章に於いて詳述するが、康熙帝の勅命によつて、西洋解剖學の書が滿州文に飜譯されて、欽定格體全錄なる書が、康熙末年のころに作られた。この書は、完成するとともに禁書となつてしまつたので、中國解剖學には、何らの影響を與えていない。從つて王清任の藏府觀察は、この欽定格體全錄の刺戟によつて行われたものではない。又、西洋解剖學が中國に一般に導入されたのは、英人 B.Hobson(中國名は合信)が、咸豊元年(一八五一)に全體新論を作つてからであつて、王清任の藏府觀察よりも後のことである。王清任は獨自の立場からして、自己の創見によつて、藏府觀察を行つたと言い得る。王清任の藏府圖は、第二章第六節で詳述するが、現代解剖學の上から見ると、幼稚で誤謬の多いものではある。しかし、古典醫書の記載に懷疑し、親視實驗を重じ、四十餘年にわたつて、營々として藏府觀察に從事した精神・態度こそは、中國現代解剖學の先驅者と言つても、過賞ではなかろう。

むすび

以上に述べた所は、中國古代より清末に至るまで、換言すれば、現代解剖學の起るまでに、醫學の目的をもつて行われた人體の解剖・觀察又は外科手術、その他解剖に關係のある記事を、諸文獻から拾い集めて、時代を逐うて排列したものである。渉獵し得た文獻が少いがために、脱漏も多いことと思われる。大方諸賢の教示を得て、補正することを冀う。

上記の各解剖・觀察を通覽すると、解剖・觀察の對象は、刑屍・敵屍・人又は犬に食い荒された死屍であり、その執刀人は、醫學に無關係な巧屠・劊子であり、さらに多くは内密に解剖・觀察が行われ、且つ何らの設備のない所で行われたのである。從つて、その結果が正確でないことも、やむを得ない所であろう。之に加えるに、中國人の古典尊重主義も手助い、想像的觀念的要素が多く、動物解剖の智識を多く含んでいる古典醫書の生理解剖の智識から脱却する域にまでには至つていない。しかし、此等の解剖・觀察の結果、中國傳統的解剖の智識の中に、人體解剖による現實的な智識が、相當多量に注入されたことは、否定し得ないであろう。

因みに、中國に於て、現代的人體解剖が行われたのは、民國二年(一九一三)に内務部より發布された解剖規則によつて、同年十一月に、江蘇公立醫學專門學校で行われた人體解剖がその嚆矢である。

第二章　現存する中國近世までの五藏六府圖・人體模型の概說

はしがき

本章に言う「五藏六府圖」とは、人體の五藏六府を中心として描かれた解剖圖であつて、内景圖、内形圖、内照圖、藏府圖とも言われる。本章では便宜上「藏府圖」なる略稱に統一して從うことにする。

第一章に述べたが如く、中國醫學は經絡說を紐帶として組織され、その經絡說は、五藏六府の生理解剖の知識を基盤とするものである。故に中國醫學に於いては、古くから五藏六府の研究は盛んであり、第一章で述べたが如き人體解剖・觀察も行われ、諸種の藏府圖が作られた。又一方、

魏晉以後、佛教道教が盛んになるとともに、それぞれの立場からの藏府圖も作られ、遂には中國醫學・佛教醫學・道教醫學の三者の内、二者又は三者を折衷した藏府圖も相當に多く作られるようになつた。

隋書經籍志以下の諸志、諸家の藏書目錄の醫家類・道家類等には、相當多くの藏府圖が著錄されているが、その大部分は亡佚に歸している。本章に於ては、現存する清朝までの藏府圖・人體模型につき、その代表的なものを選び、時代を逐うて概說し、その性格・系統を明らかにし、中國解剖史學研究の一史料とするとともに、嵯峨清涼寺釋迦胎内五藏の調査の背景にしたいと思う。

第一節　唐の代表的五藏六府圖……胡愔の黃庭内景五藏六府圖

隋・唐の時代には、神農明堂圖、明堂人形圖、偃側圖、明堂三人圖、五色傍通五藏圖等の如き諸種の藏府圖が存在したが、皆亡佚してしまい、現存するものは、わずかに唐の胡愔の黃庭内景五藏六府圖(以後は「五藏六府圖」と略稱する)の一書に過ぎない。

胡愔の傳記は明らかではないが、その五藏六府圖の自序(後に述べる)によつて、太白山の女道士で、見素女と號し、唐の宣宗の大中二年(八四八)に五藏六府圖を作つたことが知られる。從つてこの書は、現存する中國の最古の藏府圖であるばかりではなく、五藏を具備する藏府圖としては、現存する世界最古のもので、解剖史學上注意すべき文獻である。宋の崇文總目には、胡愔のこの書の外に、「黃庭外景圖一卷」が著錄され、胡愔には、この外に黃庭外景圖の著作があつたことが知られるが、この書は今に傳存していない。

この胡愔の五藏六府圖は、唐書藝文志、崇文總目に著錄されているが、今に傳わる本としては、次の五種がある。

(1)黃庭内景五臟六腑補瀉圖一卷　明正統道藏洞玄部靈圖類所收本(商務印書館景道藏による)

(2)黃庭内景五藏六府圖一卷　明正統道藏洞眞部方法類修眞十書所收本(同上)

(3)五藏六府圖一卷　醫方類聚卷五所收本(文久二年―一八六二―喜多村直寬活字刊本による)

(4)黃庭内景五臟六腑圖說一卷　萬曆十一年(一五八三)上

海王圻刊黄庭内外景玉經附刊本

(5)新刻黄庭内景五臟六腑圖説一卷　萬曆□年錢唐胡文煥刊百家名書(又は格致全書)所収本

以上の五種の傳本を對比すると、その書名は少しく異り、内容に詳略の別もあるが、その内容は一致し、同じく胡愔の五藏六府圖であることは明白である。内につき、「(5)胡文煥刊本」は「(4)王圻刊本」の重刊本であつて、僅かに校改された所があるのに過ぎないものである。

この五種の傳本のうち、本文が最も具つておるものは、「(2)道藏洞眞部本」であり、最も省略されておるものは、「(1)道藏洞玄部本」であつて、その卷末に、「右五臟六腑圖。取其要者略之。故文不足。」と附記されているから、この書はその本來からして摘錄本であることが知られる。その他の傳本にも、それぞれ詳略の別がある。此等の傳本を綜合して相補足して見ると、胡愔の五藏六府圖の原本の本文は、卷首に「太白山見素女胡愔撰」と題する自序があり、その序末には「大中二年戊辰述」と作成年時が書かれている。次に肺・心・肝・脾・腎・膽の順に記述し、各藏には、圖説・修養法・相某藏病法・六氣法・月禁食忌法・導引法の諸項目があつたことが推定される。

次に藏府圖に就いて見ると、「(2)道藏洞眞部本」・「(4)王圻本」・「(5)胡文煥本」には、全く圖はなく、「(3)醫方類聚本」には、附圖第二～第七に見られるが如き肺・心・肝・脾・腎・膽の圖が、本文のそれぞれの所に分載され、各圖ごとに、藏形・藏神・童子玉女・卦像・雲形が一圖の内に描かれている。「(1)道藏洞玄部本」には、ただ藏神圖のみが、本文のそれぞれの所に載せられ、藏形等の圖は皆省略されてしまつている。此等の傳本からして、胡愔の五藏六府圖の原本には、「(3)醫方類聚本」の如き諸圖が各所に分載せられていたものであることが推定される。「(3)醫方類聚本」所載の圖については、その道の專門家は、「唐の圖の系統ではないとは言い得ない」と鑑定され、さらにその藏神圖は、「(1)道藏洞玄部本」の藏神圖とその形がほぼ合致するからして、「(3)醫方類聚本」の藏府圖は、大體に於いて胡愔の原圖の面影を保つたものと推定される。

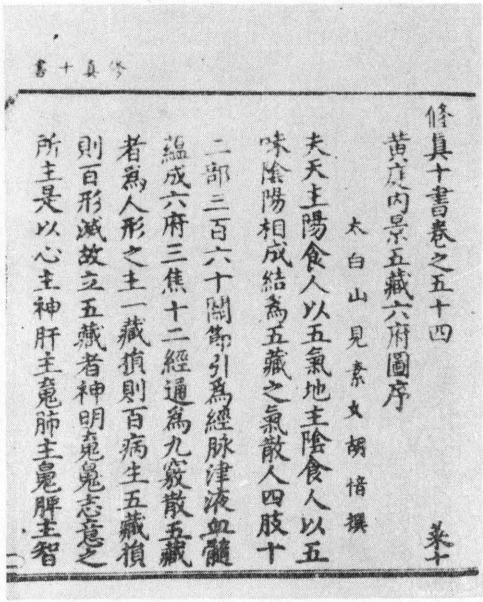
ここに考うべきは、「黄庭内景五藏六府圖」なる書名からして胡愔の原本には、すべての藏府につき、それぞれの圖と記文とが存在したと思われ、從つて肺・心・肝・脾・腎

膽の六種の圖と記文とだけしか存していない今の傳本は、殘闕本ではないかという疑問が當然に生ずる。此の問題に就いて考えてみると、「(1)道藏洞玄部本」・「(2)道藏洞眞部本」には、腎の條の末に、

右已上五藏數。加膽名六藏。亦受水氣。與坎同道。不可同例敍之。故別膽藏圖。相次之。

と言い、特に膽藏圖の一條を增加した理由を説明している。膽は本來は五藏の內に數えられないが、五藏の中に加えられて六藏と呼ばれることもあり、又膽以外の諸府は、その府の從屬する藏(例えば、大腸は肺、小腸は心)の條內で説明されるが、膽は水氣を承けて坎(腎)と道を同じくするものであるから、膽の從屬する肝の條に膽をば含めて説明することはできない。故に特に膽の條を設けたと言うのである。この文からして、胡愔の原本には膽以外の諸府の條は設けられていなかつたことが推定される。又胡愔の自序は專ら五藏を主として説き、六府には言及していないことも、上記の推定を裏書きするものである。從つて今の傳本は完本であつて、膽以外の諸府の條を殘闕したものでないと推定される。

胡愔はこの五藏六府圖を作つた目的を、大中二年(八四八)に作つた自序に、



修真十書卷之五十四

黃庭內景五藏六府圖序

太白山 見素女 胡愔 撰

夫天主陽食人以五氣地主陰食人以五味陰陽相成結爲五藏之氣散人四肢十二部三百六十關節引爲經脉津液血髓蘊成六府三焦十二經通爲九竅散五藏者爲人形之主一藏損則百病生五藏損則百形滅故立五藏者神明魂魄志意之所主是以心主神肝主魂肺主魄脾主智

第1圖　胡愔の五藏六府圖　自序(本部洞藏道)

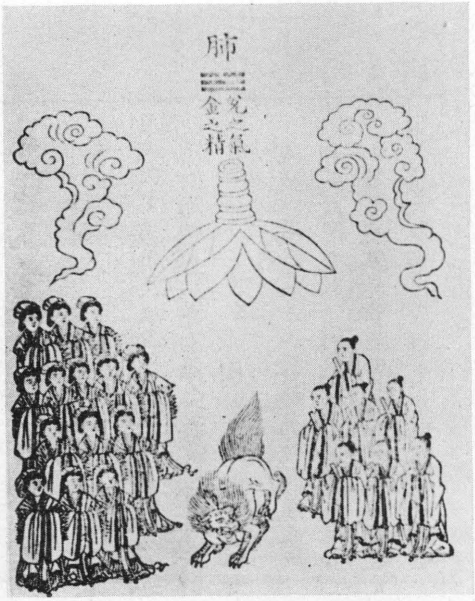
天の五氣と地の五味とが結ばれて五藏となる。五藏は身體の根源で、神・魂・魄・志・意の居る處である。故に一藏が損すれば百病が生じ、五藏が損すれば百形が滅ぶ。從つて、五藏の生理解剖の知識を明確にし、その上に修養法・相某藏病法・六氣法・導引法を立て、それによつて五藏を養えば、不老長生が得られる。(要譯)

と説明している。この胡愔の自序によつて明らかであるが如くに、五藏六府圖は道教醫學に屬する書である。

由來隋志・新舊唐志には、その道家類に相當多くの道教醫學に屬する書が著錄されているが、現存する完本としては、唐の梁丘子の注した太上黃庭內外景玉經（萬曆十一年―一五八三―王圻刊本）とこの胡愔の五藏六府圖との二書に過ぎない。この太上黃庭內外景玉經（以下「內外景玉經」と略稱する）の成立年代は明らかではないが、宋の歐陽修は、魏晉の間に道士が作つたものとしている。（歐陽文忠公文集外集卷十五「刪定黃庭經序」に見ゆ）。この兩書はとにも僅かに殘存する道教醫學の古典醫書であつて、中國の生理解剖史學上のみならず、道教史學上に於いても貴重な史料と言い得る。

上記したが如く、胡愔の五藏六府圖は唐の大中二年（八四八）に作られたもので、嵯峨の清涼寺の釋迦胎內の五藏が作られた宋の雍熙二年（九八五）以前に於ける唯一の現存する藏府圖である。從つてこの書は、釋迦胎內五藏の研究上に、非常に重大な意義を持つものである。故に本稿に於いては、胡愔の五藏六府圖の各藏府につき、各藏の形態・色彩等を中心とし、中國古典醫書に見える生理解剖の記載と對比しながら詳說し、この道教醫學にもとづく胡愔の五藏六府圖と、中國古典醫學との關係を明らかにし、それを展開して、釋迦胎內五藏の性格研究の一助に資したいと思う。

(1) 肺藏圖　醫方類聚本の胡愔の五藏六府圖に載せる肺藏圖は、附圖第二に見られる通りである。その圖說に、



第2圖　胡愔の五藏六府圖　肺藏圖

肺神皓華。字虛成。夫肺者。兌之氣。金之精。其色白。其象如懸磬。其神形如白獸。肺生魄。化爲玉童。長七寸。

素衣。持兵杖。往來於肺府也。一云。肺有七童子十四玉女守之。

と説明している。肺の形像を中心とし、その上方に肺が五行説によつて八卦に配當される兌卦を描き、その下方に、「兌之氣　金之精」と注記してあり、肺の形像の下方に、肺神名は皓華字は虚成を表徴する白色獣が描かれている。この白色獣は四神の白虎である。肺の形像の左方右方に二つの雲形が描かれている。此は恐らく肺氣を表徴するとともに、装飾として描かれたものであろう。又肺の形像の下方の左右には、肺神に奉仕する七人の童子と十四人の玉女とが描かれている。圖説には「化爲玉童。長七寸。素衣。持兵杖。」を本文とし、「肺有七童子十四玉女守之。」をば「一云」として、一説としている。この圖が本文を捨てて一説に從つて、七童子十四玉女を描いた理由は明らかでない。隋唐の間に成つた孫思邈の千金方の卷十七「肺藏脈論」には、

有十四童子七女子守之。神名鳥鴻。

と記している。その神名・玉女童子の數は、胡愔のそれとは異つている。しかし、藏神・玉女・童子の考は、道教醫學に特有のものであつて、實に魏晉の道士の作と言われる「内外景玉經」に淵源している。この内外景玉經の卷上の心神章第八には、心・肺・肝・腎・脾・膽の藏神の名字を記し、肺部章第九～膽部章第十四には、各藏神に奉仕する童子・玉女の數・服裝・服色・持物・職務等が詳記されている。

又上に引用した圖説には、「夫肺者。兌之氣。金之精。其色白。」とある。かかる記事は、例えば心藏圖に、「夫心者。離之氣。火之精。其色赤。」とあるが如くに、各藏の圖説に書かれている。由來中國傳統醫學に於ては、五藏六府を五行説により、八卦・四季・五色等種々のものに配當し、之を相生・相剋説によつて展開して、診斷・治療を行うのを原則としている。此は實に中國傳統醫學の特質の一であるが、道教醫學に於いてもこの原則を早くから利用している。胡愔の「夫肺者。兌之氣。金之精。其色赤。」等の一聯の文は、皆中國傳統醫學の五藏六府の五行配當の原則を用いて書かれた文である。

さらに又、肺藏圖の圖説には、「肺生魄」とあり、心・肝・脾・腎の圖説にも、それぞれ「心生神」・「肝生魂」・

「脾生意」・「腎生智」とある。かくの如き考え方は、中國傳統醫學の古典である素問の六節藏象論・靈樞經の靈蘭祕典論・本神篇に見えている。例えば本神論には、

肝藏血。血舍魂。…脾藏榮。榮舍意。…心藏脈。脈舍神。…肺藏氣。氣舍魄。…腎藏精。精舍志。

とある。胡愔の「肺生魂」等の文は、中國傳統醫學の古典書にも見えるもので、決して道教醫學に特有な考ではない。

又圖說には、肺の形像を「其象如懸磬」としているが、その典據は詳らかではない。しかしその圖は、中國古典醫書の難經四十二難の「六葉兩耳。凡八葉」に類似するものである。（肺圖に七葉を描くのは、傳寫の誤と思われる）從つて「懸磬」とは、千金方卷十七等の所謂「華蓋」と同形のものを意味すると思われる。

次に胡愔の圖說には、肺を解剖學的に說明して、

肺爲五藏之華蓋。本一。居上。對胷。有六葉。色如縞映紅。重三斤三兩。西方白色。入通於肺。

と述べている。

この圖說中の「肺爲五藏之華蓋。」に就いては、上記の內外景玉經の肺部章第九には、「肺部之宮。似華蓋。」とあり、千金方卷十七にも、「肺爲五藏之華蓋。」とある。恐らく胡愔の據つた所であろう。華佗內照圖（後に詳述する）の肺手太陰經の條に「黃帝書云。肺爲諸臟之上蓋。」とある。この「黃帝書」とは如何なる書であるかは明らかではない。又中國傳統醫學の古典の靈樞經の九鍼論に、「五藏之應天者肺。肺者。五藏六府之蓋也。」とある。此が恐らく「華蓋」の最も舊い典據であろう。

次に圖說の「肺有六葉。…重三斤三兩。」に就いては、中國傳統醫學の古典である難經四十二難には、「肺重三斤三兩。六葉兩耳。凡八葉。」とある。胡愔の圖說の「重三斤三兩」は、難經によつたものと思われる。肺葉に就いては、難經は、「六葉兩耳」と言い、胡愔は「六葉」と言い、兩耳には言及していない。しかし肺圖には、合計七葉が描かれ、上の左右の二葉は兩耳であると思われる。此等を併せ考えると、胡愔の原本には、「六葉兩耳」と書かれ、原圖には兩耳と六葉とが描かれていたのが、傳寫の間にそれぞれ誤脫したものと思われるからして、肺の葉數もまた難經に典據したものと推定される。ここに注意すべきは、難經の「六葉兩耳」の說に對して、四葉說が、隋唐のころに

行われていた。醫方類聚卷五に收められている「五藏論」には、肺は四葉とされている。この書の著者は未詳であるが、恐らく六朝の作と思われる。さらに又、內外景玉經肺部章第九の梁丘子注も肺は四葉とされている。胡愔はこの四葉說に從わず、難經によつて、「六葉兩耳。凡八葉」說に從つたのである。

次に胡愔の圖說の「色如縞映紅」に就いて見ると、胡愔の五藏六府圖には心藏圖に「色如縞映絳」、肝藏圖に「色如縞映紺」、脾藏圖に「色如縞映黃」、腎藏圖に「色如縞映紫」、膽藏圖に「色如縞映青」と書いてある。案ずるに素問の五藏生成篇に、

生於心。如以縞裹朱。生於肺。如以縞裹紅。生於肝。如以縞裹紺。生於脾。如以縞裹栝樓實。生於腎。如以縞裹紫。此五藏所生之外榮也。

とあり、(太素經卷十七證候篇にも同文がある)その唐の王氷の注には、「是乃眞見生色也。縞白色。紺薄青色。」とある。この素問の記事は、五行說によつて五藏に配當される色、例えば、肝…青、心…赤等の色とは關係なく、五藏の外榮の色を述べたもので、その外榮の色は五藏そのものの實質の色と一致するからして、この五色は、五藏の實質の色と言うことになる。心の色は縞(白の練絹)で朱をつつみ、縞を透して見るような色、肺の色は、縞で紅をつつみ、縞を透して見るような色…と言うのである。胡愔の圖說の「色如縞映紅」の等も、素問のこの記事と同じく、五藏の實質の色彩を述べたものである。內につき、素問は心に「朱」、脾に「栝樓實」とするに對し、五藏六府圖は心に「絳」、脾に「黃」としている。案ずるに絳は濃い赤であつて、朱と非常に類似する色であり、栝樓實は熟すと黃色になるから、素問と五藏六府圖とは、その表現は異るが、その內容は全く同じである。以上を要するに、胡愔の「色如縞映紅」等の文は、素問と同じく五藏の實質の色を言つたものである。中國傳統醫學では、五藏の色彩は上記の如き色に考えられており、五藏六府圖は之によつて書かれたものである。

次に圖說の「西方白色。入通於肺。」に就いては、心の圖說にも、「南方赤色。入通於心。」、肝にも「東方青色。入通於肝。」、脾にも「中央黃色。入通於脾。」、腎にも「北方黑色。入通於腎。」とある。此等一聯の圖說の文は、全

く素問の金匱眞言論に據つて書かれた文で、肺藏圖說の「夫肺者。兌之氣。金之精。其色白。」（各藏の圖說に之に相應ずる文がある）等とともに、五行說によつて五藏に配當される五色で、五行理論によつて展開するための配當される觀念的な色であつて、決して五藏自體の實質の色ではない。胡愔も中國傳統醫學の五行說による五藏・五色の配當を襲用したのである。

次に圖說には何も說明されていないが、肺藏圖には、肺管に九つの節が描かれている。此は難經四十二難の「喉嚨重十二兩。廣二寸。長一尺二寸。九節。」によつたものであろう。

第3圖　胡愔の五藏六府圖　心藏圖

(2) 心藏圖　醫方類聚に收められている胡愔の五藏六府圖の心藏圖は、附圖第三に見られる通りである。その圖說には、

心神丹元。字守靈。夫心者。離之氣。火之精。其色赤。其象如垂蓮。其神形如朱雀鳥。心生神。化爲玉女。長八寸。錦衣。持玉英。每出入於心府。

と說明している。この文の內、「其象如垂蓮」は後述することにするが、その他は上の「肺藏圖」の條でした解說から類推されるからして說明を省略する。ただ千金方卷十三では、「神名を呴呴」とし、宋代に作られた簡要濟衆方（醫方類聚本）では、「有二童子。身掛緋衣。手執紅拂。」と言い、神名・玉女に異說のあることだけを附記しておく。次に胡愔は心藏を解剖學的に說明して、

心居肺下肝上。對鳩尾下一寸。色如縞映絳。形如蓮花未開之狀。重十二兩。南方赤色。入通於心。

と述べている。

先ず「心居肺下肝上。對鳩尾下一寸。」に就いては、素

問・靈樞等の中國傳統醫學の古典醫書には、此と同文のものはないが、靈樞經の五色篇には、

庭者。首面也。闕上者。咽喉也。闕中者。肺也。下極者。心也。直下者。肝也。肝左者。膽也。下者。脾也。方上者。胃也。中央者。大腸也。挾大腸者。腎也。當腎者。臍也。面王以上者。小腸也。面王以下者。膀胱子處也。

とあり、五藏六府の部位を明らかにしている。胡愔の圖說の「心居肺下肝上」等の五藏六府の部位を說明した文は、いずれもこの五色篇に記載される藏府の部位と合致している。胡愔の圖說の部位は、恐らく五色篇に淵源するものであろう。「對鳩尾下一寸」は、胡愔が自己の知見または何らかの書によつて書いたものであろう。

次に胡愔の圖說の「形如蓮花未開之狀」に就いては、上の圖說の「其象如垂蓮」とともに、心の形態を蓮花にたとえており、この圖說では、蓮花をさらに說明して、「いまだ開かざるの狀」としている。內外景玉經の心部章第十には、「心部之宮。蓮含蕾。」とあり、その梁丘子注には、「心臟之質。象蓮花之未開也。」とある。恐らく胡愔は之によつたのであろう。華佗內照圖の心手少陰經の條には、「黃帝書云。心形如未敷蓮花。」とある。この「黃帝書」は、中國傳統醫學に屬する書か、道教醫學に屬する書かに就いては明らかでない。素問・靈樞の如き中國傳統醫學の古典醫書には、心を蓮の蕾に擬した文を見出し得ない。

又、圖說の「重十二兩」は、難經四十二難の「心重十二兩。盛精汁三合。」に典據したものである。

胡愔の心藏圖說のその他の事項に就いては、既に肺藏圖の條で解說したから、ここでは省略する。

第4圖　胡愔の五藏六府圖　肝藏圖

(3)肝藏圖　醫方類聚に收められている胡愔の五藏六府圖

の肝藏圖は、附圖第四に示す通りである。胡愔はこの圖を説明して、

肝神龍煙。字含明。夫肝者。震之氣。木之精。其色青。其象如懸匏。其神形如青龍。肝生魂。化爲二玉童。一青衣。一黃衣。各長九寸。持玉漿。出入於肝藏。一云。肝有三童子六玉女守之。

と述べている。この圖説の內、「其象如懸匏」の一句は、何に典據するかは未詳であるが、その他は肺藏圖の條で解説した所から類推されるからして、説明を省略する。ただ注意すべきは、圖説には「二玉童」(各傳本は皆同じ)と記しているが、圖には二玉女が描かれている。圖説にはその任務として「持玉漿。出入於肝藏。」を書いている。「玉漿を持す」は玉女の任務であるからして、各傳本の圖説に「二玉童」とあるのは、「二玉女」の誤と見るべきであろう。又千金方卷十一には、「有六童子三玉女守之。神名監。」とあり、簡要濟衆方には、「肝名龍煙。字含明。…有童子玉女。身掛青衣。手執竹春棒。」とある。神名、童子・玉女に異説のあることを附記しておく。次に胡愔は肝を解剖學的に説明して、

肝居心下。少近左。左三葉。右四葉。色如縞映紺。重四斤四兩。東方青色。入通於肝。

と述べている。

先ず「肝居心下。少近左。」なる肝の部位に就いては、肝が心の下に在ることは、上記の靈樞經五色篇に見える所であるが、「少近左」には、若干の説明を要する。由來、中國傳統醫學に於ては、肝が左側に在るか、右側に在るかに就いては、非常な問題となつている。素問の刺禁論では、「肝生於左」と言うに對し、人體解剖によつた諸藏府圖では肝を右側に描いている。例えば華佗內照圖には「肝在右脇右腎之前並胃。而胃與小腸之右外。」と言い、肝は右側に在ることを述べている。元明のころには之を解決せんとしたものが多く、例えば元の滑壽はその難經本義に、「其治在左。其藏在右脇右腎之前。」と言い、肝は人體の右側に在るものであるが、その支配する所は左側に在るからして、素問は「肝生於在」と言つたとしている。何はともかく、胡愔が「少近左」としたのは、素問に從つたものである。

次に、胡愔の圖説の「左三葉。右四葉。…重四斤四兩。」

に就いては、難經四十一難に、「肝獨有兩葉。以何應也。」とあり、唐の楊玄操の注には、「肝者。據大葉言之。則是兩葉也。若據小葉言之。則多葉矣。」とある。從つて胡愔の圖說の「左」「右」とは、左の大葉、右の大葉を指すものである。又難經四十二難には、「肝重四斤四兩。左三葉。右四葉。」とある。胡愔はこの難經に典據したものである。

醫方類聚に收められている五藏論には、「肝有五葉。應五常。重三斤十兩。」とある。上記したが如く、五藏論の作者は不明であるが、その書は六朝時代に成つたものと思われる。これにより、唐のころには、肝の葉數、重量に異說があつたことが知られる。

胡愔の肝藏圖說のその他の事項は、既に肺藏圖の條で說明したから、ここには省略する。

(4)脾藏圖　醫方類聚に收められている胡愔の五藏六府圖の脾藏圖は、附圖第五に示す通りである。胡愔はこの圖を說明して、

脾神常在。字魂庭。夫脾者。坤之氣。土之精。其色黃。其象如覆盆。其神形如鳳。脾生意。化爲一玉女。長七寸。循環於脾藏也。

と述べている。この文中の「其象如覆盆」は後に說明するが、その他に關しては、肺藏圖の解說から類推されるからして、解說を省略する。ただ千金方卷十五には、「神名俾俾」に作り、簡要濟衆方には、「有童子。身掛中宮之衣。手執黃拂。」と言い、神名・玉女に異說のあることを附記しておく。又胡愔はその圖說に、脾を解剖學的に說明して、

脾掩太倉。在臍上三寸。色如縞映黃。重二斤三兩。中央黃色。入通於脾。

と述べている。

第5圖　胡愔の五藏六府圖　脾藏圖

先ず圖說の「脾掩太倉。在臍上三寸。」に就いて見ると、

内外景玉經の脾長章第十五には、「脾長一尺。掩太倉。」とあり、その梁丘子の注には、「太倉。胃也。中黄經云。胃爲太倉。元陽子曰。脾正横在胃之上也。」とある。恐らく胡愔の「脾掩太倉」は、この書に據つたものであろう。案ずるに、中國傳統醫學の古典醫書には、脾の部位を、「脾掩太倉」の如くに表現したものを見出し得ない。難經四十三難には、「胃長二尺六寸。大一尺五寸。徑五寸。」と胃の大きさを述べ、四十二難には、「脾扁廣三寸。長五寸。」と脾の大きさを述べている。僅か長さ五寸の脾が、長さ二尺六寸の胃の上に在る時は、「脾掩太倉」とて「掩」の字を用いて表現されるはずがない。胡愔が「掩」の字を用いる以上、脾が難經記載の「扁廣三寸。長五寸。」よりも大きなものを想定していたことが推定される。從つて圖說の「脾掩太倉」は、中國傳統醫學の難經の「脾扁廣三寸。長五寸」に從つたものではなく、道教醫學の內外景玉經の「脾長一尺。掩太倉。」によつたものであることは明らかである。

又上の圖說には、「其象如覆盆」と言い、圖には盆をふせたような形に描かれている。我國の應永八年(一四〇一)の跋文のある五藏次弟圖(作者未詳)にも、粗雜ではあるが、同じような圖が描かれている。しかし中國傳統醫學の古典醫書には、脾の形を覆盆に擬した記事を見出し得ない。華佗內照圖の脾足太陰經の條には、「黄帝書云。脾形似馬蹄。內包胃脘。」と述べている。この黄帝書の所謂「馬蹄」と、胡愔の所謂「覆盆」とは、その表現は異るが、一は脾を下方から見たもの、一は上方から見たものと思われ、ほとんど同じ形を想定しながらも、その觀點の相異によつて異つた形に表現されたものと思われる。又黄帝書の「內包胃脘」は、圖說の「脾掩太倉」に該當するものであるからして、この黄帝書と胡愔の圖說とは、表現は異るが、同一形のものを意識していたことが推定される。ただこの「黄帝書」の性格が明らかでないから、中國傳統醫學にも、圖說の「脾覆太倉」・「其象如覆盆」の如き考え方があつたか否かを決定することはできない。因みに、後世では脾は「形如刀鐮」とし、その圖も上方がやや狹い杓子狀の圖がかかれており、その形態は、はるかに胡愔のそれとは異つたものである。(第三報第一圖參照)圖說の「在臍上三寸」は、胡愔の知見によつたのか、または別による所があつたのかは、

明らかではない。

圖說の「重二斤三兩」は難經四十二難に據つた文である。

胡愔の肝藏圖の圖說のその他の事項は、既に肺藏圖の條で說明したから、ここには省略する。

第6圖　胡愔の五藏六府圖　腎藏圖

(5)腎藏圖　醫方類聚に收められている胡愔の五藏六府圖の腎藏圖は、附圖第六に示す通りである。胡愔は圖說にこの圖を說明して、

腎神玄冥。字育嬰。夫腎者。坎之氣。水之精。其色黑。其象如懸石。其神形如鹿兩頭。腎生智。化爲玉童。長一尺。出入於腎藏也。

と述べている。

內につき、「其象如懸石」に就いて見ると、中國傳統醫學の古典には、腎の形を懸石に擬した記事を見出し得ない。華佗內照圖は腎足小陰經の條に、「黃帝書云。腎藏有二。形如豇。相並而曲附於脊筋。」とある。胡愔の腎藏圖の腎の形は、石よりもむしろ豇豆に似ている。圖說の「石」は豇豆に似た石と解すべきである。

その他の圖說の事項は、肺藏圖で述べた所から類推されるからして說明は省略する。ただ千金方卷十九、簡要濟衆方には、神名を「瀏瀏」とし、又簡要濟衆方には、「有二童子。身着皂裳。手執壬癸之幡。」と述べている。神名・童子に異說があることを附記しておく。

さらに又、圖說には、「化爲玉童。長一尺。出入於腎藏也。」と言い、玉童の持物を言つていない。恐らく脫文があるのではなかろうか。圖には一童子が刀を持ち、鬼を退治している圖が描かれている。又胡愔の圖說には、腎を解剖學的に說明して、

左腎。右命門。前對臍。傳着於脊。色如縞映紫。重二

斤二兩。北方黑色。入通於腎。

と述べている。

先ず圖說の「左腎。右命門。」に就いては、この考え方は中國傳統醫學の古典醫書にしばしば見える所である。例えば難經の三十六難には、

藏各有一耳。腎有兩者。何也。然。腎兩者。非皆腎也。其左者爲腎。右者爲命門。命門者。謂精神之所舍。原氣之所繫也。故男子以藏精。女子以繫胞。

と述べ、左は腎、右は命門で、命門を性殖器官としている。胡愔はこの中國傳統醫學によつたのである。簡要濟衆方には、「其左者爲腎。右者爲命門。女子以右爲腎。左者爲命門。」と述べ、男女によつて命門・腎が左右を異にすることを述べている。かかる說は、宋の簡要濟衆方にはじまつたものではなく、あるいは六朝隋唐のころよりあつたものと推測されるが、後日の研究に俟つて、明らかにしたいと思う。

次に「前對臍。傅着於脊。」に就いては、靈樞經五色篇には、「當腎者臍也。」とあり、又上に引用した華佗內照圖所引の黃帝書には、「相並而曲附於脊筋。」とある。恐らく胡愔のこの記文の淵源する所であろう。

又、胡愔の圖說の「重二斤二兩」に就いては、難經四十二難・千金方卷十九は、ともに「重一斤一兩。有兩枚。」と記載している。難經・千金方の等は、いずれも一腎の重さを書し、胡愔は兩腎の重さを書したものと考えられるからして、その實は同じと言うことになる。

胡愔の圖說中のその他の事項に就いては、既に肺藏圖の條で說明したから、此所には省略する。

第7圖　胡愔の五藏六府圖　膽藏圖

(6)膽藏圖　醫方類聚に收められている胡愔の五藏六府圖

の膽藏圖は附圖第七に示す通りである。胡愔は圖說にこの圖を說明して、

膽神龍曜。字威明。夫膽者。金之精。水之氣。其象如懸瓠。其神形如龜蛇。化爲玉童。長一尺。執戟在手。出入奔馳於膽藏之間。

と述べている。

內につき、「其象如懸瓠」なる膽の形像については、中國傳統的醫學の古典醫書には、膽の形を「懸瓠」に擬した記事を見出し得ない。しかし唐の陳藏器の本草拾遺(開元二十七年—七三九—に書成る)によると、唐代に於いては人膽は藥用に供せられていた。(證類本草卷十五人部陳藏器餘に見ゆ)朝比奈泰彥博士編「正倉院藥物」によると、正倉院尊藏の獸膽も懸瓠の狀に作られている。從つて胡愔はその知見した人膽によつて、「懸瓠」と言つたものと推定される。

又、胡愔の圖說では、「化爲玉童。長一尺。執戟在手。」と言つているが、圖には、戟を執る童子と刀を執る童子の二人が描かれている。何故にかかる異同が生じたかは詳らかではない。

胡愔の圖說のこの外の事項に就いては、肺藏圖に述べた解說から類推され得るからして、此所には說明を省略する。又胡愔は膽を解剖學的に說明して、

膽傳着肝。色如縞映青。重三兩三銖。

と述べている。

內につき、「膽傳着肝。…重三兩三銖」は、難經四十二難の「膽在肝之短葉間。重三兩三銖。盛精汁三合。」に依據したものと思われる。又「色如縞映青」は、膽の實質の色を言つたものであることは、上記した通りである。

(7)むすび　以上は胡愔の五藏六府圖の各藏の圖、その圖を直接に說明している圖說、及び各藏の形態・色彩・部位・重量等を解剖學的に說明した圖說のみを取上げて、之を中國傳統醫學の古典醫書の記載と對比して說明したのであるが、その結果を綜合して見ると、各藏の圖は、構成・藏神・童子玉女・卦象・雲形等はいずれも道教的色彩の濃厚なものであるが、その諸藏の形態は、脾がやや疑問である以外は、中國傳統醫學の古典醫書の記載に合するものである。又、その圖說も主として中國傳統醫學によつてかかれたもので、その間僅かに胡愔自身の知見が挿入されたものである。之を擴大して、胡愔の五藏六府圖の全書に就いて

見ても、また同じようなことが言い得る。換言すれば、胡愔の五藏六府圖は、道教醫學の書ではあるが、主として中國傳統醫學に據り、それをたくみに利用して、道教目的に協うように編纂されたものと言うことができる。

由來、中國傳統醫學はその源を神仙方家に發し、次第に中國傳統醫學として發展したものであるから、その本質に道家的要素を含有することは當然である。又道教醫學も中國傳統醫學に依據して組織されたものであつて、道教醫學と中國傳統醫學とは、常に表裏の關係にあるものである。故に中國傳統醫學と道教醫學との兩者は、その極端なものに於いては相當な開きがあるが、その本質的なものに於いては、共通點の多いのは當然のことである。上記したように、胡愔の五藏六府圖には、非常に多くの中國傳統醫學の要素が含まれているが、これはこの書に限つたことではなくて、一般の道教醫學の書に就いても、言い得ることであろう。さらに之を逆から言えば、中國傳統醫學に屬する書、例えば千金方・外臺祕要方等の諸書には、道教醫學の要素が相當に多く含まれているが如くに、中國傳統醫學も、たえず道教醫學を吸收していると言い得よう。之を要するに、中國傳統醫學と道教醫學とは、その本質は、肉親關係に在り、しかも相互に吸收し合いつつ、それぞれの目的とする方向に發展したものと言うことができる。

さらにこの中國傳統醫學と道教醫學の外に、佛教醫學の存在も看過すべきではない。この三者は相互に影響しあい、しだいにその純粹度を少くし、隋唐のころに至つては、この三者の間には、相當多くの共通點をもつようになつた。特に佛教醫學の中國化が注意される。(佛教醫學と中國醫學との關聯性に就いては、第三報の「六　釋迦胎内五藏と佛教教義による五藏六府圖」の條を參照されたい。)

醫方類聚に收められている胡愔の五藏六府圖の各藏の圖には、何らの彩色が施されていないが、千金方卷二十九記載の明堂三人圖には、「其十二經脈。五色作之。奇經八脈。以綠色爲之。」と言い、六色が施されていた事實から推すと、胡愔の原圖には、それぞれ色彩が施されていたのではないかと疑われる。若し色彩が五藏に施されていたとしても、五行說によつて五藏に配當される色が施されていたか、五藏の實質の色が施されていたかは疑問である。

第二節　宋代の人體模型

一　嵯峨清涼寺の釋迦胎内五藏模型

嵯峨清涼寺の釋迦本尊の胎内に現存する五藏模型は、北宋の太宗の雍熙二年(九八五)に作られたもので、現存する世界最古の絹製の五藏模型である。この五藏模型に就いては、既に第三報に「清涼寺釋迦胎内五藏の解剖學的研究」に於いて詳述したから、此所には省略する。

二　宋の天聖銅人像とその模像

天聖銅人像は「兪穴銅人式」等の名でも呼ばれ、北宋の眞宗の天聖五年(一〇二七)に、王惟一なるものが、敕命によつて青銅で鑄造したものである。本項に於いては、この銅人像製作の經緯・性格・その後の消息を明らかにし、さらにその模像に就いて説明する。

後に詳述するが如くに、この天聖銅人像は醫學の目的によつて鑄造されたものであるが、かかる銅人像はこの時にはじまつたものではなく、第一章で述べたように、漢の王莽が天鳳三年(一六)に王孫慶を解剖して作つた銅人像に創るのである。この天聖銅人像の鑄造の經緯は、「新刊補注銅人腧穴鍼灸圖經」の天聖四年(一〇二六)の夏竦の序に詳らかである。即ち

鍼灸の道は、時代の降るとともに明らかではなくなつた。多くの書や圖繪があるが、誤謬が多くて信據しがたい。殿中省尚藥奉御王惟一は醫方に通じ、鍼灸に精しいので、之に敕命して、古今の經驗を參照し、諸説を綜合して、腧穴鍼灸圖經三篇を作らせた。しかし書籍は理解に困難であり、誤解を生ずる虞もあるから、この書によつて銅人像を鑄造させ、一切の經絡を記し、その孔穴の處に竅を穿ち、その側に孔穴名を刻みつけた。この銅人像をば、鍼灸の國定標準とする。(要譯)

と言うのである。ここに注意すべきは、この銅人像及び鍼灸圖經は、王莽の時の如くに人體解剖によつて作られたものではなく、その當時に傳存していた諸書・圖繪を綜合して作られたものである。從つて、銅人像及び鍼灸圖經は、中國古典醫學を襲用したもので、王莽の時の如き新事實による革新的なものではない。

又、宋の王應麟の玉海卷六十三の「天聖鍼經」の條に、

天聖五年十月に、醫官院から銅人像二軀を上つた。詔を下し、一軀を醫官院に置き、一軀を大相國寺の仁濟殿に置いた。(要譯)

と述べている。

この玉海及び上記の夏竦の序は、いずれも作者をば「王惟一」としているが、晁公武の郡齋讀書志卷三には、「王惟德」としている。宋史卷四百六十三王繼勳附傳の王惟德傳には、「惟德不肖。不能自立。丐食以給。眞宗聞而憫之。授惟德汝州司士參軍。」とある。晁公武の言う「王惟德」と、宋史に言う「王惟德」とが同名異人であれば問題は別であるが、若し同一人とすれば王惟德は銅人像・鍼灸圖經を作り得る能力のあるものとは認められない。かつ夏竦序及び玉海に「王惟一」に作つているから、文獻學上からしても、晁公武の「王惟德」は誤と見るべきである。

宋末の周密の齊東野語卷十三に、

嘗聞。舅氏章叔恭云。昔倅襄州日。嘗獲試鍼銅人全像。以精銅爲之。腑臟無一不具。其外兪穴。則錯金書穴名于旁。背面二器相合。則渾然全身。蓋舊都用此以試醫者。其法外塗黃蠟。中實以汞。俾醫工以分折寸。按穴試針。中穴則鍼入而汞出。稍差則鍼不可入矣。亦奇巧之器也。

と述べている。周密がその舅氏の章叔泰から聞いた話を述べ、「叔恭が襄州(湖北襄陽府)の長官であつた時に、鍼灸醫國家試驗に用いられた銅人像を入手した。この銅人像は精銅で鑄造されたもので、正面と背面とに分かれ、組立ると一像になるように鑄造されていた。その内部にはすべての藏府の模型が納れられ、外面には經絡說にもとずく三百六十五の兪穴が穿たれ、その傍らに兪穴名が刻記されていた。表面には黃蠟を塗り、兪穴に當る内部には水銀を入れておき、醫師の鍼が兪穴に入ると、黃蠟が破れて水銀がでる仕組になつていた。恐らく天聖の時に作られた銅人像であろう」と言うのである。

章叔恭の得た銅人像が、周密の言の如くに、天聖の原像であるか否かに就いては、さらに考證を要するが、その構造が夏竦の序に言う所と一致しているから、假に天聖の原像でなくしても、それの模像であることは疑を容れない。從つて周密のこの文によつて、天聖銅人像の構造・使用法等を推知することができる。

この銅人像にすべての藏府の模型が納れられていたことに注意すべきである。銅人像に藏府模型が納入されていることは、佛像・道像に藏府模型が納入されることとは別に、必ず醫學的意義のあるものであろう。

天聖銅人像の中に納入された藏府模型は今日に傳わつていない。天聖銅人像を直接または間接に模造したと思われる北京故宮延德殿に現存する銅人像にも、東京國立博物館に現存する銅人像にも（ともに後に詳述する）その藏府模型は既に亡佚している。從つて藏府模型の詳細は知ることはできない。しかし銅人像が作られた天聖五年（一〇二七）は、宋朝に於ける醫學を目的とする第一回の人體解剖が行われた慶曆五年（一〇四五）の歐希範の解剖より約二十年前のことであり、王莽から天聖に至るまでに、醫學目的による人體解剖は行われていないから、この銅人像の藏府模型は、恐らく中國傳統醫學による解剖圖、例えば神農明堂圖の如きものによつて作られたと推定される。前節で述べた胡愔の五藏六府圖、または第三報で述べた嵯峨清涼寺釋迦胎內の五藏と類似するものであることが推定される。

天聖銅人像の大小に就いては、明文の徵すべきものがない。しかしこの銅人像と表裏の關係にある腧穴鍼灸圖經の尺寸は、皆靈樞經の骨度・脈度・經別・經脈の諸篇の尺寸に據つたものである。從つて銅人像の尺寸も靈樞經のそれに據つたものと推定される。靈樞經の骨度篇には、

帝曰。願衆人之度。人長七尺五寸者。其骨節之大小長短。各幾何。

とあつて、當時の普通の男子の高さを七尺五寸とし、それを基準として各骨節等の尺寸を述べている。これから推すと、天聖銅人像もまた當時の普通男子の等身大に作られ、その高さを七尺五寸とし、靈樞經に記す尺寸に從つて、三百六十五兪穴の標準部位が示されたものと思われる。

次にこの天聖銅人像の存亡の迹をたどることにする。

清の朱彝尊はその曝書亭集卷四十六の「太醫院銅人腧穴圖拓本跋」に、靖康元年（一一二六）に、金が宋都の汴京に侵入した時に、多くの文物とともに、銅人像を金の都に運び去つたのではないかと疑つている。しかし此は單なる想像であつて、積極的な根據のあるものではない。

元史卷二百三の阿爾尼格傳に、

帝命取明堂針灸銅像。示之曰。此安撫王檝使宋時所進。

とある。この文中の「帝」とは元の世祖（一二六〇～一二九四在位）を指し、又「明堂針灸銅像」は、前後の文から推して、天聖銅人像を指すものである。この元史の文によつて、天聖銅人像二軀の内の一軀が、王機を通じて、宋から元に贈られたことが知られる。恐らく大相國寺に置かれていたものであろう。元史巻一百五十三王機傳によると、王機は元の太祖の癸巳の年（一二三三―宋の紹定六年）に宋に使してから前後五回にわたつて宋に使し、そのたびに、宋から元に幣物が贈られている。銅人像もそのいずれかの時に、王機に托して贈られたものであろう。上記した周密の齊東野語に見える銅人像が、果して天聖の原像であるとすれば、それは恐らく醫官院に置かれたものであろう。

周密の齊東野語に記載された銅人像のその後の消息は明らかではないが、王機を通じて元に歸した銅人像は、元の至元二年（一二六五）に、阿爾尼格が敕命によつて修理している。卽ち上記の元史巻二百三の阿爾尼格傳に、

帝又問。汝何所能。對曰。臣以心爲師。頗知畫塑鑄金之藝。帝命取明堂針灸銅像。示之曰。此安撫王機使宋時所進。歲久闕壞。無能修完之者。汝能新之乎。對曰。臣雖未嘗爲此。請試之。至元二年。新像成。關鬲脈絡皆備。

と記し、その修理の經緯を述べている。又、明一統志の順天府の條に、

三皇廟。在順天府治南明照坊。…東有神機堂。內置銅人・鍼灸圖經二十有四。…元至元間。自汴移置此。洪武初。銅人取入內府。圖經猶存。

とある。この文中の「元至元間。自汴移置此。」の二句は、至元二年（一二六五）に阿爾尼格が修理したことを誤つて、宋の汴京より移置したとしたものであるが、この文によつて、阿爾尼格が銅人像を修理した後、石刻の鍼灸圖經とともに順天府の神機堂に置かれていたのを、洪武初年（一三六八～）に、銅人像は內府に移置され、石刻の鍼灸圖經はそのまま堂內に置かれていたことが知られる。

この內府に移された銅人像と神機堂內の石刻鍼灸圖經とは、明の英宗の正統八年（一四四三）に勅命によつて新しく改鑄・改刻された。英宗御製の「銅人腧穴鍼灸圖經序」には、

宋天聖中。創作銅人腧穴鍼灸圖經三卷。刻諸石。復範

銅肖人。…於今四百餘年。石刻漫滅而不完。銅象昏暗而難辨。朕重民命之所資。念良製之當繼。乃命礱石範銅。倣前重作。加精緻焉。建諸醫官。式廣教焉。

とその改鑄・改刻の經緯を述べている。「天聖の石刻鍼灸圖經は磨滅し、銅人像は黑ずんで、ともに辨じ難くなつたので、天聖のそれを模刻・模鑄して、醫官院に建てた」と言うのである。この序文に「倣前重作」とあるから、正統新鑄の銅人像は、形體・大小・構造等の一切は、天聖の原像に從つたものであることが推定される。

英宗が銅人像を新鑄してから以後、天聖の原銅人像の消息は不明となつてしまつたが、英宗の新鑄銅人像の消息は、清の中葉のころまで追蹟することができる。清の彭孫貽の客舍偶聞には、

天兵入都。院中人員流散。光祿寺侵院地。以自廣。徙銅人於醫王殿。

と述べている。清兵が明の都北京に侵入した時、太醫院の職員が流散していた。光祿寺が太醫院の地を奪つて役所を擴張した時に、銅人像を太醫院から醫王殿に移置したと言うのである。又、英廉等の日下舊聞考には、

先醫廟外。北向者。爲藥王廟。有銅人像。蓋卽明英宗時所修也。

とある。之によつて、上記の光祿寺が醫王殿に移したのは、英宗が新鑄した銅人像であり、醫王殿中の藥王廟に置いたことが知られ、又日下舊聞考のできた乾隆中（一七三六～一七九五）にまで存在していたことが知られる。しかしそれ以後の消息は明らかではない。

ここに考うべきは、北京故宮延德殿及び東京國立博物館に現存している銅人像である。先ず延德殿に現存する銅人像に就いて述べよう。

謝觀の中國醫學源流論の「鍼灸學」の條に、

余於民國二十三年（一九三四）五月。至北平遊故宮。入延德殿。見所謂宋代銅人者。長約四尺。圍約兩尺。胸背兩面相連。不能開闔。所刻兪穴名稱。經絡部位。均與通行之銅人圖相符。穴有孔。體內全空。並無藏府機件。體外則古色盎然。摩娑良久。恨不能拓樣本携回也。

とある。筆者も北京に遊んだ時に、この銅人像を見た記憶はあるが、當時はこの方面に興味がなく、漫然と見すごしてしまつたことは、今から思えば殘念の至である。謝氏の

この記文のうち「胸背兩面相連。不能開闔。」は、その本來に於ては、周密の所謂「背面二器相合。則渾然全身。」の如くに作られていたものが、後に開闔できないようにされたものと解釋され、その他孔穴等から推すと、天聖または正統の銅人像の系統に屬するものであることは明らかである。しかし、この銅人像を天聖の原像、または正統の原像そのものであるとする一般説には、いささか疑問を感ずる。上記したが如くに、天聖及び正統の銅人像は、普通男子の等身大に作られたものである。今、延德殿の銅人像に就いて見ると、謝氏は「長約四尺。圍約兩尺。」とされている。この尺寸は營造尺によつたものと思われるが、一營造尺は三二cmであるから、「四尺」は我國の四尺二寸二分、「兩尺」は二尺一寸一分に當る。從つて延德殿の銅人像は、天聖及び正統の銅人像よりもはるかに小形なもので、決して天聖または正統の銅人像そのものでないことは明白である。恐らく天聖または正統の銅人像のいずれかによつて、縮小して模鑄されたものであろう。しかし此は謝氏の言われる尺寸を正しいと信用しての上での結論であるから、若し謝氏の目測に誤があれば、問題は又別である。實物を實見・再測して檢討したいものである。

次に東京國立博物館に現存する銅人像に就いては、その圖版は「醫學に關する美術聚英」(昭和三十年京都國立博物館監修)に掲載されているから參照されたい。この銅人像は、所傳によると、「竹田昌慶が入明の時、太祖の后の病氣を治した功によつて下賜され、永和四年(一三七八)に我國に將來した銅人像」とされている。永和四年は、英宗が銅人像を改鑄した正統八年(一四四二)よりも約六十年も前である。若しこの所傳が正しければ、東京國立博物館の銅人像は、天聖銅人像又はその模像と言うことになる。しかし、昌慶の將來した銅人像は、多紀元簡の醫賸附錄の「銅人像考」によると、明曆三年(一六五七)の江戸大火で燒失してしまつたとのことである。若しこの言が正しければ、現存する銅人像は、昌慶の將來したものではなく、明らかに別の銅人像である。

東京國立博物館に現存する銅人像は、正面・背面を組み合すように作られ、その本來に於ては肉色塗料が表面一面に塗られ、經絡及び孔穴名とが墨書されていたが、現在ではほとんど剝落して生地が露れている。孔穴のあなは徑一

分二厘もあつて、鍼灸醫試驗用としては、大きすぎる嫌がある。その實測値は、身長五尺三寸、頭圍一尺八寸八分、頸圍一尺二寸二分、眼裂一寸三分、口裂二寸、手（肩峯より中指端まで）二尺六寸四分で、中肉中脊の男子の等身大である。中は空洞で、五藏六府等の模型は殘存していない。この銅人像は粗雜な略式のもので、天聖又は正統の銅人像の原像でないことは明らかであるが、しかしその構造・大小からして、天聖または正統の銅人像のいずれかを模鑄した略式の銅人像であることが推定される。この銅人像は精緻なものではないが、之によつて天聖及び正統の銅人像の概容を窺うに足るものであつて、中國醫史學上、重要な史料と言うべきものである。

この外、中國に於いては、天聖または正統の銅人像が、數回にわたつて模鑄されたことが文獻に見えているが、既に亡佚してその詳細は知るを得べくもない。又、我國にも、坊間に木又は紙で作られた模像が相當に多く存在している。その形態・構造は銅人像に倣つているが、甚しく縮小されたものが多い。恐らく鍼灸の學習用として作られたものであろう。

第三節　宋の代表的な五藏六府圖

第一章に於いて詳述したが如くに、宋代に於いては、醫學目的による人體解剖が、政府公認のもとに二回行われた。その一は慶曆五年（一〇四五）の歐希範等の解剖であり、その二は崇寧年間（一一〇二～一一〇六）に泗州で行われた賊の解剖である。この二回の解剖を利用して、「歐希範五藏圖」と楊介の「存眞環中圖」とが作られた。さらにこの楊介の存眞環中圖を主軸として、朱肱の「內外二景圖」と「華佗內照圖」とが作られた。この外、中國傳統醫學または佛教・道教醫學による藏府圖も若干作られているが、見るべきものもなく、又完全に亡佚してしまつており、之を追蹟し得べくもない。故に本節に於いては、上記の四つの藏府圖に就いて概說することにする。

一　歐希範五藏圖

第一章にも述べたが如くに、我國の僧幻雲の史記標注（史記抄）所引の楊介の存眞圖には、

楊介曰。宜賊歐希範被刑時。州吏吳簡。令畫工就圖之

以記。詳得其狀。吳簡云。凡二日剖歐希範等五十有六腹。皆詳視之。…

とあり、又鄭景璧の蒙齋筆談には、

…翌日盡磔市。且使皆剖腹。刳其腎腸。因使醫與畫人。一一探索。繪以爲圖。

とあり、趙與時の賓退錄卷四にも、

慶曆間。廣西戮歐希範及其黨。凡二日。剖五十有六腹。宜州推官吳簡。皆詳視之爲圖。以傳于世。

とあり、さらに又李攸の宋朝事實卷十六には、

慶曆五年。…得希範等數十人。剖其腹。繪五臟圖。

とある。以上の諸記事を綜合すると、慶曆五年(一〇四五)に、宜州で逆賊歐希範等が刑戮された時、宜州推官の吳簡が醫師・畫工をつかわして、二日間にわたつて五十六人の腹を剖き、その解剖知見を圖に描き、歐希範五藏圖を作つたことが知られる。又、華佗內照圖の「喉嚨」の條に、「若吳簡序宋景所畫希範喉中三竅者非。」とある。この文によつて、吳簡が歐希範五藏圖に序文を作つたこと、醫師・畫工の中に、宋景が居たことが知られる。宋景は恐らくこの解剖に立合つた代表的な醫師であろう。

かくして作られた歐希範五藏圖は、宋及びそれ以後の諸藏書目錄には著錄されていない。しかし、趙希弁の郡齋讀書後志卷二に、楊介の存眞環中圖を著錄し、その解說に「比歐希範五藏圖。過之遠矣。」とあり、又北宋末に作られた沈括の夢溪筆談卷二十六「藥議」に、「世傳歐希範眞五臟圖。亦畫三孔。」とある。之によつて、歐希範五藏圖は、北宋・南宋の間のころに傳存し、それ以後消息を絕つたことが知られる。

然らば、歐希範五藏圖は、全く今日に殘存されていないか。この問題について考うべきは、我國の鎌倉末期に作られた梶原性全の頓醫抄・萬安方の二書である。梶原性全の經歷及びこの二書の著作過程、その傳本の諸系統等に就いては、石原明博士が日本醫史學雜誌第六卷第二號に「梶原性全の生涯とその著書」と題する論文を發表され、詳細に說明されるはずであるから、此所には省略する。

この頓醫抄卷四十四及び萬安方卷五十四はともに「五藏六府形併十二經脈圖」と題し、五藏六府圖が九圖、經脈圖が十二圖記載され、各圖ごとに片假名書きの圖說が附せられている。この頓醫抄と萬安方との兩卷の內容は全く同じ

であつて、萬安方巻五十四は、頓醫抄巻四十四をそのまま迷入したものである。頓醫抄巻四十四が書かれた時期は明らかでないが、頓醫抄そのものはおそくとも正安四年(一三〇二)に完成しているからして、巻四十四はそれ以前に書かれたものである。

頓醫抄巻四十四及び萬安方巻五十四の「五藏六府形」の圖は、その傳本の系統によつて、精粗の別・着色未着色の異があり、甚しいものは圖を省略し、さらに甚しいものは、この全巻を略省している。各傳本の系統を正し、性全の原本に復原する必要を痛感する。又上記したが如くに、萬安方巻五十四は、頓醫抄巻四十四を迷入したものであるから、行文の簡便上、以後はただ「頓醫抄」と記し、その内に萬安方をも包含することにする。

頓醫抄の「五藏六府形」の藏府圖に就いて見ると、第一圖と第二圖とはともに人體正面の藏府圖である。同一書に二つの正面圖があることは、いささか奇妙に感ぜられる。さらに第一圖と第二圖との間に若干の異同があり、特に第一圖には、喉に三孔が描かれ、第二圖には二孔しか描かれていない。この事からして、第一圖と第二圖とは、別の解剖の所見であり、その依據する原典が異るのではないかと思われる。次に第一圖の圖説を見ると、

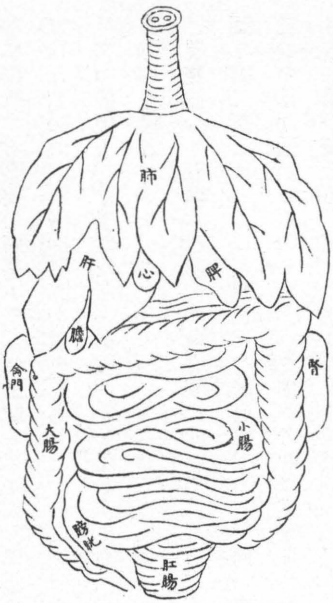
宜州ノ推官吳簡ト云人、二日ノ間ニ、歐希範ト云者ヲ初トシテ、五十六人ノ腹ヲ割テ、詳ニ五藏六府ヲ見ニ、喉ノ際ニ三孔アリ。三ノ孔ヲ各吹テ見ニ、皆イキトヲリテ不塞ラ。一ノ孔ハ食、一ノ孔ハ氣、又一ノ孔ハ水ノカヨウ孔也。

第8圖　歐希範五藏圖(頓醫抄正安本)

とある。この圖説からして、第一圖は歐希範五藏圖の系統の圖であることが知られる。上に引用した華佗内照圖の喉嚨の條及び沈括の夢溪筆談巻二十六藥議に、「歐希範五藏

圖には喉に三孔が描かれている」と言う記載に合致する。

歐希範五臟圖



第9圖　歐希範五藏圖(循經考穴編本)

又、作者の氏名は明らかでないが、明末に作られた循經考穴編附圖(後に詳述する)には藏府圖が載せられているが、その中に「歐希範五臟圖」と題記された一圖がある。この圖の藏府の形態・部位は、頓醫抄の第一圖と合致するが、ただ喉には二孔しか描かれていない。此は恐らく三孔を傳寫の間に二孔に誤つて訂正したものであろう。

又、武田藥工研究所架藏の「古代解剖圖」(假題)には、恐らく頓醫抄から轉寫したと思われる藏府圖の中に、喉に三孔のある一圖が載せられている。この圖には、「歐希範五藏圖」とは題されていないが、頓醫抄第一圖と一致するから、此もまた歐希範五藏圖の一部である。

然らば、頓醫抄第一圖及び圖說は、直接に歐希範五藏圖によつて書かれたものであるか、あるいは他書に轉載されたものによつてかかれたものか。この問題を明らかにし、兼ねて歐希範五藏圖の一斑を示すために、煩をいとわず、頓醫抄第一圖の圖說の全部を掲げることにする。

宜州ノ推官吳簡ト云人、二日ノ間ニ、歐希範ト云者ヲ初トシテ、五十六人カ腹ヲ割テ、詳ニ五藏六府ヲ見ニ、喉ノ際ニ三孔アリ。三ノ孔ヲ各吹テ見ニ、皆イキトヲリテ不塞ラ。一ノ孔ハ食、一ノ孔ハ氣、又一ノ孔ハ水ノカヨウ孔也。又肺ノ藏ハ蓮ノ華ノ如ニテ、八葉ニテ上ニ覆ヘリ。肺ノ下ニ心肝脾幷ヘリ。肝ノ下ニ膽アリ。脾ノ下ニ胃ノ府アリ。胃ノ下ニ小腸アリ。小腸ノ下ニ大腸アリ。小腸ノ中ハスキトヲリテ潔ヨクシテ物ナシ。大腸ノ中ハ滓穢アリ。又大腸ノ傍ニ膀胱アリ。又左ニ腎アリ。右ニ命門アリ。但シ心ノ大ナル者有。小ナル者有。四方成者有。長キ者有。曲ナル者有。直ナル者有。穴アル者有。穴無者有。人毎ニ替レリ。希範カ心ハ卽紅ニシテサカレ

リ。今畫ニ書カ如シ。又肝ニモ一重ナル者有。二重ナル者有。三重ナル者有。腎ハ一ハ肝ノ右ニ少シ下ニサカリテ有。一ハ脾ノ左少シ上リテ有。脾ハ卽チ心ノ左ニ有。又蒙趕ト云人、咳嗽ヲ病キ、故ニ肺損シテ黑シ。歐詮ト云者ハ、幼ヨリ目ノ病有、故ニ肝ニ白點アリ。

已上眞向ノ圖ニ依テ赤シヲワリヌ。又但シ喉ニ三ノ孔有ト云叟、或書ニ謗レリ。水ト食トハ一ノ喉ヨリ入ナリ。氣ノカヨウ孔ヲハ咽ト云。此咽喉二ノ孔ノミ可有。三トハ難言ト云ヘリ。此義最吉歟

とある。今この圖說の來源に就いて考えると、我國の僧幻雲の史記標注所引の楊介の存眞圖に、

楊介曰。宜賊歐希範被刑時。州吏吳簡。令畫工就圖之以記。詳得其狀。吳簡云。凡二日剖歐希範等五十有六腹。皆詳視之。喉中有竅三。一食。一水。一氣。互令人吹之。各不相戾。肺之下。則有心肝膽脾。胃之下。有小腸。小腸下。有大腸。小腸皆瑩潔無物。大腸則爲滓穢。大腸之傍。有膀胱。若心有大者。小者。方者。長者。斜者。直者。有竅者。無竅者。了無相類。唯希範之心。則紅而硾。如所繪焉。肝則有獨片者。有二片者。有三片者。腎則有一在肝之右微下。一在脾之左微上。脾則在心之左。至若蒙幹。多病嗽。則肺損膽黑。歐詮少得目疾。肝有白點。此又別內外之應。其中黃漫者脂也。

とある。この楊介の存眞圖の文と、上記の頓醫抄第一圖の圖說の文とを對比すると、圖說の文は、楊介の文の「吳簡云」以下をほとんど逐次的に直譯し（圖說の「又肺ノ藏ハ蓮ノ華ノ如ニテ、八葉ニテ上ニ覆ヘリ」に該當する漢文は史記標注にはない。恐らく誤脫したものと思われる）その最後に性全が華佗內照圖によつて「喉ノ際ニ三孔アリ」を批判した文を附記したものである。この事實からして、頓醫抄の第一圖及び圖說は、楊介の存眞圖に依據してかかれたものであること、及び楊介の存眞圖にも、歐希範五藏圖の正面圖とその圖說とが附載されていたことが推定される。案ずるに幻雲は室町末期の僧である。この幻雲が楊介の存眞圖を引用していることは、性全の時にこの存眞圖が既に我國に將來されていたことを裏書するものである。又頓醫抄第二圖以下は、楊介の存眞圖によつたものであるが、このことに關しては、次の「楊介の存眞環中圖」の條で述べる。

上に引用した頓醫抄第一圖の圖說には、「希範ヵ心ハ卽

紅ニシテサカレリ。今畫ニ書カ如シ」とあり、楊介の存眞圖には「唯希範之心。則紅而硾。如所繪焉。」と言つている。この文からして、頓醫抄第一圖は、歐希範その人の正面の解剖圖であることが知られる。

又、頓醫抄第一圖には、例えば岡本玄治獻上本の系統に屬する諸書では、その藏府に五行說で配當される色が着色され、正安本の系統に屬する諸書では、全く彩色されていないが如くに、その系統によつて、着色するもの、着色しないものがある。然らば、歐希範五藏圖の原本には、藏府の實質の色が着けられていたか、五行配當による色が着けられていたか、あるいは何の色も着けられていなかつたかが問題となる。前に引用した趙與時の賓退錄には、吳簡が解剖圖を作つた經緯を述べ、その最後に、

王莽誅翟義之黨。使太醫尙方與巧屠。共刳剝之。量度五藏。以竹筳導其脈。知所終始。云可以治病。然其說今不傳。

と王莽の故事を引用している。由來、北宋末の醫學は、醫學目的によつて人體を解剖する程度までに實證的な氣運が芽生えていたとは言え、その醫學の主流をなすものは、やはり中國傳統醫學であつた。從つて歐希範解剖の主たる目的も、王莽の時と同じく經絡・五藏六府の系屬關係の調査がその中心であつたと推定される。この事は、次に述べる楊介の存眞環中圖に、經脈・藏府の系屬に重點を置いた圖・圖說が載せられていることによつて裏書きされる。この中國傳統醫學の經脈說は、陰陽五行の相生・相剋說によつて展開されるものである。從つて、存眞圖から轉載された頓醫抄第一圖の歐希範五藏圖には、五行說によつて五藏六府に配當される色が彩色されており、さらに歐希範五藏圖原本にも、各藏府に五行說による色が、彩色されていたことが一應は疑われる。しかし、その決定には、さらに後日の研究の必要が認められる。

今日に殘存する歐希範五藏圖は、ただ歐希範正面圖の一圖に過ぎないが、「凡そ二日にわたり五十六人を解剖した」こと、及び「楊介の存眞圖に多數の解剖圖がある」ことを併せ考えると、歐希範五藏圖の原本には、相當に多くの藏府圖があつたものと推定される。それでも頓醫抄第一圖及び圖說が存在することによつて、歐希範五藏圖の一斑を窺い得るのは、誠に幸と言うべきである。その解剖所見には、

例えば「喉に三孔あり」とする如き誤謬もあるが、それでも動物的・想像的な要素が多分にある中國傳統醫學の解剖知識に比較すると、科學的・實證的なものとすべきで、中國解剖學に新生面を拓いたものと言うことができ、中國解剖史學上注意すべきものである。

二　楊介の存眞環中圖

我國の僧幻雲の史記標注に所引の楊介の存眞圖には、

楊介曰…宜賊歐希範被刑時。州吏吳簡。令畫工就圖之以記。詳得其狀。或以書考之。則未完。崇寧中。泗州刑賊於市。郡守李夷行。遣醫幷畫工往觀。決膜摘膏。曲折圖之。得盡纖悉。介取以校之。其自喉咽而下。心肺肝脾膽胃之系屬。小腸大腸兩腎膀胱之營壘。其中經絡聯附。水穀泌別。精血運輸。源委流達。悉如古書。無少異者。

と述べている。此の文は、その內容から見て、楊介の存眞圖の自序と思われる。又史記標注所引の政和三年（一一一三）の洛陽の賈偉節の存眞環中圖序には、

楊君介吉老。以所見五藏之眞。繪而爲圖。取煙蘿子所書。條折而釐正之。又益之十二經。以存眞環中名之。

とあり、さらに又、趙希弁の郡齋讀書後志卷二に、「存眞環中圖一卷」を著錄し、

崇寧間。（一一〇二～一一〇六）泗州刑賊於市。郡守李夷行。遣醫幷畫工往觀。決膜摘膏肓。曲折圖之。盡得纖悉。介校以古書。無少異者。比歐希範五藏圖。過之遠矣。實有益醫家也。

と解說している。この解說は上記の楊介の自序を要約し、それに自己の見解を附記したものである。

上記の諸條を綜合すると、崇寧年間（一一〇二～一一〇六）に、安徽泗州で賊が刑戮された時、歐希範五藏圖を補正する目的で、郡守の李夷行が楊介等の醫師及び畫工をつかわして、詳細に解剖を觀察せしめ、藏府の部位・形像・系屬關係等を圖に描かせた。後に楊介が之を煙蘿子の書いた藏府圖によつて校訂し、政和三年（一一一三）に、十二經脈圖と合せて編纂し、「存眞環中圖」と名付けたのである。幻雲の史記標注には、「存眞。五藏六府圖也。環中。十二經圖也。」と注記してある。「存眞」とは五藏六府圖であり、「環中」とは十二經脈圖であり、この二書が合編されたからして、「存眞環中圖」と名付けられたのである。

この文中の「煙蘿子」とは如何なる人であるかは未詳である。我國の有林の福田方の卷十二「五藏論略訣」には、唐の甄權の文と併んで「煙蘿子」の文が引用されている。又賈偉節の序の「煙蘿子所畫」を、楊介の自序、趙希弁の解說では、「古書」としている。從つて煙蘿子の書は、相當に舊い藏府圖であることが推定される。恐らく唐時代に作られたものであろう。唐時代から北宋の歐希範の解剖までには醫學の目的による人體解剖が行われた形迹はない。從つてこの煙蘿子の藏府圖は、神農明堂圖等の如き、中國傳統醫學による藏府圖であつて、人體解剖による楊介の存眞圖とは、當然その趣を異にするはずである。しかるに楊介の自序に、「悉如古書。無少異者。」と言つておるのは、了解に苦しむ所である。文獻には見えないが、歐希範の解剖以前に人體解剖が行われ、それによつて煙蘿子の藏府圖が作られたと解するよりも、むしろ楊介が自己の存眞圖を權威づけるために、古典主義の立場からして、「悉如古書。無少異者。」と誇張して言つたと解する方が、むしろおだやかであると思われる。

又楊介その人に就いては、宋の王明清の揮塵餘話卷二の「李氏醫腸癰」の條に、「楊介吉老者。泗州人。以醫術聞四方。」とあり、宋史藝文志には、「楊介　存四時傷寒總病論六卷」が著錄されている。楊介は字は吉老、安徽泗州の人、北宋末から南宋のはじめにかけて活躍し、傷寒に精しかつた醫師である。

楊介の存眞環中圖は、明の葉盛の菉竹堂書目、明末の毛扆の汲古閣毛氏藏書目等に著錄されているから、明末のころには傳存していたことは明らかである。しかしそれ以後の消息は詳らかではない。

しからば、楊介の存眞環中圖は、今日に於いて全くその迹を絕つてしまつたか。この問題に就いて考うべきは、梶原性全の頓醫抄卷四十四・萬安方卷五十四(上記したが如く、萬安方卷五十四は、頓醫抄卷四十四を迷入したものであるから、行文の簡便上、「頓醫抄」と書して、その中に萬安方をも含める)の「五藏六府形幷十二經脈圖」である。この頓醫抄卷四十四の一卷は、「五藏六府形圖」と「十二經脈圖」との二篇を合したもので、「五藏六府形圖」には、第一　正面圖(歐希範)、第二　正面圖、第三　背面圖、第四　右橫向圖、第五　五藏系通於心。心通五藏系圖、第六　氣海膈膜圖、第七　脾

胃包系圖、第八　闌門水穀泌別圖、第九　右腎命門主司精血。并大小腸膀胱之系圖　の九圖と各圖の圖說があり、「十二經脈圖」には、手太陽小腸府圖以下の十二經脈の圖とその圖說とがある。

上の「歐希範五藏圖」の條で詳述したが如くに、頓醫抄第一圖の歐希範正面圖及びその圖說は、楊介の存眞圖から性全が轉載・直譯したものである。從つてその第二圖以下の圖と圖說とは、やはり楊介の書に依據して轉載・直譯されたものであることが類推される。又、上記したが如くに、存眞環中圖は泗州の賊の解剖圖と十二經脈圖とを合篇して作られたもので、「存眞」とは解剖圖、「環中」とは十二經脈圖を指すものである。しかるに頓醫抄の十二經脈圖の第一圖に「環中圖」の三字を題記するものがある。以上の二理由からして、頓醫抄卷四十四の全卷は、性全が楊介の存眞環中圖の全部を、轉載・直譯したものと考えられる。

この外に、楊介の存眞圖の藏府圖を襲用しておると思われるものに、宋の朱肱の內外二景圖・華佗內照圖・明の施沛の藏府指掌圖書・王文潔の太上天寶張神仙脈訣玄微綱領宗統(以後は、「脉訣宗統」と簡稱する)の四部の書がある。

朱肱の內外二景圖・華佗內照圖は、それぞれ次項に詳述するが如くに、その藏府圖は、ともに楊介の存眞圖によつたものである。

又、施沛の藏府指掌圖書は、後に詳述するが如くに、明の崇禎九年(一六三六)のころに作られた書であるが、この書には、多くの藏府圖が載せられている。施沛はその卷首の「凡例」に、その藏府圖の來源を記し、

世傳有內照圖。謂爲漢元化所作。其論理人形。列別藏府。頗爲簡明。但相傳既久。未免爲後人所亂。余得宋時楊介所繪存眞圖原本。及王海藏大法等書。互相參攷。而一軌于靈素。纂爲此編。

と述べている。內につき、「王海藏大法」とは、元の王好古の醫家大法を指すものである。醫家大法の藏府圖は後に詳述するが、施沛の藏府指掌圖書の內から、醫家大法の藏府圖を除去した殘餘の藏府圖は、施沛が華佗內照圖に依據して轉載し、更にそれを楊介の存眞圖原本によつて、校訂したものと言うことになる。上記したが如くに、諸家の著錄目錄によつて、存眞圖が明末に傳存していたことが立證されるからして、施沛の「余得宋楊介所繪存眞圖原本」な

る「凡例」の語は、信用して然るべきものと思われる。

又、王文潔の脈訣宗統は、明の萬暦二十七年(一五九九)の頃に作られた書で、その藏府圖は相當にくずれている。その藏府圖の來源は明記されていないが、その藏府圖は、上記の藏府指掌圖書に記載されている存眞圖から轉載した藏府圖と全く一致するからして、此も亦存眞圖に依據して描かれた藏府圖であることが知られる。

上記したが如くに、頓醫抄卷四十四は、楊介の存眞環中圖の全部を轉載・直譯したものであつて、存眞環中圖の復原の根本資料となるものである。しかるに、現存する頓醫抄には、上記したように、諸種の系統に分れており、かつ各系統の間には、後人の傳誤・校改により、相當に多くの異同がある。故に存眞環中圖の復原の第一工作としては、頓醫抄の各系統の書を校對し、先ず頓醫抄卷四十四そのものを復原すべきである。この頓醫抄の復原工作が終つて、しかる後に上記の二景圖・內照圖等の四部の書と對比して、はじめて存眞環中圖の復原は可能となるのである。筆者は現在、存眞環中圖の復原を意圖しておるものであるが、次に頓醫抄卷四十四に見られる重な誤謬の數例を擧げ、頓醫抄を利用しての存眞環中圖復原の一斑を示すことにする。

(1)頓醫抄各系統間の異同　頓醫抄には、種々雜多の書が多く現存しておるが、これを系統別に整理すると、數系統に歸屬することができる。この頓醫抄(萬安方を含む)の系統に就いては、石原明博士が日本醫史學雜誌第六卷第四號に、「梶原性全の生涯とその著書(Ⅱ)」なる論文を發表して詳述されるはずであるから、ここでは省略する。その各系統の間には、同じ頓醫抄かと疑れる程の異同があり、藏府圖に於いても、圖說に於いても、滿目皆これである。これを一々例證することは煩にたえない所であるから、次にその著顯な一例を擧げておく。

岡本玄治獻上本の系統・正安本の系統　(原本はともに內閣文庫架藏)の諸書には、藏府圖と圖說とが記載されているが、內閣文庫藏德川初期寫本(一九函。三二〇〇八號)の系統の諸書には、例えば第一圖に「正面內相圖」の如くに、藏府圖の題名をかき、その藏府圖を省略し、その圖の部分を空白にしており、又享祿本の系統(原本は內閣文庫架藏)の諸書は、その卷四十四の第一行に「五藏六府形」、第二行に「十二經脈圖」、第三行に「右兩圖見覆載萬安方五十四卷　略之」

と書して、藏府圖及び圖說は全く省略されてしまつている。又岡本玄冶獻上本と正安本との兩系統の諸書には、藏府圖及び圖說が載せられているが、岡本玄冶獻上本の系統の諸書には、各藏府に五行說によつて配當される色が彩色されているが正安本の系統の諸書には何ら彩色されてはいない。

上記したが如くに、各系統の間に異同が多いが、同一系統の書の間にも、傳寫による異同も少くはない。多くの傳本を綜合して、一是に歸すべき必要を痛感する。

(2)後人の校改による誤謬　頓醫抄には後人が自己の意により、または他書によつて校改したがために生じた誤も少くはない。今その一例を擧げる。岡本玄冶本の系統の諸書では、第一圖歐希範正面圖には、「肝を右、脾を左」に描いてあるが、第二圖以下では、「肝を左に、脾を右」に改めている。(第三報第一圖・本章第十一圖の附圖を參照されたい)正安本の系統の諸書では、第一圖以下皆「肝を右、脾を左」に描いてある。

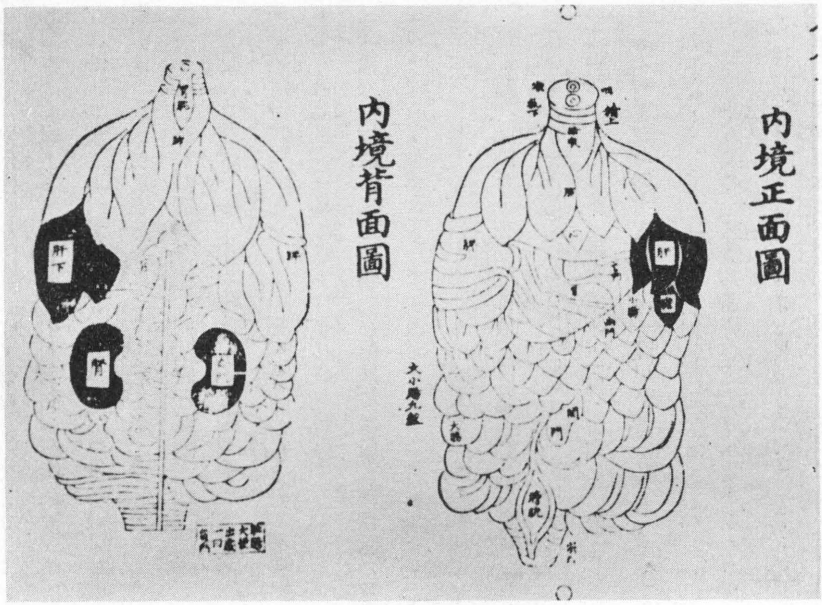
頓醫抄第五圖の「五藏系通於心。心通五藏系圖」の圖說に、「肝ノ系ハ脾ノ下ヨリ右ノ脇ヲトヲリ」とあるから、性全の頓醫抄原本は、「肝を右、脾を左」に描かれていたことが推定される。楊介の存眞圖の原本によつて校訂したと稱する施沛の藏府指掌圖書には、「肝を右、脾を左」に描かれ、王文潔の脈訣綜宗も同じく「肝を右、脾を左」にしている。

この外、後述するが如く、存眞圖の藏府圖を踏襲した內外二景圖の藏府圖を轉載した明の循經考穴編附圖、又存眞圖の藏府圖を用いた華佗內照圖は、いずれも「肝を右、脾を左」にしている。特に華佗內照圖は「肝足厥陰經」の條に、

以今之臟象校。則肝在右脇右腎之前並胃。而胃與小腸之右外。

と述べているから、その所據した圖は、「肝を右、脾を左」に描かれていたことが知られる。以上により、楊介の存眞圖の原圖は、「肝を右、脾を左」に描かれていたこと、及び頓醫抄の原圖も、「肝を右、脾を左」に描かれていたことは明らかである。

「肝を左、脾を右」に改めるものが生じた理由に就いては、素問禁刺論には「肝生於左」とある。後人はこの文に

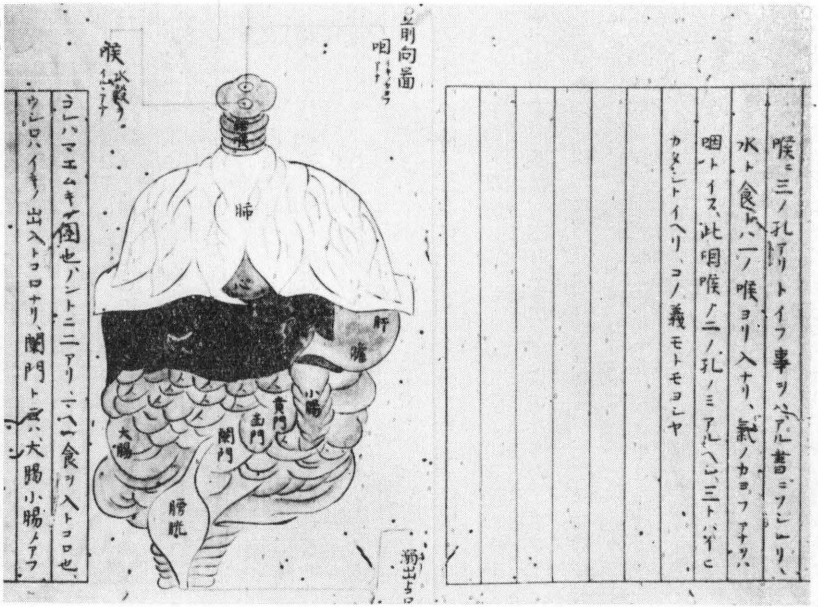


第10圖　李駉の難經註義圖序論　正背面圖（道藏本）

より、「肝を右、脾を左」に描く頓醫抄の圖は誤であると誤認して、肝と脾との左右を置きかえたものと推定される。

この誤改は我國で行われたのみではなく、中國にても行われている。道藏太玄部に収められている「黄帝八十一難經註義圖序論」なる書は、李駉（字は子桂）が、宋の咸淳五年（一二六九）に作つた書であるが、その卷首に、「内境正面圖」・「内境背面圖」・「内境側面圖」の三圖が附載されている。内につき、「内境側面圖」は、道教教義による觀念的な圖であるが、他の二圖は恐らく楊介の存眞圖によつたものと思われる。しかしこの二圖はともに、「肝を左、脾を右」に描いておる。此も素問の「肝生於左」によつて校改したものと思われる。

(3)梶原性全の誤解による誤謬　岡本玄冶本・近世初期寫本の系統の諸書には、頓醫抄第二圖の正面圖の圖說に、「ノントニ二アリ。前ハ食ヲ入ルトコロ也。後ハ氣ノ出入スルトコロナリ」と言う一文があるが、正安本の系統の諸書にはこの一文はない。その圖には、岡本玄冶本、正安本の二系統の諸書には、喉に二つの孔を前後に描き、前孔に「喉水穀ヲ入ル穴」、後孔に「咽　氣ノカヨウ穴」との說明が



第11圖　梶原性全の頓醫抄（岡本本）　前向圖

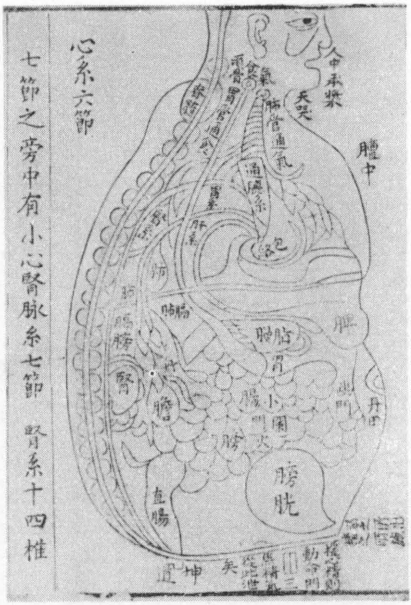
つけられている。

楊介の存眞圖原本によつて校訂したと言う施沛の藏府指掌圖書及び王文潔の脈訣宗統の二書には、その正面圖・背面圖に喉に二つの孔が前後に描かれているが、「喉」・「咽」の注は附けられていない。その「肺已下右側可見心系。系于脊髓。下通于腎圖」では、前孔には「喉」、後孔には「咽」と説明が書かれている。存眞圖によつた華佗內照圖には、その「咽門」の條に、「以今臟象。咽在喉之後」と言つている。以上によつて、楊介の存眞圖は、今の頓醫抄の圖と同じく、前孔を「喉」、後孔を「咽」としていたことは明らかである。

由來、中國醫學に於いては、例えば華佗內照圖の「喉嚨」の條に、「喉中爲息道。咽中下水穀。」とあるが如くに、「喉」を氣管、「咽」を食道とされている。しかるに、頓醫抄では第二圖の正面圖では、「喉　水穀ヲ入ル穴」、「咽　氣ノカヨウ穴」と説明を附し、又第一圖の圖説に附記された性全の評語にも、「水ト食トハ一ノ喉ヨリ入ナリ。氣ノカヨウアナハ咽トス」とある。之によつて性全は、食道であるべき「咽」をば氣管、氣管であるべき「喉」をば食道と

誤解していたことが知られる。従つて頓醫抄第二圖の圖說の「ノントニ二アリ。前ハ食ノ入ルトコロ也。後ハ氣ノ出入スル所ナリ」は、性全が「咽」・「喉」を誤解していたために生じた誤譯と言うことになる。正安本の系統の諸書にこの圖說がないのは、「前は氣管、後は食道」とする中國醫學に合致しないのに氣付き、意識してこの圖說を削去したものと推定される。

(4)性全の依據した存眞環中圖の誤謬　又、性全自身の誤ではないが、性全が依據した存眞環中圖そのものの誤謬・誤脫と思われるものも相當に多いことが想像される。下に詳述するが如く、華佗內照圖・內外二景圖の藏府圖は、それぞれ楊介の存眞圖によつたものであり、又明の循經考穴編附圖の藏府圖は、內外二景圖によつたものであり、上記したが如く、明の施沛の藏府指掌圖書、王文潔の脈訣宗統はともに楊介の存眞圖によつたものである。この華佗內照圖以下の四書には、いずれも「藏府內景圖」が載せられている。このことから考えると、楊介の存眞環中圖の原本には、この一圖があつたことが推定される。しかるに頓醫抄の各系統の諸書には、この一圖を載せているものはない。



第12圖　華佗內照圖　藏府內景圖

從つて性全の頓醫抄原本には既にこの一圖がなく、さらに進んで、性全が依據した存眞環中圖そのものに、この一圖がなかつたことが推定される。恐らく傳寫の間に誤脫したものであろう。

又、楊介の存眞圖によつた藏府指掌圖書、脈訣宗統の二書には、いずれも「肺已下左側可見脾胃之所居圖」の一圖がある。この圖は、その圖柄等からして、楊介の存眞環中圖の系統に屬する藏府圖と思われるが、存眞圖を直接または間接に襲用した頓醫抄・華佗內照圖・循經考穴編附圖にはこの一圖が無い。從つて、この一圖が存眞環中圖の原有

第13圖　施沛の藏府指掌圖書　肺巳下左側可見脾胃之所居圖

のものであると斷定するには、いささか躊躇が感ぜられる。しかし楊介の存眞環中圖の原本には、「肺右側圖」があることが、頓醫抄等からして推定される。既に「肺右側圖」があれば、之に對する「肺巳下左側可見脾胃之所居圖」があつても然るべきものである。若しこの推測が定しければ、頓醫抄の依據した存眞環中圖には、この一圖が誤脫していたのみならず、華佗內照圖・內外二景圖が依據した存眞環中圖にも、この一圖が誤脫していたことになる。しかし結論を保留して、さらに後考を俟つことにしたい。

上記したが如く、今に傳存する頓醫抄卷四十四には種々の闕點・混亂はあるが、それでも楊介の存眞環中圖の全貌を傳える唯一の書で、解剖史學上貴重な文獻であり、その復原が要望される。筆者は內閣文庫架藏の各系統の頓醫抄・萬安方を主軸とし、之に坊間に傳わる諸本を參用し、さらに華佗內照圖・藏府指掌圖書・脈訣宗統・循經考穴編附圖等の文獻に對照して、その復原を進めている。後日稿を改めて執筆し、大方諸賢の教正を得たいと思う。

三　朱肱の內外二景圖

清初の錢曾の讀書敏求記卷三醫家類に、「內外二景圖一卷」を著錄し、

朱肱吳興人。登進士科。深於醫。政和八年。取嘉祐中丁德用畫左右手足井榮兪經合原。及石藏用畫任督二脈十二經流注。楊介畫心肺肝膽脾胃之系屬。大小腸膀胱之營壘。校其訛舛。補以鍼法。名曰內外二景圖。此係舊抄。復以朱界其穴而標之。未知有刊本行世否。

と解說している。之によつて、內外二景圖なる書は、嘉祐年間(一〇五六～一〇六二)に丁德用が畫いた經絡孔穴の圖、

石藏用の書いた任督二脈十二經の圖、楊介の書いた藏府圖をば取り、その誤謬を訂正し、さらに自己の鍼法を增補し、政和八年(一一一八)に朱肱が合編して作つた書であることが知られる。宋史藝文志には、「朱肱內外二景圖三卷」を著錄している。宋志の所謂「三卷」は、丁德用・石藏用・楊介のそれぞれの圖を一卷として數えたものと思われる。

この書の著者朱肱は、字は翼中、號は無求子、浙江吳興の人。北宋末から南宋にかけて活躍した名醫で、奉議郎醫學博士を授けられた。特に傷寒に詳しく、傷寒百問、南陽活人書等の著作がある。又文中の丁德用は「難經補注」(嘉祐七年—一〇六二—に成る)の作で有名である。石藏用に關しては、詳らかにしない。

又上記の錢曾の解說文中の「取楊介畫心肺肝膽脾胃之系屬。大小腸膀胱之營壘」の一文は、楊介の存眞環中圖自序(幻雲の史記標注所引)の文によつたものである。錢曾は恐らく朱肱の內外二景圖自序によつて、かくの如くに書いたものと思われる。從つて朱肱が內外二景圖に採入した楊介の藏府圖は、存眞圖であることは辨ずるまでもなかろう。

この內外二景圖は、明末の趙琦美の脈望館書目、撰人未詳の近古堂書目、淸初の錢曾の讀書敏求記に著錄されているから、明淸の間まで傳存していたことは明らかであるが、その後は全く消息を絕つてしまつた。

この書の存佚に關して注意すべきは、循經考穴編である。この書には序跋もなく、又著者名も書かれていないが、その引用書から推すと、明末の萬曆末年(一五七三〜一六一九)ごろの作であろう。この書は上下二冊からなり、一九五五年に上海の群聯出版社が出版してから、はじめて世に紹介された書である。

この循經考穴編には、「附圖」として、第一　五臟正面圖、第二　五臟背景圖、第三　臟府內景圖、第四　氣海膈膜圖、第五　關門水穀泌別圖、第六　歐希範五臟圖、第七　肺右側圖、第八　右腎命門之圖、第九　五臟總系於心圖の九つの藏府圖があり、その後に經絡孔穴圖の六圖が收められている。圖中に簡單な說明文があるのみで、別に圖說はない。

今この附圖の藏府圖を頓醫抄のそれと比較すると、頓醫抄には、「臟腑內景圖」がなく、循經考穴編附圖には、頓醫抄第七圖の「脾胃包系圖」がない。その他、例えば「歐

希範五臓圖」は、頓醫抄では喉に前後に三孔が描かれているが、循經考穴編では、喉に左右に二孔が描かれているが如き、細部での異同はあるが、全體として見る時は、ほぼ合致し、同一系統に屬す藏府圖と言うことができる。

又、施沛の藏府指掌圖書を循經考穴編の附圖に對比すると、藏府指掌圖書には「歐希範五臓圖」はなく、「脾胃包系圖」、「肺已下左側可見脾胃之所居圖」の二圖があり、又華佗內照圖と對比すると、華佗內照圖には「歐希範五臓圖」はなく、「脾胃包系圖」がある。かくの如くに此の三書の間に、藏府圖の出入が若干あり、かつ各圖の細部に於いては、異同はあるが、全體として見る時は、やはり同一系統の藏府圖と言うことができる。

上記の頓醫抄等の諸書は、楊介の存眞圖の藏府圖に依據したものであるから、此と合致する循經考穴編附圖の藏府圖も、存眞圖の系統に屬すものであることは言うまでもない。

然らば循經考穴編附圖の直接の祖本は、如何なる書であるか。

循經考穴編には、朱肱の內外二景圖の文が七條引用されているが、存眞環中圖、華佗內照圖の文は一條も引用されていない。上記したが如くに、內外二景圖の藏府圖は存眞圖によつたものであり、かつこの內外二景圖は、明清の間まで傳存していた。之を上記のことに併せ考えると、循經考穴編附圖は、內外二景圖の藏府圖を直接の祖本としたものであることが推定される。

第14圖　循經考穴編　關門水穀泌別圖

さらに又、循經考穴編附圖には、例えば第五圖に「小腸下口。大腸上口。關門在焉。爲水穀泌別之關。清滲膀胱。

濁歸大腸。」とか、第七圖に「肺附于第三椎。下有膈膜。與脊脇周廻相著。不使濁氣上薫。」とかの如き、詳細な説明が圖に記載されている。楊介の存眞圖に直接依據した藏府指掌圖書及び脈訣宗統・頓醫抄・華佗內照圖には、圖中にかかる詳細な説明は書かれていなく、圖の題名・藏府の名稱が簡單に記されているに過ぎない。從つて循經考穴編附圖は、朱肱の內外二景圖によつたものと思われ、圖中の詳細な説明も、內外二景圖の原有のものと思われる。

以上により、循經考穴編附圖は、內外二景圖を直接の祖本として描かれた藏府圖であると推定される。若し然らば附圖中の經絡孔穴の六圖も、やはり內外二景圖に依據したものではなかろうか。

上記したが如くに、頓醫抄・華佗內照圖・藏府指掌圖書・脈訣宗統等には、いずれも「脾胃包系圖」があるからして、楊介の存眞圖の原本には、この一圖が存したことは疑を容れない。內外二景圖は、存眞圖を襲用したものであるから、當然この一圖があつたことが推定される。しかるに循經考穴編附圖にはこの一圖がないのは、恐らくこの一圖を誤脫したものと思われる。

次に朱肱の內外二景圖の圖説と、楊介の存眞圖の圖説との關係に就いて考えよう。內外二景圖の圖説は、ほとんど亡佚に歸しているが、幸にも循經考穴編に七條が引用されて、その一斑を知ることができる。循經考穴編の「手少陰之經」の條に、

二景圖曰。心系有二。一則上與肺相通。而入肺兩大葉間。一則由肺葉而下。曲折向後。並脊膂細絡相連。貫脊髓。與腎相通。正當七節之間。蓋五臟系皆通於心。而心通五臟系也。

と內外二景圖を引用している。これに該當する頓醫抄の圖説には、第五圖の「五藏系通於心。心通五藏系圖」に

是ハ五藏ミナ心ノ藏ヨリミチヲ通シ、心又五藏ニ通ス。…心ノ系ハ上ミ肺ニカヨヒテ、肺ノ兩葉ノナカヨリウシロニムカヒテ、脊ヲトホリテ腎ニツキ、腎ヨリシテ膀胱ニイタル。膀胱トホソキ筋トツレテ溲便ノトコロヘユク也。

とある。今この二つの圖説を比較すると、頓醫抄には、內外二景圖の「一則上與肺相通。而入肺兩大葉間。」に該當する圖説がない。案ずるに、頓醫抄第五圖は、「五藏系通

於心。心通五藏系圖」を圖の名としている。若し頓醫抄の如くに、心から肺に通ずる系の圖説がなければ、心は四藏と通ずることになり、圖名と相應じなくなる。從つて、頓醫抄の圖説には、この一條が誤脱していることが想定される。華佗內照圖もその第三圖の「肺側圖」の圖説に、心から肺に通ずる系が詳説されている。今この問題を別として、心から腎に通ずる兩書の圖説を比較すると、その內容は大體に於て同じであるが、內外二景圖の圖説は、頓醫抄のそれよりも詳細かつ整備したものである。之によつて、內外二景圖の圖説は、楊介の存眞圖の圖説に依據しながらも、朱肱がそれに手を入れて、增補改編したものであることが知られる。これと同樣のことが、循經考穴編所引の他の內外二景圖の文からも例證できるが、繁雜にわたるから省略する。

以上を要するに、內外二景圖の藏府圖は、楊介の存眞圖を直接の祖本とするものであり、循經考穴編附圖に轉載されて今に殘存している。圖説は、朱肱が存眞圖の圖説を利用し、それをさらに增補整備したものと言うことになる。

四　華佗內照圖

現在世に行われている華佗內照圖は、明の胡文煥が萬曆中葉(一五七三～一六一九)のころに刊行し、百家名書・格致叢書に收めた書である。この書は寶永八年(一七一一)に我國で重刊されている。この胡氏刊本は、「新刻華佗內照圖」を題名とし、六篇から成る一卷の書で、卷末には「婦人產育名方幷小兒名方」及び「運氣節要」が附刻されている。

華佗內照圖では、藏府圖及び圖説は、第一「明畫圖之象篇」に收められている。第一　正面圖、第二　背面圖、第三　肺側圖、第四　心氣圖、第五　氣海膈膜圖、第六　脾胃包系圖、第七　闌門水穀泌別圖、第八　命門大小腸膀胱系圖、第九　藏府內景圖の九圖及び圖説がある。

由來、この華佗內照圖の性格・成立過程に就いては、究明すべき種々の問題がある。本稿に於いては、その藏府圖及び圖説を中心として、この問題を考えることにする。

この書は「華佗內照圖」を書名として、後漢の名醫華佗の名が書名に冠せられ、恰も華佗に直接關係のある書の如くに名付けられている。しかし、胡氏刊本の華佗內照圖

（以後は「今の傳本」と略稱する）に就いて見ると、藏府圖の圖說に、「若吳簡序宋景所畫希範喉中三竅者非」とか、「於歐本則非」とかの如き、歐希範五藏圖に關する記文があるからして、藏府圖及び圖說に關する限りに於いては、歐希範が刑戮された宋の慶曆五年（一〇四五）以後に作られたか、又は改編增補されたもので、華佗とは直接の關係のないものと思われる。

又、宋の崇文總目には、「華佗玄門脈訣內照圖一卷」が著錄されている。崇文總目は宋の景祐元年（一〇三四）に王堯臣等が勅命によつて編纂に着手し、慶曆元年（一〇四一）に完成した祕庫の藏書目錄で、歐希範の刑戮よりも四年前のものである。上記したが如くに、今の傳本の圖說には、歐希範五藏圖に關する記文があり、その藏府圖は楊介の存眞圖に一致する（後に詳述する）からして、今の傳本の藏府圖と圖說とは、崇文總目に著錄される「華佗玄門脈訣內照圖」原有の藏府圖及び圖說そのものでないことは明白である。

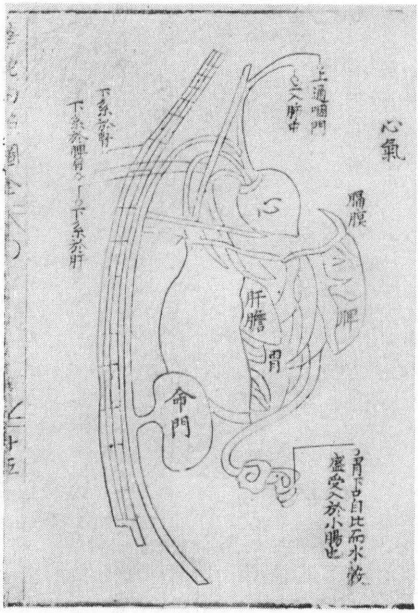
又、多紀元胤はその醫籍考卷十六「華氏佗　玄門脈訣內照圖」の條に、

崇文總目一卷。存。按是書。胡文煥所刻。題曰。華佗內照圖。文字譌脫。殆不可讀。友人奈須玄蟲恒德。所借一本。題曰玄門脈訣內照圖。卷末云。紹聖二年三月日。祕閣祕書省正字臣沈銖校書。據此崇文總目所載。卽此書也。首篇有欲知五藏之病。先須識脈訣語。是所以名脈訣歟。卷後更有新添長葛禹講師益之晉陽郭教授之才經驗婦人產育小兒方。運氣節要。

と解說している。之によつて、北宋の紹聖二年（一〇九五）に沈銖が「華佗玄門脈訣內照圖」を校訂したことが知られる。沈銖は字を子平と言い、王安石に學んだ人で、政治的にも活躍した學者である。この沈銖が校訂した「華佗玄門脈訣內照圖」なる書の存否を詳らかにし得ないが、多紀元胤の解說によると、この書には、今の傳本と同じく、卷首に「凡欲知五藏之病。先須識脈訣。」（今の傳本は「訣」の字がない）なる文があり、又卷尾の附錄も、その題名からして、今の傳本と同じものであると思われるからして、沈銖の校訂した華佗玄門脈訣內照圖と今の傳本との間には、肉身的な關係のあることが想定される。

沈銖がこの書を校訂した紹聖二年（一〇九五）は、歐希範

が刑戮された慶暦五年(一〇四五)よりは五十年後であり、李夷行が泗州で賊を刑戮した崇寧年間(一一〇二～一一〇六)よりは約十年前である。今の傳本の圖說に歐希範五藏圖に關する記文があることからして、沈銖が崇文總目著錄の華佗玄門脈訣內照圖を校訂するに際して、歐希範五藏圖によつて、その原有の藏府圖及び圖說を校改し、今の傳本はこの沈銖が校改した本を祖本とするものではないかと言う疑問が當然に生じる。次にこの疑問を檢討してみよう。



第15圖　華佗內照圖心氣圖

今の傳本には、上記した通りの藏府圖が九圖とその圖說とがある。先ず藏府圖を、頓醫抄・藏府指掌圖書・脈訣宗統・循經考穴編附圖のそれと比較すると、上の「楊介の存眞環中圖」の條で述べた通りに、圖の數に多い少いの別があり、又各圖にも細部に若干の異同があるが、傳寫の誤謬等をも考慮に入れて見る時は、全體としては、同一系統に屬する藏府圖と言うことができる。上記したが如く、頓醫抄以下の諸書の藏府圖は、いずれも楊介の存眞圖の系統に屬するものであるから、今の傳本の華佗內照圖の藏府圖も、やはり楊介の存眞圖の系統に屬するものであることは明らかである。

この楊介の存眞圖は、崇寧年間(一一〇二～一一〇六)の泗州の賊の解剖圖によつたもので、沈銖が華佗玄門脈訣內照圖を校訂した紹聖二年(一〇九五)よりも後であるから、沈銖は之を利用し得べくもない。從つて今の傳本の五藏圖は、沈銖の校訂した書の五藏圖とは別個のものと考えられる。

次に今の傳本の圖說について、之を頓醫抄の圖說と比較すると、その內容は一致する所が多く、かつ今の傳本の文が、性全の和譯以前の原文と全く同文であると思われる所も多い。概して言えば、今の傳本の圖說は、頓醫抄のそれよりも詳細で整備されており、布衍し正誤したと思える所

が多い。此から推すと、傳本の圖說は、頓醫抄の祖本の存眞圖よりも後に作られ、存眞圖の圖說に依據しながら、他書によつて增補改編したものであると推定される。

さらに一歩を進めて考えると、沈銖が校訂した書は、「華佗玄門脈訣內照圖」を書名とし、今の傳本は「華佗內照圖」を書名とし、甚しく書名が近い。又、上記したが如くに、沈銖校訂本と今の傳本とは、卷首の一文及び卷末の附錄が同じであると思われる。この二事を併せ考えると、今の傳本の圖說と沈銖校訂本原有の圖說との間に、甚だ近い肉親關係の存在が推定される。案ずるに、今の傳本の圖說には、「黃帝書」が多く引用されている。この「黃帝書」は沈銖が校訂した「華佗玄門脈訣內照圖」なる書名の「玄門」と、何らかの有機的關係があるのではなかろうか。若しこの推定が正しければ、今の傳本の圖說は、主として存眞圖の圖說に依據しながらも、沈銖の校訂本原有の圖說をも相當に採り入れて改編されたものと推定される。

上記したが如く、今の傳本の圖說は、楊介の存眞圖の圖說に依據し、さらに沈銖校訂本の圖說をも參用して、改編されたものと推定されるからして、藏府圖に於いても同樣なことが考えられるのではなかろうか。今の傳本の藏府圖が、頓醫抄以下の諸本の藏府圖と相異する部分のいくらかは、沈銖校訂本原有の藏府圖の影響によるものではなかろうか。

然らば華佗玄門脈訣內照圖はいつごろに、傳本の華佗內照圖のように改編されたか。

清の瞿鏞の鐵琴銅劍樓藏書目錄には、「新刊華佗玄門脈訣內照圖二卷　明刊本」を著錄し

集後有序云。圖左之註。宋人楊介撰。成化初。閣老彭文憲。於祕籍中抄得。出以見授。蘭家世以醫行淮南。先伯子院判德明府君。與蘭獲列官於朝。供奉御局者。三十餘年。獲益於是書不少。因命二子棐。重加校定梓之。…

と解說している。之によると、瞿鏞の見た書には後序があり、この後序は殘闕していて、刊行時代は、未詳であるが、明の成化年間(一四六五～一四八七)に、彭文憲が祕庫中から抄出した「華佗玄門脈訣內照圖」によつて、醫師の某蘭が刊行した書であることが知られる。彭文憲は彭時のことで、政治家としても文人としても有名な人である。

又、我國の內閣文庫には、「玄門脈訣內照圖一卷」が架

藏されている。（一二一三號　三〇三函）この書は一冊の寫本で、卷末には殘闕した跋文がある。

…（上闕）出。然其門人吳普樊阿。以術名淮楊間。多依準佗法。此豈其所授歟。不可考矣。後有晉陽郭氏產嬰諸祕方及禹氏運氣節要。乃固陵王達之所續。幷爲一書。嗚呼。文憲一代名臣。推是心以康濟當世者。且無弗至。而猶惓惓珍惜是編。不輕以畀人。蘭家世以醫行淮南。先伯子院判德明府君。與（下闕）

とある。この跋文によつて、此の書は上記の成化本の「新刊華佗玄門脈訣內照圖」によつて書寫されたものであることが知られる。今、內閣文庫架藏本と今の傳本とを對比すると、文字の異同はあるが、その藏府圖及び圖說は合致する。從つて、今の傳本は、成化年間に彭時が祕庫から抄出し、某蘭が刊行した「新刊華佗元門脈訣內照圖二卷」に直接または間接に依據した書であることは明らかである。鐵琴銅劍樓藏書目に、「圖左之註。宋人楊介撰。」と言い、圖說を楊介の作としていることが誤であることは辨ずるまでもない。

上記した所によつて、胡文煥刊本の華佗內照圖の成立は、明の成化年間のころまで追溯し得るが、それ以前は明らかにし得ない。由來、南北宋の間は藏府研究は盛んであつた。從つて今の傳本はこの南北宋の間に、その當時に傳わつていた華佗玄門脈訣內照圖につき、その原有の藏府圖を廢して、改めて存眞圖の圖を用い、その原有の藏府圖說を、存眞圖のそれを利用して改編したものと推定される。

最後に「歐希範正面圖」について考えると、上記したが如くに、頓醫抄、循經考穴編附圖には、此の一圖はあるが、今の傳本の華佗內照圖にはない。今の傳本の藏府圖は、楊介の存眞圖に依據したものである以上、理論上からすれば、當然この一圖も有るべきはずである。又その圖說にも、「若吳簡序宋景所畫希範喉中三竅者非。」（喉嚨の條）、「以今臟象。咽在喉之後。合右書爲是。於歐本則非。」（咽門の條）とあるからして、喉に三孔のある歐希範正面圖は、華佗玄門脈訣內照圖が南北宋の間に改編された時には、必ず附載されていたことが推定される。しかしいつのころに脫落したかは明らかではない。內閣文庫架藏の華佗玄門脈訣內照圖にも、既にこの一圖は載せられていない。恐らく成化年間に彭文憲が依據して書寫した祕庫の原本が、この一圖を誤

脱していたものと思われる。

五　むすび

本節に於いて述べたことを要約すると、慶暦五年（一〇四五）に歐希範等が解剖されて、「歐希範五藏圖」が作られた。この書は既に亡佚したが、「歐希範正面圖」の一圖のみは、楊介の存眞環中圖に載せられ、それがさらに頓醫抄・循經考穴編附圖に轉載せられて、今日に殘存している。

崇寧年間（一一〇二～一一〇六）の泗州の賊の解剖を利用して作られた藏府圖によつて、政和三年（一一一三）に楊介が存眞圖を作つた。此の書は既に亡佚したが、その圖は頓醫抄卷四十四・朱肱の內外二景圖・華佗內照圖・明の王文潔の脈訣宗統・施沛の藏府指掌圖書に轉載されて、ほぼ完全に今日に殘存し、又その圖說も梶原性全に逐次譯されて、頓醫抄卷四十四に殘存している。

又、政和八年（一一一八）に朱肱の內外二景圖が作られた。この書の藏府圖は楊介の存眞圖を襲用し、圖說は、主として存眞圖の圖說により、他の古典醫書に折衷して改編された。この書も既に亡佚したが、その藏府圖は循經考穴編附圖に轉載されて今日に傳わり、圖說も循經考穴編に七條が引用されている。

今の傳本の華佗內照圖は、その圖は存眞圖により、圖說は主として存眞圖のそれを利用し、從來の華佗玄門脈訣內照圖の圖說を參用して改編されたものである。今の傳本は、恐らく南北宋の間に、從來の華佗玄門脈訣內照圖の藏府圖及び圖說が今の傳本の如くに改編されたものであろう。

以上四種の藏府圖は、北宋末の實證的な風潮の下に、直接または間接に、人體解剖に依據して作られたもので、宋代の代表的な藏府圖である。從來の古典醫書を中心として作られた觀念的機械的で、多分に動物的要素をもつ藏府圖に比すると、一段の進步をとげたものである。しかしながら、五行說、經絡說等の中國傳統醫學の諸原理の拘束を脫しきるには至らず、かつ解剖技術も未熟なために、現代解剖學の立場からしては、實に幼稚でしかも誤謬の多いものである。それでも同時代の歐州の解剖圖に比較すると、決して劣るものではない。中國解剖史學上に、一時代を劃したものとして、貴重すべき史料である。

第四節　元の代表的な五藏六府圖……王好古の醫家大法

第一章で述べたが如くに、南宋から元を經て明末に至るまでは、醫學目的による人體解剖または人屍の觀察は行われていない。北宋末に、人體解剖による藏府圖が作成される域にまで到達していた實證主義的醫學傾向は、南宋に入ると共に急に衰退し、所謂南宋醫學と金元醫學と稱せられる風潮が之に代つた。南宋醫學は、簡便にして適切な治療法を、臨床經驗を中心として追求する臨床主義的醫學である。その結果として、醫學は貴族醫學から大衆醫學へ、文獻中心醫學から、臨床中心醫學へと移行した。かかる風潮の醫學の下に於いては、基礎醫學に屬する五藏六府の研究の如きはおろそかにされるのは、當然なことであつて、南宋を通じて見るべき藏府圖は作られなかつた。

之に對する金元醫學は、主として北方で行われた醫學で、儒家の性理說を利用して、之を醫學的に展開して作られた宋の劉温舒の素問運氣論奥（元符二年―一〇九九―に成る）等の影響を受け、素問・靈樞等の古典醫書を中心とし、之を陰陽五行・六甲運氣等の原則で展開して、診斷・治療を行うことを目的とする醫學で、理論的類推的なものであり、文獻中心的なものである。かかる理論的類推主義・文獻主義的な醫學の下に於いては、その五行配當の中心をなす所の藏府の研究は、非常に盛んに行われるのは當然である。その研究方法は、素問・靈樞・難經等の古典醫書を中心とし、その矛盾を疏通し、その誤謬を訂正する等の文獻學的研究に終始し、北宋に於けるが如き人體解剖による研究は、むしろ否定され排斥された。この金元醫學には、例えば金の李杲の脾胃論、朱震亨の脈訣圖說、元の戴起宗の脈訣刊誤集解、王履の溯洄集、滑壽の難經本義等、多くの藏府を研究した書が存在している。その中でも、金元醫學の最も代表的な藏府圖であり、かつ後世に多くの影響を與えたものは、元の王好古の醫家大法である。

王好古は、字は信之、號は海藏、趙州（直隷省）の人。金元四大家の李杲及び張元素に學び、醫壘元戎・此事難知・湯液本草等の著書があり、金末元初の代表的な醫家である。

王好古の醫家大法は、「醫家大法」なる名にて諸書に引用されているがために、如何なる書であるかを長らくの間

知ることができなかつた。後に、多紀元胤の醫籍考卷五十一に「王氏好古　伊尹湯液仲景廣爲大法四卷」を著錄し、その注に「澹生堂書目。作醫家大法。」とあることによつて、醫家大法は、「伊尹湯液仲景廣爲大法」なる書の略稱であることを知ることができた。又醫籍考には、この書の「甲午夏六月古趙州王好古信之題」と署名のある自序が載錄されている。この署名の文の「甲午」とは、元の太宗の六年で、南宋の端平元年、金の天興三年（一二三四）に當り、金はこの年の正月に元に滅ぼされている。

又、王好古の醫家大法の自序に「其間圖景顯設。內外詳備。」とあるから、この書に相當詳細な藏府圖のあることが推知され、種々この書を見るべく手を盡した。しかしこの書の傳本は非常に少いためにか、遂にその機會を得なかつた。實に殘念である。

しかる所、明の施沛の藏府指掌圖書を見るに及び、王好古の醫家大法の藏府圖が、この書に轉載されていることを知つた。藏府指掌圖書には、凡そ二十二の藏府圖が載せられているが、施沛はこの圖の來源をその「凡例」中に說明して、

世傳有內照圖。謂爲漢元化所作。其論理人形。列別藏府。頗爲簡明。但相傳既久。未免爲後人所亂。余得宋時楊介所繪存眞圖原本。及王海藏大法等書。互相參攷。而一軌于靈素。纂爲是編。

と言つている。此によると、藏府指掌圖書に載せられている藏府圖は、華佗內照圖を楊介の存眞圖で校訂したものと、王好古の醫家大法の五藏圖を施沛が校訂したものであることが知られる。從つてこの二十二圖から、存眞圖の系統の藏府圖を除去した殘りの圖は、主として王好古の醫家大法によつた圖であることになる。今、存眞圖の系統の藏府圖を除くと、(1)內景全圖、(2)肺圖、(3)心圖、(4)心包絡圖、(5)脾圖、(6)肝圖、(7)腎圖、(8)胃圖、(9)小腸圖、(10)大腸圖、(11)膽圖、(12)膀胱圖、(13)三焦圖の十三圖が、王好古の藏家大法によつた圖と言うことになる。

しかし、施沛はこの十三圖を無條件に醫家大法から轉載したものではない。その「凡例」に、

正誤。如或指膈膜爲膻中。或謂膻中爲父母。或謂喉中有三竅。或謂膀胱無上口。皆誤也。

と言つているから、醫家大法の藏府圖に若干の校訂を加え

たことが知られる。例えば、藏府指掌圖書の「⑫膀胱圖」に、上口・下口が描かれているが如きはこの一例である。

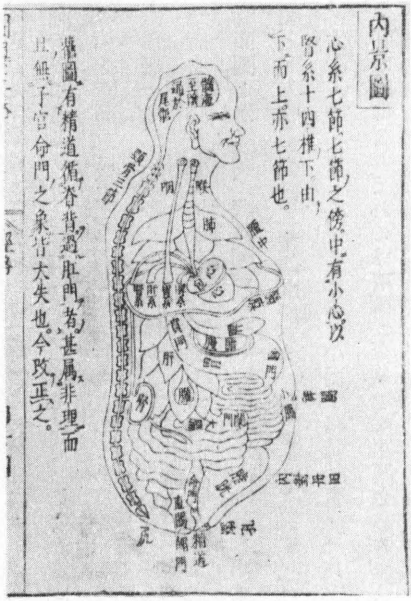
第16圖　施沛の藏府指掌圖書　膀胱圖

然らば、施沛が如何ほどまで具體的に醫家大法の藏府圖を改訂したか。この問題を解決するためには、醫家大法によつて描かれたと思われる他書の藏府圖を求めて、之を藏府指掌圖書のそれと對比して、その異同に就いて考察すべきである。この意味に於いて、張介賓の類經圖翼と、王圻の三才圖會との藏府圖が取上げられる。

先ず張介賓の類經圖翼の藏府圖に就いて考えよう。

張介賓の類經圖翼は、自著の「類經」の理解を助けるために作られた書で、凡そ十五卷からなり、天啓四年（一六二四）に刊行された。從つて、崇禎九年（一六三六）のころに刊行された施沛の藏府指掌圖書よりも十二年ほど前の書である。この類經圖翼の卷三には、十三の藏府圖が載せられ、「類經」卷三～四「藏象類」の參考に供せられたものである。

張介賓はこの類經圖翼の藏府圖の來源に就いては、具體的な說明をしていないが、その種類は、藏府指掌圖書のそれと一致し、その圖柄も酷似しているから、この類經圖翼



第17圖　張介賓の類經圖翼　內景圖

の藏府圖の來源もまた王好古の醫家大法であることが推定される。特に類經圖翼の「內景圖」に、

舊圖有精道循脊背過肛門者。甚屬非理。而且無子宮命門之象。皆大失也。今改正之。

と言い、舊圖の誤謬を改めたことを述べている。今、藏府指掌圖書の「內景全圖」に就いて見ると、脊背に循つて肛門を過ぎる精道が描かれており、又、子宮命門の形象は描かれておらず、張介賓の所謂「舊圖」に合するものである。しかるに藏府指掌圖書のこの圖は、王好古の醫家大法によつたものであるから、張介賓の「舊圖」とは、醫家大法の藏府圖を指すものであることは明白である。以上の諸理由により、類經圖翼の藏府圖は、醫家大法のそれにより、更に張介賓が校改したものと斷定することができる。

今、類經圖翼と藏府指掌圖書との藏府圖を比較すると、膀胱圖と內景圖とが異るが、他の十一圖はほとんど全く一致する。

次に王圻の三才圖會の藏府圖に就いて考えよう。三才圖會は王圻が纂修し、その仲子の王思義が續集した凡そ一百六卷からなる類書であつて、萬曆三十五年(一六〇七)に完成された。崇禎九年(一六三六)のころに作られた施沛の藏府指掌圖書よりも、三十九年前の書である。この三才圖會の「身體部」は、王思義が續集したものであるが、この身體部卷一〜二に、多くの藏府圖が記載されている。卽ち一藏府を中心として描かれた藏府圖が十二圖、人身正面圖と背面圖とが二圖、藏神圖が六圖、腎獨有兩圖と肝有兩葉之圖とが二圖、合計二十二圖がある。この二十二圖は、肺・大腸・脾・胃・心・心包絡・小腸・膀胱・腎・三焦・膽・肝の順にそれぞれの藏府圖が分載せられ、最後に、人身正面圖と背面圖とが載せられている。

三才圖會には、此等の諸藏府圖の來源に就いては何ら說明されていない。今之を他書と對比してその來源を考えると、人身正面圖と背面圖は、華佗內照圖のそれに合致し、又その圖說も華佗內照圖によつたものと思えるから、此の二圖は明らかに華佗內照圖によつたものである。又、腎獨有兩圖及び肝有兩葉之圖の二圖は、明の正德年間(一五〇六〜一五二一)に作られた張世賢の圖註八十一難經辨眞のそれに合致するから、この書によつたものである。又藏神圖は、第一節に詳述した唐の胡愔の黃庭內景五藏六府圖の

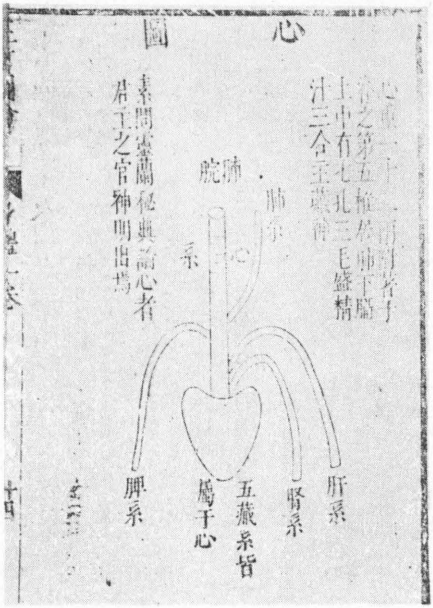
藏神圖に合致し、又王圻自身も萬曆十一年(一五八三)に、胡愔の書を重刊しているから、この藏神圖の六圖は、胡愔の書によつたことは明らかである。

最後に、一藏府を中心にして描かれている十二の藏府圖に就いて、之を施沛の藏府指掌圖書と比較すると、三才圖會には、內景全圖の一圖がない。又心圖・膀胱圖・心包絡圖・三焦圖の四圖は相異るが、他の八圖は全く合致する。又之を類經圖翼と比較すると、藏府指掌圖書の場合と同じく內景圖はなく、心・膀胱・心包絡・三焦の四圖が異り、他の八藏府圖は合致する。上記したが如くに、藏府指掌圖書・類經圖翼はともに王好古の醫家大法の藏府圖を襲用し、之に校改を加えたものである。三才圖會の此の十二圖は、その八圖が藏府指掌圖書等と合致するから、必ず醫家大法と近親關係のあるものであることが推定される。

以上を要するに、藏府指掌圖書・類經圖翼及び三才圖會の一藏府を中心に描かれている十二圖(以後は單に「三才圖會」と言い、この十二圖を意味する)は、皆王好古の醫家大法の系統の藏府圖である。從つてこの三書ともにその形態が一致する肺・脾・肝・胃・小腸・大腸・膽・腎の八圖は、醫家大法原有の圖をそのまま襲用したものであることが推定される。上記したが如くに、藏府指掌圖書と類經圖翼との間には、內景圖と膀胱圖とが異り、又三才圖會には內景圖はなく、又上記の二書との間には、心・膀胱・心包絡・三焦の四圖が異つている。此等の相異は、主として校改によつて生じたものと思われる。然らば上記の三書の內のいずれの圖が、醫家大法の五藏圖の舊態を保つているかについて考えることにする。

(1)內景圖　上記したが如くに、類經圖翼には、「舊圖有精道循脊背過肛門者。甚屬非理。而且無子宮命門之象。皆大失也。今改正之。」と言つているからして、張介賓が校改した圖であることは明らかである。藏府指掌圖書の內景圖は、張介賓の所謂「舊圖」とその條件が合致しているから、藏府指掌圖書の內景圖は、醫家大法の舊態に近いものと思われる。三才圖會にこの一圖がないのは、恐らく他に全體の內景圖があるがために、王思義が意識的に之を省略したものと思われる。

(2)心圖　藏府指掌圖書と類經圖翼との心圖は合致し、心に肺系・腎系・肝系・脾系の四系が描かれている。三才圖

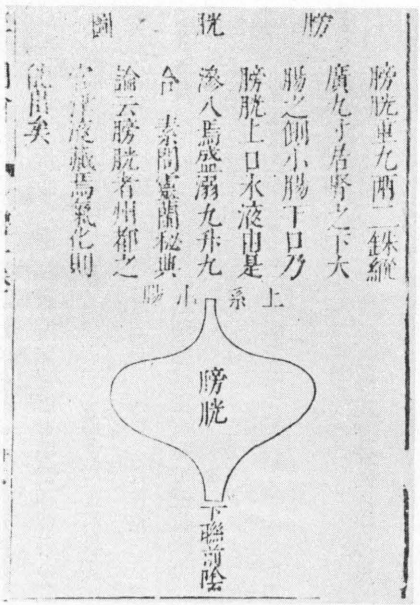


第18圖　王圻の三才圖會　心圖

會の圖は、心そのものの形は、上記の二書と合致するが、上記の四系の外に心系が描かれている。

萬曆三十四年(一六〇六)に作られた錢雷の臟腑證治圖說人鏡經(後節に詳說する。以後、「人鏡經」と略稱する)の心圖は、藏府指掌圖書の心圖とその形態は少しく異つているが、やはり心圖に肺・腎・肝・脾の四系のみをかき、その自序の末に附言して、「如心圖中。多一咽系。…此皆踵前人之譌。亦由未之經識故爾。」と言い、舊圖では心に五系が描かれているが、それは誤であるとして、咽系の一系を削去している。案ずるに頓醫抄等の圖はいずれも心に五系が描かれ、又錢雷以前に「心は四系」とする文獻を見出し得ない。故にこの說は錢雷にはじまつたものであり、張介賓・施沛は、この錢雷の說に從つて、醫家大法の心圖の五系を改めて、四系にしたものと思われる。この觀點から言えば、三才圖會の心圖は、醫家大法の舊態に近いものと言い得る。

(3)膀胱　膀胱の圖は三書ともに異つている。藏府指掌圖書の膀胱圖は、上口、下口があるように描かれているが、施沛の「凡例」に、「或謂膀胱無上口。皆誤也。」と言つて



第19圖　王圻の三才圖會　膀胱圖

いるからして、自己の見解によつて、膀胱に上口、下口を描いたもので、醫家大法原有の圖でないことは辨ずるまでもない。又、類經圖翼の圖は、その形は三才圖會の圖とは、非常に異つているが、錢雷の人鏡圖の膀胱圖とは酷似している。錢雷の膀胱圖は、後に詳述するが如くに、嘉靖三十六年(一五五七)に倭寇が解剖された時の所見によつて描かれたものである。張介賓の膀胱圖はこの錢雷の膀胱圖によつて描かれたものである。從つて、三才圖會の膀胱圖が醫家大法の舊態に近いものであろう。

(4)心包絡と三焦　藏府指掌圖書と類經圖翼との心包絡・三焦の二圖は合致するが、三才圖會のみは異つている。王好古にこの藏府に關する積極的な記載がなく、このいずれが醫家大法の舊態に近いかを積極的に證明する根據がない。しばらく疑問としておき、後考に俟つことにする。

以上は、藏府指掌圖書・類經圖翼・三才圖會に記載される藏府圖を通じて、王好古の醫家大法の藏府圖を想定したものである。その結果、この三書に記載される圖によつて、醫家大法には凡て十三圖があり、その內三書の圖形が合致する肺・脾・肝・胃・小腸・大腸・膽・腎の八圖は、いずれも醫家大法の藏府圖をそのまま轉載したものであり、この三書の圖形が合致しないものの內、內景圖は藏府指掌圖書に、心及び膀胱は三才圖會にそれぞれ記載される圖が、醫家大法の舊圖の形態を傳えたものであり、心包絡と三焦との二圖は、いずれの書の圖が、醫家大法の原圖に近いかは未詳であるとの結論を得た。

ここに注意すべきは、醫家大法の著者王好古その人は、文獻主義的な金元醫學の代表的な一人である。從つてその藏府圖も、その當時に傳存していた中國傳統醫學の藏府圖が用いられたことは推測される。今、上記の如くにして推定し得た王好古の藏府圖と、唐の胡愔の五藏六府圖の藏府圖とを對比すると、肝・肺・膽の三圖はやや合致し、心(系を除く)腎の二圖は相當に似ており、脾だけが全く異つている。又嵯迦清涼寺の釋迦胎內五藏と對比すると、圖と模型とでは比較しにくいが、肺・肝・心(系を除く)・腎・胃・腸・膀胱・膽等には類似性は相當に多い。王好古は如何なる藏府圖に依據したかは未詳であるが、王好古の藏府圖には、中國傳統醫學による藏府圖の要素は多く保有され、それが三才圖會・類經圖翼・藏府指掌圖書の藏府圖に傳え

られ、この三書を通じて、中國傳統醫學による藏府圖の面影を如實に窺うことができるのである。

宋代の人體解剖による藏府圖は、例えば頓醫抄の藏府圖に見られるが如くに、多くの藏府を一圖の中に描き、各藏府間の系屬及び部位を明らかにすることに重點をおいて描かれている。かかることは、人體解剖によつてその實況を見てこそはじめて描き得る所である。しかるに王好古の藏府圖は、全體圖としては、想像によつて描かれた內景全圖が一圖あるのみで、他の圖はいずれも一藏府につき一圖が描かれ、その藏府の形像を明らかにすることに重點が置かれている。これは、人體解剖等の親視實驗によらず、古典醫書の記載を中心として、想像・類推して描かれた觀念的な圖であることを示すものと思われるが、ここにもまた中國傳統醫學による藏府圖の性格の一面が看取される。

第五節　明の代表的な五藏六府圖

明代の醫學は、元代の延長とも見られ、金元醫學が支配的位置をしめていた。從つて、その生理解剖說は、金元醫學の學說が專ら行われ、藏府圖も王好古の醫家大法が主として用いられていた。しかるに明末に至つては、實用主義的な風潮と、實證主義的な氣運とが、小規模ながらも起つた。實用主義的な風潮の結果として、藏府圖に於いては、その當時に傳存していた多くの藏府圖につき、その性格・系統を批判することなく、之を雜錄して、その多きを誇るが如き藏府圖が作られるようになり、又實證主義の氣運の結果としては、第一章に詳述したが如く、醫學目的による人體の解剖・觀察が、小規模ながらも行われ、その所見を加味した藏府圖も作られるようになつた。

この時代を具體的に代表する藏府圖としては、錢雷の臟腑證治圖說人鏡經・王文潔の脉訣宗統・王圻の三才圖會・闕名氏の循經考穴編・張介賓の類經圖翼・施沛の藏府指掌圖書等の諸書がある。次に此等の諸書に就いて略說しよう。

一　錢雷の臟腑證治圖說人鏡經

明代に作られた多くの藏府圖の內、人體解剖の所見を加味したものに、錢雷の臟腑證治圖說人鏡經（以下「人鏡經」と略稱す）がある。この書は萬曆三十四年（一六〇六）に成つて刊行され、さらに萬曆四十年（一六一二）に重刊されてい

るが、傳本は非常に少い。

錢雷の傳記は明らかではないが、人鏡經の諸序から推すと、號は豫齋、浙江四明の人、宋の名醫錢仲陽(乙)の子孫で、醫を王宗泉に學び、萬曆年間に活躍した儒醫であることが知られる。

この人鏡經は正編八卷と附錄二卷とよりなり、附錄は錢雷が人鏡經を補足すべく作つた諸論文を編纂したものである。しかし人鏡經そのものの傳來の經緯は明らかではない。錢雷の人鏡經序には、「この書はその師の王宗泉の舊藏本であつたのを、宗泉の死後に購得した」ことを述べ、さらにこの書の著者を考證して、

然求其人。惜無序引贊跋。可稽考之。醫鑑有徐仲融者。得異人授以葫蘆。啓視。乃扁鵲人鏡經。史言。長桑君。飲以上池之水。盡見臟腑癥結。是經豈扁鵲所遺耶。

と言い、醫鑑及び史記扁鵲傳によつて、人鏡經を扁鵲の作かと疑つている。上記の醫鑑の文は、張太素の齊書の徐之才傳(太平御覽卷七百二十三に見ゆ)にもとずいたもので、徐仲融は之才の五世の祖である。若し錢雷の言の如くに、人鏡經が扁鵲人鏡經であるとすれば、その傳來の系統は、扁鵲…徐仲融…王宗泉—錢雷と言うことになるが、此には種々の疑問がある。次にこの人鏡經の性格に就いて考えよう。

この人鏡經には、肺・大腸圖(卷一揭載)、脾・胃圖(卷二)、心・小腸圖(卷三)、腎・膀胱圖(卷四)、肝・膽圖(卷六)、正內形圖、背內形圖、側內形圖(ともに卷八)の八圖がそれぞれの卷に分載されている。錢雷は人鏡經の序に、この書を校訂した次第を附記して、

此編原係繕本。因錄者膚陋。遂致文義有未協。次序有不倫。尤有戾於經旨者。如心圖中。多一咽系。肺圖中。多一食管。膀胱圖中。多一胞於其內。此皆踵前人之譌。亦由未之經識故爾。余乃溯流討源。悉本素靈釐正之。芟其紕謬。黜其重複。勿使復淆心目。幸有得於目擊者。別著於附錄中。其臟腑圖。照華佗古內照圖。御院銅人正背側內圖。質而正之。

と說明している。この文中の「華佗古內照圖」は、「古」の字を增補していることから推測すると、胡文煥の刊本ではなくして、成化年間に某蘭が刊行した書を指すものと思われる。又、この文中の「御院銅人正背側內圖」の意味が明白ではない。「御院銅人」とは、明の太醫院に置かれて

いた正統八年(一四四二)に新鑄された銅人像、または石刻された銅人腧穴鍼灸圖經を指すものと思えるが、この兩者には、正・背・側の三內圖はないはずである。恐らくは誤文で、「其臟府圖。正背側內圖。照華佗古內照圖。御院銅人。質而正之。」と校改すべきであろう。上記の錢雷の校訂に關する記文の大意は、

人鏡經の原本には、心圖に咽・肺・腎・肝・脾の五系が描かれていたが、その內の咽系を除き、肺には肺管の外に食管が描かれていたが、その食管を去り、膀胱圖には、胞の中にさらに一胞が描かれていたが、中の一胞を除いた。藏府圖及び正・背・側の三內形圖は、華佗古內照圖及び太醫院の銅人像に照して正した。

と言うことになる。かくして校訂された結果が、現存の人鏡經の藏府圖である。

次にこの人鏡經の藏府圖の來源を明らかすために、他の諸藏府圖と對比して見よう。

先ず頓醫抄等の楊介の存眞圖の系統の諸書の藏府圖と對比すると、人鏡經の正・背・側の三內景圖は、頓醫抄等のそれとは細部に若干の相違はあるが、大體に於いて合致するから、人鏡經のこの三內景圖は、存眞圖の系統に屬すものである。錢雷の校訂の序文に「照華佗古內照圖」とあるからして、華佗古內照圖によつたことは明らかである。

この三內景圖を除く他の藏府圖について、王好古の醫家大法の系統に屬す王圻の三才圖會、張介賓の類經圖翼、施沛の藏府指掌圖書に對比すると、上記の三書はいずれも各藏府が一圖に獨立して描かれているのに對し、人鏡經には肺・大腸・心・小腸・腎・膀胱は皆獨立して一圖にかかれているが、脾と胃、肝と膽とは、それぞれ合して一圖にかかれている。又之を形の上から對比すると、三才圖會とは、相異るもの…心・膀胱の二圖。未詳のもの…脾・肝・膽の三圖。類經圖翼とは、相似るもの…膀胱の一圖。未詳のもの…脾・肝・膽の三圖。藏府指掌圖書とは、相異るもの…膀胱の一圖。未詳のもの…脾・肝・膽の三圖。その他の藏府は、三書ともに人鏡經のそれと、形態が合致している。內につき、この三書ともに、その形態が人鏡經に合致するか否かが未詳の脾・肝・膽の三圖は、人鏡經が脾と胃、肝と膽とを、それぞれ合して一圖としておるがためである。この脾・肝・膽の問題を後に詳述することとして、人鏡經

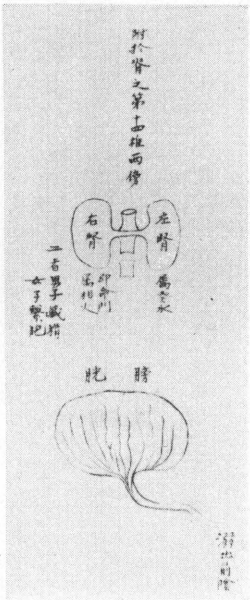
と三書との間に異同のある心と膀胱との二圖について、その異同の經緯について考えよう。

(1)心　上記したが如くに、錢雷は人鏡經原有の藏府圖を校訂した次第を、その序に述べて、「如心圖中。多一咽系」と言い、その原有の心圖から、咽系を除いたことを述べている。恐らく次に述べる嘉靖三十六年(一五五七)の倭寇の藏府觀察の知見によつたものであろう。從つて、その原有の圖には、咽・肺・腎・肝・脾の五系が描かれておることになり、人鏡經原有の心圖は、三才圖會の心圖とその形態が合し、從つて王好古の醫家大法によつた圖であることが推知される。錢雷は自己の見解によつて、その原有の心圖の五系から咽系を除いたのである。類經圖翼と藏府指掌圖書との心圖が、人鏡經の心圖に合するのは、錢雷が校改した人鏡經の圖によつたからである。

(2)膀胱　錢雷の序には、「膀胱圖中。多一胞於其內。」と言い、人鏡經の原圖には、膀胱の胞內に、さらに一胞が描かれていたのを、錢雷が胞內の一胞を削除したことを述べている。又その人鏡經附錄上の「膀胱圖正訛」の條に、

王履曰。胞居膀胱之內。有上口。無下口。津液既盛於胞。無由自出。必因氣而後能漸浸于胞外。積于胞下空處。遂爲溺。出前陰。…履因之。增繪一胞。…余前於嘉靖三十六年。適總憲梅林胡公。戮倭於東教場。命劊子手。取心治之。與衆將同食。時中軍戴翔海。居停余家。因得從劊子手。逐一檢視。以證疇昔之惑。果膀胱無上口。又無胞居中。但有一管。直達前陰而出溺。其精管。循腰脊。遶大腸之右。而合出於前陰。但精管在溺管之下爾。乃予所目擊者。故敢決群疑。而證經旨。夫豈好辨哉。

と述べている。これによつて、人鏡經原有の膀胱圖は、元の王履の圖によつて描かれたものであるが、錢雷が嘉靖三十六年(一五五七)の倭寇解剖の所見によつて、その膀胱圖を改めたことが知られる。



第20圖　錢雷の人鏡經　腎・膀胱圖

三才圖會の膀胱圖は、王好古の醫家大法のそれの系統に屬すものと思われるから、人鏡經原有の王履の膀胱圖にも、それを校改した錢雷の膀胱圖にも合致しないのは當然である。

又、類經圖翼の膀胱圖は、錢雷のそれと形態は似ているが、甚しく粗雜である。恐らくその本來に於いては、錢雷の膀胱圖によつて描かれたものであるが、刊版その他の事故によつて、粗雜になつたものと思われる。

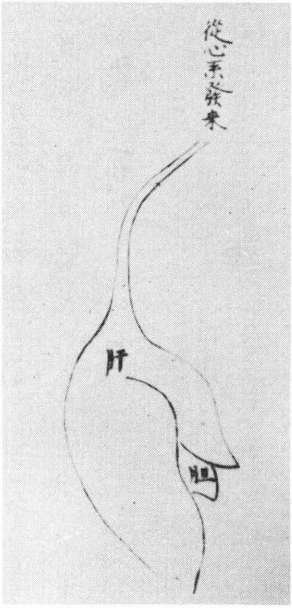
又、施沛の藏府指掌圖書の膀胱圖は、その「凡例」に、「或謂膀胱無上口。皆誤也。」と言つておるからして、施沛は自己の見解によつて、膀胱に上口、下口があるように改圖したものであるから、人鏡經と合しないのは當然である。

以上を要するに、人鏡經の藏府圖の內、同一圖とされている脾と胃、肝と膽の二圖を除くと、肺・腎・大腸・小腸の四藏府は、王好古の醫家大法の系統の圖であり、心圖はその人鏡經の原圖はやはり醫家大法の系統の圖であつたのを、錢雷が自己の解剖所見によつて改めたものであり、膀胱圖の人鏡經の原圖は王履の圖の系統であつたのを、錢雷が自己の解剖所見によつて改めたものと言うことになる。

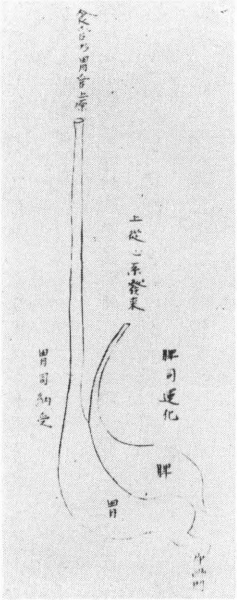
次に同一圖に描かれている脾と胃・肝と膽の二圖に就いて見ると、上記したが如くに、王好古の醫家大法の藏府圖は、一藏府につき一圖が描かれておるからして、人鏡經のこの二圖は、醫家大法に依據したものでないことは明らかである。

「脾と胃」・「肝と膽」をそれぞれ一圖に描いておるものに、東醫寶鑑の藏府圖がある。東醫寶鑑は李朝の名醫許浚等が敕命によつて、宣祖の二十九年(萬曆二十四年—一五九六)に編纂に着手し、光海君の二年(萬曆三十八年—一六一〇)に完成した書で、人鏡經と相前後して作られたものである。この書には、その卷一に身形藏府圖、卷三に肝・膽、心、脾・胃、肺、腎の合計六圖が載られている。この東醫寶鑑なる書の性質上、その藏府圖は中國の藏府圖に典據するものと推定される。しかし人鏡經をはじめとし、中國に現存する藏府圖には、この藏府圖と合致または類似するものはない。したがつてこの東醫寶鑑の典據した藏府圖と人鏡經のそれとは全く別系統のものと思われる。(轉寫又は刊版の拙劣によつて、この異同が生じたとすれば、問題は別となる)

次に人鏡經の「脾と胃」・「肝と膽」の二圖を、華佗內照圖に對比すると、その正面圖・藏府內照圖の中にかかれている脾・胃・肝・膽の形態は、その圖がくずれているために明言はし得ないが、割合に人鏡經のそれに近い形のもの



第21圖　錢雷の人鏡經　肝・膽圖



第22圖　錢雷の人鏡經　脾・胃圖

と思われ、さらに人鏡經の「脾と胃」・「肝と膽」の部位・大小の割合等は、華佗內照圖のそれに合致すると思われる。從つて人鏡經の「脾と胃」・「肝と膽」との二圖は、主として華佗內照圖によつて描かれたものであることが推定される。ここに注意すべきは、この人鏡經の「脾と胃」の圖の胃の形が、醫家大法の系統の諸書の胃の形と合致していることから考えると、人鏡經の「脾と胃」・「肝と膽」の二圖は、主として華佗內照圖によつて描かれたものであるが、醫家大法の藏府圖にも參照されたものであることが知られる。

以上を要約すると、現存する人鏡經の藏府圖は、正・背・側の三內景圖及び「脾と胃」・「肝と膽」の二圖は、主として華佗內照圖によつて描かれたものであり、肺・腎・大腸・小腸の四圖は主として王好古の醫家大法の系統の圖によつてかかれたものであり、心と膀胱の二圖は、錢雷の嘉靖三十六年(一五五七)の解剖所見によつて描かれたものと言うことができる。心・膀胱以外の諸藏府圖にもやはり錢雷の解剖所見が、若干加味されているであろうことは、想像に難くない。

現存する人鏡經の藏府圖の性格は上記の通りであるから

して、その人鏡經原本の藏府圖も、錢雷の言うが如くに、扁鵲・徐仲融に淵源するものでないことは、言を俟たない所である。錢雷は古典尊長主義の立場からして、之を權威づけるために、扁鵲・徐仲融を引合いにだしただけで、人鏡經の原本も、やはり元明の間の作であることは、その藏府圖の性格からして言い得られる。

この人鏡經の藏府圖はその後相當に行われ、明の程式の醫彀全書(萬曆四十九年刊—一六一八)の集古卷一に轉載され、又明の賈詮の藏府性鑒(未見。下の尤乘の序から推す)、清の尤乘の藏府性鑒增補(康熙三十年刊—一六九一)は、いずれも人鏡經の藏府圖を全面的に襲用している。この外、人鏡經の藏府圖を、直接または間接に、部分的に用いている書は相當に多い。

二　その他の重要な五藏六府圖

上記した錢雷の人鏡經の外に、明代の代表的藏府圖と言い得るものは相當に多いが、その中でも特に解剖史學上注意すべき書及び後世に多くの影響を與えた數書を選んでここに概說する。此等の書は、既に本章の第三節・第四節の關係箇所で、その性格等の大要を說明し盡したから、ここではただその要領を述べるに止める。從つて、此等を一括して、「その他の重要な五藏六府圖」と題名を附けたまでで、此等の諸書が人鏡經よりも解剖史學的價値が少いために、かくの如くに一括したものでないことを附記しておく。

1　王文潔の太上天寶太素張神仙脉訣玄微綱領宗統（以下「脉訣宗統」と略稱す）

この脉訣宗統なる書は、張太素が作り、明の伯祥が注解し、王文潔が編纂したと言われ、凡そ七卷からなり、萬曆

第23圖　王文潔の脉訣宗統　氣海膈膜圖

二十七年(一五九九)に刊行された書で、非常な稀觀本である。この書の張太素以下の關係者の傳記は明らかではない。

この書の卷一「圖論」には、臟腑正面圖以下十圖の藏府圖が載せられ、各圖ごとに圖論が書かれている。この脉訣宗統の藏府圖は、相當に崩れてはいるが、之を華佗內照圖等に對比すると、明らかに楊介の存眞圖の系統であることが知られる。ただこの書には、「肺下左側見脾胃所居圖」があるが、華佗內照圖等にはなく、華佗內照圖等には、「藏府內景圖」はあるが、此の書には存していない。內につき、「肺下左側見脾胃所居圖」は、既に本章の第三節「二楊介の存眞環中圖」の條に於いて詳說したが如くに、楊介の存眞圖の原有の圖かとも思われる。「藏府內景圖」は、この書が誤脫したものであろう。又各圖に附せられている圖論は、華佗內照圖の圖說を布衍したものである。

この書の藏府圖及び圖說は、楊介の存眞圖の系統に屬す諸書とともに、存眞圖復原の重要な史料である。

2　王圻の三才圖會

三才圖會の編纂者の王圻は、字を元翰と言い、江蘇上海の人。明末の學者で、續文獻通考・東吳水利書・稗史彙編等の多くの著述がある。三才圖會は一百六卷からなる類書で、王圻が纂修し、その仲子の王思義が續集し、萬曆三十五年(一六〇七)に完成した書である。この三才圖會のうち、王思義が續集した「身體部」の卷一～二には、合計二十二の藏府圖が載せられている。この二十二圖の來源は、第四節で詳說したが如くに、人身正面圖と背面圖との兩圖は華佗內照圖、腎獨有兩圖と肝有兩葉之圖との二圖は、張世賢の圖註八十一難經辨眞、藏神圖の六圖は、唐の胡愔の黃庭內景五藏六府圖、肺・脾・肝・胃・小腸・大腸・膽・腎・

第24圖　王圻の三才圖會　肺圖

心・膀胱の十圖は王好古の醫家大法、心包絡と三焦との二圖は未詳である。

この三才圖會の藏府圖は後世に相當に行われ、古今圖書集成醫部、我國の和漢三才圖繪の藏府圖は、いずれも之によつたものである。

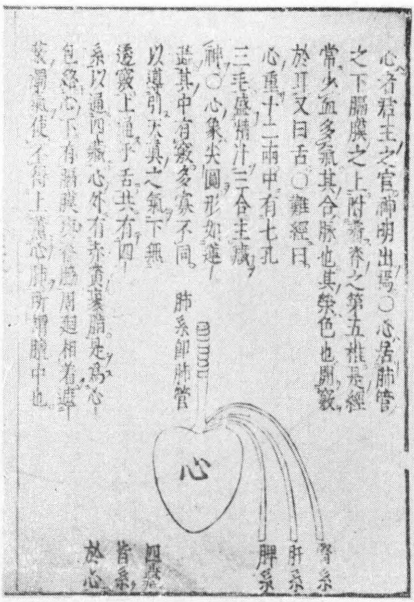
3　循經考穴編

循經考穴編の著者は未詳であるが、その引用文からして、明の萬曆末年に作られたものと推定される。この書は抄本で傳つていたが、一九五五年に上海の群聯出版社から印行されて、世に行われるようになつた書で、上下二篇と附圖とからなつている。この附圖には九圖の藏府圖が載せてある。この九圖の來源に就いては第三節の「三　朱肱の內外二景圖」の條で詳述したが如くに、內外二景圖から轉載されたものである。又この循經考穴編には、內外二景圖の圖說が七條引用されている。內外二景圖及び楊介の存眞圖の研究の重要な史料である。

4　張介賓の類經圖翼

張介賓は、字は惠卿、號は景岳又は通一子、浙江山陰の人。明末の代表的醫學者の一人で、景岳全書・類經等の大著がある。

類經圖翼は、類經の理解を助けるために作られた書で、凡そ十五卷からなり、天啓四年(一六二四)に刊行された。類經圖翼の卷三には、凡そ十三の藏府圖が載せられている。この十三の藏府圖の來源は、第四節に於いて詳說したが如くに、肺・脾・肝・胃・小腸・大腸・膽・腎の八圖は、王好古の醫家大法により、內景圖は醫家大法の圖を張介賓が自己の見解によつて校改したもの、心・膀胱の二圖は、錢雷の人鏡經によつたもの、心包絡と三焦との二圖は、その



第25圖　張介賓の類經圖翼　心圖

來源は未詳である。

この類經圖翼の藏府圖は、それ以後最も多く行われた。中國に於いてのみでなく、一六八二年に、フランクフルトで刊行された A.Cleper の Specimen Medicina Sinicae（支那醫學軌範）の五藏圖は、實にこの類經圖翼から轉載されたものと言われる。（昭和三十一年第五十八回日本醫史學會總會に於ける石原明博士の發表による）

5　施沛の藏府指掌圖書

施沛の傳記は明らかではないが、その著書「靈蘭初集」によつて、字は笠澤、號は元无子、江蘇雲間の人で、明末の相當な醫學者であつたことが知られる。藏府指掌圖書は靈蘭初集に收められた一卷本で、崇禎九年（一六三六）のころに成つた書と思われる。

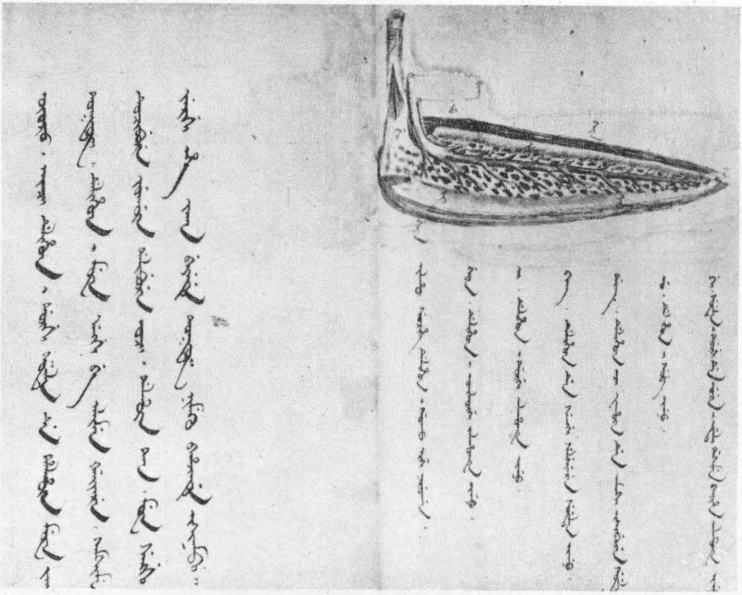
この藏府指掌圖書には、凡そ二十二の藏府圖が載せられている。第三節の「二　楊介の存眞環中圖」の條で詳說したが如くに數藏府が一圖の內に描かれている九圖は、楊介の存眞圖の系統の圖であり、又各一藏につき一圖がかかれている他の十三圖は、第四節で詳說したが如くに、肺・脾・肝・胃・小腸・大腸・膽・腎及び內景圖の九圖は、王好古の醫家大法によつて描かれたものであり、心圖の一圖は、錢雷の人鏡經によつてかかれたものであり、膀胱圖の一圖は、自己の見解によつて描かれたものであり、心包絡と三焦の二圖は、その來源は未詳であるが、或は張介賓の類經圖翼によつたものとも疑われる。

第26圖　施沛の藏府指掌圖書　三焦圖

この施沛の藏府指掌圖書は、その藏府圖が明確にかかれておるために、存眞圖の復原及び王好古の醫家大法の藏府圖の研究に、闕くべからざる史料である。

第六節　清の代表的な五藏六府圖…王清任の醫林改錯

清代の文化は、明朝の退嬰的消極的な弊を一掃して飛躍的に進展し、豪華にして絢爛たる康熙・乾隆の文化を產み、諸般の學術はそれぞれの發展をした時代である。しかるに醫學に於いては、誠に舊態依然たるもので、却つて退歩のあとさえ見える。この醫學の停滯性が何に歸因するかは、醫史學の研究に從事するものに取つては重大な問題である。この醫學の停滯性は、その藏府圖に於いても見ることができる。明末から乾隆・嘉慶にかけては、例えば、撰人未詳の煙霞錄生化內景圖、尤乘の藏府性鑒增補、古今圖書集成醫部に見られるが如く、多くの藏府圖が作成されてはいるが、いずれも宋・明の藏府圖を踏襲するか、さもなければ、無批判に諸藏府圖を雜錄したものに過ぎない。全く宋・明の糟粕をなめるもので、その間に何らの新鮮味も進歩の跡もない。しかしただ一つの例外として、「欽定格體全錄」の一書がある。この書は康熙帝の勅命によつて、耶蘇會士フランス人 P.P.Parrenin（中國名は巴多民）が、本文はフランス人 Pierre Dionis の解剖書から拔萃し、解剖圖はデンマーク人 Thomas Bartholin の解剖書により、滿州文



第27圖　欽定格體全錄

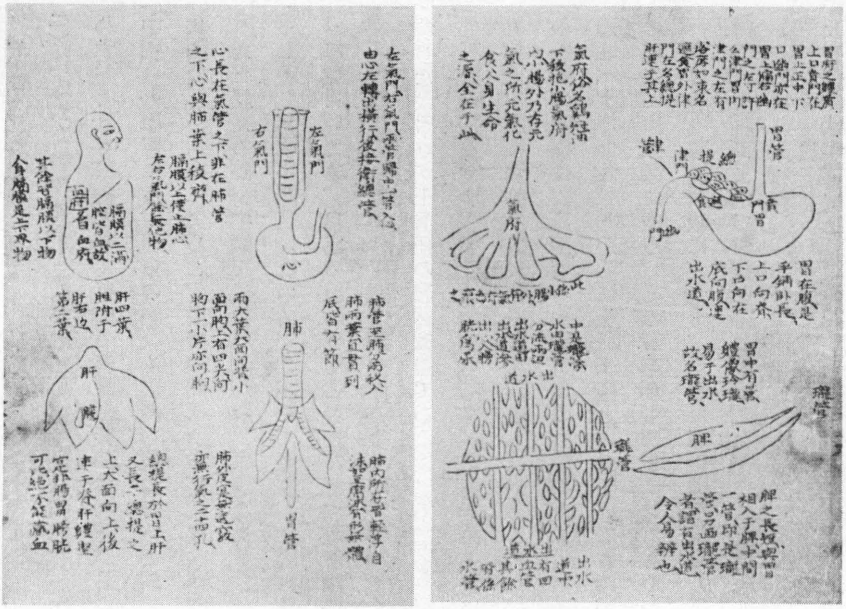
に飜譯して作られた書で、康熙帝の末年（一六六二～一七二二）に成つた書である。しかしこの書は僅に四部しか作られず、それも禁書として秘庫の奥深く架藏されたが爲に、中國の醫學界には、何らの刺戟も影響も與えていない。又、我國の解體新書によると、明清の間に西洋解剖書が漢譯されたと思えるが、中國では行れなかつたようである。

しかし嘉慶年間（一七九六～一八二〇）に至り、中國古典醫書に疑をいだき、自己の經驗にもとづいて、生理解剖學を體系づけ、それによつて藏府圖を作るものが、ようやく現われた。それが王清任の醫林改錯である。

王清任（乾隆三十三年生―一七六八）は、字を勳臣と言い、直隸玉田縣の醫師。既に第一章で詳述したが如くに、一切の診斷・治療は、正確なる生理解剖の智識の上に於いて行わるべきである。しかるに金科玉條とされている古典醫書の記載には誤謬が多く、その藏府圖も據るに足るものがない。自らの親視實驗によつて、正確なる生理解剖の智識を得て、それによつて信據し得る藏府圖を作ることを志し、嘉慶二年（一七九七）・四年（一七九九）・二十五年（一八二〇）及び道光八年（一八二八）の四回にわたつて、病屍・刑屍の藏府を觀察し、さらに道光九年（一八二九）に、解屍を多く見ている恆敬公の知見談をきき、それ等によつて得た智識を綜合して體系づけて藏府圖を作り、之を自著の醫林改錯に記載した。

この醫林改錯の一書は、上卷・下卷及び下卷附錄の二卷からなる書で、道光十年（一八三〇）に刊行され、（道光五年に初版が刊行されているが、それは完全な書ではない）その後八回にわたつて重刊されている。この醫林改錯の上卷には、藏府圖と圖說とを載せ、下卷には醫方を載せている。この下卷の醫方には、ほとんど見るべきものがないが、その上卷こそは、中國解剖史學上、注意を拂うべきものである。

醫林改錯の上卷には、首に「醫林改錯臟腑記敍」が置かれ、古典醫書の生理解剖に關する記載の誤謬の多いことを列擧し、自己の人屍觀察を志した動機・觀察の經過を詳述し、次に「古人所繪臟腑形圖如此」と題して、張介賓の類經圖翼の藏府圖十二圖を掲げ、その後に「余將親見諸臟腑顯隱之形繪於其後」と題して、自己の親見によつて得た智識を綜合して作つた十三の藏府圖を掲げ、その圖中に簡單な解說を加えている。その次にこの圖を說明するための論



第28圖　王清任の醫林改錯　藏府圖

文五篇が置かれている。その論文は、第一に「會厭・左氣門・右氣門・衛總管・榮總管・氣府・血府記」、第二に「津門・津管・遮食・總提・瓏管・出水道記」、第三に「腦髓說」、第四に「氣血合脉說」、第五に「心無血說」の五論文であつて、各器官の生理解剖的な機能・部位等が詳說されている。

王清任の所說の紹介及びその批判は後日に讓るが、今その概要だけを述べると、王清任は右氣門・左氣門(大動脉または肺動脉の誤認か)なる呼吸器の存在を認めて、氣管の存在を否定し、心臟を誤つて呼吸器とし、その代りに血府なるものを想定して循環器にあて、又肺が呼吸器であることを否定して、その代りに氣府なるものの存在を想定し、衛總管(動脉)を、空氣が全身を循環する管と誤認し、榮總管(靜脉)のみを血管とし、膵臟の構造と脾臟の構造とを混亂して、脾臟に瓏管(淋巴管か)・出水道(膵管)が存在するとなす等の誤謬が見出される。

しかし他の一面に於いては、總提(膵臟)の存在を確認し、胃の所に津管(主膵管)・津門(膽管か)・痞瘧(幽門弁)・遮食(幽門括約筋)の存在を觀察し、膀胱に「有下口。無上口。」

を確認し、又腎臓に「絶對に精を藏し得る所ではない」と觀察するなど、その觀察に鋭い所も見受けられる。（現代解剖學との同定は、他日專門家の教を得て補正したいと思う）

以上を要するに、王清任の藏府の觀察及び圖は、現代解剖學の上から見ると、實に不正確であり幼稚でもあつて、中國傳統醫學の先入觀念から脱却し得たものではない。しかし王清任は、野犬や劊子（死屍解剖人）によつてあらされた藏府を觀察し、醫學に無知な軍人の話をきいただけであるからして、かかる多くの誤謬に對しても同情すべき點もある。むしろ、千古不易、金科玉條とされている古典醫書に疑をいだき、敢然として親視實驗にその一生をささげた精神こそは、中國現代解剖學の曉鐘と言い得よう。

王清任の醫林改錯の後、咸豊元年（一八五一）にイギリス人 B.Hobson（中國名は合信）が全體新論を作つてから、西洋解剖學は中國に一般的に導入された。しかし中國に於いて現代的な解剖が實施されたのは、民國二年（一九一三）に內務部が公布した解剖規則によつて、江蘇公立醫學專門學校が、同年十一月に行つた解剖にはじまるのである。

擱筆するに當り、諸種の御教示を賜つた清涼寺釋迦像綜合研究會の諸賢、又文獻の閲覽・撮影に多大の便宜を與えて下さつた內閣文庫・金澤文庫・京大附屬圖書館・京大人文科學研究所の當事者各位に深謝の意を表する。

特に本研究に、終始御指導と御鞭韃をして下さつた伊藤純一郎樣には、御禮の申上げようもない。誠に有難とう御座います。

なお本研究は、昭和三十年度文部省科學研究費及び武田藥品工業の篤志による經濟援助によつて行われた研究成果の一部であることを附記して感謝の意を表する。

（三一・六・二〇稿了）

附　記

脱稿した後、內閣文庫に王好古の「伊尹湯液仲景廣爲大法」（卽ち醫家大法）の抄本らしいものが架藏されていることを知つた。果して、藏府圖が描かれているかは疑問である。後日拜閲の上、稿を別にして、補正したいと思う。

（三一・六・二八附記）

〔附録　一〕

中國近世までの解剖・藏府圖簡明年表

太古～秦（　～前二〇七）

兪跗・人體模型を作る(但し呪術醫學)
扁鵲・外科手術を行う(同右)
兩漢(前二〇八～後二二〇)
漢書藝文志に「黄帝内外經」を著錄す(素問・靈樞の祖本?)
新・天鳳三年(一六) 王莽・王孫慶を解剖し、銅人像を鑄造す
魏・晉(二二一～四一九)
漢魏の間華佗・痲藥を用いて外科手術を行う
魏晉の間難經成る(?)
魏晉の間太上黄庭内外景玉經成る(?)
晉(二六五～) 皇甫謐の甲乙經成る
晉(二六五～) 王叔和の脉經成る
南北朝(四二〇～五八八)
南北朝間五藏論成る
隋(五八九～六一七)
隋末のころ孫思邈の千金方成る
唐(六一八～九〇五)
永徽四年(六五三)長孫無忌等の唐律疏議成る(法律により人屍解剖を禁ず)
大中元年(八四七) 我國の僧惠運・五藏六府圖を持ち歸る
大中二年(八四八) 胡愔の五藏六府圖成る(現存する中國最古の藏府圖)
北宋(九六〇～一一二六)
雍熙二年(九八五)清凉寺釋迦胎内五藏作成さる(現存する世界最古の絹製藏府模型)
天聖五年(一〇二七) 王惟一の銅人像成る
慶曆五年(一〇四五) 歐希範等を宜州で刑戮し、解剖圖を作る
元豊年間(一〇七八～一〇八五)徐遁・藏府を觀察す
紹聖二年(一〇九五) 沈銖・華佗玄門脉訣内照圖を校訂す
崇寧年間(一一〇二～一一〇六)賊を泗州に刑戮し、解剖圖を作る
政和三年(一一一三) 楊介の存眞環中圖成る
政和八年(一一一八) 朱肱の内外二景圖成る
北宋末のころ張濟・藏府を觀察す
南北宋の間華佗玄門脉訣内照圖・今の傳本の如くに改編さる
南宋(一一二七～一二七八)

咸淳五年(一二六九) 李駉の八十一難經註義圖序論成る
元(一二〇五～一三六七)
太宗五年(一二三三～宋の紹定六年)以後、宋の天聖銅人像
(一軀)元に贈らる
太宗六年(一二三四) 王好古の醫家大法成る
至元二年(一二六五) 阿爾尼格・天聖銅人像を修理す
明(一三六八～一六四三)
正統八年(一四四三) 敕命して天聖銅人像を改鑄す
成化年間(一四六五～一四八七)彭時・秘庫架藏の華佗玄門
脉訣內照圖を書寫す。某蘭之を刊行す
正德年間(一五〇六～一五二一)張世賢の圖註八十一難經辨
眞成る
嘉靖三十六年(一五五七) 錢雷・倭寇の藏府を觀察す
嘉靖・萬曆の間何一陽・敵屍の藏府を解剖す
萬曆二十七年(一五九九) ごろ、王文潔の脉訣宗統成る
萬曆三十四年(一六〇六) 錢雷の臟腑證治圖說人鏡經成る
萬曆三十五年(一六〇七) 王圻の三才圖會成る
萬曆四十六年(一六一八) 程式の醫彀成る
萬曆中期(一五七三～一六一九)胡文煥・新刻華佗內照圖を
刊行す
萬曆末期(一五七三～一六一九)ごろ循經考穴編成る
天啓四年(一六二四) 張介賓の類經圖翼成る
崇禎九年(一六三六) ごろ施沛の藏府指掌圖書成る
清(一六四四～一九一一)
康熙末期(一六六二～一七二二)欽定格體全錄成る(但し禁書)
嘉慶二年(一七九七) 王清任・藏府を觀察す(第一回)
嘉慶四年(一七九九) 王清任・藏府を觀察す(第二回)
嘉慶二十五年(一八二〇) 王清任・藏府を觀察す(第三回)
道光八年(一八二八) 王清任・藏府を觀察す(第四回)
道光九年(一八二九) 王清任・恆敬公より藏府の所見を聞
く
道光十年(一八三〇) 王清任の醫林改錯(完本)成る
咸豐元年(一八五一) 英人 B.Hobson (合信)の全體新論成
る(西洋解剖學の中國への一般的導入)
民國(一九一二～)
民國二年(一九一三) 內務部・解剖規則を頒布す。同年江
蘇公立醫學專門學校・人體解剖を行う(現代的解剖のは
じめ)

附　日本

承和十四年（八四七）安祥寺の僧惠運・唐より五藏六府圖一卷を將來す

正安四年（一三〇二）梶原性全の頓醫抄成る

鎌倉末期（一一九二～一三三二）五藏曼荼羅書寫さる

永正十年（一五一三）永正解剖圖書寫さる

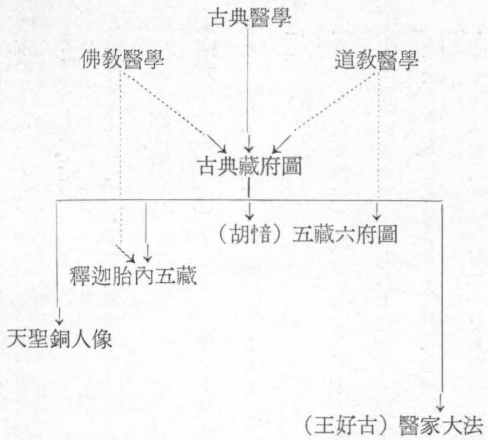
弘治三年（一五五七）長崎壽榮の醫家秘方成る

附　朝鮮

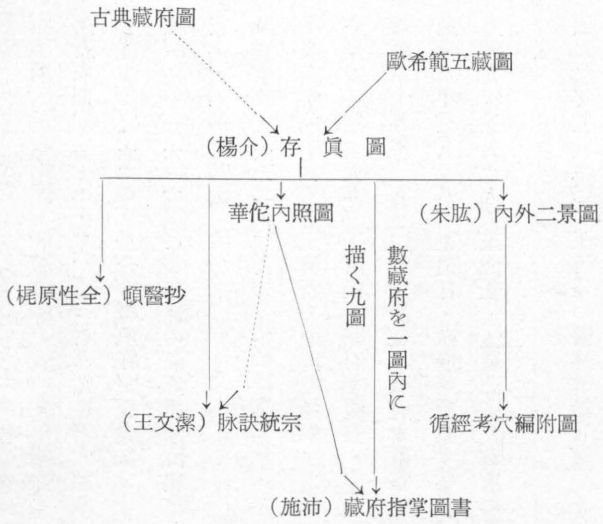
光海君二年（一六一〇）許浚等の東醫寶鑑成る

〔附錄　二〕　主要藏府圖簡略系譜

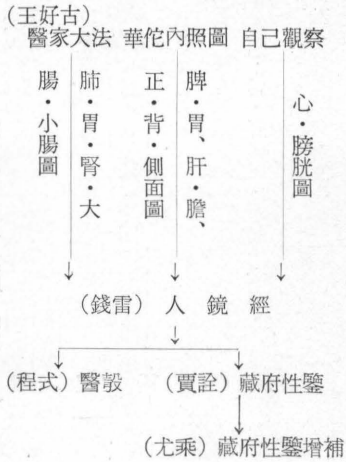
第一圖　古典藏府圖を中心とする系譜



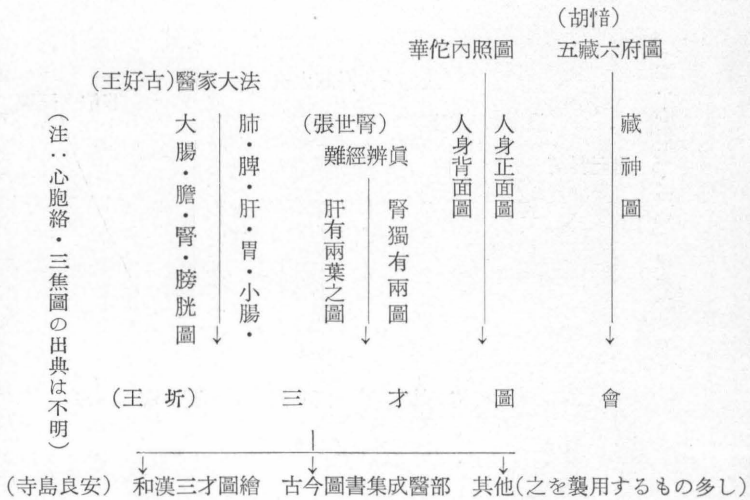
第二圖　楊介の存眞圖を中心とする系譜



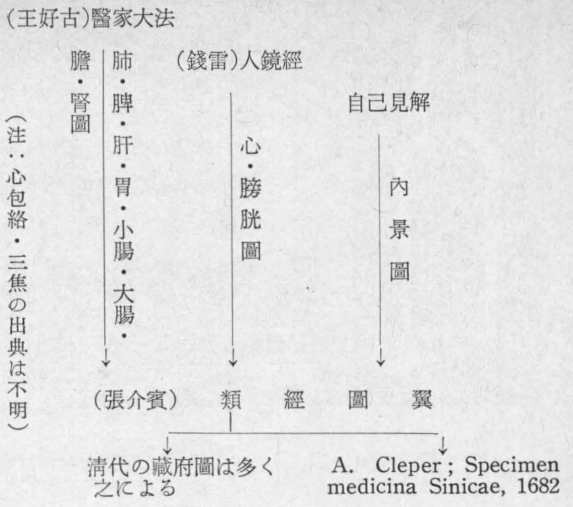
第三圖　錢雷の人鏡經を中心とする系譜



第四圖　王圻の三才圖會を中心とする系譜

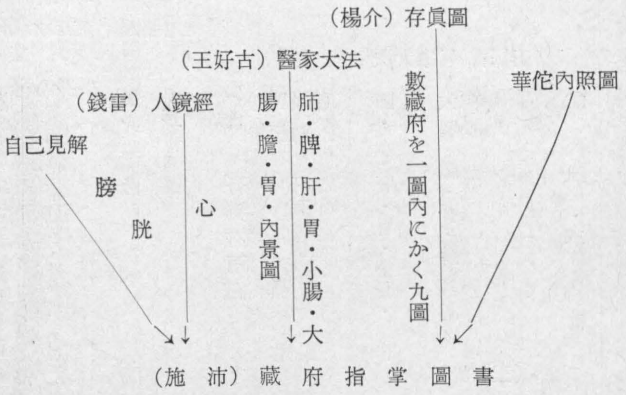


第五圖　張介賓の類經圖翼を中心とする系譜

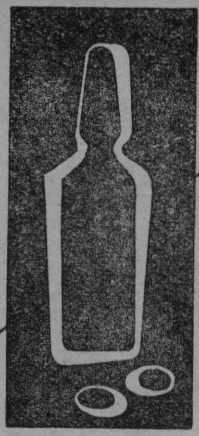


(注：心包絡・三焦の出典は不明)

第六圖　施沛の藏府指掌圖書を中心とする系譜



(注：心包絡・三焦の出典は不明)



循環系ホルモン剤

カリクレイン

冠状動脈，脳，横紋筋，皮膚及び肺の末梢血管の拡張作用のみならず，血管痙攣の抑制作用もあり，全身の血行を改善し、組織への栄養を良好に致します．

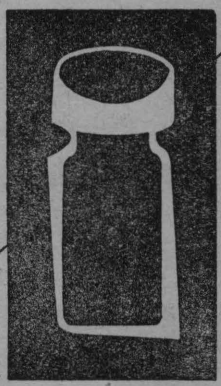
注：10単位　5管　¥840
錠：10単位　20錠　¥980
　　10単位　100錠¥4,300

BAYER "Bayer" Leverkusen

高単位・持続性 循環系ホルモン剤

デポ・カリクレイン

カリクレインの作用を合理的且つ持続的に発揮せしめる目的で、研究完成された新製品で，その適応域は更に広汎です．



注：40単位　5バイアル入　¥ 1,800

両剤共保健適用

★文献集送呈

バイエル製品に関する御照会は吉富製薬バイエル薬品部へ

輸入元　吉富製薬株式会社　　販売元　武田薬品工業株式会社
大阪市東区道修町二

(A89)

武田薬品

神経痛

リウマチに…

新型V.B_1剤アリナミンは、従来のV.B_1剤に比べて体組織・神経組織との親和性が強いため、特に神経痛リウマチ等に対して、注射療法は勿論、内服によっても優れた効果を発揮する。

〔特長〕① 組織内によく移行し、長時間貯蔵される。
② 投与後、短時間にB_1の血中濃度が上昇し、しかも濃度が高く、持続時間も長い。
③ 体内の結合型 B_1(コ・カルボキシラーゼ) の増加は極めて顕著である。

〔効能〕 神経痛，神経炎，リウマチ，神経手術後の神経麻痺・知覚障害，坐骨神経痛，顔面神経麻痺，視神経炎，食欲不振，消耗性疾患の補助療法，甲状腺機能亢進，湿疹，脚気及び脚気様症状，疲労，便秘等。

☆健康保険点数☆
注射液 1cc 1管
静注……8点
皮下・筋注……6点
錠剤も健保採用

チオール型V.B_1誘導体製剤（T.P.D.）

アリナミン

【包装】 注射液 1cc (5mg) 10管 糖衣錠 (1錠=5mg) 30錠・100錠

大阪市東区道修町 武田薬品工業株式会社 東京・札幌・福岡

悪心・嘔吐に

薬剤冬眠に

精神科領域に

コントミンは其後各科領域に於て臨床実験が重ねられ、非常に興味ある結果が数多く報告されています。
又、コントミンの健保による使用が全適応症に認められ、御使用が非常に便利になりました。

健保点數

錠剤(12.5mg)1錠 2.2点
〃 (25mg) 〃 3.7点
注射液0.5%5cc1管
筋注 18点

内科小児科	名種原因による悪心・嘔吐、疼痛、吃逆、頑固な不眠症、夜尿症、痙攣、悪性症候群
精神科	躁病、鬱病、精神分裂症、症候性精神病、反応性精神病、不安・恐迫神経症、ヒステリー
外科	前麻酔、強化麻酔、薬物冬眠、ショックの予防及び治療、手術後の疼痛・嘔吐及び高熱症
産婦人科	妊娠悪阻、無痛分娩、子癇
眼科	緑内障、白内障、斜視手術
皮膚科	帯状包疹、慢性蕁麻疹、湿疹その他

〔上記名科領域に於ける臨床報告文献集送呈〕

クロルプロマジン製剤

コントミン

糖衣錠 (12.5mg) 100錠 (¥1,000), 1000錠 (¥8,900), (25mg) 500錠 (¥8,900) (50mg) 300mg (¥10,000), 注0.5%2cc10A (¥630)5cc 5A(¥750) 5cc 50A (¥6,500) 2.5% 2cc 10A (¥1750)

製造 吉富製薬株式会社 大阪市東区道修町2ノ26
販売 武田薬品工業株式会社 大阪市東区道修町2ノ27 (Co-6)

麻酔医学の進歩は

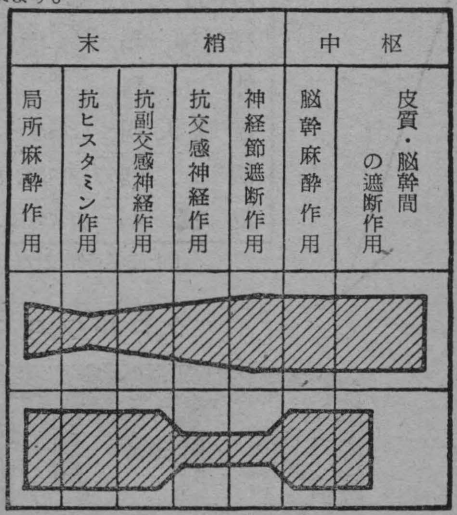
Cocktail Lytique

を齎しました

フランスのLaobrit等により紹介された新しい麻酔法で、クロルプロマジン1.塩酸プロメタジン1.オペリジン2.の割合の混合処方-M_1-を用いて強化麻酔・薬物冬眠の状態を齎します。

衰弱のひどいPoor risk Patientでも或は脳・心臓等の手術でも、この方法によつて行えば可能なことが報告されています。この二つの薬剤の協力により完全に自律神経遮断が行われるため(下表参照)、有害反射をなくし、少量の麻酔剤で理想的な状態のもとに手術を行うことが出来ます。

フランス
ローン・プーラン社
との独占技術提携品



クロルプロマジン

ウインタミン

塩酸プロメタジン

ピレチア

ウインタミン；筋注用 (0.5%)2cc10A 630円,5cc5A 750円, 静注用 (2.5%)2cc10A1,750円 新発売(1%)5cc10管、糖衣錠(12.5mg)100T,1000T,ほかに25mg,50mg錠
ピレチア；注射液 (25mg) 1cc10A 200円 (10mg) 2cc10管 170円
錠剤(25mg)100T,700円

大阪市東区道修町　塩野義製薬株式会社　東京・福岡・札幌

SHIONOGI

Study on the Model of the Human Viscera in the Cavity of SHAKA-MUNI's Statue in SAGA SHŌRYŌ-JI Temple.

by

Kōmon MORITA. Akira ISHIHARA. Kōzō WATANABE.

Shaka-muni's statue of Shōryō-ji Temple in Saga in the west of Kyoto is well-known as an exact image of Buddha as he was. Not only has it been the object of worship from older days, but it holds an important position in art history.

This statue was sculptured in the 2nd year of *Yoki* in Hoku-So Dinasty (985), the work beginning in July 21st of the lunar month and was completed in August 18th. The sculptor is recorded as *Chō-Enkō* patronized by *Chōnen,* Japanese monk. All the expense for it was defrayed by interested persons living near *Taishū.* Recently we have come to know that the statue is made of a tall tree named *prunus wilsonii koehne,* a special product of the district.

In the spring of 1954 we happened to find that in the cavity of this statue there are many things kept by Buddhistric reason. On further inspection it became clear that they are achieves, scriptures transcribed by hands, printed scriptures, a piece of cloth, copper coins, some metals and jewels; so various in kind and so large in quantity that no statue in the Orient can equal this one.

Among things kept in the cavity, remarkable is a model of the human viscera, which we inspected in details from the medical point of view. A list of the viscera model was found, too, in the statue.

Our report on it is comprised of five parts, making it clear what this viscera model means, by researching as many anatomical literatures of the Orient as possible.

We found the facts as follows:—

1. The model of the human viscera put in the cavity of Buddha under Buddhistic doctorine means that the statue is an identity of living Buddha.

2. The model of the human viscera was made by the hands of three nuns of *Myōzen-ji* Temple in *Taishū* and one believer, praying for their senior nun's recovery from illness.

3. The model is made of colored silk cloth together with cotton, incense and jewels. (See the picture on the first page).

4. The viscera numbers twelve, eleven of which are recorded on the attached list. Nine can be explained by modern anatomy; they are stomach, heart, liver, gall bladder, lung, kidney, larynx, intestines and skin of back.

5. No viscera in modern anatomy coincide with two; two bursas named *To* and *Chô* shown in the lower part of the picture, and *Jyōshō*. a thing like ribbon shown in the above, right of the picture.

6. Some viscera have Sanskrit characters or Buddhistic name written on them. They all come from Buddhistic medicine and the model was made according to the anatomy of ancient India.

7. On study of the forms and colors of the viscera, it is clear that they follow the traditional Chinese medicine.

8. By X-raying we found the statue has teeth in its month.

9. A very few statue with such viscera as this under Buddhistic doctorine have been made and except this statue there remain only seven in Japan (one of which is only in record). None, however, is so old and so complete as this regarding the data of sculpturing, the sculptor and the motive.

10. In conclusion we may say the viscera model in the cavity of the Buddha statue of *Shōryō-ji* Temple is the oldest and most complete one in the world.

These are an outline of Part I, II and III of this study.

In the following part we studied on the beginning of anatomy in ancient India and its dissemination to various countries, for the viscera model in the statue was made under Buddhistic doctorine originating in India.

The main points are as follows:

1. Traditional Indian medicine is based on "*Veda*." In Brahmanism, anatomy closely connecting with religion reached to a considerably high level.

2. Knowledge of Brahmanic anatomy was succeeded by Buddhism, especially by a school of esoteric Buddhism, to be introduced to China in the beginning of the 8th century. In the following century it found its way into Japan through Chinese Buddhistic scriptures.

3. Indian anatomy introduced to Japan developed to a typical thought called "*Gozō Mandara*" (Buddhistic anatomical doctrine) and had been popularized until about the 16th century when it assimilad to theoretical religion losing its original medical meaning.

4. At present 15 literatures on "*Gozō Mandara*" including pictures are ascertained.

5. Traditional Indian anatomy found its way westward to Arabia in the 9th century, and there it developed to a considerably high degree, united with knowledges of Rome and Alexandria.

The expeditions of crusaders gave it a chance to be introduced to Europe where it contributed to the reformation of European anatomy in Renaissance.

In Part V, we gave an outline of the history of human dissection, changes of anatomical charts, and models of human viscera in China. We compared typical anatomical charts of every period until 1913 when the first human dissection was made scientifically according to European medicine, whereby we proved that there are some anatomical charts made on the result of practical human dissection, though it has been

believed that Chinese medicine is only theoretical not practical.

The main points are:

1. In the stone age, the Chinese had already a very primitive, rather magical, medicine. They made human models out of grasses and trees in order to cure a disease by magic.

2. In the 3rd year of *Tempo* in "*Shin*," *Ōmō* had captives of war dissected, and casted human model of copper.

3. In China between the 3rd century and the 8th century, anatomical knowledge separated from medicine to unscientific natural philosophy. This is a conspicuous trait of Chinese medicine.

4. In *Tang* Era, a law against human dissection come to effect. But there are some exceptions; it is recorded that for about 10 centuries (until *Ming* Era) 6 bodies were dissected to make anatomical charts, some of which can be restored to the original state.

As above-mentioned, the model of the human viscera in the cavity of Buddha statue in *Shōryō-ji* Temple is of deep significance as a complete clastic model from the view point of not only the history of Oriental Medicine but anatomy of the world, although it is far from the fact.

It is a great pleasure for us if this study can contribute to filling up a blank of medical history of the Middle Age in Orient.

編集後記

・猛烈に暑い夏でした。各位には暑さにもめげず御精進のことゝ存じます。燈火親しむ秋にさきがけて、分厚な特集號をお屆けすることが出來て、責任の一端を果した安心感を覺えます。

・この特集號が誕生するまでには、思わぬ道草をくいました。昨年末の東京の役員會で第六卷第三號として出すことを承認され、その豫定でおりました處が、續々と新事實が現われたために報告も內容が盛澤山になり、圖版も思いきつて原色版などを入れ、約二百頁の大册になりました。そこで遲れついでに大きなものにし、頁數の關係から他の卷とのつり合い上、第七卷の第一號より三號合併としました。外見は堂々たるものになりました、がその內容や如何？

・淸涼寺本尊の釋迦如來像は、香煙の絕えない、信仰の頗る篤い佛様です。いかに研究のためとはいゝながら、その胎內を檢討するのですから、執筆者も無上の菩提心を發し、齋戒沐浴して誠意をつくしました。各自の力量一杯に研究したつもりです。內容は別としてこの點だけは信者の方にも、また本會々員の方にも、さらにまた御本尊様にもお許しいたゞけると思います。

・石原の結論と渡邊の結論とは、外見上では逆のように思われますが、石原の研究は佛教々義に重點をおき、梵字や經典を中心として議論したから、あの結論に到達し、渡邊の研究は形態・色彩・種別だけをとり上げて、議論を展開したから、あのような結論になりました。決して反對の結論ではなく考察上の角度を異にしたからです。足して二つに割つて下さい。しかし、細部では執筆者間に意見の相異もあります。今後、各位の御教示によつて完全なものにしたいと思つています。

・これは中間報告です。近い將來、立派な最終報告を仕上げたいと思つていますから、不備な點や誤謬はどし〳〵御教え下さい。（渡邊）

・この特集號は製版と印刷の關係上、渡邊評議員に一切をお任せして京都で作つた。また〳〵會員外の希望者も多いので、役員會の承認を得て特に增刷し、本號に限り分賣することにした。希望者は學會事務所宛申込まれたい。

・一度にこのような豪華版を出したので、會計が非常に苦しくなつた。會費未納の方は早く拂込んでいたゞきたい。

・終りに、このような特殊なものを會誌の特集號として採用し、承認された役員會に心から敬意を表する。（石原）

日本醫史學雜誌　第七卷　第一〜三號

昭和三十一年八月二十五日　印刷
昭和三十一年九月　一日　發行　　本號特別頒價　三五〇圓

發行所　日本醫史學會
代表者　內山　孝
東京都板橋區大谷口町一
日本大學醫學部內山生理內

印刷所　株式會社　文功社
京都市南區上鳥羽村山町一〇三

卷頭圖版　株式會社　便利堂
京都市中京區新町通竹屋町南入

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History.

Vol. 7, No. 1~3. September, 1956

Special Number for Study on the Model of the Human Viscera in the Cavity of Shaka-muni's Statue in Saga Shōryō-ji Temple

CONTENTS

Part I Introduction ..... Kōmon Morita (1)
Part II Buddhistic Meaning of the Visceral Model..... .....Akira Ishihara (5)
Part III Anatomical Study on the Traditional Chinese Medicine .....Kōzō Watanabe (30)
Part IV Introduction of Indian Anatomical Knowledge to China and Japan ..... Akira Ishihara (64)
Part V General Remark on the Dessection and Anatomical Figures in China.....Kōzō Watanabe (88)
English Summary ..... (183)

The Japanese Society of Medical History
(Department of Physiology. Nihon University. School of Medicine.)
Itabashi. Tokoy, Japan.

特別頒價 350 圓